

●鮒三

鮒＝船、三＝虎＝虫で船虫。

●千里眼八

八は添え物だろうということで「千里眼」で喜んでいたが違う。いつもながら切り方が肝心で、千里・眼八である。千里といえば虎で、八を未とか辛とかに置き換えてもダメだ。赤岩が隻眼なので眼の音通で岩が浮かぶ。八はやで矢であるから、虎・岩・矢のキーワードが得られ、あとはググってみれば、

石に立つ矢：石に立つ矢とは、どんなことでも、必死になって行えば必ずできるということのたとえ。

『韓詩外伝』の楚の熊渠子や、『史記（李広伝）』の李広という勇将が、大石を見誤って虎だと思って弓を射ったところ、立つはずのない矢が石に突き刺さったという故事から。

となり、千里眼八は虎ネームであった。とくれば眼八と音通の現八も同じに考えて良いだろうから岩矢であり、庚申山のエピソードが現八の名詮自性で成っていることが分かる。

●根五平

根五は猫で挿絵の毛深さからは虎であることが分かるが平が曲者であった。平は丙で三番目だから寅で猫虎、猫は虎と言う名前である。親兵衛の本名の真平も真の虎であったが、蘇生した時に宝珠を持った龍になり親兵衛と改名された。

力二・尺八の父十条佐吾の佐吾も 3+5 で十条八とは思っていたがなにか間が抜けた感じがしていた。佐は助けるで吾は十干の五番目の戌で、戌と戊は同じ。十条は東条と音通で金碗は東条の氏族であるから「金碗（白犬）は犬を助ける」という名前であり、その子の力二・尺八は八房と言う名前で犬士の父であるから、十条兄弟は犬士を助けるために戦死してしまう。尺八は尺八郎というように八郎であり、金碗八郎が里見（里の犬）義実を助けた対になっている。

●槃瓠といえば高辛氏。

今まで気付かなかったけど、高辛は庚申と音通である。後に頻出する古那屋の庚申の日、赤岩庚申山等がこの場面を源としているのは明らかである。

手束が伏姫を見たのが弁財天に参ったのになぜか庚申塚。弁財天には蛇で「美少年録」においても阿蘇沼の弁財天と蛇について語られている。弁財天と伏姫は無関係であり、前にも書いたが弁財天と結び付くのは手束である。

●数字は十二支（だけで全てが片づく訳ではない）

蜚崎十一郎照文の十一は何かと思っていたが十二支の戌で、犬男であった。

墓六は蛇太夫の息子に殺された。六は巳だから蛇で、墓六は蛙・蛇であり蛇に睨まれた蛙という名詮自性であった。

宮六は申蛇。新六郎は新＝申でこれも猿蛇。寅は三番目だから安西三郎は虎男で景連の連も虎。菱毛酷六も「酷く虐げ殺す」だけど六は蛇でもある。

番作もいろいろ考えたが、作はさで三とすると三は虎であるから番虎（ばんこ）＝蜚虎＝槃瓠となる。首をくわえている番作は槃瓠で、八犬伝における八房である。

上総の一作などは一を「子」や「甲」に置き換えても意味不明である。金碗との関係で「鞠」をしてみると、その単位は「足」であるから作は足と音通だろうと考えられる。上総には蛸貝つまり片思いで、鞠には七夕があるから「片思いの七夕」となり、娘の濃菫と対になる名前である。

経論ノ中、畜類ノ問答多ク見エタリ。大論ニハ、或池ノ中ニ、蛇ト、亀ト、蛙ト知音ニテ栖ケリ。天下旱シテ、池ノ水モ失セ、食物モナウシテ、飢テ徒然ナリケル時、蛇、亀ヲモテ使者トシテ、蛙ノ許ヘ、「時ノ程オハシマセ、見参セン」ト云ニ、蛙、返事ニ偈ヲトイテ、「飢渴セシメラレヌレバ、仁義ヲワスレテ、食ノミヲ思フ。情モ好モ、ヨノツネノ時コソアレこそ。カヽル時ナレバ、エマイラジ」トゾ、返事シケル。ゲニモアブナキ見参也。グツトノマレナバ、カバカリノ事ト思トモ、ヨミガヘルミチモアラジ。

●槃瓠

槃瓠から犬と瓢の連想が働く。槃瓠譚から義実・伏姫・八房譚が、槃瓠と音通になる万古將軍を連想しそこから義実と龍女の玉梓が造型され、濱路が関連付けられていく。

●金碗は金が白、碗がワンで犬で白犬であったことは書いた。百八十勝回上に「源氏は素より金徳にて、色は白を貴べり」⑩249 とある。金徳とみてハッとしなかったら八犬伝を読むのはやめたほうがいい。金碗大輔孝徳である。里見が里の犬で金碗が白犬で大輔も白犬のつながりかと思っていたが、自殺した八郎は違ったが大輔は金徳＝源氏＝里見の白犬であったから義実が密かに伏姫の婿にしようと思っていたのも間違いではなかった。里見の白犬であった大輔は、大となり、ただの犬と成り下がったのだった。

●衣更月(きさらぎ)

角太郎と結婚した鄙木姫は雛衣と「文字こそ異なれ唱は似」ている⑩230 というが、字足らずなところがちょっときついなと思っていた。衣が「き」であるから雛衣も「ひなき」と読めば、唱は似ているどころか同じなのである。

●何故信乃の周りには糠助や額蔵やら「ぬか」がいるのだろうと考えたことがあった。こんなこともある。月代(さかやき)は月の代わり、つまり玉の代わりなのだが、同じさかやきでも月額がある。額は月、月は玉なのだから額蔵は玉蔵で玉を隠し持っているが名詮自性で、糠助は糠＝額＝月＝玉だから玉を助ける人であり、信乃をなにくれとなく助けにならない時もあるが助けてくれるのである。というよりも糠は孝であるから孝＝信乃を助けてくれる人である。

「毛吹」の月の項に額があるが、なんとなくそういうものかと思っていた。月額(さかやき)から月に額という連想なのかと納得。



これも 月額で、額は月、月は玉なのである。



子供の頃の莊助の容姿についての描写はないが、荒芽山の莊助は「鬢薄して」③125 とあるから子供の時には挿絵のようにデコッパチだったと思われ、額蔵とは墓六が漫ろにつけたものだが(③78)、漫ろは漫ろなりに墓六は「デコ蔵」という意味で額蔵と呼んだのであろう。

●2012/05/17に「墓六には虫がいるから虎なのだとは言っていたが、墓を分解すると 日大虫だから大虫＝虎である」と書いたが、 日(はつか)とあれば鼠(類船集)で、大虫＝虎であるから『毛吹草』の「ときにあへはねすみもとらになる」が墓の名詮自性である。墓田素藤の墓も「ときにあへはねすみもとらになる」である。蛙と思っていると鼠であり馬琴得意の「鼠の輩」である

●伏魔殿の禁を破った洪大尉。この人の名詮自性を考えてみた。分解すると水のシ（さんずい）と共になり水共⇒酔狂になる。酔狂であればまさに洪大尉の名詮自性である。八犬伝でもこの読みができる名前があるかもしれない。

●亀篠

亀＝瓶、篠＝酒で酒を入れる瓶だから口絵のようになるとも、亀＝鬼、篠＝六で鬼殺しで、鬼殺しの酒を飲まされているとも読んだ。亀＝鬼、竹＝畜、篠＝嬢で鬼畜嬢とも読んだが、匠作の娘であることが詳しく書かれていたので単に篠を嬢にして、意味は変わらないが「鬼嬢」でも良いだろう。

●姨雪代四郎と親兵衛の関係は、与四郎と信乃との関係の対になっていることは分かる。ヤス平は安の川原で七夕と関係があることも分かる。代四が四四で獅子であることも分かる。代四郎は夜白で牡丹であることも分かる。となると八房は八が四+四で獅子であり、牡丹形の斑は付き物である。ここまでは今まで書いていることで目新しいことではない。房＝ま、であるが、百七十二回を読んでいても一つ見つけた。蜜房（はちのす⑨444）で、房が「す」ならば八房は「ヤス」であり、ヤス平は平を無視すれば八房であった。ヤス平の息子の力二・尺八は八房であったが、父のヤス平も八房であった。親兵衛の父は房八で転倒して八房で、ヤス平は親兵衛にとって親の代わりともいえる存在であった。

代四郎は与四郎であるから小文吾の代わりとして親兵衛に付き纏っている時は、谷風こと金子与四郎と大童山との関係になる。ヤス平は犬の代四郎の対として、ただなんとなく親兵衛に付き纏っていたわけではないのだ。

●房＝ま＝魔。八房＝八魔。

犬士はもともと魔犬と人の子という八人の魔人なのだから仁義八行の玉＝魂が必要なのである。

●丁田町進

丁田は町で反対になっているから「ちま」で次の町も反対に読んでちま。チマチマ進むだけなの？と思い口絵を見ると、さや形地に雲の帯をしている。雲とくれば女郎蜘蛛なので「類船集」で町をみると「傾城屋」があった。ヤス平が蟹と七夕で、隣の舵九郎と依介が七夕、虎、玉でお馴染みのモチーフである。

莊役根五平と音音が猫猫なのは分かりやすいが、三宝平・庵八・駄一郎の組み合わせが分からない。根五平は毛深いので図像的にも虎なのだが上の三人に毛深いのはいないので、図像的に虎はいないということになる。なにかよく分からない。

●力二郎 曳手 単節 尺八郎

蟹を 曳く 節の人よ 八郎。



節の人というのは竹の額縁による。ぬいの讃にあるように「節婦竹の如し」である。



この二枚の額縁の雲と龍も上の口絵との関連でないと意味が分からない。関札は「恋の関札」で上の鯉と通じる。春駒は四人の意馬を表す。

この四人に関係ある「荒芽山の麓」の挿絵だが、ヤス平は薄墨で描かれていて幽霊であることを示している。実際ヤス平は生きているのだから薄墨で描かれるのはおかしい。しかし馬琴は話の都合上戸田川で船とともに沈んだヤス平を幽霊とのみ思わせるためにそういった操作をし、故意に読者をミスリードする。ノンフィクションを読んでいるのではないのだから、そういうこともあるということを想定の範囲内とっていないと面白味は分からない。

●曳手(ひくて)

曳手も考えてみた。曳くは夏引の引を思い浮かべやすいが、ここでは「牽＝けん」で、曳⇒牽⇒犬である。手は手束の「た」であるから田になり、合せて犬田である。つまり曳手と単節の姉妹は犬田と淡雪姉妹であり、四輯口絵の小文吾・房八図に重なる。のちの親兵衛と代四郎の関係において代四郎が小文吾の代わりであったように、曳手と単節も親兵衛に対して小文吾の代わりとして富山に連れてこられたのである。

小文吾もついでに考えてみた。小文吾の本当の苗字は那古である。前に見たように、那古は猫に通じるので小文吾一家はもともと虎家族であった。その虎の小文吾がもがりの犬太を殺した。もがりは本文の漢字以外に虎落がある。つまり小文吾は犬太を殺したことによって、自分の那古＝猫＝虎性が落ちたのである。

古那屋は虎屋であった。虎屋というといろいろあるだろうが「江戸語」でひいてみると、

- ①日本橋和泉町にあった饅頭屋。
- ②吉原角町河岸の娼家虎屋次郎吉。
- ③両国橋横山町角にあった薬屋。
- ④尾張町にあった薬屋。解毒反魂丹を売った。
- ①以外の娼家と薬屋の虎屋が古那屋かもしれない。

●単節(ひとよ)

一節(ひとよ)が単節なのは、単→淡・節→雪⇒淡雪。

淡雪というとなんとも紛らわしいのが泡雪奈四郎で、雪ネームで姨雪代四郎と名前は似ているのに悪人である。奈四が梨であることに気付けば、梨の花が雪のように白いこと、その果実は犬殺しであって姨雪代四郎とは名前の出来方がまるで違うことが分かる。単節が淡雪ならば泡雪と音通になり、犬殺しの泡雪奈四郎と同じになってしまう。荒芽山の危難は単節がいたことによって招かれたともいえる。

●禄釈坊堅削

六尺棒で犬を裂く、は読んで字の如しの名詮自性。六尺には戸(けん)があり、六尺棒と犬の関係ができる。もう一步進むと六尺に「擬宝珠ぎほうし、擬法珠ぎほうし」があり、禄釈坊堅削が偽法師であることがわかる。「偽法師犬を裂く」が本当の名詮自性である。

●重戸は植物ではなく魚であること、犬が重なるという名前ゆえに伏姫が現われたことはすでに書いた。で「重」だが里偏である。里戸と置き換えてみると、里犬であって里犬の里見と同じである。

何度も書いているが、戸山や重戸の戸が犬であるのか。「弓張月」の葎家二十戸(下190)の戸のふりがなが「けん」であることによる。「けん」は軒でも見でも犬(けん)なのである。

●直塚紀二六は『古事記』の「雉還らざりき。故今に諺に「雉の頓使(きじのひたづかい)」と曰ふ本これなり」とばかり思っていたが『大和本草』を見ていて分かった。

述異記ニ晋陸機力黄耳ト云犬ノ首ニ書ヲユヒ付テ遠所ニ使ニヤリテ往来セシ事アリ。



五輯見返しは陸機の飼犬黄耳の話に基づいている。黄耳を「こうじ」と読んだらここではアウトで、黄耳は「きじ」である。紀二六は猫の紀二郎の対になる名前と思っていたが、黄耳六であり六は「りく」だから陸で反すと「陸の黄耳」である。還らない雉では紀二六の行動に合わないし、与四郎犬＝代四郎に噛み殺された紀二郎猫＝紀二六の反対の名前にしては単純すぎるし、犬士と相性最悪の六ネームと言うのも親兵衛譚では逆になるのかとか、親兵衛＝桃太郎では猿がいない等腑に落ちないでいたのだ。紀二六は猫や鳥に見えるが、やはりと言うか犬ネームだったのだ。紀二六といえば親兵衛の密書であり、雉の頼使と黄耳で「書の使い」を名詮自性としているのである。

神変大菩薩＝役の行者と名札があるのは三枚目だけで、前の二枚とは似ても似つかない姿である。二枚は登場人物が勝手に役の行者と決めつけているのを、読者がこれまた勝手に役の行者と思いこまされているのではないか。～とのみ思わせる馬琴の手にひっかかっているのではないか。二枚目の弓、霧、手紙、老人を囲っている蜘蛛の巣であろう分銅模様、毒石＝玉梓を包んでいる錦の囊、実際の歴史(時代が違うが)で遊女係である里見義成が覗き見をしている背後の木目は肇輯口絵で玉梓が持つ琴、すべてが玉梓である。

では最初の異人が仁義八行の玉をくれたのはおかしくはないか、と考えていた。玉の文字も書状に書かれていたことも如是畜生発菩提心に変化する。つまり異人が最初に玉をくれた時から文字は如是畜生発菩提心であったのを玉梓の怨霊の力によって仁義八行に見せられていた、仁義八行→如是畜生→仁義八行と変化したように思っているが、じつは如是畜生→仁義八行の変化しかなかったのではないか。玉を首にかけられた時から伏姫は逆に玉梓に纏わりつかれたと考え、肇輯口絵の玉梓と伏姫が二身一体のように描かれているのも分かる。伏姫の読経の功德によって八房が菩提心をもったとき、初めて玉の文字は仁義八行に変ったのではないだろうか。如是畜生発菩提心なんて文字の玉をもらっても、気味が悪くて首にかけるとは思わないのである。

玉の文字について、義実の不可解な発言がある。

看数の大玉に、初は如是畜生、発菩提心といふ八字あり。後は変じて、仁義

礼智忠信孝悌といふ、八箇の文字に倣見れし⑤318

なんと如是畜生→仁義八行の変化しかなかったのだ。義実の発言ほどあやしいことはないのだが、これは気に留めておいてもいい事柄かもしれない。

●四輯口絵の小文吾。隣の房八とで額縁の梅は八房の梅となる。とだけ思っていたが「和漢三才」を見ていて閃いた。

東風(こち) 谷風

東風といえば菅家だから梅と関係はある。犬士はみな梅男でもあるが小文吾だけ特に関係付けられているのは梅→東風→谷風であるからだ。小文吾のモデルは横綱谷風であると言ったことがあるが、その関係の要素の一つとも考えられる。

●赤坂の駅(しゅく)⑤339

強盗：赤坂の宿(類船集)

礪時願八業當 (礪時=ととき=十×十き=百き=百鬼。八業=夜行。業當=強盗)

●



これと



これらの図像的な共通点によっても定包→八房を説いてきたが「類船集」の菰をみて閃いた。尺八吹、である。本文でも上左の挿絵でも尺八と関係があるのは定包であるから、尺八は定包の属性なのである。

●



船虫の雲をいままで蜘蛛と読めなかったのが情けない。

まるで菅笠に船虫と名札がついているようだが、

漂泊する遊女や巫女の代表的持物が、笠だったのである。(大和岩雄『遊女と天皇』p187)

とある。のちの船虫の行動からは、船虫が漂泊する遊女として描かれているのがわかる。名札付きの菅笠が船虫の本質なのである。

と言ったことを加味すれば、貞行が持っている笠は玉梓である。図像的にも丸いものは玉とみていいだろう。

●依介よりすけ

介を貝＝玉と見ると、依玉になる。分解して反して読んでいくと、玉の衣の人になる。



確かに玉模様の着物である。

頭、あっ玉。依介の人柄からすると衣は心で、心ざまの淳朴（すなお）②370 な玉の心の人であろう。

のちに犬江屋を継いだのだから、依介も犬士にはなれない犬であった。



後ろ姿の頭の前の駕籠の中に玉を持った大八がいる。稿本をみると

「あ**た**ま男」はいないので馬琴がそこまで意識したかは分からないが、現状では以上のように考えることができる。

貞行が玉梓、木曾介が定包、朴平たちが「このヤロー、こんちくしょう」と踏みつけているのが尺八（定包）で尺八の入った錦の袋が玉梓である。「このヤロー、こんちくしょう」と定包だけでなく玉梓も踏みつけていなければおかし



いのである。玉梓は「錦の囊に包る、毒石に異ならず」（①111）

で、上の船虫に関係するのが「古金襴の袋に納たる笛」③244 で、朴平等が踏みつけている尺八の遠い対になっている。「慰かねし徒然に、尺八の笛吹すさみ、更に余念はなかりけり」①100 といった定包の対として小文吾も「われも亦いとはやくより、尺八を好みしかども、そは虚無僧尺八」③244 と言っている。尺八は定包の属性なのだから、八房を經由して小文吾に受け継がれていると言えよう。八犬士の人物像を形造っているのは、①それぞれの前身②八郎—伏姫

③祖父たる義実④父たる八房—定包⑤やることなすこと失敗する大輔といったところで、まさに黒白斑である。仁義八行が犬士であるとのみ読むのは逍遙の毒に汚染されてしまったからである。かつて逍遙が八犬伝を死に追いやったように、八犬伝を読むことにおいて逍遙はすでに死んでいるのである。

犬江—五十子—安房
犬川—岩熊—安房
犬村—蟹崎—安房
犬坂—安王—結城
犬山—光弘—安房
犬飼—天津—安房
犬塚—春王—結城
犬田—七郎—安房

文中：玉梓→八房
文外：玉梓→怨霊→正月（濱路）
定包→八房

玉章→月正、八房→八⇒悌⇒定・房→包となる言葉遊びを牽強附会と思えてしまう人、遊び心のない人はそもそも八犬伝など読む必要はないのである。

●馬琴の「歳時記」の王春月：春王ノ正月[佐伝]を「左氏伝」でみると「春、王の正月」とある。この歳時記の書き方は面白い。春王の後身は信乃で、正月は濱路なのだから「信乃ノ濱路」となる。「軒のつま」が犬の妻で信乃の妻濱路と言っているのだから「信乃ノ濱路」という言い方も良い。春王の後身である信乃と玉梓の後身である濱路とのつながりが今ひとつ分からなかったのだ。定包→八房→八犬士であるから春王ノ正月がないと濱路の相手に信乃を特定することができないのである。

●今まで「合璧集」

問題とする箇所は、

星トアラバ 天津 犬かい 連歌論集 1

星とアラハ あまつ 犬かひ 続群書類従

天津兵内が現八の前身だとしているのに、連歌論集 1 の「天津」という漢字を見るまで類従本の「あまつ」を見過ごしていた。星—犬飼だけで満足していたのだ。この短絡的に～とのみ思い込んでしまう心理を馬琴はついてくるのだ。玉梓—八房とのみ思い込んでいる脳みそで、それに沿って考える限り「発明」

はないのだ。

●かかあ手束(たばね)の水髪「胡蝶」p53

ほほう手束(たつか)は手束(たばね)かと思い、いつもの如く反してみると「ねばた」になる。手束(たばね)の束はたばだから手をねにすると「ねたば」になる。ねたばまでくれば、八犬伝読みならどんな痴者でも「寝刃」にたどりつくだろう。手束の名字の「井」は音読み「せい」で反すと「いせー伊勢」になる。伊勢、寝刃とくれば『伊勢音頭恋寝刃』である。

●遊女、女郎というキーワード

「合璧集」の「栗トアラバ、女郎花、むせる、箱根山、春日野、まく、飯」が毛野であることは分かる。まくは撒くかもしれないが、毛野とのつながりを考えれば馬加(まくわり)のまくがある。栗は安房で里見とすれば『吾妻鏡』の里見と遊女の関係は「安房トアラバ女郎花」となる。

○拈下庵



花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする『源氏物語』

蜻蛉

●『新編水滸画伝』

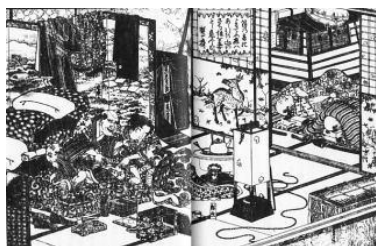
一番初めに出てくるのはつい林冲と思いがちだが、高俅である。犬士列伝のトップは犬塚信乃である。浮浪子弟の高俅と親孝行の信乃の反対なのは分かるがなぜ信乃がトップなの？という疑念が残る。高俅は毬が上手い。まりといえば金鞠だから八犬伝の連想に結びつく。で、高俅。孝球＝孝の珠で、高俅の悪に匹敵するボリュウムで信乃の孝子ぶりが描かれているということなのではないか。

●八百比丘尼妙椿

第百五十三回に至って「八百八人の何曾々々」の、八百は「風＝風」という答えで妙椿は風比丘尼であったかと分かり、妙椿の正体の狸は野猫で虎で「風は虎に従う」から風を起こす鬻鬻の玉を持っているのだと分かる。そして妙椿がしていることをみれば売色比丘尼であることは明らかで「遊女」というキーワードにもちゃんとハマっているのだ。言表にこだわれば八百は「風＝風」とはっきりと本文に書いてあるのだから妙椿が風比丘尼であることは動かせない

のである。言表することで、かえって限定的に～とのみ思わせるのが馬琴の手だということを忘れてはいけない。雛衣は「雛（こ）衣（い）」で鯉、恋が名詮自性と思っていたがもう一つある。雛（こ）衣（きぬ）で雛犬（こいぬ）と音通であった。斬られたり切腹したり傷口から珠が飛び出てくるのも同じで、雛衣は雛犬だった信乃の飼犬与四郎とも対になる名前であった。雛衣「こきぬ」恋や鯉も良いが雛犬という名詮自性が雛衣にはあっている。

船虫も「せんちゅう」と音読みで考えてみたが、それらしいことは浮かんでこないのを忘れていたが、遊女のキーワードで「遊女は船中の事」とあれば虫（ちゅう）は中（ちゅう）で、船虫＝船中だとわかる。



船は玉で玉虫になる。『嬉遊笑覧』の「玉虫」に、漢

土に媚薬といふことあり「本草」にも往々見ゆ。其物を貯へもてば人にめでいつくしまるとあり。玉虫も是等の意にや（下略）とある。船虫は媚薬の玉虫だから「人にめでいつくしまるる」のだ。この鹿恋の挿絵をみれば船中でも媚薬もありだと思える。水滸の母夜叉母大虫に、似たる強盗なるべきか（第七十六回）とあるが、船虫はほとんど母夜叉こと孫二娘で出来ている。ならば何故母大虫を出してくるかという、船虫はメス虎であるということも言いたいのだ。船虫を単に海辺の海蛆とのみにしてしまえば、名詮自性は逃げ足が速いことだけで、何故これほどに悪でかつ男を手玉にとって生きて行かれるのか説明がつかないのである。

玉梓妙椿

真妙

●八犬伝で「俄に」と出てくると事件が起きる前兆なのだが、だいたい自作自演の狂言である。俄かに乗馬が倒れた光弘の暗殺事件は定包の自作自演の狂言である。その時の挿絵は猿楽を想起させる要素で描かれている。馬琴にとって猿楽とは狂言―事を企んで人を騙すこと。またその企み。策謀、策略―という意味で使っているのではないだろうか。甲斐で起きた、俄かに降り出した雪のせいで足止めをくった信乃

が巻き込まれた殺人事件も奈四郎と夏引の狂言であったし、殺された木工作が木工＝番匠という以外に沐猴で猿でもある。

と書いていて、第百五十八回を思い出した。内容は挿絵の「猿八友勝と猿楽して餅九郎を釣る」のままだから読めば分かるだろう。と書いていて下の挿絵を思い出すと、朴平の朴は木と音通で「もく」、無垢はむくで木工＝沐猴と音通だから同じであるということ、猿たちは定包の猿楽に乗せられたのである。そこで『新猿楽記』の七郎とつながるということだ。

2013/01/08 でみた旦開野登場の口上に『新猿楽記』が使われているのが最初ではなく、肇輯の段階ですでに猿楽という要素が現れていた。

馬琴が番匠や木工とか大工にこだわる理由が分からなかったが、こうして番匠→木工→沐猴→猿を見てくると、彼ら猿たちの役割が狂言回しであったことがわかる。

狂言回しとは、物語において、観客（あるいは読み手などの受け手）に物語の進行の理解を手助けするために登場する役割のこと。場合によっては物語の進行役も務める。狂言廻しとも称される。（ウィキより）

と言った人たちなのだ。

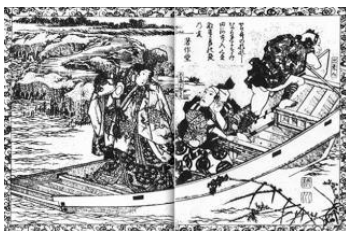
●十六回の終わりまでが八犬士の前身と、番作と手束の二人でもってどういう親の元に犬士は生まれてくるのかといった因果を描いている第一部である。

●七郎



この供養塔はなに？と思っていたが『新猿楽記』の「七郎は大仏師なり。(中略)天蓋瓔珞、蓮華の形、座光莊嚴、唐草の様(後略)」だろう。

●浅妻船



これも遊女というキーワードがあればなぜ濱路姫で浅妻船なのかという疑問も解消する。

2013/01/15

●玉梓は海棠①111 で最近引用した『海道記』の海道と音通なので「類船集」で海道をみると、遊女があつた。海道＝遊女とすると『海道記』＝『遊女記』になり、海棠＝海道＝遊女となる。ならば手束はというと「野の花」と具体的ではない。ちょっと拍子抜けしたが、拈華庵の「花」の着物が手束のものだとすれば、かえって具体的ではない「花」が良いということになる。ここで思い出すのが肇輯口絵の大輔が『海道記』の富士山であつたこと。富士山を出すための『海道記』だつたのではなく、『遊女記』を出すための富士山だつたのではないか。そう考えれば富士山がいつも船虫とセットになっていることも説明がつく。

●達者の戯墨を評するに五禁あり。(第九輯卷之三十六簡端附言)

1. 所謂仮をもて真となして、備らんことを求る事
2. 評者只其理論をもて、好む所へ引つくる事
3. 作者の深意を生索にして、只其年紀などの合ざるを、見出さまく欲するは、俗に云、穴搜の類なる事
4. 前に約束ある事の、久しくなるまで結び出さざるを待かねて、催促しぬる事
5. 神異妖怪は始ありて終なく、出没不可思議なる者なり。然るを其出处来歴を、詳にせまく欲りし、其消滅して終る所の安定ならん事を求るは惑ひのみ。

作者の本意にあらざる事、大凡この五禁を知りて、よく吾戯墨を評する者あらば、そは真実の知音なるべし。

1と3がまだ世の中にいることが不思議だ。本当に八犬伝を読んでるの？一番自分を戒めなくてはならないのが2で、手束を探っているうちに遊女が出てきたが、どんどん遊女が出てくることは「只其理論をもて、好む所へ引つ」けてしまったせいなのではないか、と思ったりする。しかし、行く先々に遊女がいるのだから好む所へ引つけてるつもりはないけど、知らず知らずのうちにそうなっているのではないか、というのは馬琴が禁じているのだから肝に銘じなければならない。遊びはルールの中でやるから楽しいのだ。



とかなんとか言っているが、この挿絵の竹の床が気になっていたのだ。寺・竹の床とかググっても分からないし、そのままにしておいたのだが、『遊女記』を読んでいて分かった。

(遊女は)上は卿相より、下は藜庶に及るまで、牀第(ゆかむしろ)に接き慈愛を施さ

ずといふことなし。

とある。牀第に注があるのでみると「牀の上面を竹で編んで作ったもので閨房を意味する」とあった。牀第をググってみると中国語で分からないので、このページを訳す、なんてするとそれらしきことが書いてあった。好むも好まざるも手束には「遊女」というキーワードが付きものなのである。

●八犬伝の俳諧的手法を考えに入れなくて典拠ばかり探しても大雑把なプロットが分かるだけでディテールは分からない。ディテールが分からないのは、美は細部に宿るを地でいった八犬伝も分からない。

●獵人に天河、富士があるのだから、肇輯口絵の大輔を獵人とみる目があれば大輔＝富士の追試はもっと早かったのだ。しかし、本文で言ってないじゃないかなどと言い出したら名詮自性も音通も何もかも意味がなくなってしまうだろう。泡雪奈四郎秋実が梨の花は雪のように白く、その実は秋で犬殺しなどという解説は本文のどこにも書いていないのだ。馬琴が見つけた蘆俊義、燕青の命名に見出した「名詮自性」だって水滸伝の本文でこういう意味なんですよなどと解説されてはいない。書かれていること、書かれていないことと言った硬直的縦割り行政的な考え方がおかしい。どっちもあって八犬伝である。さすがに読者は作者を超えてしまう的な読みには首をかしげるけど。

●肇輯

八犬伝から読んだせいか、美少年録の第一輯、俠客伝の第一集、巡島記の初輯のほうに以前から違和感があったが、今こうして見ると八犬伝の肇輯のほうで特別なのだと分かる。まあ八犬伝は特別だよな、と意味もなくずっと思っていたが、なんだかさっき突然「狗児仏性」なる語が浮かんた。「趙州和尚 狗子仏性」であるが、馬琴はこれの印を見返しの絵に使っていたりする。趙州和尚の趙州は「じょうしゅう」であるが「ちょうしゅう」とも読める。犬尽しの八犬伝であるから、一や初ではなく趙州と音通の肇輯でなければならないのだ。



趙州和尚 狗子仏性

●七夕に女郎。

女郎蜘蛛がうかび、蜘蛛はささがにで「ささがに姫」が七姫にいるから、直接ではないが女郎と七夕は結びつく。ここでまたふと女郎は「いらつめ」とも

読むので、女郎、いらつめ、七夕で、平群女郎（へぐりのいらつめ）が出てきた。平群（へぐり）とは八犬伝で言えば神余光弘の居城があった平郡だ。平群と平郡とは音通なので同じで良い。滝田ばかりに注意がむくが平郡の滝田である。『万葉集』の平群女郎がどんな歌を歌ったかは関係がなく、字面が重要で女郎（いらつめ）はそのまま女郎（じょうろう）である。玉梓と雲は蜘蛛、分銅は蜘蛛の巣であるとしたから、平郡の女郎とは玉梓のことなのである。

●泡雪奈四郎が絡むのがなぜ信乃なのか？

信濃梨子だから。左は『新猿楽記』の冒頭を八犬伝で使っているところで、雑文2に載せた当時はこれで喜んでお終いだっただけ、雑文2以後の知見を加えると上の信濃梨子とかいろいろと分かってくる。特に遊女のキーワードで読むと、次の

十六の女は、遊女・夜発の長者、江口・河尻の好色なり。
が面白い。

初登場の手束は「その年は可二八」だった。猿楽記の十六は年齢のことではないが「可二八の女は遊女・夜発」という連想は上の引用部分が旦開野登場の場面で使われているところから十分にあり得る。旦開野は手束の夕顔の系譜上にいるからである。

●あまりに言を詳にせば、天機を漏すのおそれあり。①217

牛に乗った子供のこの台詞によって、役の行者（と勝手に思い込んでいる）は天機が分かるんだと感心してしまうが、赤岩一角の霊がこんなことを言っている。

○あまりに天機を漏すときは、還て神の憎に逼らん。

○人死して霊となるときは、世に在し日に優ことありて、万理に通ぜざることなし。

天機天機と言うけれど、天機は役の行者だけの十八番ではないのである。狸が玉梓の怨霊に連れてこられたように、濱路が濱路の体に乗っ取り信乃に思いを告げにきたように、牛に乗った子供は玉梓に操られて伏姫に死を促すような偉そうなことを言いに来たのだ。玉梓処刑の挿絵で刀を振り上げていた男の役目を子供はしている。

幽霊の濱路も信乃と濱路（姫）が「月下に結れたる、宿因」があることを分かっている。これは玉梓であろうと「死して霊となるときは、世に在し日に優ことありて、万理に通ぜざること」がないことを物語っているのである。

全ては万理に通じた玉梓の怨霊によって仕組まれた壮大な復讐劇だったのだ。壮大な復讐劇は玉梓の遊女の系統にある旦開野（毛野）で繰り返される。

伏姫が死んだ日に、三匹の犬が死んでいる。伏姫、八房、五十子で、沼蘭、房八、親兵衛が対になっている。五十子は伏姫の母親で、親兵衛は沼蘭の子供だが親である。八犬士の輪廻転生を考えたとき、一番若い親兵衛の前身が一番最後に死

んだ者ということ、伏姫との強い関係から五十子としたが、親という字が作中で語られる親に代わってという以外に伏姫の親という意味があるだろう。

●正夢と起行鹿や照射山



囲まれている大輔は囲(かこい)で、正夢の讃の鹿とは鹿恋。

大輔が鹿恋ではないので、母の濃萩が、濃＝恋、萩＝鹿、転倒して鹿恋であったということである。大輔は鹿恋(遊女)の子供であったということの意味は？

●枕



濱路の枕。これも気になっていたのだ。早稲田の古典総合データベース

スの「売色の詞よせなれば」という『俳諧通言』に枕 くろぬりのもん付なり、とある。比翼莫産は枕の前の項目で、挿絵では莫産に倫子の縁取りがある。床の間掛物、花活がなぜここにあるのか、という疑問も解けた。売色の詞よせなのだ。それにしても儒教やら何やらかたっ苦しいことを言ってる裏で遊女遊女言っているのだから馬琴は面白い。



格子女郎

●輪廻関係図

一人一人に意味があるのではなく、挿絵全体が玉梓の属性。



●妙真は猫(びょう)真で「ねこま」なのだけれど、妙真が遊女と関係あるのかと考えて転倒してみた。しんみょう。

針妙:寺で裁縫をする女。寺は女人禁制なので、この名目でひそかに妻女をおいた。

あれあれ。寺、裁縫といったら手束ですな。番作が思った梵妻賊婦というのは恐らく当たっていたのである。手束＝針妙の対として妙真も妙椿も現われてくるのだろうし、ひいては船虫、旦開野の原点なのである。それでなければ手束の人生がこんなに細かく描写される意味はないだろう。

●八犬伝に出てくる牛は妓有である。対牛楼も対妓有楼。繰り返される牛と船虫という組み合わせが分かりやすい。小文吾と角太郎に船虫が絡んでくるのも、小文吾と角太郎に義実の役割がふられていることから、里見と遊女という関係から解ける。

「うし」は本人をそのまま「ぎう」と書く訳にはいかないから、本人の代わりとして側にいる。玉梓の代わりに山下定包は「山下大人やましたうし」で、手束の代わりに蚊牛がいて、蚊牛のあとに番作が家尊の大人(うし)となり手束の側にいる。

●紗綾形の道節が、首を切られていない濱路と思しき首を持つ。紗綾形→倫子→輪廻の道節が「亦是輪廻の致すところ」②145、「輪廻によって解ときは」②147と輪廻を繰り返す。ところがその言っている内容は「親の因果が子に報い」であり、馬琴お得意のずらしがある。道節が啜える刀と首だから斬首と読むと、首を刎ねられ梟首された女は玉梓だけだから、何故ここに玉梓が？と言うそこが輪廻によって解かなければならないのである。

●乞巧奠

『増補 俳諧歳時記栞草』がいくら岩波文庫になっているからといっても馬琴オリジナルの『俳諧歳時記』にあたらないと痛い目にあう。乞巧奠を栞草でみるとオ馬琴リジナルにある「唐の宮嬪」という語句が抜けているのだ。これがあれば三輯口絵「酢もあらば」「軒のつまに」が乞巧奠、つまり七夕を表しているのだとすぐに分かるくらいに重要なのに、である。宮六の名前もいろいろ考えたが、墓六が持っている濱と合わせて「宮嬪」であり、墓六の分銅繋ぎと思っていた文様も蜘蛛の巣を表

していたのだということも分かる。図像中の網目は蜘蛛の巣なのである。吉祥紋の分銅繫ぎが蜘蛛の巣なのだから道節、墓六の「紗綾形」も別の意味があるはずである。

紗綾形の初めは肇輯口絵玉梓の襟もとにチラリとあるもので鹿の子模様と一緒にある。鹿の子の衣装は鹿子衣「かこい」で遊女になる。つまりさや形も玉梓の属性を表す、紗綾形に見える何か別のものだろうと考えられるのである。

と言っているにもかかわらず紗綾形をググってみた。

江戸時代には綸子の地文はほとんどが紗綾形で、これに菊・蘭などをあしらったものが紗綾形綸子として非常に多く行われていました。

キタキタって感じ。綸子を「りんず」「りんこ」と読む人はアウト。子は「ね」なのだから、りんね＝輪廻である。口絵でも挿絵でも紗綾形のあるところには、おそらく輪廻転生の分かる人物がいるはずである。

分銅、紗綾形を意識して見ると肇輯口絵の大輔図は哀れになるほど玉梓に纏わりつかれているのがわかる。鉄砲を使う大輔なのに梓弓で弓を持っている。白頭巾と白帯、桐模様も、さらに女四天の紗綾形と分銅繫ぎ、刀の鞘の氷裂文と思っていたのも蜘蛛の巣であり、これで不幸にならなければおかしいというくらいに玉梓に雁字搦めにされているのだ。伏姫は仁義八行の玉を持っているから、紗綾形もチラッとあるだけである。八郎から受け継いだのが貧乏神とは本当に大輔は哀れである。

大輔が持つ弓矢が作る台形は富士山であり、白頭巾と腰の白帯は『海道記』による富士山の雪と雲である。大輔の善悪不二を表している。



『海道記』ついでに言うと、この口絵はかぐや姫のことを書いている中の「一たび咲めば、百の媚なる。見聞の人は皆腸（はらわた）を断つ」である。伏姫の容姿についてかぐや姫に擬えていることで、伏姫と表裏のように描かれている玉梓もまたかぐや姫的であっても良いことになる。同じ『海道記』を使うことで両者を関係付けている。

『吾妻鏡』の記事にあるように、里見は遊女担当の係であるから、義実が玉梓の担当になってしまったのは必然なのである。

前に書いたことだけど乞巧奠ついでに書いておく。肇輯口絵の犬飼玄吉、犬飼が七夕関連なのは分かるとして、なぜ河童なのか。これはお尻のあたりにある亀甲模様を出したいがためである。亀甲が臀→乞巧奠という訳だ。

●「歳時記」

牛女 二星の名を上略せしなり。

とあり牛女に「たなばた」と振り仮名がある。何度もみてきたように牛は遊女だから、七夕は遊女ということになる。これでなぜ七夕の夜に玉梓が出てきたか、濃萩の息子の太輔も七夕の夜に現われたのかが分かる。二人とも遊女なのだ。

そして手束。たなばた→たなばたであるから手束は牛女で遊女になる。これだけ遊女が出てきても、馬琴の遊女への関心の高さから当然のように思える。

● 竜の講釈にあった。獅子は竜の八番目の子供というのは今さらいうことではない。第二の子囚牛である。竜を八犬士に当てはめようと考えていたから、囚われた牛とは小文吾のことかなとか、竜のことを語っているのだから囚われた玉梓ことかなとかチラリと思っていた。そこで囚牛は「音(なりもの)を好むものなり。琴鼓の飾のこれを付く」である。音楽一味の道節たちかとも思ったが、筆口絵の玉梓が持つ琴は玉梓自身を表しているのだから囚牛と結びつけてもおかしくはない。これに最近の遊女の知見を加えると、牛は妓女(遊女)であるから「囚われた遊女」とは玉梓と考えても良いだろう。



この二枚はセットでみるべき。

琴は筑紫琴で、袖の鷺と合わせて天神。と書いていてふと「硯 学問の神様」とググってみた。

硯洗い(すずりあらい)とは、七夕を迎える準備として旧暦七月六日に行われる行事。初秋の季語。学問の上達を祈る行事で、子供達が普段の手習いの道具を洗い清めて日ごろの労に報いる。手習いの道具は、硯に限らず筆や机なども含まれる。学問の神として知られる天神にまつわる行事であり、洗い清めた硯に梶の葉を添えて供えた北野天満宮(京都府)の神事がその原型であるとされる。

硯、筆、机で

この口絵的挿絵がすぐに思い浮かばなかったとしたら、八犬伝の面白さは分からないから読むのはやめたほうがいい。この挿絵の読みについては何度も書いているので繰り返さない。

ググったことだけを書いても、馬琴が硯洗いとか筆洗いとか机洗いを知らなければ意味はないので、久し振りに思いだした馬琴の『俳諧歳時記』をみると、机あらひ、硯洗の項目があった。

硯と墨が定包の前にあるから定包と組み合わされているとの思い込みがいけなかった。墨と天神のつながりを知らなかったために、梅模様の鞍を乗せた黒

馬は磨墨で良いものを、黒牛は天神つながりだから馬に見えても実は牛などと強弁してしまった。～に見えても実は～というのは八犬伝を考えるうえで大事だが、磨墨が答えとしてあるのだから黒馬は黒馬で良いのだ。

墨が玉梓と結び付くのは肇輯口絵の玉梓の着物が墨染桜であることから分かる。

深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け、これは古今和歌集にある上野岑雄の歌で、深草が三輯口絵「軒のつまにあハびの貝のかたおもひも々夜つられし雪のしたくさ」が深草の少将とリンクしている。玉梓を調べていくと自然と濱路のことになっていき、「源氏」夕顔の「しろき扇のいたうこがしたる」から連歌の「薫物といふ匂にこがると付」けてで輪廻を表していく馬琴のイメージの豊饒さには正月早々から感嘆してしまった。本文だけでは分からない（玉梓と濱路が同じことを云うのでなんとなく分かるが、駄目押しになる）図像を読む醍醐味がここにある。

● 拝れ給ふ神女の姿は、山姫といふものめきて、弁才天に似給はず

伏姫は弁財天に似ていないのだから弁財天ではない。発想の転換が必要である。伏姫を中心に考えるからややこしいことになってくる。弁財天に関係付けられているのは伏姫ではなく手束なのだ。

『江戸名所図会』

千束郷

竜泉寺町の辺、今僅かにの地をいへり。一に篠堤と字す。（中略）この地に叢祠あり、千束稻荷と称す。

或人云う。往古は上下とわかれて、浅草天王町の辺より千住の橋際までを、すべて千束郷といひけるとぞ。仍つて按ずるに、浅草寺至徳四年の鐘の銘に、武州豊島郡千束の郷金竜山浅草寺とあり。又同じ境内に西宮稻荷と称するあり。（中略）小田原北条家の古文書に、千束の内にて阿佐谷分・三戸分・石浜等の地を、太田新六郎、（中略）朝倉分の地を江戸番匠等領すること見えたり。

千（せん）を「ち」と読むと手と音通になり手束になる。浅草、豊島郡、北条家、阿佐谷、石浜、太田新六郎、番匠等、手束登場後のキーワードが詰まっている。で、気付くとこれらは濱路、船虫、毛野に関わっているのだ。北条家は鎌倉の執権北条氏が弁財天に関係している。千束郷になにかがあると調べていくと行け！ いけ！ 探訪！！ 東京の池と水門というブログの「[吉原弁財天の弁天池](#)」という記事をみつけた。吉原に弁財天、遊女と弁財天がつながった。

千束の音通に洗足がある。地名としては日蓮が当地の池で足を洗ったという

伝説の残る「洗足池」に由来している、とググっただけではダメ。足を洗う、である。江戸語で、

芸娼妓を初めとする水商売や遊侠・放蕩はもとより、その他の悪行を事とする者が、それをやめて堅気になる。

である。挿絵でも拈華庵の手束から「足を洗った」庚申塚の手束として、同じポーズで描かれている。

02/16に「花」を見つけて以来、今年は手束と遊女遊女で終わってしまった。まだまだ分かった気はしないが、手束という女がどういう人物なのかを探ることは、八犬伝がどういった性質を持った物語なのかを知る手掛かりになると思われる。他の馬琴作品に現われる、例えば単純に三勝の流れを汲むものと思っていたが、善悪不二が強く押し出されている八犬伝では、手束はそのような流れの中にはいないようである。

●『羈旅漫録』

(烏丸)光広卿は毎度この牛を雇ふて花街にかよひたまひぬ。車の上に氈を敷その上に酒肴を設け、自若としてかよひ給ひしとぞ。

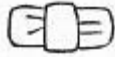
神余光弘は、里見代々記では金余左衛門介景春、房総軍記では神余安芸守景貞、房総里見軍記では金丸太郎光孝などで光弘というのは馬琴の創作で、単に光弘だけである。玉梓は遊女であったとの推測にたてば光弘は烏丸光広からの命名だろう。そして玉梓に惑溺し「長夜の淫樂に、その身を忘れて、日々月々に病を生じ」①34 たのだから神余は腎虚一俗に、過度に性交することによる男性のからだの衰弱一であり、腎虚光弘が名詮自性であろう。と考えられるのは「麻呂は男根の事と思ひ、金碗を金精の隠語と聞かば聞くべし」(犬夷評判記)などと思ってしまうのが馬琴を含めた江戸人だからである。

●『羈旅漫録』を読んでいると、馬琴は自分の体験、見聞したことをかなり八犬伝に活かしているように思える。

名古屋の評判という項の「名古屋にて針妙と称するもの、三州あたりの銜妻と同じ」とか名古屋の天王祭という項目の大八など、馬琴のイメージの仕方がわかる。名古屋→古名屋→古那屋、針妙→妙針→妙真、天王祭→大八で、イメージを作るために自分の経験やそれに伴う著作までもかたっぱしに当たっていたのだろう。『羈旅漫録』は馬琴の遊女見聞記みたいなもので、遊女が隠しテーマのような八犬伝で活かされているのも当然と言えば当然か。

●『羈旅漫録』

大夫天神は夏も小袖なり。帯は  如此横に長く結ぶなり。この挿絵について馬琴は「この段七月の初旬なれども、出像は冬の衣装に似たり。現羅衣は画くとも、彩なくては定かならぬもの也」とわざわざ注をつけているから、衣装に注意しろということだ。これに関連して肇輯口絵の伏姫と大輔で目をひくものは白い帯であり、二人に玉梓の怨霊が纏わりついていることを表している。

帯は玉梓であるから、  如此横に長く結んでる玉梓は大夫天神なのである。

玉梓を怨霊というだけでなく、特定の菅原道真の怨霊と結び付けることで天神＝遊女に導く。

●寛政九年馬琴の序がある「吉原細見」に載る二文字屋の玉章。隣に八重梅がいる。

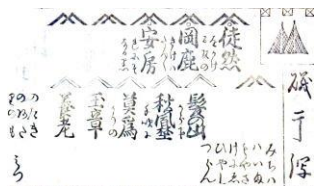


早稲田大学図書館古典総合データベース

玉屋 宮戸
 万字屋 富山
 中田屋 通路 濱里
 竹屋 梅衣
 伊勢屋 富山 姫扇
 二文字屋 玉章
 海老屋 桜人
 富士屋ふじや寅次郎
 桐屋

図像中に現われる紗綾形は玉梓が最初につけているので、紗綾形ではなく卍繋ぎ文様として理解したほうが良さそうだ。

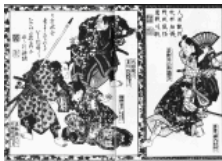
●文化二年の序がある早稲田大学図書館古典総合データベース『擬新吉原細見狂歌集/菅原長根編』に



安房に玉章、そして網のマークは



濱路を表すこの口絵を想起させる。



この口絵の氷垣残三夏行側の額縁と歌の女郎花、重戸は操野重戸

と名札がついているように本文でも女郎花とは関係がない。なぜ女郎とつく女郎花なのか不思議だったのだが『広益俗説弁』を読んでいて分かった。巻十四婦女にある「桧垣遊女は白拍子のはじまりと云説」にある

(前略)此所に桧垣砦・山下庵・薫桜あり。皆、遊女が旧跡なり。

というところ。口絵は女郎花がキーワードなのだから、氷垣は桧垣で重戸の着物の桜は薫桜とみて良いだろう。

媼内が持つ鉄砲は「嘘、でたらめ、ほら」であるから、女郎は嘘、でたらめ、ほらばかりということなのだろうか。玉梓は鸞＝嘘であるから、玉梓の供述はでたらめだったと言える。ということはいままで見てきたように手束にも遊女の要素があるのだから、番作に語った留守番の理由もでたらめだったのではないかと推測できるのである。

馬琴が知っていたかどうか「持桶の女郎紅葉」という名所があるらしい。同じ輯の口絵で箆大刀自が首を持って、稲戸津衛由充が首桶に手をかけている。馬琴をして女郎女郎言わせる意味は何なのだろう。

女郎でこの挿絵を思い出した。

沓掛の宿というだけなのにこの豪勢な布団は大袈裟だと思っていた。障子の鹿は本文にある妻恋の鹿と思わされるが、鹿のまわりに蚊が飛んでいるので「しか」ではなく「か」と読み、恋だから「かこい」で女郎になる。船虫自身も鹿の子の着物を着ている。鹿だけでは妻恋の鹿とわかってしまうからか、お約束の薬缶も置いてある。宮武外骨の『風俗猥褻辞典』に

『色道大鑑』には「囿」と書き、「大夫を松とし、天神を梅とし、囿を鹿とせり」p58

とあり、囿が「三流の遊女」であるということは、三流の船虫に対して流石に玉梓は二流ということになる。囿をこうして見ていると、口+井で手束の姓の井が出てくる。鹿の子で書かれた花という字のある衣は、やはり手束のものとみていいだろう。手束は船虫と同じく天神ではなく三流であるということになる。

囿がもう一人いる。大輔の母の濃萩である。萩は鹿だから濃鹿で転倒して鹿濃、か

こい、困になる。いくら父の一作が淫奔に似て淫奔ではないと言っても淫奔なのである。ただ金碗は神余で神の余りであるから、民俗学的(笑)にみれば「旅人を歓迎する性風俗と客人神」のカテゴリーに入る話とみてもいいだろう。

こう見てくると、なぜ馬琴は女郎女郎いうのか分かってくるようだ。馬琴にとって女郎とは興味を持たざるを得ない、男の人生を狂わせる悪の象徴なのかもしれない。犬士たちの女性恐怖と言われるものは、馬琴自身の女郎恐怖なのではないかと思えてきた。玉梓にクラッとした義実 は女郎にクラッとした馬琴であり、それを諷めた八郎はもう一人の馬琴の心の声だろう。

●「千字文」の口絵にある「化野や 人の心の鬼の名を かくして笑る 姫百合の花」を見て、この挿絵を思い出した。

亀篠の後の百合は鬼百合と思っていたけど、画中の文は「化野や」であろう。亀篠は亀＝き＝鬼で、鬼の名を隠しているし、この笑顔である。馬琴のことだからここでこの化野は地名とは関係なく、濱路のことを夫婦で「化かし合う」墓穴と亀篠のことになるだろう。うちのパソコンは信乃信乃うっているせいか、あだしのを変換すると「仇信乃」がでてくる。確かに信乃は仇敵みたいなものだ。化野を「ばかしの」で「馬鹿信乃」が一番最初に浮かんだ自分って。まあ墓穴と亀篠にしてみれば村雨をすり替えられたことに気付かないで出て行った信乃は「馬鹿信乃や」であろう。亀篠のこの笑顔である。

「弓張月」に戸のふり仮名が「けん」とあったように、八犬伝は馬琴の集大成であるから八犬伝だけを読んで八犬伝を理解するのは無理。戸がケンで犬だからこそ富山はトミサンではなく、犬山になるトヤマでなければならないのだ。

ついでに言うと、化野は毛野と音通である。毛野の仇討ちキャラというのはこんなところからきているのかもしれない。

●馬琴の『高尾千字文』の口絵に



鯉に乗った「娼妓(ゆうじょ)高尾」が描かれている。手束(タツカ)は束が面(ツラ)と音通で、面は顔だから手顔(タカオ)＝高尾となる。タカオは片仮名の「タ」が漢字の「夕」でタカオ＝夕顔になる。

●濱路→濱子→濱の子→海女の子●天神(うめ)。安政七年版『新吉原細見記』早稲田大学図書館 古典籍総合データベース

●依介は人衣玉、玉の衣の人。

●



この挿絵にも玉梓の存在が満ち満ちているのだけど、従者が持つ梅模様の馬柄杓がなんとなく分からなかった。馬柄杓なのだからここに描かれていることはおかしくないし、玉梓がいるのだから梅もおかしくはない。ではそれが梅模様の柄杓である必然はあるのだろうか。つまり『俚言集覧』にあるように遊女は柄杓であるから、梅の玉梓が柄杓＝遊女ということになるのだ。



信乃が持つ柄杓もいかにも伊勢参りのアイテムかのように見せているが、図像は住吉詣であるから別の意味があるはずなので、梅模様の籠と柄杓は別々に描かれていても、ふたつで上の挿絵の従者が持つ梅模様の柄杓に対応していて同じ意味があると考えていいだろう。玉梓はいないのにこの口絵にも玉梓の存在が満ちている。これまでに見てきたように額蔵にしがみついているような幼女が玉梓の後身である正月の濱路とみると肇輯口絵の玉梓図との関連がわかる。

●『羈旅漫録』における馬琴の興味は専ら遊女に向いているようで、天神についても言及している。『守貞謾稿』で鹿子位と見ても鹿の子模様が浮かんで玉梓や船虫、手束の花の鹿の子も思い起こしたが「位」が邪魔をしていた。船虫の鹿の子は、鹿の性は淫だから良いが、玉梓と手束の鹿の子まで同じとは考えていなかった。『羈旅漫録』に

島原に鹿子位といふ妓あり。これは江戸よし原のはし女郎におなじ。p 210

とある。一番はじめに鹿の子模様を付けているのは肇輯口絵の玉梓だから、鹿の子は玉梓とみて良いだろう。つまり鹿子位は遊女だから、音通の鹿子衣を着ている玉梓は遊女である。夕顔の宿（拈華庵）に鹿の子で花という字が書かれた着物があるが、おそらくそれは手束のものであるから手束も鹿子位なのである。

船虫と逸東太の「笛の音に」の挿絵の鹿も妻恋の鹿とか上品なものではなく、船虫の遊女性を表しているのだ。



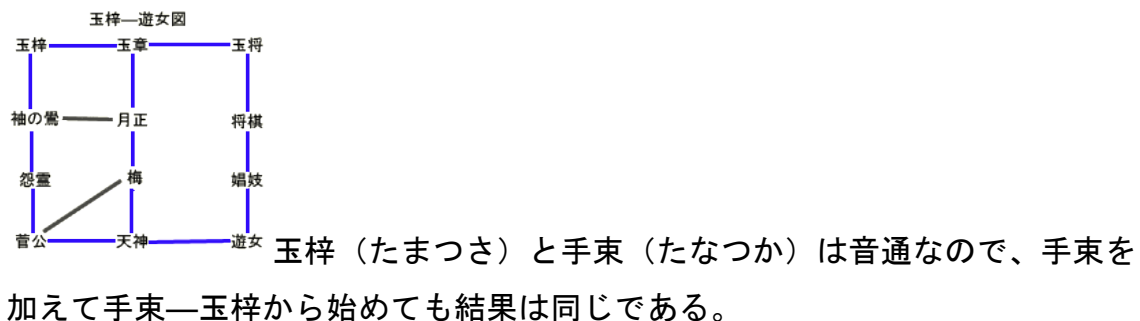
七輯表紙の鹿の子模様は、七輯が船虫編ともいえる内容であることを表している。

大輔の母濃菰のことを父の一作は淫奔（いたづら）に似て淫奔ならず①128 と言っているが、わざわざ言うということは淫奔であると言っているのと同じことだ。

●玉梓が怨霊であることを導くために「袖の鸞」など菅原道真の要素が使われている。『守貞謾稿』に天神が遊女とつながる面白い記事を見つけた。

天神 ある人曰く、天神と号すことは一昼夜に銀二十五匁なるが故に、菅廟の縁日に因みて名とす。（巻之二十一、娼家 上）

『物類称呼』に「妓有と云物有。若いものといふ。ぎうは牛にて牛は鼻にてつかふ也」とあり、天神→牛→遊女という連想が働く。って言うか、八犬伝は連想でなっているので、グダグダ書くよりも表にしたほうが分かりやすい。



●名前が玉梓に変換できる遊女的要素の色濃い手束、夕顔の系譜の濱路、旦開野。玉梓的娘たちの元祖である玉梓とはどういう女なのだろうか。

図像に比べて本文では容色や定包と密通したこと、処刑前の怨言など情報量が多いようで少ない。玉梓の言う故郷がどこかも、どういう経過で神余光弘の側室になったのか等何もわからない。おそらく定包同様に容色の良さでもって神余光弘に召し出されたのだろう。

玉梓は玉章で考えるので「ぎょくしょう」とは、肇輯口絵の犬山道松、二十回の犬川母子雪中遭難図で額蔵が着ている着物の柄から「玉将」である。道節の父は道策で将棋とのつながりで本因坊道策が想起されることも含めると将棋というキーワードは正しいだろう。玉梓は遊女であろうとの前提に立てば、将

棋とは娼妓である。女田楽に遊女的な要素があるからこそ馬加大記は旦開野たちを呼び入れたのである。旦開野から逆算すると、神余光弘も女田楽の一員だった玉梓を召して側室にしたとも考えられる。

ならば何故道節と額蔵の二人が将棋＝娼妓と関連付けられているかと言うと、道節の前身＝神余光弘、額蔵の前身＝岩熊鈍平、濱路の前身＝玉梓であるからで、道節と額蔵が一番将棋＝娼妓＝玉梓に近いからだ。玉梓が娼妓であるならば、稗史七法則的後身の手束と旦開野に遊女的な要素があるのも当然といえるだろう。

●



この口絵の画中の文は「世の中は地獄の上の花見かな」なのだけれど、地獄というキーワードで面白いことがあった。ネットにあったのでいつもの如く出典が分からないし嘘か本当かも分からないが、地獄太夫という遊女に一休が般若心経を説いたとの話。



手束の後の襖に書かれているのが般若心経である。で、ググってみると一休の『狂雲集』

兩片皮復一具骨
鳥蟲馬牛更魔佛
混沌未分暗昏昏
雲月知爲誰風物

馬牛のお馴染みはさることながら、魔仏、混沌とはこの挿絵そのものである。どうしても手束には遊女がつきものである。

ちなみに一休は親兵衛の京都編（この時点では一昨年遷化している）と「侠客伝」で將軍義持暗殺に失敗した姑摩姫を捕える場面に登場する等、重要な役割がある。

●於樺（おと）

虎のことなのだけれど、倒置してみるのを忘れていた。「とお」なら東条、十

条、稻城といっぱいいる。十条兄弟の母音音が猫であることは前にみたから、とおは虎であることが分かる。ということで赤岩一角武遠をもう一度見直してみると、赤岩は隻眼、一角は牙が二本で牙二郎の父親、武遠は遠が虎であるから武虎で猛虎になる。化け猫に食い殺される以前から猛虎の赤岩一角武遠なのだから、犬村にならなければ角太郎は猛虎の子供のままであった。玉を持たない角太郎は猛虎の子なので、化け猫のニセ一角につけ入られる下地があったのだ。

鰐崎悪四郎猛虎という隠すのが面倒くさいかのような猛虎そのままだが出てくるが、そのルーツは赤岩一角武遠であった。

2012/11/19

●



船虫の雲をいままで蜘蛛と読めなかったのが情けない。

まるで菅笠に船虫と名札がついているようだが、

漂泊する遊女や巫女の代表的持物が、笠だったのである。（大和岩雄『遊女と天皇』 p187）

とある。のちの船虫の行動からは、船虫が漂泊する遊女として描かれているのがわかる。名札付きの菅笠が船虫の本質なのである。

●いむぐわれきぜん むくいぬ

『中世なぞなぞ集』 p37。因果歴然。報いぬ→むく犬。八犬伝のむく犬たちは因果歴然ということ。木工作の場合、挿絵でもわざわざ注を入れている。

●こしのうちのしんぺい かきうちハ

『中世なぞなぞ集』 p69。



奥の中にいるのは大八の親兵衛だが、この時の本名は真平である。かきうちハは肇輯口絵の八郎の持ち物であるから八郎その人を表す。つまり「奥の中の真平」とは八郎であり、大・八郎、八郎の完成形の親兵衛である。後姿の頭は玉を表している。

●八房は玉梓の怨霊に操られた狸に育てられた犬であった。

父はなく母犬は狼に殺され狸に育てられたという構図は、父八郎はいなくなり、母の濃菰は死に一作に育てられた大介と同じである。

一作の一は蓼科太郎市の市と音通だからとみているうちに、牛に天神、鬼、市、牡丹、額があることを発見。一＝市は牛であるから一＝牛＝怨霊で、一作に育てられた大介とは八房と同じく玉梓の怨霊に育てられた子供ということになる。上総の大介の名詮自性である鉄砲玉の玉は玉梓の玉で、大介による伏姫誤射は玉梓自身による射殺と同じことなのだ。図像的にも肇輯口絵の桐柄の大介は霧＝玉梓に夤縁かかっていることをしめしている。木偶（にんぎょう①129）というのは玉梓に操られた人形と大介をみるとき印象的である。

と書いて読み返してみると、

片腕もがれし木偶と、稚児とわれ只三人①129

とある。稚児とわれが大介と一作ならば片腕もがれし木偶が玉梓であろうと肇輯口絵をみると、玉梓の左腕がない。袖をくわえているのは恥じらいのポーズではなく、腕がないから袖を咥えて持ち上げているのではないか。隣の口絵で木曾介が腕まくりしているのは腕に注目しろということなのだ。

●物類和漢称呼部 / 沢元【ガイ】 箸

馬琴蔵の『物類和漢称呼部』に牛口刺（ヲニアザミ）がある。鬼薊なのだが牛口刺で考えると牛が鬼ということになるから、牛＝鬼と考える例の一つとなる。玉梓は死しては祀らざる鬼で、義実に見撃されているのだから心＝神ではなく、気＝鬼である。天神の菅原道真にしても祀られるまでは怨霊であったから、祀られていない玉梓は神ではなく鬼である。

犬士を五行で分類したことあがあるが、十干十二支を忘れてはいけなかった。十干十二支よりも五行で考えるほうがいかにも高度で知的に見えるから十干十二支を侮ってしまっていたが、ごった煮の八犬伝の要素に上も下もないのだ。

仁一壬 犬江でそのまま。

義一癸 川で癸

礼一丙（レイはないので音通のヘイ）「ひのえ」の角太郎は風火作戦。

智一未（チはないので音通のビ）智と美、まさに毛野。

忠一丑 黒で火行（火牛）

信一申 芳流閣の屋根へ「三間梯子を走登るに、猴の杓を伝ふが如し」②184

孝一庚 信乃が庚申に関係深いのもこれか。

悌一丁（ひのと）火事—梶之助

基本的な組み合わせ。壬の親兵衛は別格で、現八が二回出てくる。

庚申→信乃・現八

癸丑→額蔵・道節

丁未→小文吾・毛野

丙申→角太郎・現八

現八が申だと高い所に登ったり山（庚申山）に入ったりと分かりやすい。信乃と二人で庚申に絡むのも納得。角太郎の丙は、信乃と同じ庚申、妻帯者、孝行息子の点からみて、風火作戦にからむことから実質的に庚とするほうが対としてもスッキリして綺麗である。

●伏姫の伏の字は、人にして犬に従う名詮自性①166

とのみ思わされてはいけない。伏は福だから「禍福倚伏」が名詮自性である。本文にある通り「禍福は糾える縄の如し」である。伏姫は福姫となると、福の付合いに弁財天があり、滝の川なる弁財天①285 に八房に乗って現れる。ただ伏姫が弁財天かというそうではない。福の付合いには毘沙門もあり、連想が弁財天に向かったというだけであろう。挿絵の要素が「類船集」では布施（伏姫）、富貴 牡丹（八房）、福 弁財天が順に並んでいる。本文にない庚申塚がメインなのだ。

●岩熊鈍平は額蔵の前身。

錦織頼二を頼死と考えていたけど、この頼がくせものだったのだ。

岩熊は顔隈で奴の格好をした額蔵のことだとしていたけど、鈍平が鈍い振りをしてる額蔵かと決めかねていた。で、頼だが、頭を地につけて礼をする、ぬかずくの意味がある。「鈍平等は、阿容々々と、沙石に頭を掘埋めて」①106 が頼であった。額蔵、糠助のぬかはどこから来るのか疑問であったが「頼」であった。鈍ドンの音通で考えていたけど、濁点のないトンも忘れてはいけなかった。平は平身低頭の平であろう。

●「いせのあま」図と「田単」図についてこんなことを書いていたので、

信乃・額蔵図の輿の着物は玉梓のものであったし、現八（ここでは見八）・道節図の柳は玉梓の肩にかかる黒髪を「春柳に糸垂て」（①111）と描写していたことによる。柳には腰であり、腰は輿につづる。

信乃と現八信道には信（まこと）があり、額蔵と道節は虚の姿である。信乃と現八が同じポーズをとっているのも対応している。首を切られていない浜路なのに、道節が持つ首を浜路の首に思い込まれるが、女で首を刎られたのは玉梓だけである（①114）。額蔵の懷で顔だけ出している幼児と、道節がもつ首の女は同一人物であり玉梓→浜路なのである。

●田単

蚊牛。蚊は牛。雑文で牛は怨霊、悪であるから蚊も怨霊である。

蚊牛は火牛である。火牛は火行に通じる。

蚊(火)は蛛(毛吹)である。

火定に終を示したる寂寞道人肩柳なり(中略)南蛮鉄金+篠の纏身腹甲を、透間もなく領具して、網に螫れる蜘蛛に似たり(②138)

七日に話題にした蜘蛛がこんなところにも出てきた。さや形、分銅、桐、ストライプ、斬首といった玉梓の属性が描きこまれたこの口絵には、道節が持っている首は普通に濱路の首と思ってしまうが、首(こうべ)を刎られた①114 玉梓が描かれている。

転生からみると、玉梓が濱路、道節が神余光弘、現八は天津兵内だが、現八は現・八郎といった三人で、月代を剃らない道節は図像的に定包となる。いつも言うように「梟は梟ではない」が図像の基本である。

道節と現八がこの口絵の場面で会うことはないし、よっぽど捻くれて考えない限り、パッと見で濱路の首と思い込んでしまうといったこういう図像があるから、口絵と本文とは合っていないと誤解されてしまうのだ。

●ふと雲には瑞雲と魔雲があって船虫の雲は魔雲だろうと思った。雲で突然蜘蛛が浮かんた。蜘蛛だと女郎蜘蛛だろうと各種付合集を見てもない。で「和漢三才」を見ると、絡新婦(じょうろぐも)があった。新婦に絡むとはまさに船虫である。そして斑蜘蛛ともいうのだから、図像で船虫が初登場の時につけていた斑の帯が斑蜘蛛の証拠である。女郎蜘蛛ならば庚申山以降の船虫が分かる。

女郎とか船虫とか書いていると手束を思い出す。拈花庵での手束の挿絵、強調されている斑の帯。今まで麻とばかり思い込んでいた模様は蜘蛛の巣なのではないだろうか。船虫は突然変異の悪女ではなく、稗史七法則に則って現れた船虫以前の女性たちの対であり、反対の姿なのだろう。

手束は弓だから番作の着物は破魔矢である。手束の魔は破られたのである。

●図像の読み方。玉梓の図像中の物、現象(霧—桐)はすべて玉梓の属性である。

桐の木で作られている琴は玉梓である。その虎のような木目(柱もある)も玉梓である。以下の図像もすべて玉梓の怨霊が夤縁していることを示している。

鹿の子、さや形、墨染め桜、花の簪、鸞の袖、斬首、分銅、雲、霧・桐(煩惱の雲霧)、黒の扇、芭蕉、子供、老人、梅、黒牛、梅の鞍の黒馬。白衣(白い帯)、亀甲、七夕、弓矢、錦の袋、玉簾

「霊書を感じて」の挿絵には玉梓の気配が充満している。肇輯口絵の大輔は全身が桐(霧)に包まれ、白い頭巾に白い帯(白い頭巾に白い帯は富士=不二)、本文では

鉄砲を使う大輔が弓矢を持っていて玉梓に夤縁つかれていることを示している。

●大輔は鉄砲玉であると言いながら、鉄砲のことは知らないことに気付き、「江戸語」をみた。

鉄砲 嘘、でたらめ、ほら

鉄砲言 嘘つき、ほらふき

鉄砲様(てっぽうさん)嘘つきさん、ほらふきさん

鉄砲にこんな意味があるとは意外であった。富山で大輔が鉄砲を撃った順番が、地の文と大輔の証言が食い違うのを読んで、大輔は嘘つきじゃんとか思ったこともあったが、登場人物の発言は主観的なものだから客観的事実とは違うのだろう、と好意的にとっておいた。ただ大輔が自分に都合の良いように言っているという印象は消えなかったが、昨日みたように大輔は鉄砲玉という名詮自性なのだからそんなものかもしれない。大輔の失敗は玉梓が夤縁していたことにもよるが、大輔自身に信が欠如していたことが大きい原因だろう。精神的な父と言われる大輔からしてそうなのだから、信が欠如している犬士がいるのもおかしくない。

登場人物がこう言ったからそれが事実であろうと頭から決めつけて、それ以上考えないのは間違っている。八犬伝の世界は虚実で満ち満ちているのである。

『嬉遊笑覧』巻九に〇てつぼう「後撰夷曲集」いつはりを云を世話にてつほうはなすといへば「いつはりと思ひながらもてつほうのはなしにきもをつぶしぬるかな 政長」とある。

●下の挿絵を基準とするならば、図像的に白は玉梓であるから、肇輯口絵の伏姫と大輔の白い帯は二人に玉梓が夤縁していることを示している。

●この挿絵に八犬伝の全てが詰まっていると言っても過言ではない。



関係図はその一部でしかない。

この挿絵であれ？と思うのは「上総の大介」という名札。この時この子は加多三と呼ばれていて、義実が大輔と名付けた。介がおかしいが、介は貝で玉だと分かっているのだから代入して考える。大玉は八犬伝っぽいのは良いけど何か変だ。上総が怪しいので「類船集」をみると、蟹蛤、蛸貝がある。蟹は忠臣だから良い。蛸は八犬伝では片思いなので、後に大輔が射殺した八房をこれでもかと言うほどに鉄砲でメッタ打ちにしたことを思えば、大輔の八房に対する

嫉妬とは八房が一番の軍功を上げたことよりも、実は片思いだった伏姫を取られたことのほうが大きい理由だったと推測できる。

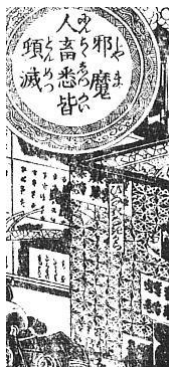
次に大をみると「類船集」にはないので、音通を探すと「題」がある。題には「鉄砲」がある。大介と鉄砲、当たりのようだ。大介とは題玉、つまり「鉄砲玉」という名前である。テレビの八犬伝で、鉄砲のない時代なのにおかしいなんて賢しらだって言われるのに気を遣ったのか、大輔は弓矢を使っていた。それは八犬伝はフィクションだと言っている馬琴に失礼だし、大輔は「鉄砲玉」という名詮自性が分かっていないからだ。とか偉そうなことを言ってる自分も書きながら気付いたのだ。

安西景連のもとへ行ったまま帰ってこれなかったのは鉄砲玉だったからなのか、金碗大輔。八房を殺した鉄砲玉は大輔自身であり、伏姫の擁護とか言ってるが⑦250 鉄砲玉は素より大介の、大には当たらないのである。

上総の大介が鉄砲玉というのは久し振りに面白い名詮自性であった。大輔は左母二郎的人間だったというのは蛸貝のキーワードでも分かる。

●璋ショウ 信乃が持っている柄杓は璋で分解すると玉章で、玉梓である。玉の輿に乗った金持ち信乃に無銭伊勢参りのアイテムである柄杓は必要ないし、もともと住吉詣でを描いているのである。

●衝立に「ひな衣なきから」と名札が付いていて、芸が細かいなと感心していたのだ。



が、馬琴の細かさはそんなものではなかった。衝立には別の扨という漢字がある。これを分解すると戸衣で「こい」になり雛衣になる。やらずもがなでもやらずにはいられなかった馬琴なんだろうな(笑)

それにしても「邪魔な人畜は皆悉く頓滅した」と「ひな衣なきから」の上にデカデカと書くとはいくら雛衣が鄙木姫の虚花とは言えひどすぎるな。切腹して内蔵が出たとか雛衣に対して悪意があると思えない。馬琴はヒナコとかいう女に相当酷い目に遭わされたのかね。

●ワンワン

枉 wǎng 無実の罪。冤 yuān 枉

汪汪 wāngwāng わんわん(犬の吠え声)。

狗児は「わんわん」⑦31 だから汪汪の犬は音通の枉枉で、犬士たちは無実の罪をきせられてしまうのだ。金碗大輔が犯した伏姫射殺という罪も悪意があった訳ではないので枉である。信乃にしても額蔵にしても、なんでこうも簡単に無実の罪をきせられてしまうのか不思議だったのだ。寧王女(ねいわんによ)だから春王、安王も枉枉の汪汪である。で、犬塚・犬坂の汪汪 に転生したのだ。

これだけ汪汪書いていると上総の一作の一は「ONE」なのではないかと思えてくる。一作＝犬作りか？馬琴は英語を知っていた？TENは天？十条は天上？天上の八房？なんてのだったら面白いけどね。馬琴が英語を知っていたとか見たことも聞いたこともない。当時の日本の情勢を考えれば、好奇心旺盛の馬琴が知っていたとしてもおかしくはないが。

『寛政三年紀行』の巻頭で「西にうろたへ、東にさすらい住の狂人有。旦には上総に喰ひ、夕にハ武蔵にやどりて、しら波のよるべをしらず、たつ泡のきえやすき物から、名を一茶房といふ。」というのが小林一茶で、一作の作が「さ」で一茶になる。上総の一作にも気をとめておいた方がいい。

「類船集」上総に鯛・鮑貝・蟹蛤がある。鮑貝は上総の一作の娘濃菰の鮑の貝の片思い、蟹蛤は「蟹は蛤」とみると住吉の浦がある。挿絵では百姓一作で上総は「上総の大介」である。介は貝だから住吉「源氏」が絡んでいそうである。と、なんだか混乱してきた時は思考停止が良い。

●山下柵左衛門定包

山→犬

下→舌→尺八

柵→作→さ

左→さ

ささ→篠→篠は蟹→蟹（かたかなのカニ）

衛門→門衛る

定包→悌包→八房

犬＋尺八＋カニ＋門を衛る＋八房。尺八とカニが八房になるのは本文にある。八房自体が蟹であることは昨日みた。柵が作や策ではないのは、柵には「しがらみ」や「まとわりつくもの」という意味があり、纏わりつくものは煩悩の犬であるからだ。

山下柵左衛門定包には「八房。門衛る犬、八房」という名詮自性がある。そして「ささ」＝六で梨、犬殺しで、犬の朴平と無垢三を殺すのが定包である。犬が犬を殺すというパターンの原点は定包である。犬の犬殺しにはなにか原拠があるのだろ

うか。

だいたい人に対して煩惱の犬にしてやると言った玉梓が、自ら煩惱の犬に生まれ変わり、読経の功德で善の犬になった途端に怨みの相手の息子に射殺され、死体をボコボコにされるマヌケな怨霊なのであろうか？それこそ茶番である。

篠蟹に、軒のあやめ、織女祭(たなばた)がある。軒(のき)はケンで犬になるのはお馴染みである。あやめは黒白、善悪だからだから、黒白の犬・善悪の犬になる。八房は黒白斑の善悪の犬、その子の八犬士も黒牡丹の痣をもった黒白の善悪の犬である。黒牡丹が聖痕ならば、痣が消えた八犬士はただの俗物になり下がったということなのか。痣が消えた同時期に玉の仁義八行の文字も消失している。牡丹は富貴歓楽の悪の象徴であり、玉は善の象徴であった。その二つは八犬士誕生の因縁であり、痣と文字の消失は八犬士を動かしてきた全ての因縁の消失を表していて、因縁から解放された八犬士は仙人になるより他はないのである。

●作はさ。

匠作→作匠→さしょう→詐称

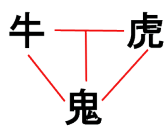
番作→作番→さばん→茶番

拈華庵→拈華微笑→拈華は微笑。夕顔→白き花ぞ、おのれひとり、笑みの眉開けたる。拈華→夕顔。拈華庵は夕顔の庵。詐称、茶番、夕顔の庵、何が善なのか、何が悪なのか、八犬伝の世界は虚実の迷宮である。

●牛虎鬼、悪のトライアングル。

牛が悪というのが盲点であった。最初に黒牛に乗った子供を役の行者その人とか、役の行者の関係者と思い込まれるから他の考え方が出来なくなるのだ。玉梓は祀らざる鬼なのである(①109)から、鬼＝怨霊と考えて良いだろう。黒牛に乗った子供に玉梓を透かして見るとき、玉梓の怨霊がいかに伏姫に夤縁しているかを知ることになる。

図像を見たままで解釈しようとするのは「見立て」という考え方—ある意味で遊び心—を忘れてしまったからだろう。本文にこの図像の通りはないから本文と乖離していると言うのではなく、我々の理解が乖離してしまっているのである。



悪のトライアングル

『易経』の「蹇。利西南。不利東北。利見大人。貞吉」は「犬(けん)は丑寅

によろしからず」である。牛虎（鬼門）に良くないのだから当然鬼たちも犬士に襲いかかってくる。

●珠は手股を漏て、輾々と、雛狗のほとりに落しかば(①288)

手は「たな」であること、珠は「輾々ころころ」と転がること雛は「こ」であること。輾々は犬っころである。表紙にはそれこそコロコロした犬っころで埋め尽くされている輯もある。犬が初めにあるのだから、犬と玉のイメージは丸々とした犬っころにあるのだろう。八犬士を選んだのも犬は可愛いからだとか馬琴が言っていたような記憶がある。で、ころは葫蘆であり夕顔、瓢箪の別名なのだ。犬飼は既定であるから、犬飼→七ター瓢箪→夕顔の連想が働くと思われる。次に犬は飼い＝貝＝玉との要領で音通と付合いで八犬士のキャラをたてていったのではないだろうか。

三輯の表紙は犬っころだらけだが、よくみると白犬、黒犬、黒白斑だけである。白犬、黒犬、黒白斑の犬が八犬伝の基本である。

●玉梓、手束、濱路

梓弓、手束弓、破魔弓で三人は何故か弓つながりだとは書いていたが、やはりツツコミが足りなかった。角太郎の弓の講釈は月のためで、弓は月なのだ。弓張月である玉梓、手束は図像的に仰け反っていて、下図の月のように黒白半々である。玉梓、手束は善悪をもった、濱路は魔を破った月の女なのだ。

●軒のつまごとに、這ひまつはれたるを(源氏、夕顔)

を八犬伝に変換すると、
犬の妻ごとに、玉梓が贅縁ている

となり、五十子、伏姫に玉梓が贅縁ていることになる。濱路は前身玉梓だし、雛衣を殺す船虫も下でみたように玉梓と音通になる。濱路と雛衣は五十子、伏姫との対になっているから、雛衣は玉梓的な船虫と関わってしまう。あくまで「的」な構成上の対であって船虫に玉梓がとり憑いているのではない。

●この挿絵を無視して玉梓がいつまでも崇めていると思うのは創作モノの八犬伝に影響されすぎである。

挿絵にあるように玉梓は怨みを散じたのである。これは善の玉梓の姿であり、馬琴はここに水滸伝の宋江等に見出した本然の善を設定している。玉梓(玉章)は月正、正しい玉(魂)を持つ者としての正月の濱路に生まれ変わったのだ。玉梓を転倒すると梓玉で新月になる。濱路の図像には満月がつきものだから、この点でも濱路は玉梓の反対になっている。

伏姫に天照大御神をみる時、肇輯口絵で伏姫の反対に描かれている玉梓は月読神である。そこに神を見なくても玉梓は月であることを言いたいだけだ。

●船虫は船が玉で虫と章が音通で玉梓となるとか、音通なんてそんなものだろうということにしておいた。最近名前を例えば犬塚なら犬は塚と考えるのだとしている。船虫は船で虫であるから船の音通をみると鮒と船がある。鮒の付け合いに「玉章」がある。鮒の玉章という故事によるものだということらしいが、とにかく船＝鮒＝玉章であることはわかる。虫は虎にしているから船虫は玉梓で虎になる。玉梓で虎とは正月（濱路）である。

●肝心の牛鬼を忘れていた。その名もずばり牛鬼で、犬士の言うことを聞いて船虫を突き殺す地獄の獄卒牛鬼は白牛である。



黒白は善悪であるから船虫を殺す牛鬼は善の牛で、伏姫の前に現れた子供を乗せた黒牛は悪の牛、菅原道真を想起させる怨霊の牛である。

●



額蔵の袖は琴を立体的に模した嘘（鸞）の袖で、天満宮の鸞替え神事で肇輯玉梓図と関連。鸞替え神事は正月。亀と天満宮で、亀戸天満宮は亀、犬、天満宮と関連し、梅と関連。蛙は月関連。とこれだけ牛牛書いていれば、さすがにこの蛙は牛蛙だと気付いた。見た目は蛙でも牛である。亀は毎度鬼なので牛鬼となる。墓六・亀篠夫婦は地獄の獄卒牛頭であった。下で書いた『易経』の蹇は西南に利ろし、東北に利ろしからずで、蹇は犬だから「犬は丑寅によろしからず」となり、牛と虎は犬と相性が悪いのである。犬の伏姫と牛に乗った子供とは良好な関係であるとは思えないのである。

●二枚の図像に、怨霊と黒牛の関係と子供の正体が隠されていた。

斬られようとしている玉梓は伏姫であり、また子供が乗った黒牛である。牛に乗った

子供は玉梓を処刑しようと刀を振り上げている男である。肇輯口絵で二人が対に描かれているのは、伏姫に玉梓が夤縁しているからである。

濱路姫が濱路の霊に操られた事例は、それ以前にも同様なことがあったことを教えてくれる。この子供は玉梓に操られた、伏姫に対する処刑宣告人である。刀を振り上げた男と子供の着物の柄が同じように描かれていることからそう考えられる。

牛に乗った子が言う天機などは、一角や濱路の霊が言うことで分かるように死んだ人間には特別なことではない。黒牛は菅原道真經由で怨霊であり、玉梓なのだ。

八郎の後身である伏姫の誕生から、八郎の子大輔に伏姫を射殺させるまでの親殺しが玉梓の復讐である。伏姫が玉を得てからは専ら大輔に玉梓は夤縁していたので、大輔はやることなすこと失敗するのである。伏姫死後起こることにも玉梓の怨霊が関与しているとみるのは間違いである。あとは玉梓の怨霊に使われてしまっただけの狸が祀ってくれなかった里見に対する逆恨みによって引き起こす事件である。



玉梓の処刑執行人と子供の着物の柄が似ていることには随分前から気付いていたが、子供は役の行者の関係者とのみ思わされていたので、どう考えていいのか分らなかったのだ。～とのみ思わせるのが馬琴の手法である。

●鬼門である丑寅は朴平と無垢三が定包暗殺のために落葉嶺の東北にいたからとしていたが、それはただ鬼門にいたからというだけで何故朴平と無垢三なのかという答えにはならない。二人が犬平とむく犬であることがポイントである。最近見直している『易経』にこうある。

蹇は西南に利ろし、東北に利ろしからず。（『易経』下 57 岩波文庫）

蹇は犬だから「犬は丑寅によろしからず」となり、牛と虎は犬と相性が悪いのである。牛頭天王の祭りの夜に古那屋の悲劇が起こる。

梅と組み合わせの黒馬は見かけは黒馬でも黒牛なので怨霊限定である。

虎と違って牛は犬士との関係がそれほど悪いものではないと思い込んでいたが、思い起こせば蚊牛は犬に殺されたのだった。

●易経 六四、井甃。无咎。

井、甃す。咎なし。黒白石畳の井手束には善悪があるとしたが、咎はないということだ。しかし、その前に初六、九二、九三がある。

●信乃は篠で何故亀篠と同じ篠なのだろうかと思ったことがあったが、この矛盾の一つも分からないので保留にしておいた。6 ネームをこれだけ見てきて分かった。篠＝3＋3＝6は犬殺しだから信乃自身も犬殺しなのである。手始めに飼い犬の世四郎を殺し、信乃を殺しにかかったために亀篠は墓穴を掘り殺され、犬山正月の濱路も信乃に関わったために殺され、房八とぬいも信乃に関わったために殺され、黒犬の木工作も信乃に関わったために殺され、奈四郎も信乃に関わったために殺されといった具合に、信乃は死を招くまさに「死の」使者である。信乃の部屋に忍んできた濱路を帰したあとの馬琴の書きっぷりは、これこそ「褒め殺し」だろうと言いたくなるくらい変な感じはするが、まさか信乃自身が犬殺しで死を振りまいていたとは。仁義八行のバケモノどころではないのである。

血の付合に薄があるので、篠すすきの信乃は親の犬塚番作の血を初めとして血を浴びてばかりいるのだろうと思っていたが、その血は犬の血ばかりであった。犬を殺す犬、信乃は金碗大輔の直系の血筋なのかもしれない。

八犬伝は今まで自分が信じ込まされてきた八犬伝とは全く違う姿をしている。明快な名詮自性、単純な勧善懲悪、音楽的な文章、そんなものは全て婦幼のためのものだ。八犬伝は読む本ではない、解く本である。

●玉章の付合を見ると犬があるので、一時期やはり八房は玉梓の後身なのかなと思ったことがあった。しかし犬は犬の犬だけではないのだ。玉梓の後身としている正月の濱路は犬山家に生まれている。付合におかしいところはないのである。

●ろくでなし

六で梨。六は犬殺し、とわかれば簸上宮六も簡単だ。宮戸川がある。宮は犬川だから、非情（簸上）な犬川殺しである。犬殺しが分からないと、簸上が非情と音通とはなかなか気付かない。蜚照（アマテラス）と同じで『古事記』ネームだけだと思ってしまう。

巨田新六郎は巨大な（ちょっと苦しいが）真の犬殺しである。巨田新六郎による荒芽山の急襲は犬士たちにとっての最大の危機であったと言える。

亀＝き＝鬼で篠＝3＋3＝6、鬼で犬殺しが亀篠である。犬たち（信乃・額蔵・濱路）にとっては最悪の人物である。

●山下定包は艮下で定→悌→八、包→房で犬下八房になる。犬下ではいかにも途中で考えるのが嫌になった感があるので、下を考えてみた。まずは音通を探せばいいので「類船集」で「した」を探すと「舌」だけがあり、尺八、～の犬(～は読む能力がないが、とにかく犬)である。舌だと八房が伏姫の顔を舌を吐き、涎を流して見ていたことが思い起こされる。尺八は定包のアイテムである。山下定包は「舌を吐く犬八房」である。2012/02/14の山下柵左衛門定包を読むで書いたように、伏姫の読経に耳を澄ますようになる前の八房は定包的な犬であった。

●乾为天→犬为天（あま）

これで（あま）ネームも解読である。

義実には土塊を投げた白水郎（あま）の子。義実は「天その国（安房）を給ふの兆」①23と解釈したが、白犬の八郎が義実に安房をもたらしたのである。

甘利も犬に利する人である。天岩餅九郎は「甘いわ、餅食おう」と思いがちだが、天は犬(間諜まわし者)なので間諜児である。

●風水

天→乾、水→坎、山→艮、地→坤。乾坎艮坤は犬の音通である。乾为天だから天津兵内は犬津兵内だし、蟹崎は天崎で犬崎で犬川莊介の親戚、海女の子の濱路も犬の子。杣木朴平は山林になるから艮林で犬林。山と水の犬山と犬川は苗字が変わったことがない。山下定包は艮下で定→悌→八、包→房で犬下八房になる。

「比翼文」の権八が犬八と分かった時から「ごん」＝権＝犬の要領で変換すれば良いのであとは犬（ケン）の音通に気付くだけだ。

●



黒馬、梅、川と宇治川の合戦のエピソードを想起させ、それによって導かれることは？と読者に考えさせる。平家物語とか引っぱりだしてきて一応満足するのだが、本文からみるとこの川は『東関紀行』による天竜川である。宇治川？天竜川？と読者を混乱させミスリードして核心から遠ざけてしまうのが馬琴の手法である。この黒馬が黒牛とは考えさせないどころか気付かせもしないのである。というか宇治川とか天竜川とかはどうでもいいのだ。馬ではなく牛と分かったのだから、この川は天の川なのである。

●一番初めに出てくる図像が基準になる。真っ黒は牛である。つまり外見は人であろうが馬であろうがなんであろうと黒いのは牛である。下の貞行の後の黒馬も梅の鞍をつけた黒牛である。梅と黒牛のセットで道真の怨霊だから八犬伝では玉梓の存在を表している。梅がなければただの牛で、大人(うし)と呼ばれる番作も黒い着物を着た牛である。そういう目で筆輶の八犬子図を見ると、なんで荘介だけ大人っぽいのかと思っていたが、黒の着物の大人＝うし＝牛である。牛の付合いに「額」がある。額蔵は牛三で「牛さん」だから黒だ。額蔵の前になにかと信乃を庇護した糠助も糠＝ぬか＝額だから牛助である。現八は牛の子供であった。牛(大人)は信乃を守るものらしい。牛蔵の額蔵、牛助とその子供の現八や牛男の小文吾が信乃を守るのも、道節が黒いのも火遁を使う火牛であるからだ。三輯口絵の道節図に田単が書かれているのも火牛ならば納得だ。黒は水なのに火遁を使う道節はもともと矛盾した存在なのである。まさに言葉も図像も「梟は梟ではない」のである。

●小文吾が犬士中で特に七夕と結び付けられているのは、モデルとしている谷風梶之助由来であろう。梶、七夕、牛、瓢箪で、牛と瓢箪は小文吾のトレードマークのようなものだ。犬と七夕は犬飼星がすぐに思い浮かぶが、牽牛と犬牛は音通で一緒になる。手束は七夕という名前だし衣織姫だから織姫で犬(三戌)・牛(蚊牛)の三角関係になる。この三角関係の元はどこかと考えれば、やはり伏姫・八房・大輔となろう。みんな犬なのだが、八房は犢のようだとあるから牛、大輔は金碗だから犬、伏姫を語るなかに「中将姫」があるから織姫でいいだろう。この関係でみると、沼蘭は犬を転倒した名前ではなく「縫い」で織姫で、小文吾は牽牛、房八は犬となる。沼蘭と小文吾は兄妹なので牽牛と織女が一緒になれるはずはなく、この三角関係は破綻する。

●道節の音楽一味とか夏引楽の夏引とか音楽に何かあると思っていて『俳諧雅楽抄』をみた。蚊、蚊遣り、蝸牛、扇、夕顔と「山院に宿志て」の主要アイテムのオンパレードである。

それは良いとして「女郎花 かよわき姿」とある。手束—夕顔の系譜—で指摘したように「山院に宿志て」と「庚申塚に」の手束は同じポーズをとっているから同じ意味がありそうだけれども、これをなんと表現していいのか思いつかなかったのだが、『俳諧雅楽抄』の「かよわき姿」が良いだろう。かよわき姿の手束は女郎花である。「類船集」女郎花の項に荒れたる宿、衣織姫がある。手束が里の女子に「絮を延、衣を縫う事」を教えたのは衣織姫からの連想であろうか。

また相撲は「古代めきて任侠の心あるべし」とある。小文吾と房八は任侠心のある相撲取りであり、古代の野見宿禰のエピソードが想起されるのもそのためである。

●菅原道真と黒牛。仙童と思われる怪しい子供が乗っていたのは黒牛。玉梓の図像

からは怨霊である菅原道真を導ける。

霊は先のことを見通せる(赤岩一角霊語る)。濱路は濱路に憑いて体を支配し自分の思いを語らせているし、将来二人が一緒になることも予言している。

黒牛は鸞の袖と同様に怨霊の玉梓を表すのかもしれない。怪しい子供の着物の柄が玉梓処刑の男と同じである。怪しい子供は伏姫を死に追いやるような態度と発言をする。怪しい子供が言う師匠を読者は勝手に役の行者と思い込んでいる。

子供は玉梓に憑かれた死の使者なのではないだろうか。そんな気がする。

●甲斐の信乃が夜『太平記』を読んでいると、中納言藤房遁世の段での左衛門という女房の「書置きし君が玉章身にそえて後の世までの形見とやせん」という歌等四首が出てくる。そのことで節に死んだ大塚の濱路のことなどを思い出している信乃の前に、木工作の娘濱路にとり憑いた濱路が現れ、自分は左母二郎に殺されたけれども魂魄はいつでも信乃のほとりに夤縁ついていたと言う。

ここでのポイントは「玉章」と、濱路の魂魄は信乃に「夤縁て」いたこと。つまり濱路は転生していないのだ。玉梓の悪念は良将義士(義実と八郎)に憑くことが出来ずにその子／＼(伏姫と大輔)に「夤縁て」いた。伏姫と大輔に夤縁ついている玉梓が八房に生まれ変わっているというのはおかしいし、挿絵で雛犬(八房)と玉つき怨霊が別々に描かれているのも当然である。琴は玉梓であるから八房が伏姫の部屋に乱入した際に、伏姫に倒れ掛かりその動きを封じた琴は、伏姫に夤縁している玉梓の仕業であることを表している。

同じ言葉や行動が繰り返されるとき、前はどうかであったか？というのが馬琴の問いかけであろう。八犬伝は対だらけなのだから、ここの対あそこの反対と指摘するのは容易だ。問題は何故対なのか何故反対なのかで、それによって語りたいことは何であるかだ。

●玉梓は基本的に玉章で考える。

玉→船、章→虫となる。名前ゆえに義実系の小文吾、角太郎を痛めつける。八郎系の現八、信乃には弱い。船虫は現八と信乃も揃った六犬士に殺される。道節と莊助は前身ゆえに、特に道節は船虫との直接的な接触はないのに、前身の神余光弘暗殺に玉梓も加担していたせいか船虫誅戮の際に「牛に突して思ひの随に、苦めて誅戮せん」⑤179などと積極的である。船虫はただ玉梓と名前が置き換えられるだけなのである。名詮自性は恐ろしいのである。

●犬殺しの梨男、奈四郎は信乃を殺しそこねたが、黒犬の木工作を殺していた。

番匠＝木工、「むく」「もく」「ほく」「ぼく」等は黙、黙を分解して黒犬。東条、金碗等は白犬。黒白(善悪)斑が八犬士。

●逢えない七夕。

七夕の夜、八郎の前に現れたのは濃萩との間に産まれた後の大輔である。濃萩とは「恋萩」だからつま恋の鹿である。筆口絵の大輔は鹿と関連付けられている。大輔は濃萩の代理のつま恋の鹿である。向かいにいる伏姫は八郎の後身なので、逢えなかったが逢えた、逢えたが逢えていない(例えば力二等夫婦)という微妙な関係が八犬伝の男女の恋の底流にある。伏姫と大輔に見えるが八郎と濃萩なので筆口絵の隠れテーマである恋がこの二者の間にある。しかし表面の二人にあるのは八房に対する大輔の嫉妬である。八房を撃ち倒した大輔は鳥銃を振り上げて「なほ撃つこと五六十、骨砕け皮破れて、復甦べうもあらざれば」①228 という有り様である。ここまでやるか、と思っていたがその底流に八房に対する嫉妬があればこの位やるのかもしれない。女の嫉妬よりも怖いのは男の嫉妬とはよく言われるが。

●玉梓が一番初めに登場する女性なのだから、玉梓後に登場する女性たちの対にしろ反対にしろ基準になっている。次に重要なのが八郎との子供(大輔)を残して死んだ濃(鯉、恋)萩。八犬伝に登場するのは大きくみれば玉梓系の女性と濃萩系女性の二種類である。八郎の後身である伏姫は男まさりで別格である。

●黒駒を爰に考えすぎた。甲斐の黒駒だとか名馬磨墨などからいろいろ導いてみたが、墨を磨るということで良かったのだ。筆口絵定包・玉梓図の墨と硯と白い扇、一言信の挿絵にある硯、「馬を飛ばして」の梅と黒駒(磨墨)、「使女の」梅と黒駒(磨墨)とグレーの扇、「木からし」の硯と黒い扇は一連の図像であった。墨と扇は定包、梅は玉梓との関連を示していたということだ。玉梓は筆口絵から薄墨桜とのみ思いがちだが、怨霊の玉梓は菅家で梅なのだ。最初にポンと答えを見せてそれのみと思わせ、そこで読者を思考停止にさせるのが馬琴の手法であった。そうすると「山院に宿して」の挿絵中に梅があることも納得である。手束は玉梓の位相であり、玉梓から梅娘の後身濱路への繋ぎの存在であった。

それならば何故「磨墨」なのかが問題になる。「類船集」の硯を見ると答えが分かる。連歌である。今まで見てきたように八犬伝を読むには「類船集」などの俳諧付合語集をコードブックとして使うが必要になる。自分が図像解読のきっかけとしたのは『連珠合璧集』の

夕顔とアラハ こかしたる扇(源)

という一節である。これに『連理秘抄』に「一、輪廻事 薫物と云句に、こがると付て」とあるのが結びついた。連歌用語としての輪廻の意味がどうであれ、輪廻は「薫物」と「こがる」なのであり、それが遊戯三昧の八犬伝の世界であ

る。口絵・挿絵を看板や本文の説明ではなくイメージとしての図像と読む時、馬琴と読者共通の言語として俳諧付合語集が必要なのである。

画中の文を読まないと夕顔でもってセットになっていると見えない。

●「合璧集」犬とあらば(里の犬、村犬)またら。里見の犬は斑犬に決まっているのだ。
●「類船集」鉄輪(カナワ)の付合である「嫉妬」は面白い。肇輯口絵大輔図の縁は鉄輪である。伏姫救出を帰参のよすがにしようとか理由はあるだろうが大輔を衝き動かしていたのは、自分がもたついている間に最高の手柄をたてた八房に対する嫉妬なのである。大輔は自分が霧が晴れろと祈ったら霧が晴れた、と言うが(これにしても実際は大輔が鉄砲を撃った瞬間に霧は晴れたのだ—登場人物の言葉はその人物の主観にすぎない)その場限りの祈りの元は嫉妬であるから伏姫誤射という、三年間至誠心から修した手束と毛野とは違う結果が出るのは当然である。八房—信乃、伏姫—濱路、大輔—左母二郎という関係になり、左母二郎が濱路を殺してしまったのは信乃への嫉妬に衝き動かされたせいだろう。大輔は左母二郎並の人間であったために、大としての再生が必要であった。

●下の「六」ネームで篠は虎としたがまだ考えが足りなかった。虎というだけでは犬士を殺しにかかる理由にならない。六は「戮」でもいいが「陸でなし」の方が良い。つまり「六で梨」で六＝梨で犬殺しになる。下で見た「六」ネームは犬士たちを殺そうと図った面々である。

●無垢三の三は善と音通。

無垢三の三は「さ」で作と音通。善→三←作。

無垢三は無垢で善という名前。木工作も無垢で善。番匠も木工で匠作・番作親子も無垢で善となる。この要領でいくと上総の一作は—＝人、作は善で「上総の善人」と言う名前。

●山下柵左衛門定包

旧記によると左衛門である。柵は馬琴の創作であるから柵にする理由があるはずで柵は作であるから作左衛門になる。ささ衛門は篠衛門で虎衛門になる。虎衛門とはカッコ悪いが仕方ない。

●「六」ネームは虎。

「戮」で殺すとの意味もあるが基本的には三三(ささ＝篠)で虎である。分かりやすい例をあげると鉦千本河豚六のふぐろくは六を虎にすると虎河豚になる。亀篠の場合瓶酒で鬼殺しの酒と読んでいたが鬼虎になる。下の見返しにあるように鬼は虎皮パンツとレッグウォーマー(笑)をつけている。分かりやす

い虎ネームだけでなく六ネームの虎も犬士に襲いかかってくるのだ。

酷六、墓六、宮六、孟六、氷六、巨田新六郎、卜部季六、湊六、馬加蠅六郎、但鳥跣六業因

孟六も孟は牛の鳴き声と思っていたが猛虎である。この虎ネームが但鳥跣六業因を最後に親兵衛再出世後は直塚紀二六のように虎ではなく、犬を助ける猫として現れる逆転現象が起きる。親兵衛再出世後は闇が暗くなくなったと言われる由縁であろうか。

八犬伝の安房での発端に丑寅が絡んでいる。丑寅は鬼門であるから勿論鬼とも絡む。孟六は牛根孟六で六が余ってしまうが「牛がねモウ」と鳴く名前だと思っていた。六が虎と分かれば「牛がね、猛虎」となる。毛野が馬加大記一家を殺した対牛楼とは猛虎を退治する楼である。大記は大鬼であるから丑寅と関係する。虎退治と鬼退治は同じレベルにあるのだ。

虎はいたるところに隠れている。正月だった濱路には虎の要素があったが、初めから濱路の濱路姫に虎の要素はない。正月に変換できる玉梓にも虎の要素があり、山下大人（うし）の定包とともに鬼門の丑寅カップルである。

● 媽祖になる前の名前が黙娘で分解して黒犬娘になるとした。この黙が番匠達の由来なのだ。匠作・番作父子、木工作は皆黒犬だったのだ。手束は夕顔で白であるから白犬で黒犬の番作との間に黒白の犬の信乃が産まれた。金碗は白犬なので斑犬の犬士たちは金碗姓になったあと黒の痣が消えて白犬になった。また白犬とは白小袖だけで富山に入った伏姫でもある。

無垢三は無垢なので白犬でぬいに転生し、黒白の八房ならぬ白犬の房八と結婚して大八を産む。十条兄弟は名前が八房であっても、十条が稲城、犬白、白犬である。白犬のままでは犬士にはなれないのである。



そのまま写し成す煩惱の犬だから、黒白斑な犬は玉梓が言う「煩惱の犬」なのだろう。（『耽奇漫録』上 482）

●



肇輯口絵の組み合わせはこれが正しいなどと操作したことがあった。善悪対立の構図が玉梓を挟んで視線のぶつかり合いで示される。何故これを思い出したかと言うと、定包という名前で定＝悌＝八で、包は郎と音通であることに気付いたからだ。定包は八郎であり、八郎は定包である。包を房と音通として読むと八房に定まった男になる。。二人は言わば善悪二身一体である。二六郎(2+6=8)の徳用が悪の八郎であることは、徳用には定包の位相があるのだろう。

この合成図を読むと、

碓子尔春

忍光八

難波江乃

始垂母

辛之河尔

加久尔

世波

月(春)夜(八)の(乃)犬(母)は(波)

●犬田小文吾。節用集の犬田豊後に小を付けただけかと思っていたが違うようだ。文はそのままで、小+吾で悟だから文悟＝豊後である。犬田をたすと畎でみぞ、谷といった意味になる。小文吾のモデルである谷風を想起させるものであるかもしれない。

●犬川衛二則任とは何者だろう。

川には犬士を守ってくれる役割がある。神宮川(かにはかわ)、蟹は川だからだ。川に蟹に代入すると犬蟹衛士となる。蟹は犬を衛る士である。力二郎(蟹おとこ)や犬村蟹守儀清が犬士を衛ってくれるのも「蟹は犬を守り犠牲となる」という名詮自性であり、額蔵が信乃を衛る人であるのも犬川衛二の息子だからだ

衛二とは何か。『官職要解』にこうある。

衛士は(中略)諸宮城諸門を警衛し、火をたいて夜を守った。(同書p141)

とある。犬川衛二は四集叙の冒頭「狗之守夜也性」に対応している「犬は衛士」という名前である。

則任はどうだろう。息子の額蔵の義任は信乃や濱路といった弱者を守る義の人なので、任＝にん＝人だからそのまま「義の人」という名前である。義任から考えると則任は「則の人」になる。則には法とか大道という意味があるが、法というと悪法もある

ので大道が良いだろう。則任は足利政智の苛政を諫めたりする人であった。犬川衛二則任、義任親子の名詮自性は「犬は大道を衛る」ということである。大道廃れて仁義あり、である。

任＝とお＝遠だから赤岩一角武遠は赤岩一角武人になる。赤岩は隻眼、一角は一角獣、武人は不人で「片目の一角は人ではない」という名詮自性になる。

●堀内蔵人貞行、杉倉木曾介氏元

諸書をみると堀内蔵人貞行はそのままだが、杉倉木曾介は木曾左馬允氏元などとなっている。堀内貞行は変更する必要がなかったということになる。

さだゆき、貞は悌と音通だから八に置き換えられ、ゆきは雪であり犬であるから八犬である。八犬士の父である八房を連れてきたのが貞行であるのも、貞行が乗る馬の鞍の梅も貞行が犬なら納得である。

木曾介ももともと杉倉木曾介氏元と思いこんでいたので、木曾という苗字が前面に出ていなかったため、杉倉を分解したり音通を探したりと分からなかった。番作と手束が会った吉蘇(きそ)と何か関係はあるのだろうかとは思っていたものの思考停止していた。番匠がどこから出てきたのか分からなかったが、木曾といえば大工(番匠)と対になる名前だったのだ。犬を守る番匠たちは里見＝里の犬を守る木曾介なのだ。犬、雪、梅、番匠などの八犬伝の基本は義実主従にあった。

第一回から第十六回の終わりまでに八犬伝の全てが詰まっている、と言っても良いかもしれない。伏姫以前から八犬伝は確かに存在しており、伏姫が八犬伝の中心にあるという機械的八犬伝観からは脱却しなければならないだろう。



初雪や犬の足跡梅の花

後刷の肇輯表紙は雪、犬、梅の関係がはっきりしている。

●河鯉権佐守如を河と鯉は犬を佐けると読む、と書いた。まだ河に蟹を代入していなかった。甘かったな。

河＝蟹、鯉＝里見の魚、権＝犬、如＝雪＝犬だから「蟹と鯉は犬を佐け、犬を守る」という名前なのだ。その後蟹はその運命として犠牲となって死んでいく、見事な名詮自性である。

扇が谷定正の奥方蟹目前も「かなめのまえ」とふりがながあるから扇の要などと言われているが、切り方を変えれば「蟹、目の前」である。蟹は目の前にいるということ

なので河鯉権佐守如を指している。

●犬川衛二

川には犬士を守ってくれる役割がある。神宮川(かにはかわ)、蟹は川だからだ。川を蟹に代入すると犬蟹衛士となる。蟹は犬を衛る人である。力二郎(蟹おとこ)や犬村蟹守儀清が犬士を衛ってくれるのも「蟹は犬を守り犠牲となる」という名詮自性であり、額蔵が信乃を衛る人であるのも犬川衛二の息子だからだ。額蔵雪中遭難図での衛二が妻という表記も犬の妻であり後の軒の妻がまた犬の妻であることに通じる。

●蟹は犬を癒し、助け犠牲となる関係は肇輯口絵の八郎図に始る。金碗＝白犬八郎の漆かぶれをあっという間に癒したのは三十あまりの焼き蟹であった。蟹自体が島村蟹といった忠臣の化身であることに由来するのであろう。

●額蔵の父犬川衛二。

衛二とは何者なのか。『官職要解』にこうある。

衛士は(中略)諸宮城諸門を警衛し、火をたいて夜を守った。(同書p141)

とある。犬川衛二は四集叙の冒頭「狗之守夜也性」に対応している「犬は衛士」という名前だったのだ。

●八犬士は一人。犬は仮の姿。ゝ大と八房は二身一体。

斑犬八房の子である八犬士には痣がある。白犬である金碗姓になった八犬士から痣は消える。

●「弓張月」で寧王女は「ねいわんによ」であるから王はわんである。狗児は「わんわん」⑦31 だから春王と安王は王王でわんわん、つまり狗児である。春王と安王は単に結城合戦の原因となったから犬士(信乃・毛野)に生まれ変わったのではなく、もともと狗児であったということなのだ。

本文に言表化されていないことを考察して読むのが「発明」なのであり、なんでもかんでも言表化されていると読むのは浅い、あまりにも浅すぎるのである。

●玉梓から正月への変換はみてきた。となると同じように前身の名前のなかに八犬士の名前になるヒントが隠されているに違いない。

親兵衛の親は親の房八に代わる者という意味だとされているが、伏姫の親ともとれる。

額蔵は顔を蔵すなので顔に隈取り、顔隈から岩熊になる。

角太郎から蟹崎十郎輝武が難しかった。輝武は輝竹なので『竹取物語』ネームであ

る。角太郎は雛衣から「角太ぬし」③402、船虫からも「角太」④14と呼ばれている。つまり「かくた」と「かくや」の音通ということになる。

信乃はしんのとしゅんのうの音通。春を分解した親子「三人の日」々が書かれているのは信乃。

毛野は安王の安には女がいるので誰もが騙される女装ができる。

道節は偽名の寂寞道人肩柳の道人が「みちひと」で神余光弘の「みつひろ」と音通になる。

現八は現と天、信道で信と津の音通、とかなり遠いがこんなものだろう。

小文吾の古那屋の「古那」は「那古」を転倒しただけ。七夕男の小文吾は七郎の七繋がりではないかと思う。現八との関係も七夕と犬飼星と関係があるからだろう。



犬江—五十子—安房

犬川—岩熊—安房

犬村—蜷崎—安房

犬坂—安王—結城

犬山—光弘—安房

犬飼—天津—安房

犬塚—春王—結城

犬田—七郎—安房

定包—八房—安房

八郎—伏姫—安房

玉梓—濱路—安房

妻立—網干—安房

房八—朴平—安房

ぬい—無垢三—安房

前身をみると後身たちの関係がよく分かる。例えば同僚だった天津兵内と那古七郎は乳兄弟の現八と小文吾になっている。五十子だった親兵衛は伏姫との関係が一番強く、犬士内で誰とも争わない。婦人の仁などと言われるのも前身ゆえである。岩熊鈍平の莊介と神余光弘の道節、玉梓の濱路、妻立戸五郎の左母二郎とで濱路の最期に四人揃っている。前身が春王、安王兄弟の信乃と毛野は争わない。前身が溺死した蜷崎輝武の角太郎は泳げない。前身が刻剥をさをさ民を苦しめた岩熊鈍平だった莊介は裏切った光弘だった道節と二度も戦っていて、犬士中で一番悲惨な目にあわされている。この前身後身が分らないと、犬士が何故か伏姫の子というだけで、ただなんとなく玉と痣の「不思議」な因縁に導かれて安房に集っていく物語にしかみえ

ないのである。

春王安王は女の姿に似せ、輿に乗りて城を出でけるを長尾因幡守これを生捕る
(『房総軍記』)

其の(輿)中に若君二人を女子のやうに出で立たせ奉りて、敵陣の中を分けて、落しける(中略)中程の輿に歳十二三ばかりなる姫君二人在します。其の御姿心言葉も及ばぬ程優に見え給ひしを(『結城合戦絵詞』)

八犬伝では「両公達は生拘られ」①18、「両公達は生拘らる」①256 と春王・安王の女装について何も触れていない。書いてしまえば肇輯口絵の信乃・毛野が女装であると早い段階で分かってしまう。特に毛野の場合は登場の仕方に工夫があるのだからヒントになることは書けないだろうし、馬琴は書かない。八犬伝は「発明」されるべき書なのだ。

●妻立戸五郎

戸五郎が左母二郎の前身であるのだが、なぜ左母二郎になる名詮自性であるのか分からなかった。とくに犬である戸が分からなかった。犬五郎？妻立は左母二郎が濱路と一緒になったら立ててあげるようなことを言っているのですこら辺であろうと読んでいた。妻を立てる犬五郎？分からない。と思っていたら閃いた。切り方が悪かったのだ。妻立戸と五郎である。妻立戸を反して戸立妻、犬を立てる妻、五郎は殺すと音通。妻立戸五郎が「犬をたてる妻を殺す」という名前なのだから、それは濱路を殺した左母二郎しかいないのである。

●蟹崎十郎輝武と息子の蟹崎十一郎照文。輝武は富山に向かう八房と伏姫を追跡中に溺死した。照文も犬士探索という武士としての役目ではないことを命じられている。ある意味で犬の犠牲者といえるだろう。そこで輝武と照文である。匠作・番作親子が匠番反して番匠となるように共通項の輝と照をとると残りが武文となる。八犬伝読みなら簡単にわかる。蟹崎親子は武文蟹なのである。

狸といふ文字は、里に従ひ、犬に従ふ。是則里見の犬なり。①139

これでいけば、

鯉といふ文字は、里に従ひ、魚に従ふ。是則里見の魚なり。ということになる。前に書いたように里見自体が犬の里なので、里見と犬と鯉の関係になる。肇輯口絵の義実が乗る鯉も竜との明らかな関係だけではなく、これからのヒントが鯉そのものに示唆されているというものだと見るほうがいい。琴高仙人的な図像がそれによって琴高仙人的なことを語ろうとしている訳ではない。

安西家の嘉例として出陣する際に、大きい鯉を軍神に胙として備えることになっているので釣って来いと義実は言われている。安西家の嘉例ではあるが、八犬伝中にお

いて鯉は胙であると規定されたと言っていいだろう。雛衣＝鯉の死も角太郎の首途のための胙なのである。

義実の妻万里谷五十子は犬谷犬なので、犬と犬の子供は伏姫となる。犬(里見)と犬(五十子)の間に生まれた子は犬(伏姫)で、犬(八房)と結婚し生んだ子供は八犬子である。犬山(富山)で産まれた八犬子は最後に生まれ故郷の富山に帰る。

万里が犬なのは金碗(かなまり)の碗と音通だからだ。金碗大輔はもともと犬だったから、大になるのも名詮自性であり、大輔と八房は二身一体なのである。

金碗の碗(まり)は「わん」である。婆々が顔は狗児(わんわん)⑦31 だから、金碗とは金狗で犬同士の里見と関わることになる。肇輯口絵の八郎図も八郎と蟹ではなく犬と蟹である。この後も蟹が犬士を守ってくれる原点である。

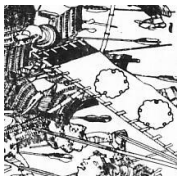
金狗については、五行配当で金は白なので金碗は白犬であり、斑犬の犬士との精神的な父という位置にいる。

●河鯉権佐守如

河鯉権佐守如を河と鯉は犬を佐ける、と読む。守如のゆきは雪で犬の代名詞なのだ。河と鯉は犬を佐け、犬を守るのだ。それ故に雛衣＝こいは角太郎、現八を佐け、守るのだ。

雪ネームの吹雪姫。雪だからそのまま犬と関係あるとそこまでは一目で分かる。この吹雪姫、徳用にさらわれていたのを親兵衛に救助される。伏姫を救出できなかった金碗大輔の反対であることも分かる。だから吹雪姫なのだ。

吹くは伏、雪は犬で伏犬姫で「犬の伏姫」もしくは「伏姫は犬」といった名前である。



豊嶋一族云々の挿絵部分。

雪だからこの乱戦の中に犬山がいるのだらうと思っていた。しかし、よく考えれば犬山の家紋は蝶だから違う。豊島氏も九曜紋であるから違う。つまり雪は犬だから犬山もいるし、豊島は戸島で犬嶋になる。犬が二匹というか、犬島と犬山の間係を表しているのだらうと思う。この流れで行けば四輯口絵の房八の額縁も、犬と雪と遠回りせずにそのまま雪＝犬「犬の八房」で良いのだ。

泡雪奈四郎も梨の花は雪のように白いのだが実は犬殺し、雪が犬だから安房の犬、犬殺し男、つまり信乃殺し男ということになる。いや待て。信乃は殺されかけたが殺されてはいない。そうか信乃に殺される男、まさに名詮自性である。

この流れでいけば単節もただの音楽ネームではない。単は淡で節は雪、淡雪と言う名前になって犬との関係が出来る。同じあわゆきでも「泡雪」と「淡雪」は違うのだ。

●真間井樅二郎秋季真間の紅葉、季節は秋

●広益俗説弁

大工といふ説

俗間に、工匠をすべて大工とよぶ。

今按るに、非なり。『百寮訓要抄』を考るに、大工・権大工・小工・権小工は、禁裏より定め置くゝ内匠寮のうちの名なり。

八犬伝に出てくる番匠＝大工の意味するところが分からなかったのだが上記記事によってなるほどと思える。権大工、権は犬だから犬大工、大工は犬なのだ。匠作・番作はもともと犬であったし、四六城木工作も東条の犬である。馬琴は番匠がやけに好きなのではなく、犬という名詮自性ゆえであった。

無垢三もむく犬からもあるだろうが、無垢＝木工＝大工だから犬三、犬三匹である。無垢三の後身ぬいが犬、房八が八房で犬、親兵衛が犬江になって犬で犬三匹である。番匠とはこういうことだったのか。

●『故事部類抄』の書紀垂仁記「稲 入城門」が毛野の設定に使われていると思われる。雑文読みなら「稲 入城門」を「犬、城門に入る」と読み、八房も思い浮かべるだろう。「上毛野」も八犬伝での毛野は下野だが「字考節用集」では犬坂上野である。稲城がそのままである。この流れで垂仁記を読むと小文吾と犬太のエピソードを彷彿とさせる野見宿禰がある。

さらに読み続けると甕襲の玉である。

●『馬琴日記』、当然だが日記に松坂がよくでてくる。八犬伝と伊勢は切っても切れないので松坂かと思っていて閃いた。松坂を転倒すと坂松「ばんしょう」になる。番匠は八犬伝によく出てくるが、なぜ番匠なのか分からなかった。匠作、番作という順も匠番＝松坂という伊勢ネームであれば『伊勢音頭恋寝刃』との絡みも納得である。

●八犬伝とは遊戯三昧、ことば遊びの書である。付け合い書をコードブックとして暗号としていたが、暗号とことば遊びの違いを、

両者が大きく違う点は、ことばの仕組みにある操作を加えた結果が、ことば遊びの場合は無意味な記号の羅列であってはならないことである。いうなれば、ことば遊びは「意味されるものの上に意味するものを重ね合わせる」ものでなければならない。

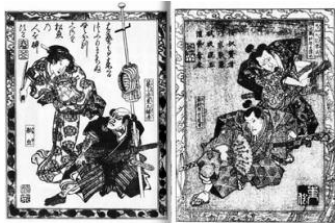
とすると、八犬伝がことば遊びの書であることは明らかである。

例えば玉梓に玉章という意味あるものを音通で重ねる。玉は月であること、

章は正と音通であるという意味するものを重ねれば、玉梓は月正で転倒すれば濱路の本名である正月になる。玉梓が正月になることから正月（濱路）は玉梓の後身であろうと推測できる。

ことば遊びの要素を抜きにして読んできたために八犬伝は説教くさい本としか読めなかったのである。ことば遊びと書いていて、曲亭馬琴を転倒して琴馬亭曲、ことばていきよく、曲がからかい、冗談、変化、面白味、興の意であるから「言葉亭曲、言葉って面白い」と読んだことがあったが、読本作家になる以前からのペンネームであることも考えれば当たらずとも少しは遠からずかもしれない。

●下で図像的に毛深い男は猫か虎であるとした。～つらネームも虎と音通だから虎であるとした。この二つを満たす者がいるのを忘れていた。



縁連は腕の毛深さだけでなく、裾をまくって毛脛まで見せている。馬加大記は大鬼なので毛深くない。

四輯口絵の板扱均太も毛深いが、板扱均太をどう読めば虎になるのだろうか。挿絵中の均太は毛深くないので虎ではないのかもしれない。と思っていたら、上半身が見える「現八勇力」では胸毛がある。

もがりの犬太の毛深さにも気付いていたが、もがりが虎落ならば納得である。縁連、犬太の顔も図像的に虎なのだろう。

暴風舵九郎も顔と胸毛から虎と分かる。風は虎に従うから虎である。

荘役根五平も猫（虎）平で毛深い。

「残賊」の並四郎も毛深いが、並四郎は歳男なので虎にはならない。とすると足をはだけている船虫の代わりであろう。船虫は母大虫で虎である。

馬加の四天王のうち鬼の季六以外は毛深い。なにか虎なのだろう。

●四六城木工作

東条と結城（番作、匠作）を結びつける名前だが、どうして濱路（姫）と関係するのか。奎という字をみて閃いた。もっこう＝木＋公＝松、奎であるから、濱路の女松②62として関係する。木工＝もっこう＝沐猴、猿なので犬の信乃と相性は悪いはず。猿梨

●和漢三才で厚木（ほほのき）を見ても何とも思わないが、大和本草で厚朴（ほほのき）を見ると！とくる。朴平の朴はのきだから軒でケン、犬である。朴平が犬であれば無垢三が尨犬で、犬同士で納得である。朴平の後身が房八、無垢三の後身がぬいで、八房と犬つまり八房と伏姫で八犬士が富山（戸山＝犬山）で誕生となる。

犬の朴平に殺された那古七郎。那古は猫と音通である。猫と七をググると、猫を殺せば七代崇るという俗説があるとか。房八の悲劇は朴平が殺した猫の祟りである。小文吾も本名は那古だから猫であるが、もがりの犬太＝虎落の犬太を殺すことによって犬性＝犬姓を得る。房八郎と現八郎が競合しないように、犬太と犬田は同時に存在しないのだ。

●棣棠（やまぶき） 漢名：金碗喜水

●金子与四郎

金＝ごん＝権＝けん＝犬。犬の子与四郎。

●牽牛花こと朝顔は三才図会に牽牛子（けんごし）とある。牛といえば小文吾である。牛＝ご＝吾なので、小文吾は小文牛となる。文牛は蚊牛であるから、小文吾は小蚊牛である。

小文吾の役回りは義実・伏姫で毛野の八房と2対1になっている。番作と手束の場合、毛野が手束の役回りであることは明らかなので、小文吾は番作で2対1の対にする場合もう一人必要になる。つまり小文牛は蚊牛の役回り、小蚊牛である。勿論小文吾が蚊牛と同じということではない。蚊牛と対になる人間が必要であるということだ。

牽牛＝七夕なので、梶、火事という連想が働く。蚊牛は火牛だから寺ごと番作に焼かれてしまうし、山火事の炎に囲まれた小文吾の挿絵も印象的だ。小文吾の瓢箪柄の着物も七夕に関連付けられている。

梶、小文吾は相撲取りとなれば、二代目谷風梶之助であり、谷風が小文吾のモデルであろうと思っている。図像的に将棋盤を片手で持ち上げる親兵衛は大童山で、二人一緒の浮世絵も残されている。

谷風の本名は金子与四郎で、小文吾の代理として与四郎が親兵衛についてまわっているのだ。

ウィキなのでどこまで正しいか怪しいけど、五行思想の五節句の金は七夕である。金子⇒七夕⇒梶之助？



馬琴が良しとするとする英泉描くデブで大男の相撲取りらしい小文吾。

●墓穴は分解すると廿日大虫だが、二十日というと鼠になる。虎と鼠。ググると「時に遇えば鼠も虎となる」がある。出典がないので馬琴が使わないような言葉では意味がない。で、書かないでいた。付合以外はあまりみない『毛吹草』を見ていたら、世話付古語に「ときにあへばねすみもとらになる」があった。前回ザッと八犬伝に關係する言葉をチェックしていつて、忘れていたけどこれにも●を付けていたのだ。は、おいといて。悪人だが墓穴を虎にするにはスケールが小さすぎる。本文にある「鮮血の泥に尾を曳く亀篠、四跂ふ墓穴逃迷ひ、蛇に迫るゝ七転八倒」②165 がいかにも名詮自性らしいが、墓穴は時に遭った鼠、馬琴常用の「鼠の輩」なのである。

●井手束

井⇒いの⇒犬

手束⇒たなたば⇒七夕

犬と七夕といえば犬飼星なので手束は犬を拾ってきて飼うことになる。

寄合で結びつけたり変換したりするのはテクニクであって、八犬伝の基調にあるのは伊勢、恋、七夕である。七夕は恋の要素かもしれない。

●魚男

色白の魚男左母二郎は鰯ちゃんかと思っていたが「いざぬたにせん網魚」なので、鰯はぬたにはならないのではないかとも思っていた。『大和本草』白魚に「而淡美可為膾可蔵糟」とあるので、極悪非道の鰯ちゃんも可愛い、白魚が良いだろう。

●井手束（いのたつか）

井は「せい」で反して読むと「かつたいせ」になる。伊勢に「かつた」なるものがあるのか名所図会をみると、

▲勝田 ○和屋〔割註〕此両村は、大神宮の樂人三座の内和屋太夫、勝田太夫の産地なり。当村の神社において、正月三日より六日迄例にて猿樂の三番叟をまふ。

とある。伊勢勝田になるので馬琴の『羈旅漫録』をみるとなかった。が、馬琴は「げい子」にかなり興味があったらしく筆を多く費やしている。○岩波文庫『物類称呼』

遊女 うかれめ

伊勢の山田にて艶女といふ。（中略）奥州松前にて、やかんといふ。越前敦賀にて、かんひやうと云（タがほをさらすといふ心なり）。p 22

中々にいひははなたてしななる木曾路の橋のかけたるやなそ 源頼光（同p 23）

妓有と云物有。若いものといふ。ぎうは牛にて牛は鼻にてつかふ也。又ぎうは花にてつかふ也（花は客の賜物也）又は遊君を花と見て花に遣はるゝといふ意にもあらんか（同p 23）

『羈旅漫録』にも「花いくつと仕切を、相場をきくといふ」とある。

番作が初めて手束に呼びかけた「女中さのみな駭き給ひそ」という台詞。女中が気になっていたが『羈旅漫録』に「京は女郎といはず、女中といふ」とある。手束についてまわる女郎がまた出てきた。

●本文から額蔵の前身は岩熊鈍平としたが、口絵の奴隸額蔵の図像からもそれが分かる。額蔵の額はひたいだが顔でもある。口絵の額蔵は本人とは全く違う顔で描かれており、隈取りが顔を蔵している。額蔵とは顔に隈、顔隈＝がんくま＝岩熊である。

●角太郎

「三才図会」に角は鰐（さい）とある。これまた以前に再太郎⑨136 とは義実の又太郎に対応している名前とした。角太郎は鰐太郎⇒再太郎⇒又太郎となる。この名前によって角太郎には義実の役回りが振られているのである。

「三才図会」に角鷹（くまたか）がある。角がくま＝熊とすると、角太郎は熊太郎ということになる。熊は「在深山中」である。同項の和歌に「太山」とあり、深山は太山である。

以前墓田権頭素藤について、

権頭は犬の頭。素藤が妙椿に連れてこられた太山（みやま）。深山ではないところがミソ。太を分解して大とゝとして、また合せて犬になる。犬は戸だから、ここもまた富山である。もともとこの太山は、伏姫—親兵衛、妙椿—素藤の対になっている場なので、富山なのである。

と書いた。「類船集」熊にはおく山、捨る世があり、世捨て人の角太郎は熊とみて良いだろう。赤岩角太郎には岩熊が隠されている。岩熊といえば神余光

弘、山下定包を裏切った岩熊鈍平がいる。七犬士は完全な善の存在ではなく、なにがしかの瑕疵がある。角太郎の場合は元の赤岩という苗字にあるのだろう。濱路が正月、荘介が額蔵で考えるように角太郎は赤岩で考えるのが良い。

道節は寂寞道人肩柳が肩に瘤＝龍（珠）がある人になる。親兵衛は大八が大八郎でスーパー八郎である。美形の毛野は旦開野で旦（おやま）の毛野である。見八ではただの犬だが現八では玉を持った犬になる。

●何故赤岩一角は現八に目を射られて片目になったか？

赤岩＝せきがん＝隻眼だから。

●名詮自性

戸山⇒犬山⇒富山（トミサンでは犬山のトヤマと音通にならない）妙真⇒ねこま（ネコの古名「和名抄」）で虎

音音⇒子子⇒猫、獅子

妙真と音音には獅子と虎の二面性がある。

嗚呼善⇒虎魚

夏引⇒名墓、夏引楽（道節の音楽一味との対。濱路の対）

手束⇒夕顔、龍蚊、七夕、玉梓

濱路⇒ハマチ、濱獺、海女（大織冠）

五十子⇒犬、稲

重戸⇒おもと（魚）、犬に重なる

稲城⇒白犬、東条

雛衣⇒鯉

船虫⇒玉虫、母大虫（牝虎）

玉梓⇒龍女（大織冠）、龍女：一名クリカラ

玉梓⇒正月

亀篠⇒瓶酒、鬼殺し

一角⇒一角獣（牙は二本。息子は牙二郎）

泡雪奈四郎秋実⇒梨の花は雪のように白く、実は秋で「犬殺し」

姨雪世四郎⇒雪は犬の叔母、世四郎は世四が獅子、夜白で牡丹。

八百比丘尼妙椿⇒八百は風（風）、比丘尼は売色比丘尼、妙椿は珍奇な猫（虎）

番作⇒晚咲く（夕顔）

錠庵⇒金定山下⇒山下定包

旦開野⇒旦（おやま）の開野⇒女形の毛野

弥々山＝八頭山（ややま）＝八岐大蛇

網干左母二郎⇒網で干された魚。色白なので鱈。酢に浸して食べると佳⇒酢もあらばいざぬたにせん網魚（三輯口絵）

力二郎、曳手、単節、尺八郎⇒蟹を曳く人よ八郎（肇輯口絵）

四六城木工作⇒四六は十、十城は東条、木工は番匠で番作・匠作。つまり安房と結城。

徳用⇒犬供養

堅削⇒犬裂く



音楽：南無阿弥陀仏の額「類船集」

莊介の場合は額蔵で考えるようだ。それにしてもこの挿絵は音楽一味の道節、南無阿弥陀仏の石塔と額蔵とそのままである。莊介と道節の音楽一味、特に音音と組みとなるのはこの挿絵によらなければ分からなかったのだ。これは名著版からスキャンしたが、岩波版では「南無阿弥陀仏」が見えないので要注意である。

●浜路を考えると、濱で以て「ひんじ」とか「ひんろ」とか考えていた（兵にヒンの音はないので、新漢字で分解しても意味はない）が、もう一つ突っ込みが足りなかった。犬の獣偏である「犴」の漢字から八犬伝っぽいものを漢和辞典から抜き出していくと「獺ヒン」川獺（かわうそ）があった。濱路とは獺児「川獺の子」という名前なのではないかと思い当たった。「三才図会」で水獺かほうそをみると、和名は宇曾で濱獺があり、

濱獺 即獺大者顰如、身似蝙蝠。

である。濱路が濱獺であることは、今まで謎だった信乃・濱路図の蝙蝠の額縁が表しているのだろう。さらに獺であることは、濱路の前身であるとしている玉梓が同音の「顰」の着物をきていることから窺える。

濱路というのは「宇曾の児＝嘘の子」なのである。大塚家の実の子ではないことから始まり、濱路の周囲には嘘ばかりなのである。甲斐の濱路が木工作の実の子ではないというのも、夏引が木工作を裏切っていることを知っているのも濱路という名前ゆえであろう。

魚男の左母二郎と対になる濱路という名前、はまちという魚の連想もあるが獺からは「正月十月獺両祭魚知報本反始也」と濱路の本名との連想が働く。

三才図会で水獺は「水狗」であり、狗＝犬の道節・信乃・莊介との繋がりができる。

エサは魚やエビなどの魚介類を中心に、ネズミやウサギ、鳥、カエル、昆虫、カタツムリなんかも食べるそうで、墓六は濱路と名付けた時から、直接ではな

いが濱路に食われてしまう運命なのである。

●手束の「井」という苗字。

「類船集」の井の項に「田顔タツラ」がある。他の辞書類では田面とあり、顔と面が通用していることがわかる。田顔タツラはタカオで夕顔に通じ、またタツカ、手束に通じる。

「井」に石菖がある。石菖蒲である。あやめは八犬伝的に黒白、善悪である。手束の挿絵を思い出してみれば黒白の石畳を着ている。井という名字に「善悪」があるのだから、着物は手束の善悪を図案化したものであると読める。

●朝貌、夕顔と喚做たる、両個の美婦人（⑤379）。

素藤譚はそれ以前の稗史七法則で成り立っているのだから、対となるものがないといけない。つまり、朝貌と夕顔がすでに出ていたということになる。貌と顔の使い分けには、夕貌ではタカオにならないという理由が考えられる。誰が夕顔なのか。

●薬缶＝野干。キツネの別名。野狐（やこ）。



妲己=狐狸精は千年を生きる金色の九尾狐。

妲己は朝歌に殺され①114

前に見たように、左は全図で①108の玉梓が描かれている。

『物類称呼』22. 遊女。奥州松前にて、やかんといふ。越前敦賀にて、かんひょうと云（タがほをさらすといふ心なり）

●肇輯口絵、定包・玉梓図。この玉梓について信多純一氏は『里見八犬伝の世界』において「琴を立てて持ち、その口許を恥ずかしげに袖でおおう」p51と表現されている。恥ずかしげというのは個人的な感想ではないかと思っていた。付合を読んでいたら謡と何度も出てくるので久し振りに「芭蕉」を読むと、

さも愚かなる、女とて、さなきだに、あだなるに芭蕉の、女の衣の薄色の、花染ならぬに袖の、ほころびも恥かしや、

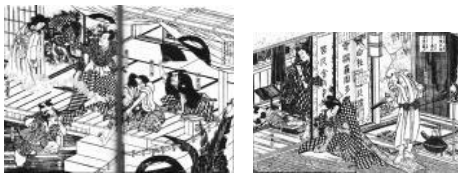
とある。玉梓図でなにか違和感を覚えていた箇所は「袖のほころび」なのだろう。八郎切腹図にある芭蕉は玉梓にかかっていたのだ。

拈華庵が拈華微笑からの名前というのは分かっていたが、拈華微笑の「言葉を使わずお互いが理解しあうこと、心から心へ伝わる微妙な境地・感覚のたとえ」という意味とどうつながるのかが不明であった。

芭蕉を優曇華ということもあるとか。またお釈迦さまの拈華（優曇華を手にして瞬かれた）なのだから芭蕉⇒優曇華⇒拈華という連想が働く。拈華庵が芭蕉庵であるとする、今まで思ったこともなかった二枚の挿絵の関連が疑わしくなってくる。左図の右端にあるのが芭蕉だからだ。番作の後の着物の文字は花だったので、類船集で花をみると芭蕉はある。花には犬に通じる稲と善悪（あやめ）、黒白（あやめ）に通じる菖蒲（あやめ）もある。手束の着物を黒白とみれば手束は善悪の女であるといえる。

一束：紙 柴（易林本節用集）。手束は手紙で玉章となる。玉は月、章は正で反して正月。手束というのは玉梓が正月に生まれ変わってくるまでの繋ぎのような存在である。

手束は船虫、旦開野（にせの女—旦はおやま『戯子名所図会』）、於兔子等の原点なのである。手束に夕顔や海棠を読むのもそれぞれ一要素にすぎない。



●墓六には虫がいるから虎なのだとは言っていたが、墓を分解すると 十 日大虫だから大虫＝虎である。

●玉桂

月の中にあるというカツラの木。また、月の異称。

●夕顔

夕（ゆう）はカタカナのタ。顔は面（ツラ）でツカと音通。夕顔は手束となる。顔を面と言うのは有かなとか思っていたが、調度手束初登場の十五回に

強顔（つれなく）①267

強面（つれなく）①268

とあり、顔＝面で良いのである。

夕顔の夕（ゆう）はカタカナのタで、顔はカオでつなげてタカオとなる。タカオと言えば馬琴作の『高尾船字文』があり、遊女高尾となるのではないかな。

●網乾左母二郎 面色素く (②51)

浦の網乾に浜路の女松 (②62)

さもじ：さかな（魚、肴）の女房詞

俳諧四季之詞 正月：干鱈

色白の網乾左母二郎は干鱈男で正月（浜路の本名）、改名後の浜路と関わる。

●梓弓、手束弓、はま弓ということで『貞丈雑記』弓矢の部を読んでいたら、『太平記』巻三、笠置軍の条に「十三束三ッぶせ云々」とあった。これは六十一回の現八と角太郎の弓についての会話③412の典拠であろう。それが『太平記』巻七にあると八犬伝。どちらかが間違っている訳で大系版『太平記』にあたってみると、「十三束三伏」は巻三の笠置軍にあった。馬琴は巻七の吉野城か千剣破城のどちらかと勘違いしたのだろう。これはどこかで間違えたと訂正したのだろうか。

夕顔の白ク夜ルの後架に紙燭とりて 芭蕉

●束は縛る、まとめる、抑制する、集める、調整、結末、という意味

手束を「手を束ねる」腕組みをする。また、傍観する、手をこまぬく、なんて思うと手束は蚊牛が番作に殺されるのを手を束ねて見ていたという限定された名前になる。また『下学集』を見ると、「束柱：束或作短」とある。束を短にすると手短になる。ググると簡単に短いさま、てっとりばよいさま、「用件だけを―に話す」とある。江戸語でみても「手軽。簡単。手っとりばよいさま」と意味は同じだ。手束は手っ取り早い女なのだろうか。手束遊女説にこだわっているつもりはないのだが、いろんな要素が一点に向かっていると思えるのは馬琴が禁じている、自分の好むほうに引き付けていることになるのだろうか。

●亀篠

亀は瓶で篠は酒。亀はきで鬼、篠は三三で六で戮、合せて鬼殺しの酒とした。「類船集」の「亀」の項に「酒」がある。もともと亀が酒を連想させるものなのか、亀＝瓶で酒を連想させるのか。

●『下学集』軒 檐

軒

檐

八犬伝ではこの二字を音読みで使い分けている。犬で使いたい場合は「けん」の軒である。

●もし庚申の日に孕むことあれば、その子必ず盗賊となる。故に凡そ庚申の日
子ある月に子を生ものは、その子に名づくるに金をもてす。（『燕石雜志』卷
之一（四）丙午〔附〕十二獸）

墓田素藤の元の名前は但鳥源金太である。つまり素藤は盗賊になってしまっ
たのだから、素藤の母親は庚申の日に孕み、庚申の月に素藤を生んだことにな
る。素藤も八犬士と同様に庚申に関わる男なのだ。

素藤というのは裏里見・裏八犬士といった存在である。

と言ったことを書いた。『下学集』庚申の項に

或説云。此夜夫婦行淫。則其所妊之子必作盜。

とある。「その子に名づくるに金をもてす」の出处は別にあるようだ。

●浜路のはまは破魔矢のはまかと思っていたが『貞丈雜記』にはま弓とあり、
破魔矢でないことでそのままにしておいたが、今なら

梓弓

手束弓③381

はま弓

と弓つながりであることが分かる。角太郎が現八にする弓の講釈。ただ義実
がした龍の講釈に対応しているだけだと思っていたが、弓が重要であることを
示しているものかもしれない。このあとに出てくるのが船虫というのが気になる。
船虫を前三者と関連付けようとしてるのだろうか。こう見てくると手束の
怪しさは船虫級なのである。

●①166

藺相如が勇をもて、夜光珠はとりかへすとも

とある。これは 2012/02/20 の記事に関連するだろう。

○沼藺

ぬい、本文中にあるように反して「いぬ」が名詮自性とだけ思わされてはい
けない。反して犬はそれで良いのだけれど、なぜ沼藺という漢字なのかが重要
である。

藺。漢和辞典で見ると藺相如がある。この名前、八犬伝を読んでいる人なら
一度は調べたことがあるはず。ググると、

中国、戦国時代の趙の政治家。恵文王に仕え、和氏の璧を城十五と交換する
ために秦に使したが、秦の昭王の策謀を見抜き、璧を全うして持ち帰ったとい
う「完璧」の故事、および将軍廉頗との「刎頸の交わり」で名高い。生没年未

詳。

である。ここまですれば沼蘭が蘭相如由来の名前だろうということは察しがつく。沼は「しょう」だから反して「りんしょう」になる。「じょ」がどこにもない。で、馬琴が真の少女などと訳の分からないことを言っている妙真である。馬琴が分解した通りに真少女である。しんとりんが音通だからりんしょうじょとなる。房八が小文吾と文字通りに「刎頸の交わり」となってしまうのも本人ではないが名詮自性である。

房八がわざとではあるが小文吾に対して脅迫するような態度をとったのも、房八＝ぼうはち＝忘八に通じるからである。

房八と沼蘭、八房の犬という本文中の登場人物が言う「一解」だけを金科玉条のごとく受けとっていたら、いつも言っているが「～とのみ思わせる」馬琴の手にひっかかっているのである。最初にそれらしいことをぶち上げて、読者を思考停止にしてしまう、それが馬琴の手だ。

と書いた。親兵衛の珠が夜光の珠②321であったことを考え合わせれば、蘭相如の「刎頸の交わり」という語が発想のベースになっているとみていいだろう。

●手束は遊女説を考えてきた。『源氏物語の女性たち』秋山虔にこんなことが書いてある。

円地文子氏の「夕顔と遊女性」という文章が思い起こされる。源氏に対する夕顔の対応に「無意識の娼婦性」を読まれた円地氏は、「あの夕顔の宿の半部から額を透かせている女たちの姿まで、少し後の遊女の宿部を写した絵巻の風情に似ているように」思われるのである」とも述べておられた。いかにもあの夕顔の花咲く宿を見出したとき、源氏は「をちかた人にももの申す」と口ずさんでいたのである。『古今集』所収の旋頭歌「うちわたす をちかた人にももの申すわれ そのそこに 白く咲けるは なにの花ぞも」の一句である。竹岡正夫著『古今和歌集全評釈』によれば、この歌は遊女への呼びかけと解されている。まさに源氏は遊女の宿のあたりを徘徊する嫖客のていたらくで夕顔とかかわりあい、相手が遊女なればこそ日常世俗とは別世界に浮遊することができたのである。（p32）

2012/02/16 記事で「死」か「花」か迷ったのだが、花にする意味が分からなかったので死にした。しかし「夕顔」を導かせたいのならば、「花」は何の花なのだろうと考えさせるだろう。

●俳諧的手法（連想）は馬琴独特なものではないのだが、暗号化という機能が先行作家にも見られるものなのか。馬琴のオリジナリティとはどういう範囲な

のか。独自のものか発展形なのか。

●八犬伝は俳諧を抜きにして語ることにはできない。発想、連想、変換、ディテールを体系付けているのが付合である。

●『金瓶梅』第十四回

一日、正值正月初九、李瓶兒打聽是潘金蓮生日①120

潘金蓮の誕生日は正月の九日。

浜路の元の名前正月は「正月のはじめに生れ」だから。

●『金瓶梅』第十四回

女房のことばは馬耳東風、他人のことばは金字經①106

正是：家人説著耳邊風，外人説著金字經。

馬耳東風、蚊牛は耳に数珠を掛けてたから牛の耳に念仏かと思ったが馬の耳はあるけど、牛は聞いたことがないと調べると、

牛に經文（うしにきょうもん）

意味：どんなに説き聞かせても効き目のないことのたとえ。

があった。2012/02/19の記事に関わってきそうである。

●この場面は小文吾—船虫、小文吾—旦開野の原点になっている、とした番作・手束。船虫がこんなことを言っている。

歹き伎倆のこれ彼と、わらはが耳に入ることも、目にかゝる日も侍りしを、泣つ口説つ諫れば③242

この「泣つ口説つ諫れば」は、

忽地女子の泣声して、「そは聞わきなし、むじんなり。衆生済度は仏のをしえ、よしそれまでに及ばずとも、心を穢す破戒の罪、法衣に槐ず刃もて、殺さんとは情なし」①272

の対になってることは間違いないだろう。善悪の対か、手束と船虫は同類なのか。会話の途中から番作が聞いたことになっているのも謎を増幅させる馬琴の上手いところだ。手束は謎の女だ。

●穂北

塞は北なり。（『燕石雑誌』p498）

穂＝すい＝水。穂北とは水の塞である。梁山泊というと山の印象があるが、水滸伝の水滸とは『水の滸』ということ。安房を梁山泊にする訳にはいかないので、穂北は八犬伝における梁山泊なのだろう。

●信乃・浜路「木からし」挿絵。

『金瓶梅』的な見方をすると、

梅香、你與我捲起簾兒，燒一炷兒夜香。

岩波文庫で「梅香、梅香、簾を捲いて、香焚いて」①163 となる。八犬伝本文では定包の様子を描いているのだが、浜路が梅であることと「香焚いて」を合せると『金瓶梅』が画中の文でもあろう。ここでも「源氏」の「夕顔」と組み合わせられている。

2012/03/26

●文外の画、画中の文

ようするに文外の画中の文。画中の文とはストーリーを視覚化しただけのものではなく（勿論看板でもない）、読み解く暗号としての図像である。

●定包が八房になるにはどう変換されるのか考えてみた。定包は「ていほう」と読む。包は房で問題はない。どう定が八になるのかがずっと分からなかった。「てい」の音通を思い浮かべて八犬伝的なのは「悌」である。仁義礼智忠信孝悌……！…悌は八番目だ。悌＝八＝定である。やっと定包が八房に変換できた。

ついでに定包は錠になるように包（かね）は金なので、金剋木で杣木朴平に剋つ等、一つの名前にいろいろな要素が組み込まれているところに八犬伝の複雑さがある。

名詮自性は読んで字の如しだけではないのである。

●『俳諧類船集』に「虚言」がある。月、日、星、虹、雨とかなんで虚言なの？と思えるようなものの中に「梓御子」があった。梓巫女だろう。玉梓を語るとき梓巫女の連想からその神性を語られるけれども、虚言とあらば梓御子とあるのは注目である。『大織冠』の龍女と玉梓の関連を語った時に、玉梓の言っていることは嘘であろうと推測した。

玉梓の仰け反りと手束の仰け反りには梓弓と手束弓という弓の共通項があると考えたが「類船集」の「反ソル」にも弓がある。

「謗ソシル」「虚言ソラコト」一つにおいて「そねむ」「反ソル」と並ぶのは付合を連想機能として見るとき注目に値するだろう。玉梓と手束、共通項が多いのである。

と書いていて思い出した。



『江戸吉原図聚』 三谷一馬

このページを開いたら、ご丁寧にも「市松と着物の柄が手束と同じ」などと書いたメモまで出てきた。買った 2004 年当時にも手束の怪しさには気付いていたのだが、そんなことはないだろうという考えに囚われてしまっていたのだ。今気付けばこれまたご丁寧にも富士山とその上に梅まである。

口絵、挿絵だけを初めに見た読者の中には手束は遊女ではないか、と疑念を持った人もいたかもしれない。

手紙を持っていたからといって、手束が本当の手束であるとは限らないのである。これほどの疑惑がありながら賊婦だろう！と決めつけられないのは固定概念がことさら左様に強いからである。

●八犬伝における俳諧的手法。

- ①連想機能としての付合。
- ②変換機能としての付合→暗号化。

●犬山道策

策がある人には読めないし、なぜ道作ではないのだろうとは思っていた。

久し振りに古本を見に行ったら『日本囲碁大系 3 道策』があった。道策なので当然見ると、道策だけではなく道節も出てくる。菩提所は本郷丸山の本妙寺だとか。

馬琴作品の図像を見ると結構囲碁に関するものが出てくる。で、思い出した。道節を殺そうとした黒白という女。黒白＝あやめ＝善悪なのだが、黒白を使ったところが囲碁の道策つながりのネーミングなのだろう。

●音音が子子で獅子でもあるが猫でもあることは書いた。では対になっている妙真は何か？真の少女？などと騙されてはいけない。妙は猫で「ねこま」である。忘れていたが妙真と音音の子は八房である。とすると、八房の実質的な母である野猫である狸と同じことになる。妙真＝妙椿＝音音である。猫が野猫で「やびょう」とばかり思い込んでいたのが間違い。猫は「みょう」でもある。麻苗もびょうとばかり思っていたので魔猫？とチラと考えたこともあったが、ねこまで良いのだろう。

●「書紀」巻十四

手束（たなすえ）。手は「たな」だから手束は「たなつか」になる。

●以前、素藤の本名但鳥は丹頂で丹頂鶴であるとした。そこで手束である。たづかの「たづ」は鶴である。鶴と蚊でこんなのを見つけた。岩波文庫『醒睡笑』

(下)249

旅人、敦賀にて「一夜の宿を貸したまへ」といふ。亭のこたへに、「春か秋冬ならば易きことなり。夏月にとまり事はなるまい」。「如何なれば」と問ふ。「ここは、処をつるがとて、鶴ほどの蚊ありてくらふものを」。旅人いふ「それならば宿かし給へ。毛頭くるしからず、生得わがすむかた山家なれば、山ほどの蚊にくはれつけた身じゃ」と。

●貂蟬

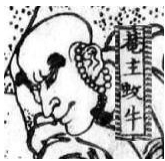
テンは、漢字の「貂（チョウ・テウ）」に由来する。

むじな - へん【豸偏】

漢字の偏の一。「豹（ひょう）」「貂（てん）」「貉（むじな）」などの「豸」の称。むじな【貉／貉】 1 アナグマの別名。《季 冬》「山がつや—しとめし—つだま／蛇笏」 2 《毛色がアナグマに似ているところから混同して》タヌキのこと。

●竜

①雨工、雨師②角→鹿③頭→駝④眼→鬼⑤項→蛇⑥腹→蜃⑦鱗→魚⑧爪→鷹⑨掌→虎⑩耳→牛



蚊牛というだけに火牛が名詮自性かと思っていたがそれだけではない。牛なので⑩、耳に数珠である。竜種の牛が後に出てくることを思えば蚊牛も竜なのだろう。悪竜も毒竜もいる（①28）のだから蚊牛が竜で悪いことはない。火竜（同）もいる。火牛で火竜で番作に寺ごと死体を焼かれたのも名詮自性だろう。とこんなことを言いたいのではない。蚊竜、反して竜蚊、たつかである。蚊牛と言う名前には手束が隠れていた。蚊牛＝手束なのである。手束を賊婦に無理矢理しようとしているかのように感じるが、いろいろなルートを辿ってみても同じ結論しか出ない。

手束＝たつか＝竜か、とは思ってはいたが、竜か？ではまいちで「か」の処理に困っていたのだ。手束は竜火、火竜なので、水剋火で村雨を持っている番作が蚊牛、手束に剋つのである。人は竜を屠る（①26）というのが襯染となっている。

番作が春・安王の首を奪取した美濃樽井の金蓮寺というのも藩金連を想起させるには難くない。

●手束の着物の読み方はまちがっていたかもしれない。桜と麻を別々に見ていたが、桜麻で良いのだ。

●七輯口絵 出来介は瓢箪柄の着物。天の川の見立てか。

蟹崎照文は耳に手をあて、浜路姫が打つ鼓の音を聞いているように見える。ここまでが「うちおと（打ち音）す鼓のさえや」で、霧の中に船が一艘で「桐一葉」となる。

と書いた。隅田川と同じ流れが信乃と現八が流された利根川だからだ。ここで忘れていたのが、現八が犬飼であること。

三才図会に「河鼓ひこほし、たなはた」以奴加比星がある。三才図会を真面目に読んでいれば、とっくに浜路姫図が八犬伝の隠れテーマである七夕と関係していることは分かったはず。三才図会を八犬伝の読み方が分からなかった時に読んだので、近くは二輯浜路図の鳥を探したが分からないし、たいして役に立たないんだなと侮っていたのだ。

●夏は寅をもって正月にするとか歳時記で見つけて喜んでたけど、三才図会にこんなにはっきりと書いてある。正月（浜路の本名）は虎なのだ。



●『和漢三才図会』卷三十八獸類 狸

按狸有数種而淡黒色背丈如八字者名八文字狸。

狸は分かっているからいいや、なんて全然分かっていないのである。

そが（最大きなる牝狸）背の毛は焦縮れて、模様譬ば焼画の像く、如是畜生発菩提心といふ、八箇字の見れて、いと鮮明に読れしかば⑦131

にも根拠があるのだ。

●『和漢三才図会』椿の項に「虎目樹」と書いてある。八百比丘尼妙椿は狸で野猫だから虎だと分かっているのだから、ちゃんと読んでいれば椿でも虎と結

びついているのだ。若狭の八百比丘尼を連想させるが、八百が風で風ということも、風は虎に従うことも分かっている。

●『抱朴子』内篇卷之十一 仙薬

在人間三百許年，色如小童，乃入抱犢山去，必地仙也。

仙童を役の行者の化現かと決めつけていたが、「さぞなわが師のまち給はんに、はやまからん」①217 という台詞からは、この仙童は役の行者の弟子で「入抱犢山去，必地仙」なのではないだろうか。

などと書いてしまったが、馬琴にはめられていた。

義実を狸を玉面と言うというが、総称ではなく玉面狸もいるのだ。その玉面狸の一名を牛尾狸という。ここでも義実の台詞で狸を玉面とのみ思わされてしまうのだ。

仙童と思わされている子供の着ている着物の模様、かなりぼかされているが玉梓処刑の挿絵で刀を振り上げている男と同じ模様なのだ。伏姫と玉梓は同じ姿をしている。仙童と思わされている子供は刀を振り上げる男同様に伏姫に死をもたらすために現れているのだ。のちのちのことを考え合わせると、すでにこの時に妙椿の幻術によってニセ仙童が現れているとみると面白い。八房を育てたことで祀られると思っていたアテがはずれた狸はその段階で里見家を恨んでいるのだ。これは義実を襲った安西の残党と同じパターンである。妙椿が里見家の内情に詳しいことも、玉梓というよりも狸がずっと纏わり付いていたといったほうが良いかもしれない。

2012/02/23

●山志手（やました）

図像も怪しいが、これも怪しい。

山院に宿

志て番作

手束を窺ふ

宿志。かねてから抱いていた志？番作の名札は着物から目をそらせるために離れたところにあるのか。

番作夫婦との対は巽夫婦である。巽夫婦をみれば番作夫婦が分かるか？

悪の二人が一緒になり、巽の病気を機に信心深く善人になった二人だったが「うるはしのちご」の登場でまた素の人間に戻ってしまう。番作と手束の場合は子供がいなくて突然信心深くなり、手束が弁財天参りをするようになってから信乃が産まれた。両夫婦の関連からみれば、番作・手束夫婦も弁財天参りをするまでは善人ではなかったことになる。善悪夫婦の対かと思っていたが、

それほど単純ではないと思わせる部分を馬琴は残している。

●番作「晩咲く」とは夕顔のことである。番作は信乃・浜路図に出てくる夕顔の出处であったのだ。ただ番作が夕顔というのはおかしいので、手束が夕顔であると考えるのが妥当である。と書いていて思った。

信乃は手を掴んで手束を表している。信乃・浜路図に番作、手束がいるのだから、蚊牛と絡めて机の脇にあるのは蚊遣火である。ここでは蚊は描かれていないが、口絵の信乃・額蔵図で飛び回っているのが蚊（牛）であろう。とすると、額縁の蝙蝠は蚊を食べるという関連からあるのかもしれない。

番匠も大工でばかり考えてしまいがちだったが、辛くもを連発する馬琴であるから蕃椒（トウガラシ）のほうがいいだろう。辛き目にあう番作らしい。

これに関して面白いものを見つけた。

「灌仏の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく比、早苗とところ、水鶏の叩くなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも、あはれなり。（『徒然草』第十九段）

上の挿絵は定包の

このとき山下定包は（中略）御簾を半捲揚たる、もたれ柱に身を倚て、慰かねし徒然に、尺八の笛吹すさみ（①100）

という場面を描いているのだが「徒然」によって手束とも結び付けられている。

手束の着物も石畳という固定観念を捨ててみる。黒白斑である。まだらおんなで検索と、「班女」が出てきた。

「班女」は「班氏の女（むすめ）」の謂で、具体的には班婕妤を指す。班婕妤は前漢の成帝の愛人であったが、趙飛燕にその座を奪われ、捨てられた我が身を秋の扇になぞらえて詩『怨歌行』を作った。この故事に因んでシテが「班女」と渾名されている。

肇輯口絵伏姫図の「却被捲簾 人放出」が班婕妤のことだろう。「番作遺訓して」の挿絵にある燕から三輯口絵の「田単破燕之日」と燕が再出する。

謡曲の「班女」を読む。

「班女」に出てくる驪山宮が分からないのでググる、

「りさん」秦の始皇帝はここで瘡を治療し、唐の玄宗皇帝は楊貴妃のために

華清宮を建てた。とある。楊貴妃に辿り着いてきた。が、まずは「班女」である。

「班女」のキーワードは「扇」である。

身に添え持ちしこの扇、輿のうちより取り出せば、をりふし黄昏に、ほのぼの見れば夕顔の、花を書きたる扇なり。

と、浜路が持っている夕顔が描かれた扇が「班女」と「怨歌行」に結びついた。

●信乃、毛野はそれぞれ春王、安王の後身であるとしている。信乃と春王が音通なのは良いのだけれど、毛野と安王がどうにも結びつかなかったのだが、やはり漢字に答えがあった。信乃、毛野の女装は春王と安王の女装によっているのだろうと考えている。かたや皆に笑われてしまうような女装、かたや誰もが騙されるほどの女装。この違いは安王の中には女がいるが、春王にはいないことによる。

春という字を分解する。一人っ子ばかりの犬士だが（道節には妹がいたが腹違い）、家族三人の日々が書かれているのは信乃だけである。

●暗号解読か牽強付会か。

た	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
ま	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
づ	だ	ぢ	づ	で	ど					
さ	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ

謎の女手束はこの表に当てはまらない。

●沼蘭

ぬい、本文中にあるように反して「いぬ」が名詮自性とだけ思わされてはいけない。反して犬はそれで良いのだけれど、なぜ沼蘭という漢字なのかが重要である。

蘭。漢和辞典で見ると蘭相如がある。この名前、八犬伝を読んでいる人なら一度は調べたことがあるはず。

中国、戦国時代の趙の政治家。恵文王に仕え、和氏の璧を城十五と交換するために秦に使したが、秦の昭王の策謀を見抜き、璧を全うして持ち帰ったという「完璧」の故事、および将軍廉頗との「刎頸の交わり」で名高い。生没年未詳。

である。ここまでくれば沼蘭が蘭相如由来の名前だろうということは察しがつく。沼は「しょう」だから反して「りんしょう」になる。「じょ」がどこにもない。で、馬琴が真の少女などと訳の分からないことを言っている妙真である。馬琴が分解した通りに真少女である。しんとりんが音通だからりんしょうじょとなる。房八が小文吾と文字通りに「刎頸の交わり」となってしまうのも本人ではないが名詮自性である。

房八がわざとではあるが小文吾に対して脅迫するような態度をとったのも、房八＝ぼうはち＝忘八に通じるからである。

房八と沼蘭、八房の犬という本文中の登場人物が言う「一解」だけを金科玉条のごとく受けとっていたら、いつも言っているが「～とのみ思わせる」馬琴の手にひっかかっているのである。最初にそれらしいことをぶち上げて、読者を思考停止にしてしまう、それが馬琴の手だ。

●額蔵

秋斂冬蔵義也。

●手束を見てきて、八犬伝は「善悪不二」「邪正一如」「魔仏同根」が基本なのを忘れていたことに気付いた。

耳にかけ または首にもかける数珠 心にかける人ぞ少なき

この大津絵というのが八犬伝に絡む。蚊牛は耳に数珠をかけている。

●二輯口絵の手束の帯と拈華庵にある帯。



手束は麻模様の帯をしている。帯に注目しろとばかりに目だっている。番作と信濃に行くにも自分の家に寄って荷物を持って来ようとしめない。同じ帯があるのは、手束は拈華庵に住んでいたから、と思うのが一番理に適っている。

●手束の後の襖には『般若心経』の

観自在菩薩行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空

の赤字部分が書かれている。菩薩が張り紙で完全に見えないところがいい。抜き出すと、

自在行若波羅蜜多苦厄舎子色

となる。なんかありそうな、なさそうな微妙なところだが、馬琴のことだから何かあると思っていたほうが良さそうだ。般若をググってみる。

般若の面、般若面、あるいは単に般若は、「嫉妬や恨みの籠る女の顔」としての鬼女の能面。一説には、般若坊という僧侶が作ったところから名がついたといわれている。あるいは、『源氏物語』の葵の上が六条御息所の嫉妬心に悩まされ、その生怨霊にとりつかれた時、般若経を読んで御修法を行い怨霊を退治したから、般若が面の名になったともいわれる。能では、葵上や道成寺などで般若の面が用いられる。

庵主蚊牛は山下大人なのだから、やはり手束は玉梓と重ねられているようだ。2012/02/07 の謎の手の記事について、『京鹿子娘道成寺』との関連で怨霊と関係があるのではないかとした。描かれてはいないがあの場面にも玉梓の怨霊は伏姫に夤縁していることがわかる。鹿子模様は『京鹿子娘道成寺』由来である。

この場面は船虫と小文吾、旦開野（毛野）と小文吾のバリエーションの素になっている。船虫も毛野も化けるのが得意である。船虫は善人に化けて出てくる。船虫が嘘を實しやかに言って小文吾を騙したように、手束も實しやかな嘘で番作を騙したのか。釜に化けている狸がいるこの場面、手束が善人に化けているのだろうか。

絵のタイトルの上を読むと山志手＝山下になるのもひっかかる。ますます疑惑が濃くなる手束である。

●茂林寺の釜



この挿絵を見て茶釜かと思っていたら、なんと尻尾みたいなものがついている。狸である。左端にある丸い箱？のようなもの、これも斑だよと思って見ていた。『分福茶釜』の狸で下の挿絵に対応していることが分かった。簾と藁もいつものように対応している。大塚と「たつか」で塚と束が一緒で「た」を抜くと、たぬき、狸となる。しかし、すでに斑と狸（茶釜）はあるのだから、下の挿絵の対応からすると手束は玉梓と対応することになる。手束は玉梓のように美人に描かれているので、きっと悪なのだろう。馬琴は美とは男を破滅に迫りやる悪としているのだろう。八房と伏姫のように悪と善が結びつかないと犬士は誕生しないようだ。

て言うか、右端にある囲炉裏から出ている物体は何？対応する挿絵に燐火か

人魄（①138）と本文にある玉梓の怨霊の代わりだろうか。

八房に生まれ変っている（とされている）玉梓が本文で人魄、挿絵で怨霊になって、八房から離れて狸を連れてくるなどフラフラ動き回っているのがおかしいと思わないのか不思議だ。それは幽体離脱だなどと言われればそれまでだが。

●文字が浮かんできた。



着物の文字は玉梓の「袖の鷲」＝嘘があった。この着物が手束のものとしたら、手束はここに住んでいることになり、来たら留守番をさせられたというのは嘘になる。ますます怪しい女である。

●「山院に宿志て」の挿絵はかなり怪しい。

蚊牛だけなら火牛で番作に殺されたあとに寺ごと死体を焼かれてしまうのだからそれでいい。しかし、庵主蚊牛となると事情が変わる。今まで見てきたように庵は山下である。牛と繋げると山下牛で山下大人（うし）①43 となり、蚊牛は山下定包になる。番作は結城の落人だから義実で良いだろう。すると手束は？ たつか表記で、麻がかなり強調されている。帯なので間に入れてみると「たまつか」となる。かとさは音通なので「たまつさ」である。口絵以外の玉梓は「玉つさ」と書かれている。たつかは玉梓の位相なのだろうか？

石畳とばかり思っていたが、黒白＝あやめ＝善悪で手束に悪があるとすれば、手束は番作が思った通りに賊婦なのだろうか？ 良い人の娘だから良いひとだろうと思うと、そんなことはない。亀篠は大塚匠作の娘である。番作に刃物三昧で斬りつけられても素早い身のこなしで逃れている。麻も良いようにばかり考えていたが「魔」と音通である。ただ「真」とも音通である。手束には伏姫＝八郎に選ばれる理由が結城関係者という以外にもあるはずである。

この場面は小文吾―船虫、小文吾―一旦開野の原点になっている。善悪の対である。浜路も口絵では賊婦に描かれている。手束は謎の女である。

●栄西 浄西の子。父に孝養を尽し、父の歿後京都で修業。後に逸疋寺の住職。



この口絵の「権僧正栄西」というのを見てわかった。犬僧正英才である。



智玉の毛野と対にして描かれているだけかと思って
いたが「犬僧正英才」だったのだ。それで逸疋寺である。栄西のあとに逸疋寺
の住職になったのが犬供養の徳用である。

犬＝けん＝軒＝権＝戸が分かってから名詮自性が面白い。字面で読むのが本
当の名詮自性ではないのだ。



親兵衛

莊介

角太郎

毛野

道節

現八

信乃

小文吾

「衛介郎野節八乃吾」これこそ万葉集みたいだ。それらしく並べ替えてみると
「吾野節衛八介乃郎」で、私の節を守る八玉の男、となる。伏姫から受け継い
だ節を守る八犬士、という読みにするのがいかにもである。

もう一つは、節を守る八郎の玉（魂）だけど、吾が余る。ただ馬琴は八郎が
好きなので肇輯口絵にかけて、節を守る我が八郎でも良いだろう。

●犬士們は、安房殿の寶貝たらん事、他們が所蔵の靈玉と、又何ぞ異なるべき。

⑦154

寶貝＝靈玉。依介だけだと何も分からないが、介＝貝＝玉で素より水気の人
なので妻が滯という名前で良い。滯を念のために調べたら「れい」である。夫
婦で靈玉になる。犬江依介なのでちょっとした犬士なのだ。しかし、



いくらなんでも、これが くなるか？

●金鞠大輔孝徳

口絵の表記。変えるくらいだから鞠にポイントがあるのだろう。鞠と四天で摩利支天になる。大輔図の鹿も獅子だが、猪も獅子である。摩利支天に猪は付き物で、管領戦でも重要な働きをする。摩利支天と大輔、摩利支天と八犬伝、獅子ということだけなのだろうか。五十子のもとの名字万里谷もなにかしら摩利支天と関係があるのか。

●根生野飛雁太素頼（ねおいのひがんともとより）

根性の僻んだ素より。文庫版の登場人物には根生野素頼とあるが「ねおいのもとより」ではなんのことだか分からない。名前を考える場合全部を対象にするべき。

●阿瞞あまの身なれど⑦122

尼ではなく欺瞞の瞞なので化け尼と言っている。音読をする人たちがいた、というだけでこれほど漢字に意味を持たせている八犬伝は素より音読の書ではない。

●2012/01/23 記事中に「くにし」は国土ではないかと書いたが、⑦53に君子（くにし）とある。君子で解釈すべきであろう。

●天帝の恩勅を承り⑦43

八犬伝の世界では役の行者が最高神のように言われるが、その上に天帝がいる。

●雲のある図像について『戯場訓蒙図彙』に雲気「名剣・名玉・名鏡、または英雄士・軍師・謀反人の類、密かに隠れ居るを知らせるために、この雲気たつとかや」とあるのが的を得ている。

2012/01/13の口絵も首桶に英雄士つまり房八の首が入っているから雲気がたっているのだ。親兵衛（名玉）が昼寝をしている部屋の襖には雲とご丁寧にも梅が描いてある。他の雲も推して知るべし。

●道節の火行の挿絵をみて、この不動明王を思いだしたことがあったのだが、道節と結び付けて考えることができなかった。五行で土の道節が火行というの

も不思議な話だが、下の『戯場訓蒙図彙』を見て不動明王の動と道節の道が音通ということから結びつくのだろう。と書いてきて次の記事を思い出した。

『仏像図解新書』小学館。

八大童子の項を読んでいると、八尊はそれぞれ性格も異なり、像容もバラエティーに富んでいる。那智の滝で修行中に失神した僧文覚を助けたと『平家物語』が語るのは矜羯羅。(P176)とあった。

稽平と矜羯羅の「稽」と「矜」はほこへんが同じでつくりが「今昔」で対応している。平は平家の平とも言える。稽平の主道節の家紋は平氏の蝶である。稽平というネーミングには平家のエピソードがありそうである。ただ「図解新書」には矜羯羅童子しか書いていないが、「平家」巻五、文覚荒行で文覚を助けたのは矜羯羅と勢多伽の二童子である。

不動明王の脇侍は勢多伽と矜羯羅の二童子である。これで稽平が道節の家来であったこと、火遁の術を捨てた道節から離れて行くことも理解できる。矜羯羅が色若衆というところが音通とのエピソードの素であろう。

五行は理屈っぽい、音通は屁理屈である。それに具や材料ではなく完成品の和食や中華を一つ鍋に入れて溶けるまで煮込んだものが八犬伝なので、いろんな風味がしてなんだかよく分からないのは仕方がない。

●山下定包

山は土剋水で天津兵内、那古七郎に剋。

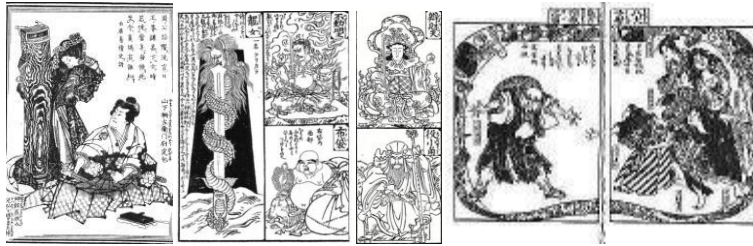
包は金で杣木朴平、無垢（木工）三の木に剋。全勝の名前である。

金碗八郎は金剋木で玉梓に剋つが、定包の金とでは一対一なので土生金、白（金）の源氏、里見義実を必要としたか。義実に火気があれば話は簡単だが、そう上手くはいかない。

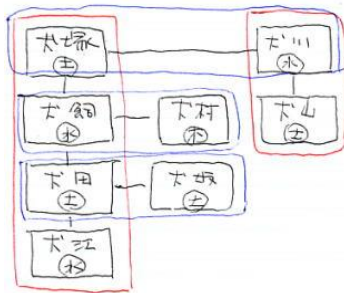
●強弱関係も五行で考えると分かりやすい。

木の玉梓は土の里見に剋ちかけるが、金の八郎に負ける。八郎さえいなければ義実相手に玉梓は逃げおおせていただろう、ということも想像に難くない。幸若舞「大織冠」の竜女と万戸のように「さしも賢き万戸とは申せども、やがてだるまかされ」たのだろう。

『戯場訓蒙図彙』



●犬士が会っていく順番を五行でみると、土—水と水—木、土—土の関係がはっきりする。



相剋関係は犬・玉・痣という同一の因縁で解消される。

●『今昔物語集』 卷第五 三獸行菩薩道、兎焼身語第十三

第三十六回の挿絵「白刃交るとき」の月がそのヒント。月は玉兎で、兎は房であるから房八のなかには、捨身慈悲、滅私献身の象徴としての兎がいることになる。

八房に捨身慈悲の伏姫と、伏姫の読経の功德によって欲を離れた八房は滅私献身の犬となり、玉=兎を持っている犬士たちは滅私献身の人となる。

玉梓は正月（浜路）に生まれ変り、信乃への滅私献身で死んでいく。於兔子は音子→猫だが、名前に兎があり確かに滅私献身的な時期があった。兎=玉とばかり思っていると於玉子と訳が分からなくなってくる。

● 板野井太郎（木）、土田土太郎（土）、網乾左文二郎（水）交野加太郎（火）、村雨（金）

木剋土。

土剋水。

水剋火。

火剋金。

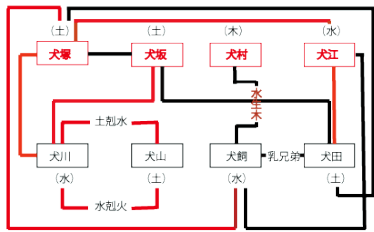
金剋木。

全滅パターンである。誰が金なのかと思っていたら村雨だった。つい金は gold と思ってしまうから間違える。火剋金で村雨を手に入れた道節だったが、村雨の特徴である水がまだ火遁の術を捨てていない道節の火気を消してしまい、定正暗殺失敗と散々な目に遭う。三太郎だけで考えていたから迷路に入ってしまったのだ。五行を使えばスッキリ収まる。浜路と左母二郎が海浜で一緒という

よりも水と水としたほうが良い。

●相剋、相生表

赤枠は肇輯口絵の伏姫グループ、黒枠は八房グループ。



犬川・犬山は道節がニセ火定の際は水剋火で犬川、道節が犬山に戻った時は土剋水で犬山となり、一勝一敗の五分。

犬田・犬江は親兵衛が山林の時は木剋土で小文吾を苦しめ、犬江になると土剋水で小文吾と叔父、甥の関係になり五分。相剋はチャラになるようになっている。これらの相剋関係は玉、痣という共通項によって解消され結ばれて犬で一つになる。

伏姫グループは坤、八房グループは乾。図像的には四対四だが、信乃、毛野という名前とパッと見、本文の女装から六男二女と捉えることもできる。二女はその前身である春王、安王の女装からきていると思うが、六対二という数字の絶対的根拠にはならない。八卦と魔方陣の乾が六、坤は二がそれではないだろうか。

●島田充氏「八犬士と五行」をお取り寄せしてみた。

結果が違うのは、島田氏が犬士の分類を五常と五行で考えたのに対し、自分は犬士の名字と五行で考えたこと。仁義八行を五行に配当するには忠孝悌がないので無理がある。

	島田氏	自分		
犬江	木	水	水生木	仁は木という結論は同じ
犬川	金	水	水生木	木に貌がある。額蔵というのは貌を蔵しているということ。 二輯口絵の額蔵はまるで別人である。
犬村	火	木	木生火	礼の火気より木生火が他の犬士とのバランスがとれる。
犬坂	水	土	土生金	土に粟、智、牛があり、金に毛、稲、犬、馬、水がある。
犬山	火、土	土	土生金	土に粟、智、牛があり、金に毛、稲、犬、馬、水がある。
犬飼	金、土	水	水生木	現八が角太郎を再生させる。
犬塚	木、土	土	土生金	土に粟、智、牛があり、金に毛、稲、犬、馬、水がある。

犬田	木、土	土	土生金	土に粟、智、牛があり、金に毛、稲、犬、馬、水がある。
----	-----	---	-----	----------------------------

●但鳥源金太素藤

見事に金で出来た名前である。金生水で神水。土生金で素藤を生んでしまったのは里見義成。

●木の犬村角太郎を試みる。

五音	角	角太郎、大角
五臓	肝	雛衣切腹
五虫	鱗	妻の雛衣（こい）は鯉
五悪	風	八百八人作戦に加担

●水は玄。角太郎の相棒のような現八は玄吉で考える。

五音	羽	芳流閣の挿絵にカモメ。勿論羽はないので屋根から落ちた。
五味	鹹	塩浜の鹹四郎を殺す
五虫	介	亀、甲殻類と貝類。肇輯口絵に甲羅あり。
五畜	猪	火猪の計
五麟	角端	

信乃が信のくせに孝玉なので信道の玄吉と組みになる。犬村は木、現八は玄吉で水。水生木、水がなければ木は枯れてしまうのである。

介が甲殻類と貝類であるから、越後国片貝の簀（海老）大刀自は莊介（小文吾は巻き添え）に関係するのだ。簀大刀自は大きい海老で伊勢海老、伊勢ネームかと思っていた。貝は毎度のことながら玉なので、片貝の簀大刀自は男勝りである。かいを変換していたら蟹がでてきて驚いたが、解なのだから当然だ。蟹＝貝＝玉であるから、蟹も玉も人を医する力がある。漆にかぶれた八郎を一発で治したのは蟹のゆで汁だった。拷問されても莊介は翌日にはケロリとしていたし、小文吾は毒を盛られても死ななかったし、全然治らなかった目が玉を当てただけでスッキリと治ってしまった。ここで思う。破傷風で死にそうになり大騒ぎになった信乃だけど、玉を口中で舐めていたらあっという間に治っていたはずだ。

●簀上宮六

五液：涎。宮六は（中略）鼻下を長くして、涎の流るゝを覚えぬ。（②52）

五常：義。莊介に斬り殺される。

●犬士同士の関係も五行で規定されている。

木/犬村

土/犬塚、犬山、犬田、犬坂

水/犬川、犬飼、犬江

犬塚 VS 犬飼、犬山 VS 犬川、犬坂 VS 犬川。犬田と犬江は親戚。犬田と犬飼は乳兄弟。犬村意外は土剋水の相剋だが、玉と痣があるから仲良くやられているのだ。

●女四人男四人が描かれている筆輯口絵によって陰陽では、

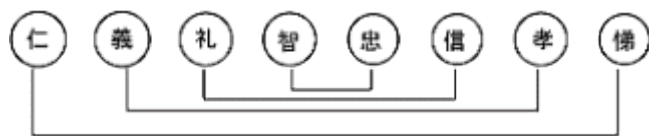
犬江—犬田

犬村—犬飼

犬坂—犬山

犬塚—犬川

と犬坂—犬山以外は初めに会う同士という関係になる。犬坂—犬山は仇を狙う同士で、共に変装が得意だが仇討ちを成功、失敗の関係にある。



以前作ったこの図の関係と一致する。

●与四郎（子子郎）音音（子子）

二人とも十二支で「子」で、五行で言うと「水」になるので水に関する働きをする。また五行相剋で言うと水剋火なので火災現場にいても助かってしまうし、土剋水なので富山に拉致されてしまう。

●『抱朴子』内篇卷之十四 勤求



所謂適楚而道燕，馬雖良而不到，非行之不疾，然失其道也。或有性信而喜信人，其聰明不足以校練真偽，揣測深淺；所博涉素狹，不能賞物。

●浜路②137

邪慳の刃に現身の、命を隕すわらはがうへに、月日は照らし給はずや。

日月有所不照（『抱朴子』内篇卷之十二 弁問）

●『抱朴子』内篇卷之十二 弁問

遂山林之高潔，甘魚釣之陋業者は、房八の義死と義実の釣り。

●素藤が野猫の妙椿に連れてこられた太山（みやま）は、虎と関係付けられている。

『抱朴子』内篇卷之十二 弁問

聞太山婦人之哭，問之，乃知虎食其家三人，又不知此婦人何以不徙去之意，須答乃悟。

『礼記』礼記 檀弓下

孔子過泰山側，有婦人哭於墓者而哀，夫子式而聽之。使子（路）〔貢〕問之曰：「子之哭也，壹似重有憂者。」而曰：「然，昔者吾舅死於虎，吾夫又死焉，今吾子又死焉。」夫子曰：「何為不去也？」曰：「無苛政。」夫子曰：「小子識之，苛政猛於虎也。」

●『抱朴子』内篇卷之十二 弁問



按仙經以為諸得仙者，皆其受命偶值神仙之氣，自然所稟。故胞胎之中，已含通道之性，及其有識，則心好其事，必遭明師而得其法，不然，則不信不求，求亦不得也。玉鈐經主命原曰：人之吉凶，制在結胎受氣之日，皆上得列宿之精。其值聖宿則聖，值賢宿則賢，值文宿則文，值武宿則武，值貴宿則貴，值富宿則富，值賤宿則賤，值貧宿則貧，值壽宿則壽，值仙宿則仙。又有神仙聖人之宿，有治世聖人之宿，有兼二聖之宿，有貴而不富之宿，有富而不貴之宿，有兼富貴之宿，有先富後貧之宿，有先貴後賤之宿，有兼貧賤之宿，有富貴不終之宿，有忠孝之宿，有兇惡之宿。如此不可具載，其較略如此。為人生本有定命，張車子之說是也。苟不受神仙之命，則必無好仙之心，未有心不好之而求其事者也，未有不求而得之者也。

文中の「宿」によって古那屋が居停（はたごや）なのだろう。画中の文が高度すぎる。

●『抱朴子』内篇卷之十一 仙藥

在人間三百許年，色如小童，乃入抱犢山去，必地仙也。

仙童を役の行者の化現かと決めつけていたが、「さぞなわが師のまち給はんに、はやまからん」①217 という台詞からは、この仙童は役の行者の弟子で「入抱犢山去，必地仙」なのではないだろうか。

●玄吉、妙真。玄妙。

●越樽俎以代無知之庖，舍繩墨而助傷手之工。『抱朴子』内篇卷之一 暢玄



鯛を短刀でさばこうとする無知の庖（りょうりにん）

無知の庖（糠助）の息子は玄吉（現八）。

●白箸川①59

石臼箸にさす。無理な注文、駄々をこねる、無理を承知でやる、などのたとえ。臼と白が似てるからか。地名にも注意しないと。行徳は徳を行う、と分かりやすい。と言うか、漢字の感じが似ているから同じということも有りなのだろうか。

●網乾左母二郎

浜路で網に乾された魚男というのが絵的で良いがちょっと物足りない。左母二郎の性格、行動をみれば「網心あれば魚心あり」のほうが良い。

●



このような書き方をするのは大角だけである。非常に怪しいと思わなければならない。重なっているところから読むと「大小字角太郎」になる。

角太郎の玉は、北国に行く商旅に角太郎の母が加賀の白山権現社頭の粒石を持ってきてくれるように頼んだら、礼字の玉だったというもの。

加賀との関係で大小字といえは支藩の大聖寺藩となる。

北国に行く商人とは、薬を自分でも煎じていた馬琴だから越中富山の薬売りだろう。富山藩は加賀藩のもう一つの支藩で、加賀前田とおなじ梅鉢紋を使っている。

大聖寺、加賀とくれば富山で、文字も音も同じ八犬伝の富山が炙り出されてくる。大角の中に富山があり、富山は富士であるから大角は不二なのだ。

2012/01/13 の記事

○二階松山城介

現八と角太郎共通の武芸の師。二回待つかいろいろ考えていたが、反してみた。

介城山松階二となる。

介は貝、すなわち珠。城は白でまず白山。松階二……まつかいに「松買いに」「待つ甲斐に」…待つ甲斐に白山で珠を得た。

まだある。つまいかに、つまは八犬伝では妻だから妻いかに、妻如何にである。妻如何に、白山、珠となる。もう我々は本文を知っているのだから作文できる。

白山から持ってきた珠を飲んだ妻（雛衣）はどうなる、である。今さらどうなる？と言われたって結果は分かっているのである。

中に松山があるからと言って、松山三十（まつやまみそじ）、松山味噌とは関係がない。

●戸田川で犬士を救ったのは蟹の親子なのだが、戸と見れば犬田川に変換できるだろう。犬だ川、川は犬でとまってはいけない。川は獅子でもだめで、川は竜なのだ。小文吾の玉が竜のように蛇行している川（文五兵衛夜水中の光をの挿絵）にあったことから分かる。富山つまり犬山の川が天竜川でもって書かれているのもそのためだ。竜（川）は八番目の子である獅子（八犬士）を護ってくれる存在である。

神宮川（かにはかわ）も「蟹は川」で分かりやすい。

○神宮（かには）＝蟹の碯平だった姨雪代四郎は犬士を守って水没して死んだ（島村蟹）。はずだったが姨雪代四郎だったので助かった。名詮自性とはその時々の名前によって性格が変えられるので便利である。神宮（かには）＝桜であるから代四郎は花咲きの翁と呼ばれることになる。

●徳用を徳川とばかり結びつけるのは間違っていた。何故犬士を殺そうとする坊主なのか？という基本を忘れている。とくよう、とひらがなにする。下から読んでくればしつこいくらいに戸は犬だと言っているので、よっぽど鈍くないかぎりにはピンとくるだろう。戸供養、犬供養和尚が徳用の名詮自性である。

徳用「やおれ後生、覚悟をしたるや。行童にもしつべき和郎なンドの、敵手に立は大人気なけれど、こも亦和尚の役なれば、只一撃に往生させん、十万億土へ走りね」⑧103

●徳用ついでに犬江親兵衛。

戸江親兵衛。江戸の親衛兵。親兵衛の元の名前である真平が親兵と音通で、関東の近衛兵と言ったところか。親兵衛が虎から守ったのは将軍や管領ではなく天皇であった。

●九輯下の上口絵

○獅子、牡丹、鯉、里見義実、龍。音音（おとね）は（ねね）で子子。子子は（しし）で獅子。

○犬山、戸山。戸は（けん）で犬。戸山は富山で犬山。節に生き、犬の胤と信で犬士は生まれた。

○ぬいと房八。犬と八房。つまり伏姫と八房。

○上から名札を読む。力二郎、曳手、単節、尺八。五輯口絵と同じ読み。蟹を曳く人よ八郎。

○猫と虎は同じ。

本文のように「犬の八房」「八房の犬」と読むと、伏姫がいなくなってしまう。of ではなく and である。

●平八郎

曇りなき
学びの道の
鏡もて
照らして
擇らめ
人のよしあし

なんだか平八郎という人に向けて言っているようだ。大塩平八郎という人は、学問は陽明学を学び、知行合一を信じて、自宅で洗心洞という私塾を経営し、頼山陽などとも交際を持った（ウィキ）そうだ。大塩平八郎の周りには変な連中がうろついていたのだろうか。

●磯九郎の口絵も、酒で殺される磯九郎である。



●「山崎街道」

●単節・十條尺八郎、曳手・十條力二郎



蟹を曳く人よ（東条）八郎。



蟹＝力二（りきじ）を片仮名読み。曳く。人よ＝単節。十条＝東条。尺・八郎。

金碗は東条の氏族。のように下の口絵も名札が重要。

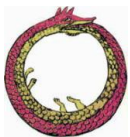


描かれているものをひとつひとつ細かく見ていったら分かった。これは出産図である。お宝尽しは出産祝い。帯の内とは胎内である。白地藏と書きながら、描いてあるのは「子をとろ子とろ」であるのはそのためだ。二輯表紙、七輯総目録の箱型の張子の犬が伏姫と雛衣の疑似妊娠出産を表しているとは思っていたが、すでに肇輯から描かれていた。あとは解説の興を削ぐので書かない。

●関連雑文2に上の口絵に関してこんなことを書いていたようだ。古すぎて自分で書いていて忘れていたが、たまに見直すと良いことがかいてあったりする。竜の胎内とか今よりもまともだ。

〇ヘビは、脱皮して大きく成長するさまや、長期の飢餓状態にも耐える強い生命力などから、「死と再生」「不老不死」などの象徴とされる。そのヘビがみずからの尾を食べることで、始まりも終わりも無い完全なものとしての象徴的意味が備わった。

そして、蛇は竜と同一視されていることを考えれば、八犬子たちは竜の胎内にいるとみなされる。「死と再生」＝輪廻転生、「不老不死」＝神仙、という八犬伝のテーマがここで示されているのだ。



最後尾に見える信乃だが、大と八犬士の周りを囲む帯の初まりは上図のように、信乃になっている。そして、終着点も信乃だ。

これを見ると、馬琴は列伝部を信乃親子三代の物語を軸にして、始まりと終わりがある。と初めから構想していたことがわかる。八犬具足で終わることはなかったのである。

信乃の物語は、雷鳴と驟雨の中劇的に村雨を返還するという遺訓を果たすことで終わった。竜は帰ったのだ。

八犬伝とは言いつつも、竜に翻弄された犬塚信乃（一家）の物語であった。

●妙椿と素藤の関係。

以前、素藤の本名但鳥は丹頂で丹頂鶴であるとしたけど、鶴は意外にも害鳥であると言うくらいでだからどうした、という感じだった。素藤と妙椿という関係で考えていたけど、鶴と狸の関係に茂林寺の釜があった。

応永年間のこと。上州（現・群馬県）の茂林寺という寺に守鶴という優秀な僧がいた。彼の愛用している茶釜はいくら汲んでも湯が尽きないという不思議な釜で、僧侶の集まりがあるときはこの釜で茶を振舞っていた。

あるときに守鶴が昼寝をしている様子を別の僧が覗くと、なんと守鶴の股から狸の尾が生えていた。守鶴の正体は狸、それも数千年を生きた狸であり、かつてインドで釈迦の説法を受け、中国を渡って日本へ来たのであった。不思議な茶釜も狸の術によるものであったのだ。

正体を知られた守鶴は寺を去ることを決意した。最後の別れの日、守鶴は幻術によって源平合戦の屋島の戦いや釈迦の入滅を人々に見せたという。

とウィキに頼るのも危ないので『甲子夜話』（旧大成版）の卷三十五の末尾にあるのを読む。

ウィキでは貉、老僧と言うことが分からないから妙椿が老狸ということにつながらない。源平合戦の屋島の戦いなどを見せるのに「一つの咒文」を唱えたこと、肝心要の「日本へ来りすむこと凡八百年」が分からない。八百比丘尼妙椿である。孫引きコピペばかりしてると落とし穴がる。最後は本である。

狸の化け僧の守鶴と言う名前。転倒すれば鶴を守るという名前である。妙椿は何故素藤を選び守護するのか。答はお馴染み『分福茶釜』の元になったと言われる茂林寺の釜にあったのだ。

茂林寺の狸との対で政木狐がいるということだ。

浜路もそうだったが、本名で名詮自性を考えるべきである。

●墓田権頭素藤

権頭は犬の頭。素藤が妙椿に連れてこられた太山（みやま）。深山ではないところがミソ。太を分解して大とゝとしてまた合せて犬になる。犬は戸だから、ここもまた富山である。

もともとこの太山は、伏姫—親兵衛、妙椿—素藤の対になっている場なので、富山なのである。

●貉と狸は同類⑦42

●段々筋（だんだらすじ）③52



何故忠臣の段々筋を額蔵を拷問する連中が着ているのか。

良民を屠殺して、これを名づけて法度とす。善を悪とする故に、忠義を誣いて、五逆と罵り、悪を善とする故に、奸曲を美して、君子と称す。③53

善悪が逆転しているからである。

●瓶子



番作の着物に瓶子が三つあるので、『平家物語』巻三を見ると、「赦文ゆるしぶみ」「足摺あしずり」「御産」とあって、手束と番作の本文の様子が描かれている。赦文は手束が咥えている。「足摺」？と思ったけど、番作は足が不自由になってしまうのだった。御産は二人の間に信乃が産まれる。

また平家は手束の帯の紋からも伊勢平氏が導ける。瓶子は隣の額の亀篠（瓶酒）と関係があることを示す。姉弟だけど。

目結び紋は二人が結ばれること、五曜紋は御用、番作が犯罪者であることを示す。「毛吹」伊勢の項に山田櫛がある。

全体の見た目は「伊勢音頭」で宝剣すり替え譚になる。花見の中に伊勢参りを入れて伊勢のヒントにしている。

手前の四人が地獄の呵責で、その上の人達が花見。共通の額縁なので、世の中は地獄の上の花見かな、になる。

御用で思い出した。



義実図の龍門を受け、鹿と照射で『宇治拾遺物語』「龍門の聖鹿にかはらんとすること」により、大輔の運命を暗示する。さすがに宇治拾遺に鉄砲は出せない。

だんだら模様は大輔が早野勘平であることも示す。

白の頭巾と白い腰帯は『海道記』に富士の山を見れば、（中略）半天にかかりて群山に越えたり。（中略）雪は頭巾に似たり、頂に覆ひて白し。雪は腹帯の如し。腰にめぐりて長し。とあるの富士山で、向かいにいる伏姫の額が「雪

は」で、大輔が被る「頭巾に似たり」となる。腹帯は上に書かれているように、大輔の腰をめぐって長い。半天は女四天が二人なので、半天。大輔は半天にかかって群山（女二人）を越えている。

伏姫にも同じ白い腰帯をつけさせることで、二枚の絵に共通の意味があることを示している。

富士山であることは大輔が伏姫を救出しようとしたのに、誤殺（蘇生するけど）してしまうという善悪不二であることを描く。

この大輔像は六十七回の「名を改めて大角留別の小集す」の大角の脇にある富士山と重なる。馬琴は雛衣を見殺しにした大角を仁義八行の善の塊としては描いていないのである。

●肇輯口絵には全部ある

義実、八郎

釣り、鯉（恋）、蟹、旗、雲、龍、波、竹、団扇、腰蓑、風呂敷袋（？）

定包、玉梓

琴、桜、鶯、牡丹、扇（白）、硯、石畳、鹿の子、さや形

貞行、氏元、朴平、無垢三、景連、信時

さや形の錦の袋、（き）つね（狐）の絵とそこから出ている黒い煙、、刀、狸、旅、扇（黒）

伏姫、八房

雪、梅、桜、首、房、白い帯、竹、（富士山＝不二）、犬、黒白、鎖

大輔

鎖、十手、桐、弓矢、捕り物、氷裂紋、だんだら模様（忠臣蔵）

八犬士、ゝ大

白地藏、瘤、亀、将棋の駒、麻、玉、鍵、隠れ蓑、丁子、巻物、布袋、河童、打ち出の小槌、隠れ傘

●加仁波



加仁波、桜＝蟹は桜

伏姫は八郎の後身だと言っているが、口絵の八郎と伏姫がつながった。犬村蟹守儀清（蟹は犬を守って犠牲になる）の娘の雛衣が桜柄を着ている理由はここにもあるだろう。花は桜木、人は武士。だから伏姫と雛衣は切腹する。二輯

口絵の手束の桜柄も同じに考えていいだろう。信乃も角太郎も蟹に守られていた間は無事でいられたということだ。窮地に陥った五犬士を救ったのも蟹の親子であった。

●あきさめの

もる夜

わひしもうつ

はりの

くにしは

袖をぬらす

ものかは

くにしは朽ちしの間違いではないかと思ったけど、国土（こくし）、国家のために身命をなげうって尽くす人物。憂国の士なので、隣の額にいる稲戸津衛由充のことである。こくしと書くと、酷使、音通で酷吏になって稲戸津衛でなくなってしまうので国土になる「くにし」にしたのだろう。額縁に梅があるのは稲戸津衛が犬犬親衛（犬が犬を親衛まもる）であることを描いている。

額縁の鯨の守りとさめのもるで画中の鯨守磯九郎のこのように見せるが違

う。
ち、かと思つて稿本を見たけど、馬琴はちをはっきり「ち」と書くので違

●かくまてにへかたく見ゆる世の中に 馬鹿馬鹿しくもすける釣かな

これも文吾兵衛のことを言っていると思ったら大間違い。対応している肇輯口絵、義実・八郎図の本文のことを言っている。

「かくまてに」が「かくまでは」①60に対応して、へかたく見ゆる世の中に馬鹿馬鹿しくもすける釣かなが以降の本文に対応している。

かくまてに へかたくみゆる よのなかに ばかばかしくも すけるつりかな
右手に見ゆる蟹、雲、釣



上左の信乃・現八図に対応しているのが七輯口絵の浜路姫「苦舟のおなしなかれにすみ田河」図。隅田川は利根川と「おなしなかれ」なのである。鼓、桐一葉が霧の舟。屋根が舟の見立て。信乃と浜路姫の対になっている。

●蟹崎照文（蟹照＝天照）は伏姫の代わり。犬田（田力男）、房八（建速須佐之男命）、ぬい（天宇受賣命）

口絵のぬいがなぜ胸をはだけているのか分かった。艶本ではないので、さすがに天宇受賣命のままには描けない。親兵衛の手の中から玉が出現したことは、高天原も葦原中国も明るくなったことを示している。信乃と現八が流れ着いた蘆原は葦原中国の見立てである。

こうしてみれば、信乃は蛭子神となる。父の番作が蛭子神と陰口をたたかれたことに重なる。戸山は富山で富士山の見立てとなっているが、伊勢神宮である。

房八が櫓を持っているのは船主というだけでなく、櫓＝貝＝玉で玉ではないけど貝を持っている人で、次の見開きの額縁で玉＝貝を表している。念をいれて貝と念玉も描いている。

●媽祖は宋代に実在した官吏の娘、默娘が神となったものであるとされている。默娘は建隆元年（960 年）、福建省興化府の官吏林愿の 7 女として生まれた。幼少の頃から才気煥発で信仰心も篤かったが、16 歳の頃に神通力を得て村人の病を治すなどの奇跡を起こし「通賢靈女」と呼ばれ崇められた。しかし 28 歳の時に父が海難に遭い行方知れずとなる。これに悲嘆した默娘は旅立ち、その後、嵎山の山頂で仙人に誘われ神となったという伝承が伝わっている。

なお、父を探しに船を出し遭難したという伝承もある。福建省にある媽祖島（馬祖島、現在の南竿島とされる）に默娘の遺体が打ち上げられたという伝承が残り、列島の名前の由来ともなっている。

媽祖信仰の盛んな浙江省の舟山群島（舟山市）には補陀山・洛迦山があり渡海祈願の神としての観音菩薩との習合現象も見られる。もともとは天竺南方にあったとされる補陀落山と同一視された。

媽祖は千里眼（せんりがん）と順風耳（じゅんぷうじ）の二神を脇に付き従えている。この二神はもともと悪神であったが、媽祖によって調伏され改心し、以降媽祖の随神となった。

この話が面白いところは、媽祖の事項もさることながら、その名前。媽祖になる前の名前、默娘。分解すると黒犬娘になる。また媽を分解して女馬、馬は龍なので、転倒して龍女となる。犬が龍になっているのだ。伏姫は役の行者と思われる老人から宝珠をもらって、犬から龍になった。媽祖が神通力を得たとされる 16 歳には、伏姫が富山に入っている。伏姫が観音じゃ悪いみたいに思われてるけど、伏姫は観音である。

千里眼・順風耳という名前も八犬伝に出てくる。悪神千里眼・順風耳を二神一体として八房に置き換えると、八房はもともと悪神であったが、竜女伏姫によって調伏され改心し、以降伏姫の随神となった。

悪神なんて言うとなぐに悪い神であると思つてはいけない。神（しん）は心（しん）であるから、悪の心を持った八房は調伏されて善の心を持った犬になつたということである。

と書いた。黙は黒犬と書いているのになんで気付かないかな。番作・匠作は番匠。木工作も木工＝番匠。木工は黙だから黒犬である。番作は犬塚になる前から黒犬だつたのだ。「山院に宿して」の挿絵の段階でで何故大塚番作の側に梅模様があるのか分からなかつたのだ。犬の足跡梅の花（後刷筆輯表紙はこれをよく表している）の横に黒い布が垂れ下がっているので黒犬で良いだろう。黒白斑の丸い箱のようなものも手束の石畳、番作の変形石畳も斑犬（八房）と関係しているのだろう。竜と犬（獅子）が出会つたのだ。

四六城木工作も東条の番匠というだけではなかつた。下でみたように金碗は白犬だから信乃が現れることで黒白の斑犬になる。

泡雪奈四郎は梨男で犬殺しだから信乃を誤つて撃つて殺してしまいそうになるのかと思つていたが、黒犬の木工作を殺したのだから犬殺しである。

●夫名以制義，義以出禮『春秋左氏伝』桓公二年

●孝子不匱、永錫爾類。（『春秋左氏伝』）

孝子は独りとさるるなし、続く仲間の絶ゆるなければ。

孝玉の信乃が最初に現れる犬士の訳。

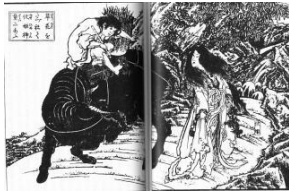
●犬川衛二則任が一子に、乳名莊之助と呼れしものなり。①348

衛莊公娶于齊東宮得臣之妹，曰莊姜，美而無子，衛人所為賦碩人也，又娶于陳，曰厲嬀，生孝伯，早死，其娣戴嬀，生桓公，莊姜以為己子，公子州吁，嬖人之子也，有寵而好兵，公弗禁，莊姜惡之，石碻諫曰，臣聞愛子，教之以義方，弗納于邪，驕奢淫佚，所自邪也，四者之來，寵祿過也，將立州吁，乃定之矣，若猶未也，階之為禍，夫寵而不驕，驕而能降，降而不憾，憾而能眴者，鮮矣，且夫賤妨貴，少陵長，遠間親，新間舊，小加大，淫破義，所謂六逆也，君義，臣行，父慈，子孝，兄愛，弟敬，所謂六順也，去順效逆，所以速禍也，君人者，將禍是務去，而速之，無乃不可乎，弗聽，其子厚與州吁游，禁之不可，桓公立，乃老。

「節用集」の犬川莊助の莊から『春秋左氏伝』隱公三年になるのだから馬琴はすごすぎる。

●周諺有之曰，山有木，工則度之，賔有禮

●道真と黒牛。



神童は役の行者の化現と決めてかかっているがそれでいいのだろうか。

未来未果が分かるのは一角、浜路の霊で分かるように役の行者の専売特許ではないのである。霊が人の口を借りてものをいうのは、浜路や幼児の親兵衛の例をみればわかる。またこの子も親兵衛とおなじく神童である。

玉梓は口絵で筑紫、袖の鶯で怨霊の代表格である道真を想起させることで怨霊のイメージを持たせられている。黒牛→道真→怨霊→玉梓となる。しかし、去り方からすると玉梓に憑かれた生身の子供でもなさそうなので役の行者の化現なのだろう。

●八郎切腹図での金碗大輔は加多三と呼ばれていて、義実によって大輔と改名された。挿絵には上総の大介とある。以前なら間違っているのだろうとか当て字だろうと済ませていたが、それは違う。介は貝で玉、上総は梓と音通。上総の大介という呼び方には玉梓が隠れている。大介の上には玉梓の怨霊が描かれていて、上総の大介に玉梓の怨霊が夤縁しているのである。

と書いていて、のと大が余るのがおかしいので考えた。大を分解して一人、一人の玉梓ではなんか変である。だいたい、といつものように繰り返していて分かった。代、上総の大介は「玉梓の代わり」という名詮自性で運命付けられた名前なのだ。



伏姫は八郎の後身である。大輔が伏姫（八郎）を撃ってしまうのは玉梓の代わりであり、撃った瞬間に霧（怨恨）が晴れたのだ。まるで大輔の鏡像のように玉梓が描かれているのもそのためだ。

●下の八郎切腹図。右下に芭蕉があるので、当然松尾芭蕉と関係があるだろうと思う。芭蕉ばしょうと言うからいけない。里見の紋は丸い一引両である。丸と芭蕉。るとつが音通。ととおが音通。松尾芭蕉である。

「葉草」芭蕉忌の項に、

（寛文二年）藤堂新七郎良精の臣となる。夫より嫡子主計良忠（俳名蟬吟）へ隨身す。（中略）しかるに蟬吟子は、不幸にして寛文六年の四月、世を早うし給ふ故に（中略）二君へ仕へざるよしを告て、しきりに暇を乞ひ申されしを、

あへてゆるしなかりしゆゑに、其秋ならん（中略）国をさる。

とある。

八郎は一度国を去っていて、義実には仕えるよう言われ、断っても「あへてゆるしなかりしゆゑ」に、「二君へ仕へざるよし」で切腹してしまう。かつこの要のところ部分が芭蕉と重なる。馬琴の歳時記になく葉草の記事だが、芭蕉に関する本を多く読んでいる馬琴なら知っていたであろうと考えるのが自然である。

馬琴という名前をみるたびに、馬琴は芭蕉になりたかったのではないかと思ってしまう。弟子でもなんでもないので近い名前はつけられない。馬は芭で、琴は「しょう」に通じる字では「ばしょう」がすぐにばれてしまうので、笙という楽器つながりで琴を選んだのではないかなどとたまに思ってしまう。しかし、あれも書きたいこれも書きたいと長編化していく馬琴には、十七文字しか使えない俳諧は体質に合わなかったのだろう。

● 姓名によりて趣向を立、趣向によりて姓名を付く（『玄同放言』詰金聖歎）

犬江→江、こうだけど。こにして犬の子

犬川→可哀想。雪中遭難から額蔵時代はかなり可哀想である。

犬村→犬が群がっている夢をみた。

犬坂→賢しい。智玉。道節にとっては小賢しいだろう。

犬山→やましい。エセ火行で軍資金を稼いでいた道節はやましかった。

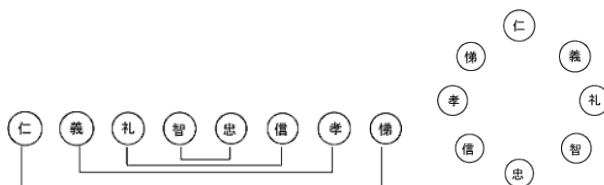
犬飼→甲斐甲斐しい。信乃や角太郎への行動はかなり甲斐甲斐しい。

犬塚→刀の柄。村雨。

犬田→臀部。お尻に痣がある

節用集の八犬士をみながら、名前だけのこの人達はどんなキャラだったのかな、と考えたんだろうね。犬山、いぬやま、やまやま・・・やましい！この男は心にやましいところがあるのだ！とか。下ネタ好きの江戸人だから、田＝でん＝臀なんてすぐに思いついたかもしれない。

節用集の八犬士の姓名によって趣向を立て、仁義八行によって姓名をつけ名詮自性とする、と言うのは簡単だが馬琴だからできたことだ。



犬士が会う設定にも対が使われている。なんで孝の信乃が一番初めに会うのが義の莊介なのか。弱きを助ける義の莊介ということよりも実際はこんな単純な法則（と言えるのか）に則っているのかもしれない。

仇を狙う同士の智（毛野）と忠（道節）。近すぎて反発か。

円にすると、一列では一番遠い仁（親兵衛）と悌（小文吾）が親戚で隣になる。文字通り剛毅木訥（小文吾）は仁（親兵衛）に近い（親戚）のだ。

●月読命、月の神とされている。『古事記』ではイザナギが黄泉国から逃げ帰って禊ぎをした時に右目から生まれたとされ、もう片方の目から生まれたのが天照大御神である。「書紀」には、月弓尊とも月夜見尊とある。

↓の五枚の図像の並びも横書き故だが、本来はこう並ぶだろう。



天照は左目、月読命は右目から生まれたのだという。

玉梓ののけ反りポーズは月弓からだろう、ついでに手束ののけ反りポーズは手束弓だろう。いくら『古事記』と書いていたからと言って因幡宇和一の誤変換には笑った。

玉が月なのもあるが、浜路の図像に月がつきものなのは月夜見ゆえか。善悪だけではなく、陰と陽の対も常に頭に入れておく必要がある。

同一人物でも女の旦開野の場面は陰の夜、陽の男の毛野に戻った場面では朝日に向かって舟を漕いでいるかのようだ。

●黒駒と梅



定包の前の硯、八房と伏姫の挿絵に出てくる硯と関係があることも分

かっていたがここでは意味不明だった。

硯に墨があるので、墨をする、磨る墨で磨墨で上の黒駒の挿絵との関係が分かった。



この犬誠に得度せり①224 と伏姫が八房に対して思った時には、まだ雲霧は払われておらず妖しみは続いている。本文にある通りに大輔が撃った鉄砲の音と共に雲霧は拭うように払われたのだから、妖しみ、つまり玉梓の怨みが晴れたのは挿絵のようにこの時である。伏姫の妙経の功德で得度したのは

八房であって玉梓ではないのだ。よって玉梓自体がこれ以上に里見家と関わることはない。のちに出てくる妙椿は玉梓と関係付けられているが、妙椿狸には狸の個人的（？）な怨みがあるだけだ。



怨みを晴らした玉梓の正月（浜路）への転生を梅模様で表している。

肇輯口絵と墨と磨墨で関係付けて表していた。「毛吹」の俳諧四季之詞の正月に佐々木宇治川先陣がある。また正月に白梅・飛梅があり、ここでも菅原道真と結び付けられる。図像は宇治川だが、本文では天竜川であり読み方が分からないと矛盾に悩むことになる。



この口絵も伊勢参りを思わせるが、住吉詣でだ。

玉梓の後身は額蔵の懷に抱かれた幼児、のちの浜路である。肇輯口絵で玉梓が着ていた桜は脱がれ、梅模様の玉の輿に変わっている。怨霊と言えはポピュラーなのは梅を愛した菅原道真であろう。梅模様は怨霊を図像化したものである。その梅模様を着る浜路が玉梓と関係付けられているのは前身後身ゆえである。

と言った理由からも、玉梓が最初から最後まで八犬伝を動かす力を持っているような存在であるとは考えられないのである。

●この口絵、だいたい伊勢音頭と見当がつく。でも亀篠たちが加わるとなにか違う。



ふと分かった。この口絵の画中の文は
世の中は地獄の上の花見かな
である。

●琴を玉梓のシンボルとすると、琴は桐なので桐模様を着た大輔には玉梓が
贅縁ていることをしめしている。

八房乱入時に琴が伏姫に倒れかかり動きを封じたのも玉梓の仕業である。玉梓が夤縁しているその子、その子とは八郎の子と義実の子伏姫のことで、桐＝琴でそれを示している。

琴は筑紫琴で、袖の鸞とあいまって太宰府天満宮を想起させ、それによって怨霊と梅を導きだしている。

● 月夜の犬（に）は死ぬ時（日）を知る



碓子尔春

忍光八

難波江乃

始垂母

辛之河尔

加久尔

世波

万葉集のように、碓子尔春忍光八難波江乃始垂母辛之河尔加久尔世波、と書いたらアウトである。



周公恐懼流言日

王莽謙恭下士時

若使當年身便死

至今真偽有誰知

図像分析のところで、本当はこの組み合わせが正しいなんて合成図像を作ったことがあった。その時は歌の内容よりも、玉梓を挟んで両者が睨み合う、扇を持った男と団扇を持った男、富貴歓楽を極めた男と貧乏神の男と言うように図像的に考えたのだった。

自然と上の読みになっていたようだ。



この良いところは定包と八郎の視線がぶつかるところだ。



以前上二枚の御簾と藁の対応を考えてみたことがあった。八房のいるところには御簾がつきものだったのだ。

月夜の犬は定包で、その犬は死ぬ時を知った八房である。

八房が死ぬ時を知っているとは、この犬誠に得度せり①224 と伏姫が八房に対して思ったことでも分かる。

肇輯口絵定包の左手が不自然だと思っていたが、刀を鞘から抜くように扇を左手から抜いたのだ。手束はたつかだから、手から抜く、たぬく、たぬき、狸である。挿絵の半分だけ定包・玉梓図と対応していた。

定包が見上げる玉梓の位置に対応して月＝玉がある。幼児の大輔が一人で城に来れないのと同じで、雛狗の八房がの代わりに狸が月を見上げている。これは二輯口絵の名札のない幼児が額蔵の着物の中にいるのと、切腹の八郎を玉梓の怨霊が見降ろしているのと、幼児の浜路が亀篠に抱かれて高い位置から信乃を見下ろしているのに対応している。玉梓の不自然な体の反りは怨霊のカーブに対応していたのだ。

白黒に牡丹柄の着物、薄いけれども石畳柄の袴の定包は獅子の要素を持った男なのだ。



玉梓と獅子の位置関係は上二図と同じである。

切腹をしない定包なのにと、周公とか王莽とか真面目に考えると訳が分からなくなるのは当然である。暗号を隠すために適当に書いているのだ。遊戯三昧、江戸のホモ・ルーデンス、ほんと遊ぶ人馬琴である。

●浜路の画中の文



大系本『竹取物語』龍の頸の玉 p 49

かぐや姫てう大盗人の奴が、人を殺さんとするなりける。

浜路が殺そうとしたのではないが、浜路に関わった右の四人（他にも墓六、宮六等）の男達は殺されてしまった。

浜路が黒づくめで強盗提灯を持っている理由もこれで納得である。浜路の元の名前正月の出处も『竹取物語』であろう。



この浜路も節婦竹の如しかとそのまま思っていたが、夏は寅をもって正月にするとか、竹林に虎も考え合わせれば単純には節婦竹の如しといかない正月の浜路である。

墓六は月には墓がいること、簸上宮六も月の宮から来ている名前であろうし、宮六は『古事記』にも絡んでいる。宮六は簸上蛇太夫の息子で、蛇太を反さば太蛇つまり大蛇になる。

六は『竹取物語』六『伊勢物語』六のヒントか。八犬伝を読んでいると、あまりに出来すぎたようなことによく出会う。意図した馬琴がすごいのか、偶然がすごいのか分からない。この図像も『竹取物語』『伊勢物語』が組み合わされている。また山崎街道、梅を出すことで左母二郎の位相が金碗大輔と同じであることを示している。

浜路が付けている花菱は伊勢神宮の神紋なので、これも伊勢に関係している。花菱を数えてみた。四つある。『伊勢物語』の四段を読んでみる。

『伊勢物語』本文は 古歌・古語・古文の総合サイト「扶桑 fusau.com」 より。

昔、東の五条に、大後の宮おはしましける、西の対に、住む人ありけり。それを、本意にはあらで、心ざし深かりける人、行き訪ひけるを、睦月の十日ばかりのほどに、ほかに隠れにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。

またの年の睦月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月の傾くまで臥せりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてとよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

睦月正月は浜路の本名。

梅の花は浜路。

あばらなるは土太郎が持つ傘。板敷は左母二郎の下敷きになっている板野井太郎。

夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけりは許我へ出発する信乃のもとに忍んで行った浜路が信乃に追い返される本文の場面。

ということになる。

花菱は後に出てくる道節も付けていて、本文を読んで兄妹を表していたことが分かる。

鳥はどうか。浜路の死ぬ運命から死出田長、つまりホトトギスであろうと最初に考えた。次に八犬伝は七夕と関係があるからカササギだろうと考えていたが、本稿では浜路を玉梓の後身としているので弓下 263 の記事でまたホトトギスに変えた。

白峰の山中に、杜鵑の玉章といふものあり。是杜鵑の致すところ、その形玉章に似たり。よりて名づく。

月は玉だから、杜鵑の玉までは図像で読める。浜路の本名である正月、月と額縁の羊歯で表される。ちなみに出版界では正月は梓である。

軒（犬）の月影で犬と関係があることが示されている。



雨たれのおとしつくして又さらに しるこそよけれ軒の月影

雨たれのおとしつくしてとは、村雨を使った戦いの後に、しるこそよけれ軒の月影とは、莊助と道節の犬の月影である。口絵の浜路図の歌はこの場面のことである。

村雨からは龍の気が出ていて、村雨が水に関係しているのはそのためだ、ということが画中の文である。もともと火気注意の道節が持つ刀ではないのだ。梟は梟ではない。口絵は見た目と中味が違うので取扱注意である。

●獅子

八犬士は龍とか獅子とか言っているけれど、それは見立てに過ぎないことに気がついた。人間である八犬士は「志士」である。音音がねね＝子子＝獅子で、婆さんのクセに変な奴なのも、音音が志士であるからだ。犬の与四郎は与四＝獅子で、かつ四白＝夜白＝牡丹でいいが、人間の代四郎を同じに考えていたのは間違いであった。代四郎は志士である。

仁義八行の玉を得てその意味を知ることによって、八犬士は狗子から獅子つ

まり志士として成長していくことになる。志士として犬士を見るとき、犬士は天下国家のため正しいと信じたことを、生命をかけて貫く者であり、仁義八行の化け物だけではありえないのである。

●浅羽麻二

朝はねマジ、だそうだ。じゃ、夜は？

マジが江戸語にあるところがおかしい。



●四輯は神話で構成されているとした。

額縁は出雲、帆大夫、社平。

簸上は日神、新織は神職。

と言ったことでググると、

カミムスビ（カミムスヒ、カムムスビ）は、日本神話の神。『古事記』では神産巢日神、『日本書紀』では神皇産霊尊、『出雲国風土記』では神魂命と書かれる。天地開闢の時、天御中主神・高皇産霊神の次に高天原に出現し、造化の三神の一とされる。本来は性のない独神であるが、造化三神の中でこの神だけが女神であるともされる。また、先代旧事本紀においては、高皇産霊神の子であるとも言われる。

大国主が兄神らによって殺されたとき、大国主の母が神産巢日神に願い出、神皇産霊尊に遣わされた蛸貝姫と蛤貝姫の治療によって大己貴命は蘇生する。

『古事記』では、少彦名神は神産巢日神の子である。

「産霊」は生産・生成を意味する言葉で、高皇産霊神とともに「創造」を人格化した神であり、高皇産霊神と対になって男女の「むすび」を象徴する神でもあると考えられる。（ウィキペディア）

となる。

信乃の回復と親兵衛の蘇生のアウトラインに使われているのが分かる。人物の組み合わせは図像を読む上で重要であるようだ。なんでここにいるの？というのが怪しい。

●依介よりすけ

介を貝＝玉と見ると、依玉になる。分解して反して読んでいくと、玉の衣の人になる。



確かに玉模様の着物である。



頭、あつ玉。依介の人柄からすると衣は心で、心ざまの淳朴（すなお）

②370 な玉の心の人であろう。

のちに犬江屋を継いだのだから、依介も犬士にはなれない犬であった。

●重戸についても、一戸重（一人の戸重なる）で、伏姫が重なる名前であるというのが一つ。落鮎であるから魚のヲモト（大和本草）であろうというのが二つ。戸が犬だから犬ネームであるというのが三つ、と考えてきた。

図像的にも伏姫図と同じということもある。



重戸は戸が犬で重犬と思ったところで左の挿絵を思い出した。

本文では高辛氏の槃瓠①167 とだけだが、挿絵では「昔高辛氏。有犬戎之寇」とある。重犬を反すと犬重であり犬戎に音通である。わざわざ挿絵を出しているのだから、重戸は名前でも犬戎でもって伏姫と重ねられている。

重戸の父夏行はあり得ないけど夏雪で、カッとして溶けてしまう。雪が犬と関係ある。

重戸の夫有種は、有がありで梨のこと。梨の種でまだ犬殺しの梨の実になってなかったことが救われた原因。

●二三十戸（けん）弓下 190。これがなかったら戸山も重戸も全然分からなかった。軒が犬と分かったからこそなんだけれど。「比翼文」の権八に振り仮名がない。「ごんはち」と読んでいたが「けんはち」でも良い。権八は戌の日に生まれている p 81 ので犬八と気付いたから「けん」は犬の音通とするとわかった。

●貌姑姫

そのまま箱入り娘。

●金碗や稲城が白犬になる。白犬とは合して狛で獅子である。斑のない八房ではなく宝珠がなく竜になれない獅子なのである。獅子男の世四郎、音音＝子子で獅子女の音音夫婦の子、白犬の十条兄弟は皆獅子止まりの人たちなのだ。また竜門の鯉で鯉止まりの孝嗣などもいる。

石畳の着物を着ていた手束（たつか、竜か）。宝珠を手にした時は獅子から竜であった。手束の手からこぼれ落ちた玉を飲み込んだ犬の与四郎が獅子、竜になり、次いで玉を手にした谷から落とされた子獅子の信乃が竜になった。信

乃を詳しく書いたから、谷から落とされる他の犬士は以下同順ということになる。

ちなみに、犬の与四郎は四白とも呼ばれたともある。四白はよしろだから夜白すなわち牡丹であるから、与四郎も世四郎も牡丹という名前で獅子に関連付けられている。

八犬士の体—牡丹の痣（遺伝）は八房から、精神—八玉（形見）は伏姫から受け継いだもの。体は八房譲りであるから抜群の運動能力を持っている。



この口絵では六男二女ではなく、上の伏姫・八房、大輔図に対応していて四男四女、つまり四男は玄吉・道松・莊介・小文吾で八房、四女は毛野・角太郎・真平・信乃で伏姫が描かれているとした。本文では六男二女で良く、この口絵に限っては図像的に親の伏姫・八房、大輔図と関連付けているということだ。

四四は獅子である。道松の着物の将棋の駒柄に龍はない。まだ彼らは駒→狛→獅子なのだ。駒→狛を導くために道松の後には頭に皿、お尻に甲羅をつけた駒牽きの河童の玄吉がいる。帯の内側（帯内）こそ胎内であり、宝珠は外にある。犬士たちは産まれた時は獅子の子であるから、珠を得て苦難の道は必ず通らなければならないのだ。

ゝ大の動作を『胡蝶物語』の相撲で「さあ来い」と思っていたが、もう一段うえて「さあ産まれてこい」である。そして、どこかで産まれた八犬子をゝ大が探す。それが白地蔵なのである。

●素藤が妙椿に連れてこられた太山（みやま）。深山ではないところがミソ。

と書いた。対する富山は深山①234である。富山はもともと戸山、犬山なので深山で良い。

●里見季基

実際は家基だが、家康の家に憚って名前を変えたと言われている。それはそれで良いだろう。問題は馬琴はどういう意味で季という字を選んだかである。音読みにしてみるのが基本なので「きき」である。ずっと分からなかったが、さっき分かった。馬琴が好んで使う「騏驎も老いては驚馬に劣る」の騏驎である。騏驎は駿馬であるから、八犬伝的にいえば竜種ということで竜である。季基＝騏驎の子であるから義実が竜の子ということになる。

義実は何故白竜に選ばれる存在であったのか。源氏の白の白竜は季基である

とも考えられる。物語上のことだから理由は別に分からなくても良いのだが、馬琴のことだからなにがしかの意味はあるはずである。

●犬と役の行者のセット。『和泉名所図会』四之巻、犬鳴山（早稲田大学図書館 古典籍総合データベース）で「それ此山ハ役優婆塞草創の地也」とある。そのあとに犬鳴の由来があり、それは里見季基が狙公の刀を得た話（⑦189 以下）の元ネタであろう。犬を猿に変えただけである。名所図会の挿絵の犬が黒白斑なのがいい。伊勢参宮、都だけでなく、八犬伝とは関係がない和泉名所図会が使われているのだから、他の名所図会も使われているかもである。

●役の行者は役の行者だから名前など考えたことがなかった。ふと縁の行者と浮かんた。役の行者自身が因縁を行う者であるからから未来未果が分かるのだ。役を約にすると約束を行う者となる。義実八房に伏姫を嫁にやると約束してしまった。役の行者はその約束を履行させたのである。

里見は見＝犬で里の犬。五十子はいねの音通で犬、伏姫も犬。役（えん）と犬は音通。犬の行者であるから犬の里見との関係があるということになる。

●五十子の城

なぜ伏姫の母五十子と同じ五十子の城を攻めるのか疑問だったが、攻め落としたのではなく素の犬の城に戻したのである。

●前身後身を考えた時に、親兵衛の前身は伏姫の母五十子とした。五十子は犬という名前で、子を二回使ってしまうと犬の子になる。親兵衛の母沼蘭（ぬい）は転倒して犬である。つまり五十子＝犬の子と言う名詮自性なのは沼蘭（犬）の子である親兵衛である。親兵衛が婦人の仁などと言われるのは前身故である。

●大団円の最後を飾る「あはれとは見る人おもへ」の句。息子を亡くしたり、病気をしたり失明でも八犬伝を完成させた馬琴を不憫と思う気持ちだと思うことなく思っていたが、違う。↓でみたように、あはれとは天晴れである。よくやった、馬琴天晴れと言われるのは面映ゆいのであろう。

●一角

『一角纂考』という本があり、早稲田でも見ることができる。それを見ると「一角魚双牙真図」があり、確かに角ではなく牙である。一角は牙が二本であり、さすがに実の親子である。鯛髻源八とか鮫の守りとか使いたくなる馬琴のことであるから、一角仙人よりも一角魚さらには一角獣を用いていることを自慢したかったのかも知れない。

●大輔は『海道記』の富士山



●左は『平家物語』灌頂巻



●山鳩が角隠しをしているから、最後の白地藏かと思っていたけど、嫁（よめ）だから「平家物語を読め」ということかもしれない。

●百十回⑥161

源氏物語を読しつ

七夜ばかり

をヒントに『源氏物語』『紅葉賀』を読む。



この口絵の画中の文であった。額縁の蜘蛛も蝙蝠も八犬伝の本文を読んでも分からない。

●口絵の右。

田税戸賀九郎は田力と戸隠れで神話ネームとした。

天津九三四郎員明は天草四郎みたいだけど、この口絵中の皇天とで考えると、九、くはかと音通で「かみよ」神代となる。天津神代、あまつかみのよ、である。額縁の蜘蛛は左の絵に関連しているのではなく、蜘蛛＝雲であるかもしれない。麻呂なのに満呂とあるから満月、その月が雲から出る、出雲かもしれない。まだ考えられることは戸賀九郎の持つ刀にある大中黒（一つ引両）が家紋ではなく漢字の日として、太陽が昇り 闇の世界が明けるということ。

というか、天津九三四郎は乞食、つまり『古事記』である。

『古事記』と『源氏物語』が典拠だと言っている。馬琴には愛すべき単純な側面がある。

●稲戸津衛由光

津守り。

花菱。住吉。本文にはまったく出てこないが、図像を読むと出てくる。

犬（稲）と（戸）津守由光。犬と住吉行こう、という名前か？戸を衛る犬と前は読んだけど、そうすると津、由光が余ってしまう。戸も犬だから「犬（と）」

犬、住吉行こう」と伊勢参りの振りをして住吉詣でに行く二輯口絵の信乃・額蔵図のような名前である。

行こうは「いこう」ではなく「ゆこう」なのだ。

●八犬女

伏姫・濱路・沼蘭・雛衣・音音・曳手・単節・重戸

賢女というなら分かるが、何故犬女なのか。伏姫はもともと人犬だし、浜路の生まれは犬山、沼蘭は犬、雛衣は犬村、音音は子子で獅子、旦那の代四郎は獅子男、曳手・単節は八房の母、重戸は↓でみたように戸＝けん＝犬だから犬が重なっている人である。重戸の話で重なっている犬とは伏姫である。

伏姫を除いて戸山の妙真を加えたとしても、戸山は富山だし戸は犬だから犬山となる。

里見の八姫も見＝犬だから、里の犬の姫たちである。

伏姫の母五十子も五十（い）、ねとぬが音通で犬となる。

東条は東が稲で犬。条は城⇒白で反して白犬。

十条は十が稲で犬。十条兄弟は白い八房である。

稻城も白犬。

八房。一戸（ひとりのしかばね）八方に至る、が本文だけど、戸は犬だから「犬八方に至る」のほうが自然であるが、これを書いてしまうとあとから出てくる戸が全部犬だとばれてしまうので義実に読者が～とのみ思わせる発言をさせているのだ。登場人物の発言はその人が思っていることを言っているだけなので、それを八犬伝中の真実としてしまうのは間違っている。あくまで一解なのだ。本当のことは義実や、大のようにペラペラと話さず、毛野（馬琴）のように言わないものなのだ。

●二輯口絵の浜路図を考える



以前浜路が付けている花菱は伊勢神宮の神紋なので、これも伊勢に関係しているとまでは読んだ。最近は進歩しているので、花菱を数えてみた。四つある。

『伊勢物語』の四段を読んでみる。

『伊勢物語』本文は 古歌・古語・古文の総合サイト「扶桑 fusau.com」 より。

昔、東の五条に、大后の宮おはしましける、西の対に、住む人ありけり。そ

れを、本意にはあらで、心ざし深かりける人、行き訪ひけるを、睦月の十日ばかりのほどに、ほかに隠れにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。

またの年の睦月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月の傾くまで臥せりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

睦月正月は浜路の本名。

梅の花は浜路。

あばらなるは土太郎が持つ傘。板敷は左母二郎の下敷きになっている板野井太郎。

夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけりは許我へ出発する信乃のもとに忍んで行った浜路が信乃に追り返される本文の場面。

と言うことになる。

となれば、三輯口絵の道節も花菱が九つ。『伊勢物語』の九段を読めばいい。九段は船虫の挿絵の塩尻でも出てきた。

●左母二郎

口絵では左文二郎になっている。さ文字＝魚、魚男だが、弓下 287 を読むとまだ何かありそうだ。陰文に「ひだりもじ」と振り仮名がある。左文字である。左母二郎とはまた陰の男でもあるようだ。陰があれば陽がある訳で、陽は信乃なのだろうか。

●二輯口絵の浜路図にある鳥。

浜路の死ぬ運命から死出田長、つまりホトトギスであろうと最初に考えた。次に八犬伝は七夕と関係があるからカササギだろうと考えていたが、弓下 263 の記事でまたホトトギスに変えた。

白峰の山中に、杜鵑の玉章といふものあり。是杜鵑の致すところ、その形玉章に似たり。よりにて名づく。

本稿では浜路を玉梓の後身としているので以てこいである。月は玉だから、杜鵑の玉までは図像で読める。そして浜路の本名である正月、月と額縁の羊歯で表される。軒（犬）の月影で犬と関係があること示されている。

●二三十戸（けん）弓下 190

戸山と富山は音通で、戸はけん＝犬だから富山は犬山である。地元の読みは「トミサン」だが馬琴は「トヤマ」にこだわる。戸をけん＝犬と読むのだからトミではいけないのである。戸山の妙真とは犬山の妙真である。妙真も犬だったのか。

富山とは素より犬の山なのである。

●赤岩一角

弓張月。「夫福は（中略）名づけて天鹿といふ。即天鹿獸（中略）角一ッあるを天鹿とす（中略）天鹿は獅子の属也」下 101 とある。角太郎の父一角は素より獅子であったから石橋を渡るのである。しかし、鹿であるから化け猫＝虎に食い殺されてしまうのだ。

鹿の性は淫であるから化け一角は次から次と妻を変えていくのだ。

角太郎は獅子の子であった。また謬こと甚しいとしながらも天鹿は蝦蟇の大きなもの也ともある。鹿は六であり、一角は墓穴に置き換えられるから、角太郎と信乃には妻帯者という共通点がある。

第一回を読む。

●東海の浜（ほとり）①17

ほとり、で思った。水滸伝とは水の滸の物語だから、海は水で浜はほとり滸、八犬伝には素より東の水滸伝つまり日本の水滸伝という意味があるのではないか、というかそういう意識のもと書かれているのは今さら言うまでもない。。古河を許我と書くが、要は河の滸、水の滸である。八犬伝に多くの川の場面が出てくるのは、それぞれが水（川）の滸の物語であるからだ。

●籠城三年①18

毛吹、犬といえば籠城。三年は三年塞がりで大將軍。見返しに大將軍ならぬ戌（犬）將軍の図がある。三年間～したということがよく出てくるが、その基本となっている。

また犬といえば蓼で、籠城軍の中に蓼科太郎市がいた。蓼科太郎市は甲斐で信乃と関わる四六城木工作の父。太郎市は手束（信乃の母）の父井丹三直秀に仕えた。

●両公達は生拘られ①18

馬琴は春・安王両公達が女装して脱出しようとして失敗、生捕られたことに十五回でも触れない。この隠された女装は両公達の後身である信乃、毛野の女装につながっていると本稿ではしている。

●又太郎①18⇒再太郎⑨136

●八騎の従卒①20

素藤を裏切り、素藤に殺された卒八はこのパロディー。

●牽駒の、こころも狂ふ①21

馬琴が好きな「意馬」

●固（もと）より①22、26。

22、26。素より「素より」を乱発していたのではなかった。

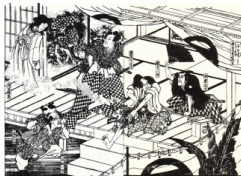
●①23、時に磯山以下の龍出現の描写は②378 頂の上に鬘鬘と、以下の伏姫が現れた時の描写と同じ。庚申塚での落雷にも伏姫が絡んでいることは言うまでもないので、伏姫と龍の強い関連が窺われる。

●物に障らぬ言の葉①30

の義実が後に失言を繰り返す。

●大八の車の柄はどうも「車僧」を読めということらしい。

●



これ、芭蕉の木は謡曲「芭蕉」を読めということのようだ。肇輯口絵玉梓の着物は謡曲「墨染桜」を読めということのようだ。

●弥々山墓六

「弓張月」下 19 にある八頭山（ややま）がヒントになる。

墓六を殺した簸上宮六という男、父が蛇太夫なので、途中を省くと簸川で八岐大蛇が想起される。八岐大蛇というと、頭と尾はそれぞれ八つずつあるのは常識。八頭山は弥々山に通じる。弥々山墓六には墓蛙だけではなく蛇が隠れていた。弥々山では蛇太夫の息子宮六と相容れるものがあるが、墓六では蛇に睨まれた蛙という二面性を持っている名前である。酒がもとで殺されてしまうのも弥々山＝八頭山＝八岐大蛇であるからだ。

●（犬稚）を為朝の後と定め、犬稚丸を更て、源義実と名告らせけり。（大系本 上 345）

義実つながりで里見義実の前身、やはり義実も犬だったのかなどと考えるのは面白い。里見は見が犬だから素より里の犬なので違和感はない。しかし、里の犬はいまいちである。里見とは転倒して「犬の里」なので、犬士たちは親もとに帰っていくのである。

八郎つながりで金碗八郎の前身が為朝であったと考えればと壮大な輪廻の物語になって面白い。一字一句読むのも良いが、こういう想像をするのも本を読む

楽しみである。

●五十（いそちゝ）（大系本 上 378）

五十子については磯子（いそご）とか稲（いぬ）と読んできたが、子をどうするかだけ「いそちゝ」なら磯路で浜路に通じる名前になる。とか書いていて閃いた。子は最近「ね」とばかり読んでいたが、童子のじだから五十子も磯路で良いのだ。五十だけでいそじと読んでいるけれど、歳とか言う時は五十路でいそじと言う。浜路という名前はどこから来ているのか疑問だったが、五十子の系統だった。

と書いたあと読み進めると、379 に童子が出てきた。

●願ふはわらわを赦させ給ひて、故郷へ還し給はらば①111

玉梓の故郷って？と思っていたら、この台詞は「雁が音を聞ては、故郷へ遣らん玉梓かと見なし」（大系本 上 383）と、その注にある漢の蘇武の故事を引いている。

●稲と犬は音通だから、稲戸津衛由光とは戸（家）を衛る犬ではないか、と書いた。同じ稲の稲城は東条と読んだ。八犬伝の基は東条なのでそれでも良いと思うが、毛野との関係から見ると、稲⇒犬、城⇒白で転倒して白犬とも言えるだろう。

十条尺八、力二兄弟。尺八、力二が八房になることは本文にある。十条は東条だから上のように白犬と読むと、白犬の八房と言った斑のない八房になってしまう。つまり尺八、力二兄弟は痣のない犬士であったのである。親兵衛の父房八も同様である。

付合はある言葉を他の言葉に変換する働きがある。音通は別の言葉同士を等価する働きがある。

五十音図で犬の音通を何個かやってみて面白いのがあった。い⇒き、ぬ⇒く、で「きく」になる。きくで一番最初に思い浮かべるのは肇輯口絵で金碗大輔が金鞠大輔と書かれていること。鞠問だから追捕される犯罪者として大輔は扱われているのだろう、とさっきまで考えていた。鞠が犬になると、ちょっと事情が変わる。金犬ではおかしい。五行の金をみると色は白である。金碗とは白犬なのだ。金碗は上でみた東条⇒白犬の一族なので、白犬と読めるのはおかしくはない。大輔は、大と名乗る以前から犬だったことになる。

金碗が白犬なので、里見（見＝犬、里の犬）と出会い、八郎の後身である伏姫が犬谷犬の万里谷五十子から生まれ、犬に纏わる名前を付けられてしまうのは前業によるものなのである。

ただ金犬でおかしいと決めつけることもできない。金は犬で犬は獅子、犬獅子となる。

金碗というのは馬琴の創作だから選んだ文字には意味があるだろう。金碗と書く時「きんわん」と書いて変換している。犬は「ワン」と鳴く。金を犬とすると「犬ワン」である。金碗八郎は「犬ワン野郎」だ。ここまで考えてくると、どうでも良いような気がする。

図像は絵解き、「画中の文」は他の箇所を表していたりするために文章よりも複雑である。

上で見た大輔像は『海道記』による富士山像が重ねられている。伏姫を救出しようとする善（帰参のためという下心もあった）と誤射という悪は不二なのである。この不二がどこから来ているかというと、父の八郎からである。八という数字は富士山の形をしているので、八郎とは不二男であり、主家を見捨てたという玉梓が言う悪、主家の仇をとったと八郎が言う善、その不二に引き裂かれた結果の死である。八郎（八人の男）の後裔である八犬士にも不二の問題は付き纏うことになる。雛衣を死なせた角太郎の挿絵には、肇輯口絵の大輔が重なる富士山が描かれている。

浜路の図像に表されているのは玉梓であり、それは浜路が玉梓の後身であるからと考えている。

「文外の画、画中の文」と馬琴が言うように本文と図像は不可分で補完の関係にある。どちらの比重が重いかという問いは無意味である。

善悪と犬の話ついで。

八房とは黒白の斑犬である。黒白は浜路の実母の名前のある通りに「あやめ」であり、あやめという振り仮名は善悪にもふられている。八房は魔犬というイメージがあるが、素は善悪の犬なのである。黒い痣のある八犬士も黒白の存在であり、仁義八行のばけものというのは一面しか捉えていない。

八犬士の黒い痣は牡丹の形をしている。牡丹は富貴歓楽の悪の象徴であり、それを抑え込んでいるのが仁義八行の玉である。

長い戦いの末に仁を得た八犬士からは悪の象徴の痣が消え、それと同時期に玉の文字も消えている。『水滸伝』の林冲が消えない刺青をされたことに対し、消える痣にしたところが馬琴の用意であろう。

八犬士の痣は黒牡丹。

〔唐の劉訓(りゅうくん)が牡丹観賞と称して人を招き、数百頭の水牛をつないで、これが劉氏の黒牡丹だと言ったという「分類東坡詩(墨花・注)」の故事から〕牛の異名。(三省堂 大辞林)

船虫誅戮に犬士が自らの手を汚すことはないと言ったのもむべなるかな

である。

牛と犬で思い出した。八房は犢に等しく大きい犬で、牛に比せられている。

●竜山免太夫縁連

籠山逸東太縁連の改名前の名前。なぜ縁連が竜ネームか。「笛の音に」の挿絵から縁連が鹿＝斑龍であること、鹿の性が淫であることからの命名だろう。鹿の角は龍の角に使われていて、鹿同様に「竜の性は淫」①28 である。

竜の徳は大いなるものだが、また害をなす悪竜、人を殺す毒竜もいる。まさに竜山免太夫縁連がそれである。連が虎に通じることもあるが、竜を善とだけ思っていると見誤ることになる。

●孕鹿

船虫の鹿の子模様。鹿はろくだから六＝りく＝戮との考えもありだが、「笛の音に」の挿絵の逸東太と船虫の様子を見れば、障子に描かれた鹿は「夢野の鹿」とかではなくて、『増補俳諧歳時記葉草』に

孕鹿 時珍曰、鹿の性淫也。

とあることであろう。ただ馬琴オリジナルの『俳諧歳時記』には、孕鹿 鹿の角墮 としかない。

●但鳥源金太素藤

但鳥を音読みするのを忘れていた。丹頂、丹頂鶴。農作物を食害する害鳥とみなされることもあるという。害鳥というのが良い。「三才図会」では、

形始定飲不食乃胎化也故名胎禽

とある。素藤の父親但鳥跣六業因が胎児を食べるというのはここからか。

○弓下 209

あかいたききは丹頂にして、これ鶴なり。

●礪時願八業當とときがんはちなりまさ

「美少年録」に十々鬼夜行太（とときやぎょうた）が出てきた。十々鬼は考えるまでもなく百鬼だから百鬼夜行という名前。

で、礪時願八業當を思い出した。礪時は十々鬼で百鬼。願當は強盗提灯「がんとう」で強盗。八業は夜行。業當は強盗。百鬼夜行強盗強盗という名前。願當、業當のように字を変えて繰り返す名前も番匠でみた。

●「侠客伝」では前身と後身が同じことを繰り返すことが説かれていて（十四回）、本稿ではそれを基に八犬伝主要人物の前身と後身を割り出すことをした。

『六三之文車』にも玉梓が出てくることから、玉梓という名前には怨霊になる名詮自性があるらしいと推測して、『連珠合璧集』に「書とあらば（玉つさともいふ）恨み」とあるのを見た。

と言うように八犬伝と言えども他の作品と同じ馬琴が書いたものなので、何

もない平野にひとり聳え立つ巨木ということはないのである。

●



この持っている物の名前はなんだろう？と思っていたが、⑤461に馬柄杓ばびさくとあり、話としても対応している。ちゃんと読むとどこかしらで分かるようになっている。

● 鯨内葉四郎はやうちはしろ

早く走ろう、なんて思っていたら急脚（はやうち）⑤429があった。

● 業当（なりまさ）⇒強盗、与冬（ともふゆ）⇒夜盗

● 但鳥源金太素藤（墓田権頭素藤の本名）

「ただ取り」だから盗賊らしい。源金太は現金だ、か現金なヤツだ、だろうと今まで思っていた。読んでみると源金太素藤と何度か書かれている。源は現と決めつけていたが、源氏の裏里見であるから源（みなもとの）金太素藤とも読める。そう読むと藤＝不二が活きてくる。

五色を五行に配当すると金は白で、源氏の白であるからその点でも里見との対になっている。

十二支では酉・戌と隣になる。

● 親兵衛だけは犬士同士の対決がないと言われているので、京都で戦う無敵斎は仮想現八、鞍馬海伝は仮想毛野、秋篠広将は仮想信乃、澄月香車介は仮想道節、種子島正告は仮想大角となっている、とした。義の人荘助に相当するのが誰か今一つ分からない。小文吾とは叔父甥の関係だから仮想でも戦わないだろうと決めつけていたが、意外な人物がいた。素藤である。口絵挿絵の図像を見ていると分からないが、これもさっき気付いたばかりで一体何を讀んでたの？という感じだ。

素藤は「骨逞しく肉多」く「現好肥たる大漢」⑤346で、これに対して小文吾は「全身肥満の大漢」⑧17なのである。



英泉が描いた馬琴が思う理想の「全身肥満の大漢」である小文吾。

「現好肥たる大漢」の素藤の図像もこれに準ずるべきなので、挿絵口絵はまるっきり馬琴の意を得ていないということになる。

●墓田権頭素藤

権は犬と言っていたから困った。犬の頭である。ここで思い浮かぶのは止水に映った伏姫が「その体は人にして、頭は正しく犬」①210であったこと。素藤譚の基本はパロディだ。犬の八房を育てた妙椿狸は、里見への報復のために犬の素藤の面倒をみるのだ。

江戸人は八に富士山を見る。八＝富士＝不二＝藤であるから、八房は藤房である。ずっと前だが『太平記』の藤原藤房と素藤の関連にふれたことがあったような。

馬琴の言い方を借りれば素藤は「素より不二」なのである。善悪は不二なのだから、素藤の初めの行いは善であったのだ。

親兵衛と素藤の戦いは善と悪の犬の戦いでもある。善と悪で思い出したが徳用の素の名前は二六郎という。足して八郎で、親兵衛は悪の八郎とも戦わないとならなかった。全ては不二だからである。

本文の通りに墓田が蛙の名詮自性だだけ思っていると単なる人面獣心物語である。～とのみ思わせるのが馬琴の手法であることを忘れてはいけない。

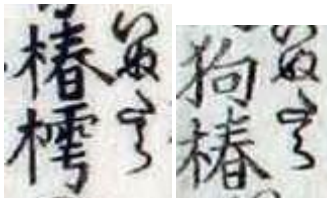
●



照文の動作の意味。九十七回を讀んでいてハッとした。

七十二回に「五の姫うへはおん耳垂珠に、黒子あり」④197とあるのを描いていたのだ。芝居絵的になにか特別な意味があるのかと思っていた。

● p 252



同じ「いぬたら」なのに違う。面白いのは前者で、椿に「いぬ」と振り仮名がある。狸は野猫で虎なのに、妙椿とは妙な狗なのだろうか。

●河鯉権佐守如かわこいごんのすけもりゆき

①鯉は胙である。また義実が河に鯉を釣に行き八郎と会ったこと、それに対

応して親兵衛が守如の息子孝嗣と会うことも含まれる。②権はけんで犬である。権佐守は犬を左け守る③如は雪。

●のき

軒だとけん＝犬と読めるので、通常は檐の字を使う。

●八犬伝を読んでいると、牛根孟六から牛は「モウ」と鳴いていたことが分かれると書いた。

⑤170「那牛鬼は（中略）咩（もう）と鳴く」とある。咩はイン、オン、ほえるだからモウというのは字面による馬琴の当て字であろう。

●呪師・放下師・刀玉の、猿楽⑤114

対牛楼で『猿楽記』を引用した口上のあとに出てきた人物を思い出せば察しはつく。

●房の項の続き。

房は「ま」だから魔とした。さらに読み進めると「次の房（ま）を検するに（中略）魔夫太們的尸骸あり」とある。八房とは八つの魔だから、八房の八人の子供である八犬士も素より（馬琴は素よりが大好きである）魔人なのである。そこを伏姫読経の功德による八房の得度と、仁義礼智の玉（魂）によって犬士は善の人格を備えることになったというのが悪から善という読みである。

「素より」に意味があるのか馬琴の癖か、数えるのが面倒な位に頻出する。素は素藤の素だから意味があるかもしれない。素藤は「素より不二」であると読めるからだ。八犬伝の文脈からいうと相反する善悪も愛憎も不二である。馬琴は人間は素より不二であると見做しているようである。

次に多いのが「辛くも」である。辛は木辛で梓になるから気になるが、意味があるのか馬琴の癖か全部読まないといえ何とも言えない。

●道節の落鮎親子へのしょうもない仕返し計画に、「その義寔におもしろし」と笑坪に入って賛同してくれたのは現八⑤47なのに、定正への復讐計画を信乃に話して諫められてしまう⑤79。

現八がそれは面白い、やろうやろうと言った時に信乃はヘラヘラ笑っていただけ、大角に至ってはそこまでやるかよ～と思っていたのだから、道節にはその場の空気が読めないのである。直近では⑤65の「道節扇を笏に把」以下の発言も同様である。

●2011/06/11の記事に

道人を（てらをとこ）と読むところは他になかったかと考えたところ、寺の話ということで百八十回上（⑩）をサラッと見たら p182 に道人（てらをとこ）とあった。特別な用例ではないようだ。

●七十回を読み進めると、p163 に

院中常に寂寞たり。（中略）唯一箇の道人（てらをとこ）

とある。何回も読んでいたが、初めて気付いた。のちに犬山道節が登場する（p187）ことを思うと、道節の変名であった寂寞道人がさり気なく仕込まれているのかなと思った。

以上のようなことを書いた。本日読み進めて⑤になり p35 に

寂寞として答もなきに

とあったあとにまた犬山道節が登場する⑤38。分かりやす過ぎる。

●箆大刀自もいろいろと考えてみたが、七十八回を読んで考えた。この回は刀に纏わる話で、わざわざ大刀(たち)の名称について断り書き④352 をしている。と見ると箆大刀自には大刀がある。箆も武具である。謡曲『箆』によって箆大刀自の口絵の額縁は梅と矢筈なのだ。口絵の箆大刀自は首と薙刀を持っている、名詮自性「自ら箆、大刀」であるいかにも好戦的な婆さんなのである。

箆大刀自は片貝殿とも呼ばれている。貝は玉だから玉の欠片ということなのだろうか。

●房

ふさとかぼうとか読んでいたが、八犬伝中での使用例は「ま」がほとんどである。「一房ひとま」④312、「八席房はちじょうのま」がある。とすると八房は「はち（やつ）のま」となる。まは魔で、絵解きでも天狗を描いて魔と読む例が多い。水滸伝では百八の魔君であるから、八房とは八の魔である。水滸伝の隠微は魔君が本然の善に帰るところという、八房が善の犬になるところが隠微である。

●磯九郎

賺す④268 という字が何度も出てきて磯が浜路と対になっている名前だと気付いた。磯までは浜と対でいいが、磯＝五十で五十九郎、五九郎＝御苦労、頼まれもしないことを酔った勢いでして、終いに殺されてしまうのだから御苦労なことなのだ。

●いかなれば枉津日の、神のしうねく夤縁て、かくまでに物をおもはするぞ
③273 という小文吾の述懐を読むと、災厄は打ち続く枉津日の神のせいと読めるが、この後に毛野と会うことになることを思えば、単に福の倚る所、将縞の伏

する所、彼にあれば此にあり②196 なのだから、枉津日の神とか読む方まで考えることはないのかもしれない。

●小文吾を抑留した馬加大記。馬鹿な大鬼と読んだが馬鹿という語が使われていないと面白くない。で、同じく小文吾の「相撲に負ぬわれにしも、只勝がたきは馬鹿者の、無法なりき」②255 という台詞があった。馬加大記の行為は馬鹿者の無法なのだろう。

●大輔の証言と地の文との違いは先にも触れた。こんなものもある。

背は黒く、腹は白き狗の子①285 が信乃が語ると「全身、黒白八个の斑毛ありて、その足はみな白」になってしまうのだ②324。理屈をつければ信乃が与四郎のことを言う前に、大が八房について牡丹の花に似た「その数八个の斑毛」②317 があったと言ったことに影響されて記憶が上書きされてしまったと言える。

もし馬琴がそういうつもりで書いているとしたら、登場人物の台詞に振り回されるのは考えものである。地の文を客観、台詞を主観と捉えるならば、状況を読む場合には地の文を優先するのが良いのではないだろうか。

●高瀬の如き方桴②197



高瀬といえば高瀬舟だろう。初版本は信乃・見八のバックが無地なので空としか思えないが、後刷本は薄墨改変によって本文の通りに河であること、屋根は高瀬舟の見立てであることを明らかにしている。

●見八（現八）と信乃が流れ着いた蘆原の件を読んでいた。犬飼見八信道まではなんとも思っていなかったが、蘆原の文字で閃いた。信道とは神道である。のちに親兵衛は神童と言われるようになる。犬（伏姫神・ぬい）と犬（八房・房八）の直系が親兵衛なのである。小文吾が田力男、犬田力男とすると、親兵衛の開かれた左手から現れた珠は天照が岩戸から現れたことを示しているかのようだ。古那屋の段が神話的なのも信道が絡んでいるからだろうか？

●其甘きこと飴蜜の如し。蒙昧蟻附して去ること能はず。

有村、有種

●
拂^{はら}雲^{うん}
霧^{きり}
妖^{あや}孽^{まじ}
孽^{まじ}
体^{てい}

この犬誠に得度せり①224 と伏姫が八房に対して思った時には、まだ雲霧は払われておらず妖しみは続いている。本文にある通りに大輔が撃った鉄砲の音と共に雲霧は拭うように払われたのだから、妖しみ、つまり玉梓の怨霊の呪いが解けたのは八房の得度とは関係ないのだ。

八房に後身っているはずの玉梓が、挿絵（玉つさ怨霊）のように燐火か人魄として滝田のかたより八房の元に閃き来るのは八犬伝中最大の矛盾である。

これを説明できるのは

甲夜よりわらははうち臥して、熟睡したりし夢ごころに、いと美しき少女子の、枕に立て呼覚まし、今宵おん身を労して、犬塚ぬしに如此々と、いはまく欲き事侍り、こなたへ来ませ、と先に立て、伴る④123

という浜路姫の台詞の箇所。

矛盾は狸を浜路姫、玉梓の怨霊を浜路の霊、八房を信乃に置き換えれば、三者はそれぞれに独立した存在なのでであるということを発明することによってのみ説明できるのである。

読者は馬琴によって八房は玉梓の後身とのみ思い込まれるのだ。

●小幡木工頭東良こはたむくのかみはるよし

小幡⇒幡小⇒番匠、木工頭⇒大工の頭、東良⇒棟梁。大工、大工の頭は棟梁。番作、匠作、木工作といい馬琴は番匠が好きだ。『番匠童』を読むと良いのか？

●『三国一夜物語』

巻七から読んでいると、二十四（才）に「高燈籠の暗号（あひづ）」とあった。馬琴の用法は解説する暗号ではなく符牒のような合図である。

●八犬伝百四十四回から読んでいると、暗号（あひづ）⑧179、和漢暗号、妙対暗号⑧182 と読んだところまでで三回も暗号という語が出てきた。馬琴がしつこい時には何かある。上記が「暗号解説」の意味で使われていないのは明らか。まあ、他にどれだけ出てくるか、用例はどうか調べないと分からないけど。

●平田張盆作与冬へたばりぼんさくともふゆ

下のように見ていくと、「餓勞れてゆくことかなはず」「番作」「われは山客夜盜（よとう）にあらず」①267 といった大塚（犬塚）番作の様子をパロった名前であることが分かる。与冬が夜盜に見えると分かる。仲間の礪時願八業当（なりまさ）も強盜で、そのままである。

●素藤の話が素藤以前のパロディーで成っていることは言うまでもない。ということ的前提として読んでいくと今まで気付かなかったことが見えてくる。

卒八そつはちという名前。馬面郎という渾名は顔が長く、板歯が斜めに反っているので名前まで卒八という。反歯と卒八が音訓似ているということを名詮自性かのように馬琴は書く。自分も⑥339 までを読み返すまでは単純にそう思っていた。しかし元がなければパロディーにはならない。ただ卒八＝反歯では意味がない。卒八という字がクセモノである。卒八の行動を読んで分かった。結城落城の折に里見季基と共に乱軍のうちに死んだ「八騎の従卒」①20 のパロディーネームである。明らか過ぎる名詮自性はひっかけなのだ。

●犬飼見兵衛は見と犬が音通だから犬兵衛であるとした。とすると里見とは里の犬である。八房を里見の犬と読んだ義実自身も犬の人であった。五十子だけが“いね”＝犬ではなかったのだ。

節用集に載る里見の八犬士。里見と犬というつながりの理由も馬琴ならそんなことで捉えたかもしれない。音通とははっきり言ってこじ付けであるから、理由など後付けで良いのである。

●根性

「江戸語」にも性根、心根、精神の意味で載っているが、馬琴が根性（こんじょう）と言っていなければ根生野飛雁太素頼＝根性の僻んだ素より成り立たない。

盗児根性⑨331

岩波版では「ぬすびと」にしか振り仮名がない。十条に振り仮名がないのが特別なので、原作ならあるだろうと早稲田君を見たら、



こん志よう、とあった。根性の僻んだ素より、で良い。

●根生野飛雁太素頼と名前が出てくる長城枕之介惺利（をさきまぐらのすけはやとし）、お先真っ暗、早や年である。生れつき根性が僻んだとかお先真っ暗

とか馬琴の心境なのだろうか。自虐ネタとすればそれはそれで面白い。馬琴日記を読めば自虐ネタなのか、ただの思いつきなのか分かるかもしれない。

●根生野飛雁太素頼（ねおいのひがんともとより）

根性の僻んだ素より。元から根性の僻んだ奴なのだろう。と読んでいくと、犬塚素（もと）より智勇に秀て⑦243 とあり、しょうもない対に笑う。

●八犬伝を読んでいると、牛根孟六から牛は「モウ」と鳴いていたこと、婆々が顔は狗児（わんわん）⑦31 から犬はワンワンと鳴いていたことが分かる。で、根角谷中二麗廉（ねづのやちゅうじうらかど）を思い出した。鼠が裏の角でチュウという名前ではないか。鼠は、嗚呼がましや鼠の輩①146 と言われるもので、根角谷中二は箴大刀自に化けた政木狐に「愚か」にされた⑦33 のだから鼠で良いのかもしれない。

●五十子

五十子についても五十を「いそ」と読んで磯子だから浜路を引きだす海浜ネームであるとか、琴にある磯から龍に関する名前であるとか考えてみた。最近の読み方で読むとどうなるか。

馬琴は五十を「い」と読む例が多い。子を「ね」と読むと、続けて「稲」となる。稲を名前にもつのは栗飯原胤度の正妻稲城（いなき）と箴大刀自の執事稲戸津衛由光（いなのとつもりよりみつ）がいる。両者とも犬士と関係があり、稲戸津衛由光に至っては、箴大刀自によって処刑される莊助と小文吾を密かに助けた人である。稲は善であるようだ。「毛吹」をみると、稲は鯉とともに孕むの付合である。鯉というと雛衣であり、その父犬村蟹守儀清となり、守・衛と犬士を護る人である。

稲と犬は音通だから、稲戸津衛由光とは戸（家）を衛る犬ではないか。第四輯巻頭の

一犬戸に當れば鼠賊進む能はず、犬や犬や猫児の虎に似たるに勝る。

ぬばたまの夜をもる犬は猫ならで頭の黒き鼠憚る。

が稲戸津衛由光の名詮自性ではないだろうか。

で、五十子＝いね＝犬となり、伏姫の母である五十子も娘同様に犬ということになる。人＋犬とは伏姫と八房である前に、義実と五十子のことであった。

大輔の母濃萩はつま恋う鹿である。濃は恋、鯉。萩は鹿。犬、恋というテーマは伏姫、大輔それぞれの母からもたらされたものであった。

●「毛吹」に芭蕉⇒扇とある。

● 鈴子



図像が対応しているのはちょっと見では分からない。本文を読むと八郎が義実、毛野が小文吾に自分がしたことを得意気に話していることで分かる。

で、左では酷六の妻子が谷に落ちて死ぬところを描いている。右ではすでに階段から落ちた母親にぶつかって死んだ娘の鈴子が描かれている。

鈴子という名前。猫に鈴のイメージで猫系と思っていた。きっとそれでもいいのだろうけど、八郎と毛野の対応から考えると、鈴子の前身は酷六図で谷に落ちていく名前のない幼児ではないかと思われる。

つまり鈴はりん、子はねでりんね、輪廻と読める名前なのである。前身も後身もろくな死に方をしない子である。

●



天津九三四郎が持ってるものの名前が分からない。こんな時は『守貞漫稿』というのを忘れていた。



太神楽かとググる。花駕籠鞠である。鞠と言うのが怪しい。 貌姑姫は羽子板を持っているし、なにか正月に関係しているのかも。正月といえば浜路だし、縁は梅だろう。なにか別のことを言っているように思える。九三四=16 というのも気になる。

● 鯛髻源八

石亀屋次団太の旧名。

石亀の地団駄《「雁が飛べば石亀も地団駄」の略。身の程を考えないで、何をまねようとカんでも限界があることのたとえ》浜路が旧名の正月に重点的な意味があったように、次団太の旧名である鯛髻源八に注目しなくてはならない。

鯛の髻源八 マツカサウオの別名、と出てくる。こんな名前の魚が本当にい

るんだ、と喜んではダメ。源八に注目である。源八＝げんぱち＝現八であり、現・八郎である。石亀屋次団太と出会う小文吾には義実の役回りがふられていることが多い。つまり八郎と義実の出会いによって物語は動いていく契機を与えられるので、ここでも同様である。八郎と義実・玉梓に対して次団太と小文吾・船虫の対になっている。こう書くからと言って玉梓と船虫が関係あるというのではない。話の構造上対になっているというだけのことだ。

あるじは鯛髻源八と呼ばれたる（④231）とサラッと流してしまうのが馬琴のいつもの手である。

●無我六

彼無我六がいと無我なる（④206）

ただ無我と言いたいだけなら無我四郎でも良い筈だが無我六なのは、むがろく、六が六ということ。

●於兔子。

子子子子子子子子子子「ねこのこねこ、ししのこじし（猫の子子猫、獅子の子子獅子）」

子は「ね」だから於兔子は「おとね」になる。竹林巽は虎でありながら龍の要素がある。音音の夫代四郎は代＝よ＝四で四四郎、獅子男であり、龍の子供である。代四郎・音音夫婦と巽・於兔子夫婦は対であり、反対になっているということ。

●於兎＝おとが虎なら音音は「虎ね」「虎虎」になってしまう。善の人なのに何か変だ。で、考えた。音音には虎的な要素があるに違いない。悪いこと（？）と言えば世四郎との不義密通なので、そこら辺を音音が語っているところはあそこら辺なので読んでみる。

過去の罪は道節に許してもらったものの世四郎も音音はそのままなので、伏姫に富山まで拉致されて「花咲のおきな」「花さきのうば」という虎とは別の要素を持った人間にならなければならなかったということだろう。奴婢密通して産たる子共は、畜産に比せらるゝので、その子の力二・尺八は名詮自性八房の犬なのである。

●心情的な部分もあって、ずっと小文吾の前身は朴平にしていたが、七郎にする。七郎の七を考えたことがなかったけど、ふと思った。七郎の七とは七夕の七ではないだろうか。そうすると小文吾が瓢箪柄男であることも説明がつく。

小文吾は朴訥な印象から朴平、剛毅朴訥は仁に近いから親兵衛と親戚なのだと考えてもいた。しかし、仁（親兵衛）に最も近いのは親の房八である。

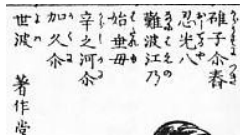
●『完本八犬伝の世界』

『和訓栞』に「一説に楚人虎を於兎といふ、於是発声なれば、倭人も同音にいひにしや、らは多くそへていふ辞也といへり、或は高麗の語也ともいへり」

とあって於兔子、つまり虎のことである。」（p471）

とある。前に音音（おとね）と言う名前で音（おと）＝音（ね）であるから、於兔（おと）＝ね、で続けて「ね子」猫で於兔子は虎であるとした。『和訓栞』があれば言うことはないが、なくてもなんとか分かるようである。猫は虎であると馬琴は言っているなのでその通りに考えれば良いのである。

根五平なんて猫平が見え見えである。



辛之に気付いていればもっと早く「木からし」が木辛と分かっていたはず。八は「や」だから八房はやぼう、野望の犬である。八犬とは野犬である。元々は馬琴が言う「暴虎馮河之勇」⑤195の輩でしかないのだから、野犬には仁義八行の玉（魂）が必要なのだ。道節は玉を手にしていなかったらずっとエセ火行で軍資金を稼ぎ改心していなかったろう。



玉梓—浜路、八郎—信乃の位置関係。

一作に背負われた大介は薬缶を持った女の背中の子。玉梓と義実の間にある獅子と牡丹の絵は、犬の与四郎が四白とも呼ばれたことから、与四⇒四四で獅

子、四白⇒夜白で牡丹に対応している。

左図には獅子、牡丹、石畳があるが何か足りない。信乃が着る蝶である。獅子に蝶、牡丹、石畳が揃ってこそ「石橋」になる。二図は補完関係にあるのだ。



左右反転すると上の八郎切腹図との関係が分かりやすい。房八、房八と言うが、名札にあるとおり房八郎である。妻のぬいと一緒に八房の犬と解釈されるが、元々は房・八郎である。現八は三十三回のタイトルにある現八郎、現・八郎であるから、古那屋では二人の八郎が同時に競合しないよう現八が出て行ったあとに古那屋にやってくるように構成されている。馬琴の上手いところだ。

もう一人、大八。親兵衛の渾名である。上記二人の例からみれば大・八郎だろう。親兵衛は八郎を超えた存在の大八郎である。七犬士が八郎譲りの欠点を持っていたのに対して、親兵衛は伏姫の教育もあって欠点は抑えられている。その点でも八郎を超えた存在である。上記のことを踏まえれば大八は蔑称ではない。



『江戸小紋柄図鑑』を見ていて分かった。右下にある南方系のよ
うな植物は何？と思っていたのだ。「芭蕉」である。芭蕉と言えば松尾芭蕉だ
し、この挿絵の設定は七夕の夜だから、松尾芭蕉、七夕でググれば、
荒海や佐渡に横たふ天河

となる。画中の文は「荒海や佐渡に横たふ天河」である。画中の文はその挿
絵やらをそれに沿った直近の文章を当てはめるだけではない。と書いていて気
付いた。氏元が掲げている扇、なにがアップレだよと思っていたが、木枯らし
図で信乃が持っている黒い扇とつながっていたのだ。あまりにこれ見よがしに
あるのでかえって注意がいかなかったのだ。信乃の家の村雨のように。

伏姫・手束図の皂莢（さいかち）や、この芭蕉のように木や植物もただなん
となくある訳ではないのだ。



信乃は八郎の後身である伏姫の子であるから八郎に置き換えていいだろ

う。となると八郎図での玉梓に相当するのは浜路になる。

●蟹目前（蟹目上）

「かなめ」の前でも上でもいいから読んでみる。

●扇谷おうぎがやつ定正さだまさ

扇が八つ。扇は末広がり。末広がりは八。八が八つで六四、六四はむし、むしは虫で虎。虎に定めて正しい、になる。笑える。虎の大ボスなのだ。もともと扇谷は上杉の一族だから虎である。

●大介

大⇒一八は八。介⇒かい⇒貝⇒玉。八玉。

●権八は犬八だけど、八は何なのか？

犬侍でピンときた。八は人で、犬人（間）である。墮落しきった権八は「犬猫にも劣りし汝」p117と言われる。

伏姫とは人+犬だけれど、人を分解して八+犬で八犬でもある。八房との関係で見れば、伏姫もまた八（房）の犬である。口絵の伏姫の房がはっきりと分かるもので全部で九つ、左だけで八つの房をつけているのもその表れだろう。手元にある『演劇界』の表紙は赤姫だが、こんなに房はつけていないのである。他を知らないのに、強くは言えないが、これが伏姫だけの特異な姿であれば意味するところは明らかである。

●「比翼文」読む。

きじは雉でいい。問題は権八である。ふりがながない。「ごんはち」と読んでいたが「けんはち」でも良い。けんはちならば犬飼現八の元の名前である。けんはちとは犬八である。権八は戌の日に生まれているp81ので犬八という名前で良いだろう。

犬飼現八の本名は、玄吉で亀吉の名前の通りに肇輯口絵では甲羅をつけている。玄吉を親子心中から救ったのが犬飼見兵衛で、玄吉を犬飼見八と改名する。のち見八は玉の由来を知り現八とまた改名した。犬飼犬兵衛であったということだけである。

七夕の牽牛星は別名犬飼星であるから、犬飼見兵衛という人は七夕と犬という、いかにもな八犬伝ネームである。

玄吉も黒吉ではなく、玄は犬に通じるのだから元々犬吉で良かったのだ。玄吉を亀吉とすると、亀＝き＝鬼でかくれんぼの鬼は玄吉である。

ついでに亀＝鬼であるから亀篠は鬼なのである。鬼笹を使う鬼の修正会がある。さらに篠を「ささ＝酒」とすると、亀は口絵のように酒を流しこまれる瓶で「瓶酒」という名前になる。亀を鬼、篠を三三で六とすると六＝りく＝戮で

殺す、亀篠が無理やり飲まされている酒は「鬼殺し」となる。

●なぜ馬琴は百八十回にこだわったのだろう、とふと思った。最近百八十を見れば百木と読む。百木をググってみた。

御苑生の百木の梅の散る花の天に飛び上がり雪と降りけむ（万 17-3906）

梅と雪、八犬伝っぽい。

●七輯口絵 出来介は瓢箪柄の着物。天の川の見立てか。

蜷崎照文は耳に手をあて、浜路姫が打つ鼓の音を聞いているように見える。ここまでが「うちおと（打ち音）す鼓のさえや」で、霧の中に船が一艘で「桐一葉」となる。



左図の縁の雲は右図の雲に対応。左図縁の鳥は浜路姫の浜千鳥に思えるが、右図の稿本にはカモメとあるので、左図もカモメとしておく。蘆は右図の縁にある。一葉図の屋根は浜路姫図の船である。一葉図のバック、何も描かれていないのが空であるとの憶測を呼んだが、後刷本では水飛沫が描かれており、浜路姫図の川と対応している。後刷本で加えられた水飛沫がこれも初版本はとにかく出版してしまえというやり方の表れだろう。

朝妻船（あさづまぶね）は、滋賀県琵琶湖畔 朝妻（米原市朝妻筑摩）と大津と間での航行された渡船。東山道の一部。

朝妻は『和名抄』に「安佐都末」とある。朝妻川の入江に位置する。船舶がしきりに出入りしたが、慶長ころから航路の便利から米原に繁栄をうばわれ、おとろえた。寿永の乱の平家の都落ちにより女房たちが浮かれ女として身をやつたものが、朝妻にもその名残をとどめ、客をもとめて入江に船をながした。

その情景を英一蝶がえがいた絵が有名である。烏帽子、水干をつけた白拍子ふうの遊女が鼓を前に置き、船に乗っている絵は、五代将軍徳川綱吉と柳沢吉保の妻との情事を諷したものであるという。一説に英が島流しされたのはこの作品が原因であるという。英が絵に讃した小唄は、「仇しあだ浪、よせてはかへる浪、朝妻船のあさましや、ああまたの日は誰に契りをはして色を、枕恥かし、いつはりがちなるわがとこの山、よしそれとても世の中」。「わがとこの山」は、犬上郡鳥籠山であるのを、床の山にかけたものである。長唄などもつ

くられた。

と朝妻船を調べていくと、以前本当にあるんだと思った天野川に当たった。隅田川などと言っているが天野川＝天の川である。出来介の瓢箪柄は七夕のヒントである。

以前早稲田君で『河内名所図会』前篇上をみた時に天野川があって、出来すぎた名前だなあと放っておいたのだ。

交野郡にあるのが天河（あまのかハ）である。交野加太郎も何気に七夕ネームなのであった。

●小文吾が瓢箪柄になるのは「自若として小文吾暴牛を駐む」の牛と絡んで以後のこと。対牛楼は前フリか。

●歌舞伎ということで「芝居絵的考察」を見返してみて、これはと思った。

土田土太郎は五十日の熊かつら。p3

先に三太郎の名前は岩熊鈍平の名前から作られていると言ったが、画中の文として熊かつらの熊が鈍平を指しているのかも知れない。

●三代目瀬川菊之丞

浜村屋路考が浜路の造型になにかしら関係しているのではないだろうか。『馬琴の戯子名所図会をよむ』p104 路考台に「田舎娘のぼうし門」とあり、三代目菊之丞が演じた「田舎娘」は「いなか娘のふりは大でき」と評されたようだ。またウィキによれば、人気・実力ともに江戸歌舞伎の最高峰として活躍し、文化5年(1808年)には女形ながら座頭となったほどだった。風姿と口跡に優れ、地芸と所作を兼ねたほか、世話物の娘役と傾城を得意としたという。初代路考ではあるが初代芳沢あやめ(難波の芳沢あやめ『小説比翼文』)とともに女方芸の基礎を築いた。浜路の実母が黒白(あやめ)というのも路考と浜路の関連を窺わせる。

真の素性が分かった時の浜路姫の台詞に「田舎女兒(いなかむすめ)」④205とある。浜村屋路考ひとりによって田舎娘の浜路と傾城(傾国の美女といったニュアンスで)の玉梓というイメージが結びつくのである。

路考については自分の書き方では混乱するので『馬琴の戯子名所図会をよむ』p102 以下参照。



広重画 市中繁栄七夕祭（部分）『浮世絵大系』17より

瓢箪柄の着物を着ている小文吾は谷風梶之助がモデルではないかと思うし、親兵衛が子供で力持ちという部分だけ大童山がモデルだろう。小文吾がやけに牛と関係を持つことから逆に考えていくと、牛と瓢箪柄をキーワードの七夕と組み合わせれば梶という語は自然と出てくるだろうし、梶と相撲取りならば谷風梶之助を思い浮かべるのではないだろうか。また「落人を奇貨として」の火に包まれている小文吾は、～の助と擬人化すれば「火事の助＝梶之助」だろう。

小文吾は子供の時から相撲をしていて大男であり、英泉のみが馬琴の意を得て「全身肥満の大漢」⑧17に描いたという。「落人を奇貨として」のスマート小文吾から見ればずっと相撲取りである。馬琴としては全身肥満の大漢で相撲取りという記号を強調したかったのだろう。

上記の人物がモデルならば、他にも当時の実在の人物が紛れ込んでいる可能性はある。

岩波版八犬伝⑩の解説によると、馬琴の兄や妹から家族、渡辺華山・蒲生君平らの友人・知人が、特に「八犬伝」の人物のモデルらしく、彼の不幸な妹は、浜路のモデルであろう。

とある。妹がモデルと言っても、おそらく不幸なところだけだろう。

谷風梶之助。本名、金子与四郎。



大童山と谷風（『写楽』内田千鶴子より）



八犬士は名前が残っているだけで何者であるのかは分かっていない。小文吾が相撲取りの大男であるとか、親兵衛と親戚であるとかは馬琴の創作である。

創作であるからこそこういった二人の取り合わせがイメージとして使われたように思う。

大童山—谷風＝親兵衛—小文吾、大童山—金子与四郎＝親兵衛—姥雪代四郎。谷風と金子与四郎は四股名と本名だから同一人物である。信乃と犬の与四郎の関係の再演としての親兵衛と代四郎とみるよりも、親兵衛の庇護者になるはずだった小文吾の二身一体の代理としての代四郎とみたほうが両者の関係は捉えやすいかもしれない。

剛毅木訥は仁に近いのだから小文吾が親兵衛仁の親戚としての設定は分かる。しかし、それだけでは相撲取りという設定にはつながらない。谷風をみると、御猪狩風にかかって死んだとある。小文吾が大猪を倒すのは、御猪狩風で死んだ谷風に対する馬琴の追善の気持ちの表れかもしれない。

梶之助の梶を火事と読むと「落人を奇貨として野武士等放馬を撃つ」の挿絵で小文吾だけが火に包まれているのはなかなか面白く見える。

●『絵本太功記』を見ようと名著版のページを繰っていたら、最近ついに老眼がきたので間違った頁を開いたら、萩の上風、萩の下露がいた。これって次団太・鯉三の変名である。出てくるのは『伽羅先代萩』。女を男、のを野にしているが名前の出处はここだろう。

『伽羅先代萩』のタイトルは先代萩で有名だけど見ても読んでもいない。気をつけようって言うか『絵本太功記』である。

●板野井太郎、交野加太郎、土田土太郎

定包図は左右反転。



当雑文では浜路は玉梓、犬士は定包の後身八房の子、左母二郎は戸五郎の後身としている。

さて板＝岩、交（こう）＝熊（ゆう）、土＝鈍、郎は平みたいなものなので、三太郎は岩熊鈍平の頭文字をとって出来た名前である。

破れ傘は簾。雨だれも簾。定包図の手紙は玉梓で、正月＝浜路に対応している。文章中だけで手裏剣（①101、②138）が共通しているので、手裏剣がない左母二図では戸五郎の腕に刺さっている尺八に相当するものに気付かなかったので随分印象が違う絵に思えたのだ。

口絵の左母二郎が左文二郎なのも、妻立の次は左母二という謎々みたいなものに気付かせないためだろう。左文二郎ならかえって左文字＝魚・男は分かり

やすい。網乾左母二郎と浜路と言う名前も、浜の路で乾された魚という意味で関係付けられている。出版に関わる馬琴にとって基本的に正月は梓であることも見逃せない。

左母二図には相当する姿がない定包は軒のき（けん＝犬）の月影である。本文と挿絵「四凶挑戦す」でいえば犬山道節と犬川莊助が犬の月影になる。軒が犬に確定できたので、三輯口絵の背介、宮六図の「軒のつま」は犬の妻、つまり信乃の妻浜路になる。この解釈は随分前から合っていたようである。

ついでに言うと、浜路が持つのは強盗提灯で浜路は賊婦である。しかし浜路が賊婦な訳はないので、考えると賊婦がいる、玉梓である（①114）。龕灯と書いてしまうと強盗提灯をイメージしにくい。

ついでに言うと、後刷本だとバックが黒くなり浜路が持つ強盗提灯からの光が左母二らを照らしているのがハッキリする。とにかく出してしまうというのが初版本。後刷本が完全版なのではないかと考える所以。初版本が価値があると言うのと内容は別問題であろう。

これも随分前に書いてて忘れたけど、図像の相似で八郎から伏姫の輪廻転生を表した最初のはこれ。



八郎の後の杉倉氏元一人を、伏姫の後のおさめつかひとをとめ使の二人の着物に分けて描いている。

● 杣木朴平・無垢三・定包

杣木朴平は無視をしてもいい平以外は「木」である。朴平の相棒の無垢三。六・九・三を足して十八、十と八で「木」で、ふたりとも木である。対して定包はさだかね、定金で金である。五行相剋で言うと金剋木であるから、朴平と無垢三にとって定包は元々勝てる相手ではないという名詮自性なのである。

● 玉梓の梓は木+辛で、きしん鬼神と読んだ。信乃・浜路図の「木からしはまたふかねども君みればはつかしのもりにことのはもなし」を思い出した。この図は玉梓と定包のことが描かれている。で、木からし、木枯らしなんて思うからいけない。木に辛子で梓である。または玉。ふかねどもの吹く、森はそれぞれには縁語だろう。君みればはつかしは「孝吉に愧ひて」①108で八郎、ことのはもなしはそのまま言葉もなしで良いだろう。つなげると、玉梓は八郎を見れば、八郎に愧いて言葉もない、と読める。

こうして信乃・浜路図を読んでくると、縁の蝙蝠は蝙蝠扇、つまり二人が持つ扇に注目しろと言うヒントだったと分かる。

蝙蝠⇒扇⇒夕顔⇒白き扇の、いたうこがしたる⇒薫物と云句に、こがると付て⇒輪廻

（玉梓）瓢核のごとき歯を切て①114

瓢は夕顔。夕顔は瓢箪。瓢箪は七夕。七夕は梶の葉。

●梶の葉。馬琴は二十四回の終わりで神宮村の考証をしている。それを紙が余ったから書いた「無益の弁」と言っている。しかし、無益だと思わせておいてかなり重要なことを書いている。

かにはは、梶原を訛ったものという。かには蟹で梶と同じということになる。上に加えれば、

瓢は夕顔。夕顔は瓢箪。瓢箪は七夕。七夕は梶の葉。梶の葉は蟹となる。蟹は嶋村蟹であり、八犬伝中では力二郎（蟹男）蟹守、蟹目前など忠臣として死んだり善の側として死んでいく。神宮河（かにはかわ）とは蟹は河ということである。故に川というのは八犬伝中に重要なファクターとしてなんども現れるのだ。

●ホウボウを見つけた。早稲田の曲亭叢書中の「物類和漢称呼部」にホウボウ 俗呼 国公魚、飛角魚、■（←漢字が出ない）公魚とある。

ホウボウ 市場魚貝類図鑑

[滝沢馬琴家春の食卓に「ホウボウの開き」。](#)

●

定 包

八 房

①定八 調子のよいこと、上手、追従

②包房 「ほうほう」か「ぼうぼう」で調べると、

ぼうぼう眉 煩悩の犬もありけば朧夜のぼうぼう眉にあふぞうれしき（「万載狂歌集」巻第十一）

●形見こそ今はあだなれなき親のゆづりおかれし貧乏の神（巻第十四）

これは随分前に肇輯口絵の八郎と、後に登場する息子の加多三こと大輔のことであると指摘しておいた。貧乏神の格好をした八郎こそ、大輔に玉梓の怨霊

を譲りおいた貧乏神である。

●師椀坊豪青 しわんぼうごうせい

前は吝坊豪勢、けちなのに豪勢と読んだ。これではそのまんまなので芸がない。青は緑青のしょうと読むとしわんぼうごうしょう、ケチな豪商つまり伊勢屋となる。

●蛙の願立て



●万里谷柳丸

柳に鞠からすると万里は鞠なので、五十子は隠れ七タネームである。

●松山五六郎尚永

数字は足すか掛けるかなので 11 か 30。30 は味噌なので、こんな御当地味噌もあるのかな松山味噌をググってみた。ない。山松味噌、ない。馬琴ちの側にあった味噌屋の名前なんかだったら分からないぞ、と思っていたら閃いた。松はしょう、山はさん。試しに反してみても「さんしょう味噌」でググる。あった、山椒味噌。江戸時代にもあったのか『江戸語の辞典』でも調べると、あった。尚永が分からないけれど、あとになると松山三十（まつやまみそじ）なる者も出てくるので山椒味噌で正しいだろう。

三十平（みそへい）なんてのもいる。

●直塚紀二六

鼓の音は雷ということで、鼓と言えば例の桐一葉である。桐一葉とは船だから、船、雷でググってみた。『古事記』である。雉がいた。

雉還らざりき。故今に諺に「雉の頓使（きじのひたづかい）」と曰ふ本これなり。

と本題はこれじゃない。「桐一葉」の図像。これは岩波文庫本『古事記』で言うところの「蘆原中国の平定」を描いている。何か訳の分からない図像は他のことを表しているのは分かっていたけれど、まさか『古事記』とは思わなかった。古那屋の段が神話でできているのだから、発端が『古事記』であってもおかしいことは何もないのだ。

ここに天鳥船神を建御雷神に副へて遣はしたまひき。

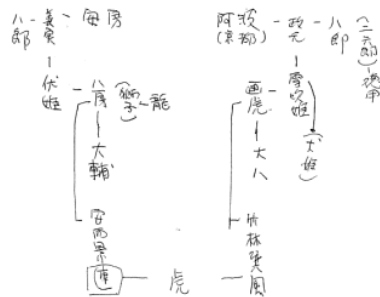
縁の上段は雲で天。下は蘆原。鷗で鳥。屋根が船。

うち落すは「打ち音す」で鼓を鳴物と考えたことは正しかったようだ。

屋根を船の見立てとする信多説は慧眼である。

●少名毘古那神

●



●天津兵内

天津は地名だから分解したりしないで調べててみたら「房州伊勢の宮」と言われる天津神明宮があった。以前みた伊勢神宮の神紋と同じ四つ菱である。浜路が死ぬまで頻出する紋様である。天津は安房ネームに見せかけているが、実は伊勢ネームなのである。でも兵内が分からない。内は「だい」らしい。へいだい、ひょうだい、神明宮でだいだいとぶつぶつ呟いていて閃いた。へいをけいに通わせてけいだい、境内で天津神明宮境内という名前はどうかろう。

天津兵内だったのが百四回（⑥39）になると天津兵内明時と名告りが明かされる。やはり明の字が怪しい。

犬飼見兵衛の養子となる

兵衛権佐（ひょうゑごんのすけ）に叙任

●天津兵内（あまつひょうない）がいたのだから天＝あま＝蜃＝白水郎＝尼＝海女＝甘＝亜麻くらいは思いついていないといけなかったのだ。

で甘利兵衛堯元を思い出した。甘＝天、てんりをググると

天理 自然の道理。万物に通じる道理。「—にかなう」

とある。堯元の四六城宅での理にかなった判断は天理であったと言うことができるだろう。ここでまた二人に共通する「兵」が問題になる。

は置いとして。甲斐で強調されているのは木工作が殺した動物たちの怨霊である。堯元とは元（前世）鷹だったのかもしれない。

●蟹と言えば伊勢なのだから、蟹崎照文が現れるところは伊勢に置き換えることが出来るのではないか。歌舞伎の引用を装ってはいるが、行徳での出来事も伊勢、おそらく神話に置き換えられるだろう。

富山は伊勢神宮であるとした。蟹崎輝武が富山で溺死したのも伊勢と関連付けられているからだろう。

と書いた。最近の考えを加えてみる。蟹を天に代えると天崎照文、天照アマテラスとなる。

第十回で死ぬまで蟹崎輝武表記だったのが、古那屋で照文が語る輝武は照武表記に変わる。初めは「輝る竹」(竹取物語)であったが、古那屋の場が親子とも天照(神話)に統一しなければならない内容であったということだろう。

●竹林巽⇒竹林巽風

『易経』に巽(巽為風)があった。「そんいふう」だけど「巽を風と為す」と読む。風と言ったら、同じく

『易経』にある風は虎に従うので風＝虎と考えて置き換えると「巽を虎と為す」になる。これによって巽風は竹林の虎になる。

竹林巽⇒虎

於兔子⇒猫

虎童子

画虎

五虎

そして「苛政は虎よりも猛し」の虎尽しである。

●入間三三(いるまのさんぞう)

散々参る。

●十条左吾(じゅうじょうさご)

音音の親。十条は東条だから置いといて、左吾である。左(三)+吾(五)で八。八犬伝だからと言って「はち」と言う名前はないだろうと、掛けてみたが十五じゃなさそう。反して吾左、ごさと言うよりもあさ、麻のほうがいい。しかし、音楽一味の名前ではない。はちはち呟いていて分かった。はちとは楽器、三味線、琵琶等を弾くときに使う撥(ばち)ではないか。そうすれば左吾は晴れて音楽一味の仲間入りである。

●蟹崎十郎輝武

今まで蟹は尼・海人・亜麻位しか思いつかなかったのだけれど、鈴木棠三『ことば遊び』を読んでいて考えてみた。

蟹を天としてみた。

崎はだいたい分解するので「山」と「奇」にする。

十郎は「とろう」で取ろう。

輝武は輝る竹。

つなげると「天山に寄り、取ろう輝る竹」となる。輝る竹とくれば『竹取物語』なので、竹取物語、天山でググってみる。

大臣、上達部を召して、「何れの山か天に近き」と問はせ給ふに、或人奏す、「駿河の國にある山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふことも涙に浮ぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ

かの奉れる不死の薬の壺に、御文具して御使に賜はす。勅使には、調の岩笠といふ人を召して、駿河の國にあなる山の頂に持て行くべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文不死の薬の壺並べて、火をつけてもやすべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山をばふじの山とは名づけける。

なんと蜚崎十郎輝武からは富士山が現れてきた。富山は富士山でもあるから、伏姫と八房を追跡中に溺死した蜚崎十郎輝武が向かった先はやはり富士山であったと言うべきだろう。伊勢伊勢言っていると、忘れた頃に富士山がこんな感じで出てくる。

●金碗は金鞠なので、五十子の実家万里谷は鞠屋かもしれない。そして鞠括りという言葉で両者を括って考えると七夕鞠で両者はつながる。

万里谷入道静蓮。なんだか厳めしいが本当は「鞠屋の道に入る常連」なんてところかもしれない。

●麻羽麻二原弘（あさはのあさじもとひろ）

浅茅原広し

●以前、糠助、額蔵と何故信乃の周りには「ぬか」がいるのだろうか？と疑問に思ったことがあったが、額＝犬の子でわかった。ぬか＝額＝糠であるから、糠助という名前も「犬の子」である。何故現八の父親の名前が糠助というのかも疑問だったが、何気に犬だったのだ。

と書いたが、これは余り答えになっていないことは分かっていた。なぜ額蔵と現八の父糠助が「ぬか」であるのかを答えていない。

いぬえ
いぬかわ
いぬむら
いぬさか
いぬやま
いぬかい
いぬつか
いぬた

どこから妙真、妙椿の妙が出てくるのかと思えば、**たえ**=妙である。



腹に穴の開いた人は『和漢三才図会』に載ってたかなと探していたら八っちゃんにはお馴染みの槃瓠がある。もう何度も見たよな、とふと左右を見ると「三伏駄」「狗国」である。伏姫は三伏生まれで、槃瓠は八房譚に使われている。狗国の図、今までなんで気付かなかったのか、（伏姫は）横走せし止水に、うつるわが影を見給へば、その体は人にして、頭は正しく犬なりけり（①210）はこの三つの順番で作られている。三伏で人+犬などというイメージを馬琴はどう思いついたのだろう、すごいなあと思っていたのだ。槃瓠ばかりに囚われてこんなことに何十年も気付かないとは一体何を見ていたのか情けないばかりだ。付け合わせを使うのもそうだが、馬琴のイメージ、ストーリーの作法は連鎖である。イメージの連鎖であるから一つのこと思いついたものが詰め込まれ、そのためにAだけではなくBもCもなければ説明がつかないことが多々ある。

● 於兔子

ウサギに関係があるのか？ 於兔子=おとこ=男なのか？ 気性が激しいだけで男とは言わないだろう（伏姫は男まさりだったけど）。で思いついた。於兎=おと=音で、音音（おとね）の例で「ね」と読むと、つなげて「ね子」猫となる。於兔子の正体は虎である。夫である竹林の虎ならぬ竹林の竜、竹林翼とは名字では竹林の虎で合うのだが、名前になると龍虎で反目する。元々相性が良いような悪いような夫婦だったのだ。

●名前を考える。

八房の旧飼主の技平。どういう名前なのか考えていた。ぎへい、義兵な訳がない。技を分解しても分からない。平を分解しても分からない。基本に帰って漢和辞典でわざを調べる。技・術・業。ふと閃いた。伊勢ネームならば業平でなりひらになる。そんなこともあるかもね、と八犬伝のキーワードは恋だから『伊勢物語』を見ていたら、また閃いた。十四段の

中なかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

七輯目録の縁の蚕。伏姫譚に出てくる蚕の対になっていることもあろうが、七輯の内容から考えると裏の「中なかに」がメインであろう。「中なかに」の次の歌が浜路が信乃の部屋から出ていくときに口ずさんだ

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

であることから『伊勢物語』、恋にウエイトがかかっているようだ。

雛衣も恋（鯉でもある）という名前なのだから当然の名詮自性と言える。

恋がキーワードと気付かなかった時は「夜も明けば」を見つけて喜んでただけで「中なかに」には注目しなかったのだから、出典をポンと出して～とのみ思わせる馬琴の術中にはまっているのだ。

純粋な恋心だけではなく、左母二郎や舵九郎のような思い込みや一方的な歪んだ恋心、八犬伝ひいては馬琴と最も縁遠く思える恋心もまた八犬伝を突き動かす力の一つである。

●名前を考える。

甲斐編を考える。

泡雪奈四郎秋実（花が雪のように白い梨は秋の実⇒梨は犬殺し）

四六城木工作（4+6=10 城 木工=番匠 東条番匠⇒安房と結城を結びつける名前）

夏引（な引き=ひき=墓）

とここまでは以前考えた。鬼はいないのかな、と思っていた。『中世なぞなぞ集』を読んでいて考えた。

出来介（木工作の下男。夏引に味方して信乃を陥れようとした）

出を分解すると山山で山が二つで、山に。来はきだから鬼（き）と同じ。介はかい。つなげると「山に鬼かい」となる。介が助だとう読めない。

●上総の一作

鞠の数え方は「一足」だからかも。さくはそくに通じる。ただ一作を分解すると一人乍、一人ながら大輔を育てたという意味にもとれる。口絵でわざわざ

鞠を使っているのだから、鞠の数え方一足⇒一作のほうが良いかもしれない。
鞠括りは鞠を作ることによるのかも。

●思ひくまの人はなかなかなきものを あはれ子犬のぬしをしりぬる

思いくま⇒重い熊⇒岩熊

●本文中でもなぞなぞと言ってるくらいなので、なぞなぞを使うと分かることもある。



例えば右の蟹目前、こんな場面はないのだが、扇やら猿とかでなんとなく納得してしまう。でも違う。「謎之本」のささにいるしかという謎は、さとさのあいだにしかが入るから「さしかさ」差し傘、となる。これを手本にしてみると、持ち物が謎を解く鍵なので、ここでは差し傘と猿が鍵となる。猿は「去る」で、さを取ると「しか」が残る。鹿となると「ろく」で、ろくは「りく」で戮となる。八犬伝では殺す意味合いが強いが、この二人には合わない。変だなと思っていると「戮力」力を合わせるという意味もある。詳しくは書かないが、この二人が力を合わせてあることを企み、その結果自殺してしまうのだ。なぞなぞで解かないと意味不明である。

●伊勢と住吉はつながる。『源氏物語』須磨

うきめかる伊勢をの海人を思ひやれもしお垂るてふ須磨の浦にて
二輯口絵の

いせのあまのかつきあけつつかたおもひ あはひの玉の輿になのりそ

は『大織冠』の「伊勢の海女」と『源氏物語』を組み合わせで作られている。伊勢参宮とだけ思っている図像に住吉詣でが現れる矛盾の原因はそこにある。～とのみ思わせるのが馬琴の手法であることを常に頭に置いておかねばならない。

大雑把に言えば、口絵・挿絵「讃」なるものはクイズの問題みたいなもので、それ自体が答えではない。答えは別にあるのだ。肇輯伏姫の「深宮飽食云々」も『源氏物語』の須磨あたりのことを言っているのかもしれない。図像そのままのキャプションではないかとも言える見かたも忘れてはいけないこともあるだろう。いつも言っているが、一つのことを語るのに様々な材料がミックスされ

ている。その中から一つだけ取り出して、それでもって全体はこうなのだと決めつけるのは間違っている。あんたは間違っている、俺だけが正しいというのはもともと不毛な論争なのだ。

●『俳諧歳時記栞草』の記事で「夏は寅を以正月とする」とあるのを見て、正月の浜路は虎であったから龍の信乃、道節とうまくいかないのか、と考えた。早稲田の「類船集」を見ていたら、虎の項に正月とあった。浜路の本名正月で考える時、その正体が炙り出されてくる。

また虎の項に玉がある。玉は龍の専売特許ではないのだ。知らなかった。で、八百比丘尼妙椿について、風比丘尼だし、狸は野猫＝虎であるから風は虎に従うの通りに、風を起こす鬻鬻の玉を持っているのだ、と考えたが、もともと虎には玉であったのだ。同じく猫もある。こんなところから猫の名前はタマなのかと試してみたりする。

肝心の犬もある。

●玉梓が烏であったとすると

次のような諺が導き出される。

烏を鷲と言ひ做す

理を非に、非を理にいいなす。悪を善に、善を悪にいいくるめる。

いちいち引用しないけど、玉梓の陳述はまさにこの通りである。義実が悪を善に言いくるめられてしまったのだ。そしてもうひとつの諺、烏は口故 憎まるるも、八郎に言った言葉が八郎を逆上させてしまった。

大輔・伏姫の出来事は「ふくろう」がベースになっていることから、玉梓＝烏とみてもおかしくはない。カラーでないのではっきりとは言えないけど、口絵の玉梓の着物の色を黒とすると、これもまた烏を表わしているのではないか。

とは言っても、玉梓＝烏も玉梓全体の一部の要素でしかないだろう。

と書いたことがあった。「謡曲三百五十番集」の目録を見ていたら「砧」があった。転倒して読む癖がついているので、たぬき、狸と思った。狸と言えば妙椿なので読んだ。いろいろとある中で一番気になったのが「烏てふ。おほをそ鳥も心して」という一節。借りていた日本古典文学全集版だと「烏てふ、大嘘鳥の心して」とある。玉梓の陳述は嘘も嘘、大嘘だったということになる。大嘘を見抜けずに一度は玉梓を処刑しないと言ってしまった義実こそ千慮の一失であった。

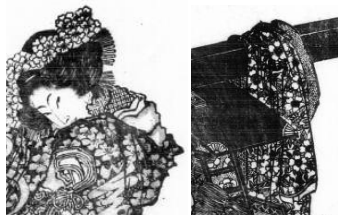
●「大織冠」

さしも賢き万戸とは申せども、やがてだるまかされ（欺かれ）

とあるように、八郎が義実に対して玉梓に騙されるなど言ったことは正しいのだろう。もう少しでボンボンの義実を騙しおおせると思った瞬間に失敗したのだから、玉梓は逆ギレしたのだ。このように里見への怨み、悪意などは逆恨みなのである。義実に「信（まこと）」がなかったから招いた災いではあるが。

●東洋文庫『幸若舞』「築島」

名月は聞こし召し、げにげにさる事のありしぞや。住吉詣のありし時、輿の先に玉章を引き結びて落とせしを



二十七の「舞車（美人揃ともいふ）」は二輯口絵額蔵・信乃図の解釈に良い。2010/01/22記事参照。口絵が美人揃を表しているとなると玉梓と浜路になる。伊勢伊勢言っているのに何故住吉詣でになるのか実は分かっていなかったのだ。

馬琴がイメージ作りに使ったのは「謡曲三百五十番集」の「住吉詣」であろう。

と言ったように01/22の三枚で一組図の考え方等を加味していくと、バラバラであったものが一つに収斂されていくことが分かる。

馬琴の～とのみ思わせる手法はここにもある。伊勢参りとのみ思わせて、じつは住吉詣を重ねているのだ。

●金碗大輔孝徳（かなまりだいすけたかのり）

孝徳を「こうとく」と読んで『日本書紀』巻第二十五孝徳天皇を読む。なるほど。

●口絵玉梓の着物の典拠は「墨染桜」。

「軒のつまにあはひの貝の片おもひ もも夜つられし雪のしたくさ」これが深草の少将のことを言っているのは明らか。もう言わずもがなである。

色香もさぞな深草の

短冊。

薫物。

木の間の月の影。

墨の衣。

玉簾。

心なき草木。
松風。

木向（もっこう）

と書いてきて分かった。口絵定包の傍らにある硯。玉梓の墨の衣、墨染桜を導くためにある。

⑤358

蘇々利といふ村あり〔今は硯村に作る〕。
名馬磨墨は、這蘇々利より出たりといふ。
素藤の話で繰り返すことにより、肇輯との関連（素藤は裏里見）を匂わせる。

●妻立戸五郎

網干左母二郎の前身としている妻立戸五郎。網魚（さかな）のような名前の作りになっているのだろうと、妻戸を調べたけれど結果ははかばかしくなかった。

名著版の「謡曲三百五十番集」。目録を見ると八犬伝用語が随分とある。「来殿（妻戸）」「舞車（妻戸）」がある。菅丞相こと菅原道真の話。ようするに妻立戸五郎という名前が怨霊、つまり玉梓と関連付けられた名前であるということが分かった。

二十七の「舞車（美人揃ともいふ）」は二輯口絵額蔵・信乃図の解釈に良い。口絵が美人揃を表しているとなると玉梓と浜路になる。伊勢伊勢言っているのに何故住吉詣でになるのか実は分かっていたのだ。

で、結論は『源氏物語』の「濡標」である。とは言っても馬琴がイメージ作りに使ったのは「謡曲三百五十番集」の「住吉詣」であろう。

載て栄花物語①209とか高尚な出典はポンと出すが、馬琴が常に使っていたのは「名所図会」「付合せ集」「謡曲集」などであろう。

●三保の谷ついでに板野井太郎、交野加太郎、土田土太郎を考えてみた。

共通する太郎は消去する。野も消去する。残ったのは板井、交加、土田土になる。板井で浮かんだのは「痛い」である。交加、こうかと思ったが「かたの」なのでそのままかたかで読む。下の名著版でとられじと読んでいるところは原文ではとられしである。そんな感じで考えていて「肩が」と読んでみた。土田土は土偏に田、土で「埋」である。

痛い、肩が、埋、とくれば痛かったかどうかは知らないが、幼児の時に埋め

られ、肩に瘤があると言うそのままの肩柳を名乗っている犬山道節である。描かれていないが、口絵には道節がいるようである。とすると、以前見たように「山前の黑夜、四凶挑戦す」の山前の黑夜を犬山道節の目の黒夜と解したのと同じ絵であったことが分かる。見た目は本文の挿絵とリンクしている珍しい一枚である。

●二輯口絵

『南総里見八犬伝』口絵・挿絵「讃」抜書抄

三保の谷の志摩路に似たる破傘 風にとられしと前へ引くなり

とあるが、名著版に

三保の谷か鑷（しころ）に似たる破傘 風にとられじと前へ引くなり

とあるのが正しい。

抜書抄は三保の谷を地名と考えているようであるが三保の谷四郎のことである。「讃」は『景清』であるが、描かれているのは土太郎の「山崎街道」である。ここで思い出すのが大輔が「山崎街道二つ玉の場」で描かれていること。三保の谷の口絵は本文に沿っているのではなく別の意味、読みがあると考えられるかもしれない。

浜路が持っているのは強盗提灯であるから賊婦である。浜路は賊婦ではないので別の人であろうと読んでみると、①114で八郎が玉梓を賊婦と言っている。浜路が玉梓の後身説の理由の一つに加えておく。

●八犬伝は史実と違うじゃん、と鬼の首を取ったかのように鼻をおごめかせて自慢するのはをこの痴者である。

細川政元を見ていたら、その管領在職期間は

文明十八年七月

長亨元八月～

延徳二年七月

明応三年十二月～永正四年六月

である。親兵衛が京都に行った文明十五年の管領は畠山政長である。馬琴の錯誤だなどと思うのは違う。何故違うのかを考えるべきである。

政元と乳兄弟の徳用の元の名前を二六郎という。2 + 6 = 8で八郎。悪の八郎であることは以前書いた。とかなんとか要するに細川家は阿波国の守護ってこと。「あわ」つながりで善の安房と悪の阿波を対比させているのだ。もともと「南海道阿波国なる、民をここへ遷し給ひて、やがて安房とぞ呼せ給ひぬ」

①31であるから根は一つなのである。そこには八犬伝世界の発端である結城

合戦、京都対関東の対立も描かれている。

●泉 杣木 親平

泉は分解して白水。白水郎《「白水」は中国の地名。水にもぐることのじょうずな者がいたというところから》漁師。海人

●同音異義語

これにも注意を怠ってはいけない。匠作・番作は番匠だが、それで満足してはいけない。晩鐘イリアイ『類船集』では温湯（イデユ）、旅宿、山寺である。「イリアイ」なんてあるが、「バンショウ」である。温湯（イデユ）、旅宿、山寺とくれば美濃垂井以降の番作の足跡になる。

特に亦彼処の温泉（いでゆ）① 2 7 7

宿（やどり）

拈華庵は山院① 2 7 7

●高校の時使っていた古語辞典から。

玉章、玉梓（たまづさ）

①手紙、消息。②玉章の、玉梓の。 使い、人、言、妹、通うにかかる枕詞。

玉、美しい石、宝石②美しいものの形容

梓

①木の名。②巫女、口寄せ

梓巫女、梓弓の弦をたたいて、生霊・死霊の口寄せ・神おろしをする女。

と、これらから玉梓は美しい巫女的神性をもった女というイメージが作られたのだろう。嘘の神にまでされてしまった。

しかし、付合のフィルターを通せば玉梓といえば、恨、雁、鯉になる。八犬伝の玉梓といえば恨みで、恨とあれば文・くす・衣・海辺の詞であり古語辞典的な玉梓像はあらわれない。馬琴が名詮自性という場合、基本的に付合をフィルターにして意味を変換しているので、文面をストレートにとると意味がなかったり、表層的な意味にしかとれなくなる。

●『類船集』輪廻：負軍（マケイクサ）である。以前作った転生表をみると見事に負軍の面々である。

春王→信乃

安王→毛野

兵内→現八

朴平→小文吾

光弘→道節

無垢三→ぬい
七郎→房八
八郎→伏姫
定包→八房
玉梓→浜路
鈍平→莊介
輝武→大角
五十子→親兵衛
戸五郎→左母二郎

同じく巻一に鍛冶：番匠、鎌倉がある。大塚匠作、番作父子は結城の印象が強いが、元は鎌倉にいたのである。持氏の近習だった匠作等が鎌倉滅亡の折持氏の子春王、安王兄弟を結城に脱出させたのである。相模こぞう（毛野）の相方（？）が鎌倉蹇児だったりする。

●馬琴の『六三之文車』に口絵に富屋の側室玉梓と出てきた。八犬伝以外に玉梓がいて、この玉梓も殺されて怨霊として現れるのだ。

玉梓という名前には殺されて怨霊になる名詮自性があるようである。

と書いた。これは書とアラハ（玉つさともいふ）恨、とあるように正しかったようだ。『六三之文車』は文政四年刊で「八犬伝」は四輯まで出ている。肇輯から七年経っており、玉梓を出しても良いかあ、といったところだろうか。手紙という意味の玉梓に八犬伝的な意味はないだろうと決めつけてしまうがために梓だけに気を取られるから梓弓とか巫女とか神性とかの意味を重視してしまうのである。菅原道真は怨霊となり神として祀られた。しかし玉梓は梟首されただけで「祀らざる鬼」①109のままである。たかが賊婦の玉梓を主人公かのように過大評価しすぎる傾向にあるのではないだろうか。

●俳諧実作者としてではなく俳諧研究家としての馬琴の到達点が八犬伝。俳諧実作は馬琴の理論癖、粘着気質には合わなかったのだろう。しかし、俳諧から遠ざかったり捨てたように見えても、しっかりとそれを取り込み、別の形（暗号化）にしてしまうということを馬琴はやっていたのだ。馬琴に俳諧の素養がなければ八犬伝はいまの形にはなっていなかっただろう。

●女性の着物の麻模様。麻は真っ直ぐに伸びるというから、真っ直ぐな女性たちのシンボルかと考えてみたが、真っ直ぐには竹が使われている。なにか腑に

落ちないものがあった。「合璧集」をみると、あさ衣とアラハ「桜」とある。なるほど、絵では麻の衣とまでは表現できないから模様で代用しているのだ。

麻模様をあげると、

- 肇輯口絵の毛野は麻。信乃は桜を着ている。しかし二人とも桜柄と言える。
- 手束
- 衛二が妻（莊助の母）
- おもいくまの挿絵の幼児
- 浜路
- めい
- 三奴の挿絵。籠の後ろの男。
- 曳手
- 音音
- 旦開野
- 雛衣（口絵では桜と一緒に。割腹時）
- 浜路姫
- 重戸（藤の花と一緒に）

と言うように犬士と関係の深い女性たちだけが身につけていることは明らかである。

「おもいくま」の挿絵では浜路は屋内なので幼児が代用。三奴の挿絵では、めいは駕籠の中なので籠の後ろの男が代用しているのだろう。浜路の麻模様は信乃が去ったあとに薄くなるなど芸が細かいところを見せている。

大塚の浜路は梅模様がトレードマークだし、麻衣＝桜とは言えないのではないかと思われるが、浜路の前身としている玉梓が肇輯口絵で桜模様、恐らく犬桜だろう。

旦開野は梅、桜、麻模様の着物であり三者を一括りとして見ることもできるかもしれない。

雛衣は口絵では麻と桜と一緒に、割腹時は麻だけになっている。伏姫と何度も重複するのを避けたためだろう。

犬士を助けた時の重戸は伏姫と重なっている。藤は不二。

彼女たちは肇輯口絵の伏姫の系譜なのである。

図像ではないが、浜路姫が四六城木工作に救われた時の木工作の妻の名前が麻苗である。麻では分からないが桜であれば浜路とのつながりも分かる。8 / 11 でみたように垂麻＝犬の子ならば、垂麻＝犬の子＝桜となる。

- 穴八（あなはち）、吐嗟（あなや）
- 蟻屋梨八（ありやなしはち）、ありや？なしや？

- 書とアラハ（玉つさともいふ）恨。

恨とアラハ海辺の詞。

海辺 いそ・はま

玉梓から浜路へは繰り返さない。では、恨とあらば海辺の詞で、海辺といえ
ば「いそ」磯であろう。重要な磯ネームは五十子（いさらご）である。五十は
「いそ」で、いそ子、磯子で海辺の詞ネームである。五十子に恨みはあったか
なと思い出すと、ここ①194 義実に対して「（前略）心づよしと恨」んでいる。
存在感のない信心深い五十子だが、ちゃんと恨んでいるのである。八犬伝の善
の女性の不幸の原点は全く存在感のない大輔の母濃菰と伏姫の母五十子の思い
死にある。

八犬士が女性に冷たいのは、濃菰が妊娠したと知って面倒なことになったと
捨てて逃げた八郎に原因がある。女性に優しい莊助は弱者を助ける「義」の人
だからだ。

●肇輯口絵の玉梓のシンボルは琴だろう。琴は筑紫琴で、玉梓の着物の柄は「袖
の鶯」、太宰府天満宮の鶯替え神事である。玉梓が天神なことではない。菅原道
真が怨霊なので、挿絵のとおり玉梓が怨霊であることを表している。そして
琴といえば桐である。肇輯大輔の着物の柄は桐である。つまり大輔には玉梓の
怨霊が纏わりついていることを表している。伏姫の部屋に八房が乱入した時に、
琴が倒れ伏姫の動きを封じたが、それが玉梓の怨霊のせいだと思われる。義実
と八郎、その子その子玉梓の悪念が纏わりついている①115 とはこのことであ
る。

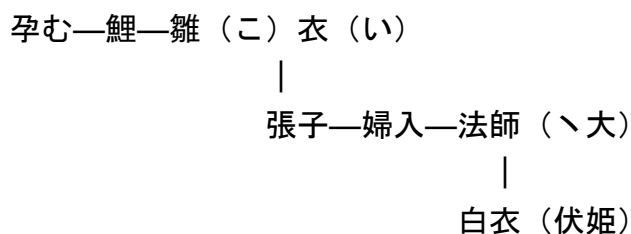
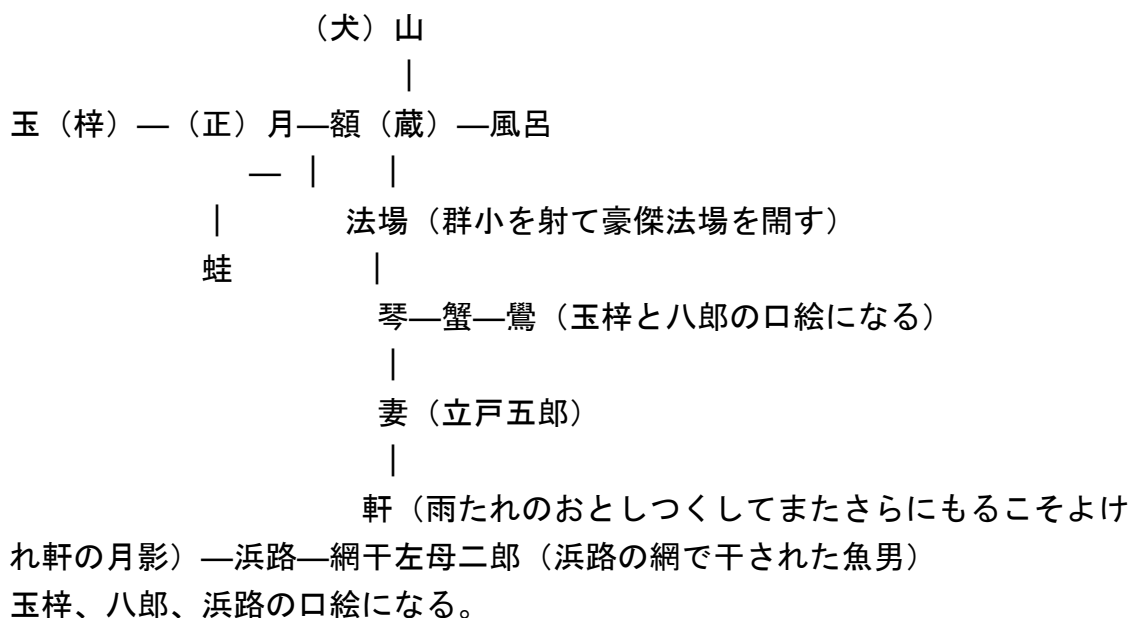
●莊助の前身は岩熊鈍平であるとした。信乃・浜路との関係、あまりに悲惨な
莊介の境遇から、前世はよっぽど悪いことをした人間に違いないといったこと
からの推測である。「毛吹」で八犬伝に出てくる言葉を結びつけていたら、

月——額

月輪——熊

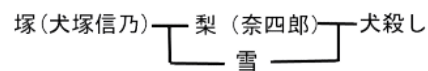
とあった。月は正月こと浜路。額は額蔵。月と月輪は一緒とみて唯一の熊ネ
ームの岩熊鈍平として良いだろう。信乃を中心にして考えがちだが、信乃・額
蔵・道節は前身が玉梓である浜路を中心にして集まってきているのである。額
蔵としての莊助は鈍い人間として描かれているのも鈍平の名前ゆえであろう。

付合と歳時記だけで話が出来てしまう。だけというのは言いすぎだが、歌舞伎やら水滸伝やらその他の典拠に味付けをして別のものを作り出していくイメージの連鎖を起こすために必要不可欠なことは確かである。



孕むから白衣の伏姫、法師のゝ大が導かれる。逆もまた真なり。伏姫の「孕む」と雛衣の「孕む」が等価になる。

警固 — 祭り — 車 — 婦入 — 葬礼 — 舟
 信乃が古那屋に着いてから房八とぬいの葬礼まで。



●番作・匠作を番匠、大工と考えていたのは一解としては良い。「栞草」に番椒 (とうがらし) ○天井守、番椒の一種とある。

●恋、恋と考えていたら分かった。



鯉→恋



文玉章→恋



八房と伏姫→恋



大和尚→さあ来い→恋

最後の「来い」が馬琴の洒落のセンス。

で、もう一つ分かった。一図左は「嬰兒が垂乳母を、慕ふ心持」①65

二図左の黒い煙のようなもの。江戸時代の夢の表現ではないか。三図左にある正夢のことである。

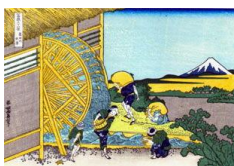
●ヒントはある。

馬面郎を見た時に（ああ郎はおとこ、男なのか）と分かった。あとは郎を男に代えるだけだ。左母二郎は左母二・郎で魚男。奈四郎は奈四・郎で梨男。左母二郎は魚男という名詮自性なのであって、さもしいという意味にってしまったら網干という名字も全然生きてこない。

八郎こそは八（人の）男であり、八犬士の原型である。

●榎木稻荷があるのだから、安房の正木、八犬伝では政木大全（河鯉孝嗣）が政木狐と関係付けられるのもそのままと言える。

●亀を引っぱる子供が描かれている浮世絵。北斎の富嶽三十六景の一枚、「稲田の水車」である。



亀を引っぱる子が目をひいたのは、五十九回「網芋の茶店に現八～」の挿絵にもいたから。それもものすごい重い力がある亀なのか、子供は力任せに引っ張っている。目立つように描かれた亀なので、なんらかの意味があろうと、亀＝き＝鬼で船虫登場を示唆しているのではないかと推測した。

庚申が富士山と、八犬伝では庚申山が富士山と関係つけて書かれていることから、何かしら北斎が八犬伝を解く富士＝不二の鍵を示しているように思える。



渋谷川の水源が天竜寺の池というのもひっかかる。

●内？

尾江内|籠山逸東太縁連の若党

墓内|籠山逸東太縁連の奴隸

媼内|泡雪奈四郎秋実の従者

[巾廚]内|泡雪奈四郎の奴隸

内ネームの四人。上の二人は毛野と関係があり、下の二人は信乃と関係がある。以前述べた信乃と毛野の共通項に追加する。

尾江内は「終えない」「追えない」「負えない」か。墓内は「儚い」「履かない」「吐かない」か。あまり意味のある名前とは思えない。

媼内は泡雪の雪との関係だろう。

[巾廚]内はなんだろう？蚊帳ない。萱ない。蚊やない（大阪弁）とよく分からない。で、共通項の「内」に注目する。うちやないの意味ではなさそうだ。内裏という「だい」で調べると「太々」がある。この「太々」は伊勢講と同じ意味の太々講の略である。太々を打つ、太々神楽と伊勢神宮に関する言葉もある。

尾江内と墓内はセットである。媼内と[巾廚]内もセットである。つまり内内となる。だいたい＝内内＝太々で、悪人の四人も何気に「伊勢ネーム」なのではないだろうか。

●『和漢三才図会』に亜麻（いぬこま）があった。亜流という言葉があるし、似て非なるモノを「狗～」というし大麻ではないから亜（いぬこ）麻（ま）と思うのだろうと思った。以前女性の着物の麻柄に注目した際、傾向は分かったものの意味が分からなかったがようやく分かった。彼女たちは犬士たちに関係している、犬士ではない亜（いぬこ）なのだろう。

図像ではないが四六城木工作の浜路を育てた前妻を麻苗という。亜麻であるとすれば彼女もれっきとした亜（いぬこ）関係者である。

麻墓愚助や浅羽麻二も麻ネームだが、一見して麻墓愚助はギャグネームだし同列に並べて考える必要はないだろう。

●以前、糠助、額蔵と何故信乃の周りには「ぬか」がいるのだろうか？と疑問に思ったことがあったが、額＝犬の子でわかった。ぬか＝額＝糠であるから、糠助という名前も「犬の子」である。何故現八の父親の名前が糠助というのかも疑問だったが、何気に犬だったのだ。

命名法も分かってきた。八犬伝の基本、音が通うものは同じということ。例として東条。「とおじょう」という音を基準にして別の漢字を当てはめるだけだ。十条はじゅう＝とお＝とおじょう、稲城は稲＝とお＝とおじょう、四六城は四＋六は十でとおじょう。暗号としては「城」を二回使ってしまったのは失敗である。つまり「反復は機密保護の敵」である。「反復はパターンにつながり、暗号解読者はパターンを手がかりにして暗号を破る」(『暗号解読』[上]270)のである。八犬伝では前身と後身は輪廻転生しているので、その行動は反復しパターン化してしまう。輪廻転生自体が反復とパターンなので仕方ないが、機密保護という点においてはそれを要素としている「稗史七法則」は弱点だらけなのである。

四六城が出たので、信乃と関わった四六城木工作。木工＝大工＝番匠で、信乃の父番作、祖父の匠作となる。信乃の母方の祖父井丹三の臣蓼科太郎市の子である四六城木工作が安房の浜路姫を助け育て、信乃と浜路姫の接点となったのも、東条番（作）・匠作という四六城木工作の名詮自性なのである。

名前といえば、錠庵が、錠＝金＋定、庵＝山下、反して山下定金つまり山下定包と読んだ時が一番スリリングだったような。馬琴、解けたぞ！って感じだったな、これは。山下定包と解読できる毒を使う男がいることで、犬山道節の前身は神余光弘ではないかと推理できるので、道節と浜路＝玉梓との関係も分かってくることになる。～とのみ思わせるのは、名詮自性にしても最初に分かりやすい例をどんと提示して、そんなものなのかと読者に思わせてしまう馬琴の手である。名前を解いていくだけでも十分に遊戯三昧の書八犬伝である。

女性名では雛衣＝こい＝鯉＝恋が分かった時は少しだけ興奮した。「ひなきぬ」という名前でしたか考えたことがなかったので、馬琴が度々使う雛＝「こ」という読みを漫然と読み流してしまっていた。とっくに第八回（p138）で雛狗（こいぬ）と書いていたのをなんと見ると馬琴に冷たく言われそうである。

雛はひな、す、すうなので「こ」と読むのは、馬琴が意味から勝手に読んだのかも知れない。ただ雛の字を選んだのには雛草が「たつのひげ」の類であるということは関係ありそうだ。宝珠を飲み込んでしまい龍女（鯉は龍になる）。

肇輯口絵の義実図は登竜門を描いている）となった雛衣（鯉）が結果的に化け猫＝虎を倒すことになったのだ。親兵衛の玉が埋められていたにも関わらず、親兵衛の元に飛んで戻ってきたことを思えば、雛草で鯉の雛衣が宝珠を体内に持って龍となっていたことには問題がなかったようである。

大輔の母濃萩について、濃は恋、鯉であるとした。萩は鹿鳴草とも言う。鹿というと肇輯口絵大輔図「正夢と起行鹿や照射山」を想起する。これにも解釈はいろいろあるが自分としては『宇治拾遺物語』の「龍門聖鹿にかはらんとする事」を表しているのだと思う。大輔の母が鯉・萩（鹿鳴草）であることで大輔が出家する将来を暗示しているのではないだろうか。

濃萩、雛衣等恋に殉じる女たちをどう考えるか。恋に殉じる女というのも文学のテーマである。安西家の嘉例ではあるが、出陣の際に軍神を祭り、その胙に大きな鯉を供えるという。八犬伝において、鯉は胙であるゆえに、濃萩、雛衣等は胙として死んでいくという意味がある。

八郎が自殺した日が七夕だったことも恋と関係ありそうだ。つい星だ、玉梓の怨霊だとなってしまうが、濃萩の恋心が父親の上総の一作により八郎に明かされた日であるのだ。大輔が濃萩の形見であるなら、七夕の夜に大輔を通して八郎と濃萩は再会したことになる。そうでなければ親子の再会の日を「二星のあふ」七夕に設定する意味がない。

八犬伝に余りに不似合いな恋というのも重要なテーマである。伏姫・八房譚では『毛吹草』の俳諧恋之詞から話のポイントになる詞が使われているようであるし、浜路の一途な恋心、暴風の舵九郎の穏やかではない恋等や七夕にまつわる話の数々、どんな形ではあれ恋心が物語を突き動かしていく原動力の一つになっているのである。

肇輯口絵の大輔が『海道記』に書かれた富士山のイメージで描かれていることは以前述べた。さらに富士が不二、大輔の行動と結果について善悪不二を表してあることも書いた。

伏姫と八房が恋、大輔が善悪不二という表立っていない大きなテーマを口絵で表しているのではないだろうか。

●額蔵

蔵を無視してしまえば、額＝犬の子という名前なのだ。犬川という名字からの蔑称かとも思うと、莊助と名乗ったのだから、額蔵と書くのは良いことでは

ない。

●七輯表紙について

「鳥」「鷹」「鷺」「鴿」といろいろ説があるようだが、自分としては「鷹」説を推す。根拠は

『俳諧 類船集 三』（古典籍総合データベース
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>）にある

玉章 雁 犬 鷹

による。今まで何気なく犬が首に巻いている布は首輪に思っていたが、手紙が入っていると見れば七輯表紙はそのまま玉章を表している。鷺では付け合わせの一枚の絵として意味をなさないし、図像的には嘴が先で曲がっていて鴿ではない。鳥は思考停止で問題外。

七輯には甲斐の信乃が読む『太平記』に
書置し君が玉章身にそえて後の世までの像見とやせん

の和歌が載る。信乃がその件などを読んでいると現れるのが大塚の浜路の幽魂に憑かれた浜路である。自分は大塚の浜路は玉梓の後身であると考えているので、玉章＝玉梓のつながりで浜路の幽魂が現れるのも当然と思える。

表紙には伏姫の結婚、出産を表している二輯表紙があるように、内容をかなり具体的に表現しているものもある。七輯表紙もそのうちの一つであると考えられる。七輯表紙の画題はズバリ「玉章」＝玉梓である。

犬は伊勢と関連付けるなら『御影参明和神異記』に載るという、御祓いを首にくくりつけてもらった犬を連想させるだろう。

●なんのことはない。「毛吹」にも玉章 犬、鷹、鴈、鳥瓜核、とある。

●西田耕三氏「君子の戯言—『南総里見八犬伝の発端』—」

P28に、義実から遠ざけられた八房の執拗で挑戦的な行動は、たしかに八房が玉梓の生まれ代わりだということ（第十二回）を十分に示している。とある。P29では義実の考えとして「八房を育てた狸が玉梓だと気もつかずに犬を寵愛したことは、悔いてももう遅い」とある。（太字、富地）

たしかに八房が玉梓の生まれ代わりだと言うことは、義実が言う八房を育てた狸が玉梓だということが、単に義実の感想であるということになる。登場人物の言うことは当てにならないということだ。文字面をなぞってそのまま考えていては矛盾にぶち当たってしまうし、八犬伝をそんな直截的な作品として馬琴は書いてはいない。水滸伝を「発明」した馬琴は読者に「発明」を求めている。

①玉梓—八房

②玉梓—狸

自分の「発明」は

③・玉梓（怨霊）

・狸

・八房

は、それぞれに独立した別物と言うことだ。で、八房は定包の後身となる。

●大塚番匠戌郷⑩ 2 8 7

大塚匠作—大塚番作という親子の順が番匠を意図的に変えたことは明らか。
番匠＝大工という意味をすんなりとは分かせない。

●変な名前。

水禽隼四郎緑林 みどりはやしろうはるしげ⑨ 4 4 0

みどりはやしみどりはやし。だいたい、緑林を「はるしげ」なんて読むところからいい加減なのではないか。

で、林緑なんて人がいるのかと思ったら

・緑林（りょくりん） 1. 青々とした林。緑の林。2. 盗賊たちが立て籠もる場所の喩え。また、盗賊の異称。 故事：「漢書—王・伝・下」「後漢書—劉玄伝」 緑林山は、中国の湖北省当陽県の山の名。前漢の末、王莽（おうもう）の時、王匡・王鳳らが窮民を率いてこの山に立て籠もり、征討軍に抗して強盗を働いたとある。（『[くろご式 慣用句辞典](#)』）

とある。水禽隼四郎緑林は海賊の頭領なので、らしい名前と言える。

●変な名前。

荻野五九郎泰儀⑨ 3 7 6 おぎのごくろうやすのり

荻野御苦労大儀。「荻野、御苦労、御苦労様」という名前。荻野という人が馬琴の側にいたのだろうか。

荻野梅塙

闇蚊野汶八夏盛⑨ 3 8 0 くらかのぶんはちなつもり

暗闇に 蚊がブンブンや 夏盛り

設楽四九二郎綾丑 したらしくじろうあやうし⑦ 3 9 0

したらしくじるだろう、危うい。

根古下厚四郎鶴宗 ねこしたあつしろうはとむね⑧ 2 6 9

猫舌、熱い。鳩胸。鳩胸までくると、もう意味不明（笑）猫舌、厚い鳩胸？

詰茂佳橘 つめもてかきつ⑥ 2 2 2

爪で搔いた

●小文吾は、いふにや及ぶ、と拿直す、刃を引提て（旦開野の）背のかたに、立遶りつゝふり揚ても、些も騒がぬ女子の一心、項を延し、掌を、うち合しつゝついゐたるを（③ 3 1 4）

という場面も、

（春王、安王）騒ぎたる気色なく、さゝやかなる掌をうち合し、はや目を閉て俟給へば、長尾が老党（中略）切鞆掛たる刃を引提て、おん後方にぞたちよする。（① 2 6 0）

前身と後身でみると、同じことを繰り返す旦開野の行動には痛ましさを覚える。

●

嘉吉元年四月十六日（結城落城）

八騎の従卒（中略）その名は朽ず、華洛まで、立のぼりたる丈夫の、最もはげしき最期なり。① 2 0

時に（文明十六年）四月十六日⑩ 1 1 9

其家臣八犬と唱ふる者の、戦功を叡聞ありて、連に御感のあまり（後略）⑩ 1 2 5

十六という数字は不吉であったのが、最期には最も良い数字に変わる。四月十六日が同じことは分かっていたが、気付いてみると文明十六年であった。設定として嘉吉元年から四十三年後というよりも、十八年までであったのが文明ということだろう。

●岩熊鈍平をちゃんと読むと、鈍平は貞行と一上一下手練の太刀風と言うくらいに強く、元は馬奴であった。



大廈の覆んとするときに、一木いかでかこれを柱ん。（① 6 4）という八郎の言葉がここで出てくるのも、この絵がタイトルとは別のことを語っていることを意味する、と書いた。ところがもう一人「大廈の覆んとするときに、一木いかでかこれを柱ん」① 9 8と言った人物がいる。岩熊鈍平である。しず

の芋環が「繰り返し」の序詞なのだから、八犬伝では輪廻を表しているとみていいだろう。とかなんとかで、奴隸額蔵の前身は馬奴であった岩熊鈍平と考えると、前身が光弘の道節と二度も戦ってしまうのもあり得るのである。

● 莊助の前身に関しては信乃の祖父匠作ではないかとかいろいろ考えた挙句、匠作は転生してないことが分かり思考停止に陥ってしまった。莊助は苦勞人で拷問を受けたり善人であるから、悪人が前身とは考えたくないという心情的なところを抜きにすると、鈍平ということになる。莊助のあまりの不遇な少年時代も、前身である鈍平の悪事故であるとすれば納得がいくのである。浜路の最期に道節、莊助、左母二郎が居合わせるのも前身故の環会なのである。



八犬士中こんな目に遭うのは莊助

だけ。前身のせいなのだから哀れである。

二枚目の挿絵は「額蔵をれん木の上に、推仰向括着て」③46で、第五回の「数か所に深痕を負たりける大将岩熊鈍平を、盾の上に括り乗せ」①84に対応している。

● 転生表

春王→信乃
安王→毛野
兵内→現八
朴平→小文吾
光弘→道節
無垢三→ぬい
七郎→房八
八郎→伏姫
定包→八房
玉梓→浜路
鈍平→莊介
輝武→大角
五十子→親兵衛
戸五郎→左母二郎

この前身後身を表すために八犬士前史が詳しく語られているのである。

●道人のあとに寂寞道人と名乗っていた道節が出てきたのは何かあるのかと疑ってみたついでに、④183の「鞠問せられよ」に注目。鞠には鞠罪、鞠獄などの言葉がある。以前この「鞠」に注目したのは、肇輯口絵の金鞠大輔である。金碗が正しいのだから口絵的な当て字と思っていたこともあったが、伏姫誤殺の罪を犯した大輔には「鞠」の字がふさわしいのである。で、道人のあとの道節のパターンを踏むと、鞠問のあとにわざわざ金碗をつけて「金碗入道、大」④187が登場する。大や大法師でいいものと思う。たった二例でなにをか言わんやだが、馬琴がすることらしいとも言える。

と書いていたら、きくもんの「きく」が違っていた。④183は「米」ではなくて「言」だった。で、確か「きくもん」があるならここだろうと、③40を見ると「事の顛末を鞠問」とやはり鞠になっている。金鞠と鞠問は違うのだ。一字たりとも揺るがせにしない馬琴である。

●道人を（てらをとこ）と読むところは他になかったかと考えたところ、寺の話ということで百八十回上（⑩）をサラッと見たらp182に道人（てらをとこ）とあった。特別な用例ではないようだ。

●69回。

奈四郎などの名詮自性は以前説いたとおり。今となれば、梨は秋の実にしか見えない。

70回を読み進めると、P163に

院中常に寂寞たり。（中略）唯一箇の道人（てらをとこ）

とある。何回も読んでいるが、初めて気付いた。のちに犬山道節が登場する（P187）ことを思うと、道節の変名であった寂寞道人がさり気なく仕込まれているのかなと思った。

●雛を「こ」と読む例追加。雛虎（とらのこ）⑧125

●第百四十回「犬江仁名を華夏に揚ぐ」の章題は、結城合戦で死んだ里見季基の「その名は朽ず、華洛まで、立ちのぼりたる丈夫」①20の八人の従卒に対応したものだろう。その名は朽ちなかったにも関わらず、本文では無名の八人に代わる八犬士である。

●鬼はいないのかと思っていたら紀内鬼平五景紀（⑧90）がいる。

●話の構造として親兵衛の京都行は、親兵衛再出世以前の、大、七犬士との対を一挙に片付けるものになっている。また親兵衛だけが他の犬士との対決がないと言われていることに対しては準犬士孝嗣との疑似対決があったとした。ところが⑧を読んでいったところ、対親兵衛を馬琴は書いていたことを知った。

無敵斎は仮想現八、鞍馬海伝は仮想毛野、秋篠広将は仮想信乃、澄月香車介

は仮想道節、種子島正告は仮想大角となっている。徳用をあえて小父の小文吾にする必要もないし、莊介は紀二六でいいだろう。徳用以外にはやる気がないのも犬士の反対になっているからだ。

●紀二六の母方の小父は蜷崎照文（⑧ 7 7）と知れば、紀二六の役回りは大塚における莊介となる。

●⑧ 7 2の阿漕の歌も、度重なる密漁で捕まった糠助の反対。

●徳用が八郎ならば、里見征伐をそそのかされた細川政元は里見義実で、徳用に「いひかひなし」⑧ 5 7と思われた政元と八郎に「いふがいなく見え」る① 6 6と言われた義実が対になっている。またいひがひありがある親兵衛と反対になっている。素藤がそうであったように、親兵衛が相手にしているのは「裏里見」の要素がある。と言うよりも親兵衛譚は親兵衛再出世以前との対で成っているのだからとりたてて言うほどのことではないかもしれない。京都で言えば親兵衛の吹雪姫救出は、大による伏姫救出失敗の反対になっているのも言うまでもない。

●徳用の元の名前である二六郎（にろくろう）は $2 + 6 = 8$ で八郎となる。徳用とは金碗八郎、現八郎、尺八郎に対する悪の八郎である。親兵衛と対峙するのも徳用が「悪少年」⑧ 4 6だったからだろう。

●1 2 2回を読む。1 2 / 0 4の雛猫（こねこ）に次いで雛を「こ」と読む例。雛松（こまつ）⑦ 1 3 8

●妙椿の名前、椿について考えていた。椿は臭いからとか馬琴は言っているがどうだろう。まず妙椿の八百については下でみた通り。その正体である狸は野猫で虎であった。馬琴は万葉集をよく使っているので椿の歌をみると、巻一に「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思は巨勢の春野を」がある。この歌はかなり面白い。巨勢といえば親兵衛に退治された画虎を描いたのが巨勢金岡である。つらつらの「つら」については虎に通う。巨勢（金岡）・つら（虎）・（妙）椿一虎、つながりとしては悪くはない。

と、こんなことを思ったのは「美少年録」で妙に「をとめ」と振り仮名があったから。妙を分解すれば「女」「少」で少女（をとめ）だけれども、妙椿や妙真が少女というのはどうも解せない。

●アトリビュート。

口絵では画中人物の持ち物に意味がある。口絵はストーリーを直截に表したものではない。

アトリビュート。馬琴はこの方法をどこから思いついたのだろうか。

●嘉吉元年四月十六日の結城落城当日に戦没した忠将義士の中に大塚匠作がいるのはおかしいといえおかしい。

●自分の助言を聞き入れた親兵衛に対して照文は「いひがひあり」⑦ 1 1 1 と思った。親兵衛以前は義実を始め① 6 6 としていひがひのない人物ばかりだったのと反対になっている。下の箴大刀自にしても親兵衛再出世以前の反対となっている。

●以前箴大刀自のしたことは法に従ったままで、そのことについては莊助と小文吾は評価をしているとした。箴という字を分解すれば、真っ直ぐな「竹の服」を着ている人なので「箴竹心の直かる本性」⑦ 7 3 という名詮自性になる。この辺り（⑦巻）は一回流して読んだだけだったので、箴大刀自の本性について書かれていたのを初めて知った。竹は節婦竹の如しで良い意味に使われるのだが、真っ直ぐではあるが八犬士と敵対する悪い婆さんと思っていなかった箴大刀自を竹の良い意味で考えていいものか疑問だったのだ。箴大刀自の「現愆り、あやまちぬ」⑦ 7 3 という言葉からは、八房を殺そうとして伏姫に説き伏せられた義実と対になっていることも分かる。と考えると、伏姫と箴大刀自の娘蟹目前は八犬伝での犬と蟹の関係の最たるものと言える。

●雛猫（こねこ）⑥ 1 4 2

素藤が自らを棄てられた猫に例えるところがいい。虎である。八百比丘尼妙椿の八百が風（風）、妙椿の正体が狸（野猫＝虎）と対になる。風は虎に従うのである。

犬士側ならば雛狗（こいぬ）である。これも雛衣の雛を「こ」と読む例となる。

●九輯上の口絵の将棋盤を片手で持ち上げる親平衛に、同じく片手で将棋盤を持ち上げる大童山文五郎の面影を見たが、九輯巻十二上の百十四回（⑥ 2 7 6）に大童山文五郎についての記述がある。読めば分かるのだ。

●田税戸賀九郎（たちからとがくろう）⇒田税→天手力男神・戸賀九郎→戸隠れ

夜の闇だった八犬伝世界に親平衛の登場とともに日が射してくるとはつとに言われている。天岩戸に引き籠った天照大神を引きずり出した天手力男神からとった田税戸賀九郎という名前の人物を登場させることで暗示している。

こう見ると「舩を逐ふて小文吾」の挿絵で朝日が印象的なのは、小文吾に天手力男神を重ねているせいかもしれない。

●八輯巻之五口絵。嗚呼善（おこぜ）。

虎魚だから嗚呼善は虎であることはいつだか書いたけど、画賛をみれば「猫児」とあるのが虎のヒントになっている。

●八士を和僧の乾児にせで、金碗氏を冒させなば、皆孝吉の名迹にて、和僧の上には干渉らず。（⑦ 3 7 1）

八犬伝の脳髓は八郎であり、八士は八郎の名迹であって、大は八士の父と

か言っても実際は「和僧の上には干渉ら」ないことなのだ。

●影西⇒栄西、徳用⇒比叡山

●左の里見次麿と山鳩図は、『平家物語』灌頂巻



まづ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮伏し拝ませおはしまし、その後西方浄土の来迎に預らんと、誓はせおはしまして、御念仏候べし。この国は粟散辺土と申して、心憂き境にて候。あの波の底にこそ、極楽浄土と申して、目出度き都の候。それへ具し参らせ候ぞ。と様々に慰め参らせしかば、山鳩色の御衣に鬘面結はせ給て、御涙に溺れ、小さう厳しき御手を合せ、まづ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向はせ給ひて、御念仏ありしかば、二位の尼先帝を抱き参らせて、海に沈みし有様

である。

額縁の貝尽しは「あの波の底」「海に沈みし有様」であり、伊勢であろう。ここでは貝を珠に置き換える意味はなさそうである。二人が持つ本はおそらく『平家物語』で、次麿の公達風の格好とその着物の柄である浪千鳥も海を表している。最期の口絵まで伊勢と関連付け、里見の滅亡を『平家物語』灌頂巻で重ね合わせている。山鳩は角隠しをしているので鬼。最期を飾る口絵にしてはなんともしょうもないものだと思っていたが、実は最期を飾るに相応しい絵だったのだ。最期まで鬼と伊勢にこだわった馬琴には恐れ入るばかりである。

●第六輯口絵の毛野、旦開野図を「芝居絵的」な考察とは違う目で見てみる。

旦開野が持つからくりは「義経千本桜」大物浦遠見の船軍で、八犬伝五十六回の本文に「屋島壇の浦」云々とあるのをきかす」とある部分。「膝栗毛」的に見ると六輯口絵は「膝栗毛」八編上の「竹田近江唐操之図」によるもので、「船弁慶」のからくりである。

「船弁慶」を出すことで、義経、弁慶、静を想起させ、毛野＝義経・旦開野＝静、小文吾＝弁慶を重ね合わせる。毛野ひとりに義経と静を混在させ、同じ

女装の信乃との差異を明らかにしている。



●「膝栗毛」を読むと八犬伝が分かったりする。膝栗毛の初編では、例えば八犬伝の「自殺を示して」の挿絵の亀篠は「鬼殺を爛せしむ」である。亀篠＝鬼殺は前に書いた。次に浜路が使っていたと思われる箱枕。目立つようにあるので何か意味があるのか？と思っていたが分からなかった。で序を読むと「それが中にも唯一夜、鮭のめし盛押かけて、商ふ恋の筥枕」とある。なるほど、唯一夜信乃のもとに押しかけた（というか）浜路の恋という訳である。恋が八犬伝読解のキーワードの一つであるから「恋の筥枕」で良いだろう。

●「膝栗毛」初編、発語。薬缶頭の茶呑ばなしに

「思ひくま」の挿絵の赤ん坊をおんぶした女。薬缶を持って、頭に茶呑を乗せて話しているのだ。これが文外の絵なのか？

●『物類称呼』鬼蟹。

をにがに○摂津にて、嶋むらがにといふ。兵庫及播州にて、武文かにと云。讃州にて、平家蟹と云。加賀越前にて、長田かにと云。

全部鬼蟹と別物と思っていたけど、全部鬼蟹であった。

●白前（つくものまえ）

百から一を引いて九十九だから、白は九十九なのか！と大したことではないのに、以前すごい発見をしたように感じたことがあった。でもそれでは意味不明であった。

『物類称呼』

白前 しらはぎ○江戸にて、しらはぎと云。（中略）上品なる物也。

やはり「つくも」という振り仮名に囚われてしまうのだ。白前は義成の正室で、側室は蘆橘（はなたちばな）と植物名前で対となっている。～とのみ思わせる馬琴の手法にはいつでも注意が必要である。

●大姦似忠。大詐似信。

●道節、見八図にある「田単」は『史記』田単列伝の「忠臣不事二君、貞女不更二夫」であり、八郎と玉梓を表している。玉梓を貞女と言っているのではないことは今さら言うことでもないが。

●知は崇く礼は卑し

礼は行動にあらわれるもので恭敬を主とする。故に卑下を要とする。（故事成語諺語辞典）

礼の人角太郎にある卑下の心が雛衣を死に追いやったと言える。恭敬と卑下は不二であり、これを表しているのが角太郎の挿絵にある富士山の絵である。自分には馬琴が諸手を挙げて仁義八行を賛美しているようには思えない。馬琴が勧善懲悪を書くのは、何が善なのか何が悪なのかを読者に問いかけているように思える。

●馬琴－江戸のホモ・ルーデンス－

「八犬伝」－馬琴と戯ぶ・遊戯三昧－

文字で戯ぶ－音（おん）・分解・倒置・変換－

図像で戯ぶ－解読－

白地蔵で戯ぶ－鬼探し－

遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れられた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのもののなかにある。それは緊張と歓びの感情を伴い、またこれは「日常生活」とは「別のもの」という意識に裏づけられている。（『ホモ・ルーデンス』中公文庫 p 72）

●親兵衛伝は七犬士伝と反対でできている。大塚の雉猫ミ二虎紀二郎に対する桃太郎の家来雉の紀二六。殺しまくってしまう七犬士の場合六名前は戮であったが、殺さない親兵衛の場合の六は禄に変わっていくようだ。

●子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。（『論語』卷第八 衛霊公第十五 九）

天津九三四郎、荒磯南無六。九＋三＋四＝十六、七＋三＋六＝十六。この二人が四×四＝十六の獅子というのはなにかそぐわない気がしていたが、十六＝四×四は志士とすれば納得の名詮自性である。算数好きの江戸人らしいネーミングでもある。天草四郎とか荒磯の浪という表の名詮自性（でもないが）で喜んではいけないぞ、過去の自分。

卷第八。衛霊公。大八を霊が衛る。面白い。

●『玉くしげ』（古典文学大系・近世思想家文集）

とにかくに、十分善事・吉事ばかりの世中になす事は、かなひがたきわざと

知べし。然るに儒の道などは、隅から隅まで掃清めたるごとくに、世中を善事ばかりになさんとする教にて、とてもかなわぬ強事なり。

馬琴はこのことを意識していたのだろう。儒教の教えによって管領戦に勝利した安房は「隅から隅まで掃清めた」ようなユートピアになったが、結局は八犬士に見限らせる内紛の国になり滅びる。馬琴によって儒教の梯子を上っていた者は、上りきったところでその梯子をはずされてしまい取り残されてしまうのである。

このあとに『玉くしげ』が、なんでも神のすることだからと成り行きにまかせて何もしないのはいけないと説くあたりが、「侠客伝」の女仙が小六になんでも輪廻、業報だからと何もしないのはいけないと語る内容に通じるものがある。

●恋をキーワードにして三輯口絵道節・見八図をみると、今まで考えてきたこととは様相が一変する。

『古今和歌集』巻第十一の恋歌一

夏虫のみを徒になす事もひとつ思ひによりて成けり

である。浜路が村雨を左母二郎から取り返そうとしてかえって斬られて死んでしまったのは、信乃一人への恋心故である、と画中の文は語っているのである。そう思うとなんとも切ない口絵に見えてくるのである。

●蟹と言えば伊勢なのだから、蟹崎輝文が現れるところは伊勢に置き換えることが出来るのではないか。歌舞伎の引用を装ってはいるが、行徳での出来事も伊勢、おそらく神話に置き換えられるだろう。

富山は伊勢神宮であるとした。蟹崎輝武が富山で溺死したのも伊勢と関連付けられているからだろう。

輝武が何もしないで死んでしまったのに比べ、輝文の活躍は著しい。武よりも文であると馬琴は言っているとしたら、毛野と道節の扱いの差の意味も明らかである。

●『馬琴の戯子名所図会をよむ』によると「戯子」は『都名所図会』に倣って書かれたという。そこで夢窓疏石ゆかりの天竜寺を読んでいくと次の項に嵐山がある。二つおいた項の坐禅石に嵐山城（細川右京太夫政元の家人、香西又六郎元近といふもの、謀反して永正年中に築く所なり）とある。八犬伝では悪僧徳用の父香西復六になっており、史実の悪人は善人に書かれることはない。先に再太郎は又太郎と同じとしたが、ここでも又と復が「また」で同じになっている。

馬琴のイマジネーションの素は、「参宮」にしろ「都」にしろ名所図会や、

付け合わせ集のような辞書、事典の類なのかもしれない。

口絵は読むもので看板絵ではないが、口絵を看板絵として見る場合は演目もさることながら演じている役者をみるという視点が必要かもしれない。この視点からのとっかかりになるということで、浜田氏の「芝居絵的考察」は有益であろう。

さて、「芝居絵的考察」では二輯口絵浜路図の鳥を浜路の魂を暗示するほととぎすとされている。自分も以前、浜路が死ぬことから死出の田長、ほととぎすと考えたことがあるが、現在は七夕との関係でかささぎと考えている。

●『馬琴の戯子名所図会をよむ』

凡例に「旦おやま」「小旦わかおんな」とある。「旦おやま」という字、毛野が女田楽時代に名乗っていた旦開野である。開野は毛野だからいいとして旦が分からなかった。元旦のたんだから「あさ」としてもなんで「旦あさ開野」なのか。もう言うまでもないが、毛野の女装は女形で「旦おやま」なのである。もしピーンツときた人間ならば、旦開野の登場時に旦（おやま）の開野、あれ？旦開野、実は男？と見抜く可能性がここにはある。

「船を逐ふて小文吾」の挿絵では朝日が昇っているし、旦という字は朝日が昇るさまだし、闇が終わっていく名前かとか考えていたのだ。それにしても八犬伝世界の闇は以後も続くのだから、「旦おやま」ととっておくのが良いだろう。旦開野とは女形の毛野という名詮自性である。「旦」、やっとなっきりした。

以前、あげまき図は六男二女ではなく、四男四女が描かれているとした。四男四女に「女は女神の血縁にして、男は犬の後胤なり」を当てはめて、信乃・真平・角太郎・毛野は女神伏姫の血縁で、小文吾・莊介・玄吉・道松は八房の後胤であると考え、八犬士のありようが新しく見えてくるかもしれない。

●伊勢の海千尋の浜に深くうがちて洒落を花なる貝尽し。（膝栗毛五編序）

確かに赤岩百中なんてのは洒落意外の何物でもないけど。素藤の話だって洒落だと言えば、義実のパロディーだけど。



●仏教的神道

●なにゆえに伊勢なのか。

富山は伊勢神宮であった。伊勢に友人がいるからとか、自分や息子も参宮したことがあるとか、おかげまいるの流行とかそんなものではないだろう。それならばもっと大々的に見せれば良いのだが、基本的には隠されている。

里見が滅びようとも富山は厳然として存在し続ける。富山は伊勢神宮であり、すなわち天皇家なのだから、里見は武家社会を表し、武家社会が幾多の興亡を繰りひろげようとも存在し続けるのが、書かれてはいない天皇家である。くどいほどの伊勢の奥にあるものが、馬琴の天皇家指向、尊王の現れなのではないだろうか。

●伊勢を目指した江戸人に見れば、対牛楼とくれば牛車楼かもしれない。

伊勢絡みで手束を考えると千束屋、信乃の着物の備前蝶柄は備前屋ということになる。蝶と獅子からにしろ、多くの蝶柄から備前蝶を選んだ理由はこんなところか。

備前屋は桜花楼とも呼ばれ、古市著名の妓楼のひとつであったと言うから、二輯口絵の手束の着物の桜、帯にある伊勢神宮の紋である花菱紋も伊勢の備前屋を表していると思える。

さらに備前屋といえば他に杉本屋、油屋があり、この油屋こそが『伊勢音頭恋寝刃』の舞台である。

古市はいづれも大楼なり。（『羈旅漫録』〔百二十八〕古市の総評）

●『羈旅漫録』〔三十〕名古屋の天王祭

名古屋の天王祭の車楽は（中略）車は大なる地車なり。大八にはあらず。

とあるように、馬琴にとって大八とは車の種類にすぎないのではないだろうか。素藤の父業因が見物に行ったのが「京師なる、祇園絵」⑤327であり、捕まった挿絵では山鉦の車輪は見えないが大八であろう。素藤対大八の親平衛の浸染である。

伊勢の牛車楼が作った宣伝冊子『伊勢名物通神風』の見返しには赤々とした大八が描かれている。「伊勢名物」は文化戊寅＝文政元年出版であるから、親平衛登場の第四輯以前である。おそらくは馬琴が張った伊勢のアンテナにひっかかったであろうと思われる。「古市はいづれも大楼なり」と認識していたのだから、牛車楼＝大八車は『羈旅漫録』の旅の時から記憶にしまいこまれていたのだろう。

牛と言え、小文吾は十牛図の牛だから、牛車の大八の親平衛と親族のつながりを持っているのだと思われる。

小文吾の前身朴平が丑寅に関係していたためか、水滸伝の母大虫（メス虎）に比される船虫に何度も被害にあう。船虫に痛い目にあわされた犬士は多いが、船虫刑戮の牛鬼とは特に小文吾の代理なのである。

●ちゃんと本文を読めば分かるのだ。



六輯口絵、栗飯原首胤度がもつ扇に書かれた歌。ねのあらしのミおとつれやすき秋の山里、の前はなんて書いてあるのか分からなかった。久しぶりに小文吾の話をとということで五十二回を読んでいたら、

吹おろすかたは高ねのあらしのみ音つれやすき秋の山里（③ 2 4 4）

とある。胤度が左手に持つものが、古金襴の袋に入れた上記の歌を高蒔絵にした虚無僧尺八、つまり嵐山であり、扇はその歌を見せるための代用である。

一富士二鷹三茄子の額縁で左右で一枚の絵にしている。また持ち物によって左右対称になっている。首桶と壺、太刀と短刀、扇を一面と数えることで、隣の額の縁連がもつ剣道の面と対応している。

口絵の場合、本文の歌は使われてはいないだろうといった思い込みがあったために、余計なことを深く考えてしまったのが間違いの始まりで、八犬伝に思い込みは禁物である。大体がこの歌は口絵のキャプションではないのだ。

ずっと後だが、本文に関連した見返しにある「趙州和尚、狗子仏性」の印をなんと見たか、と馬琴が評に答えているように、本文だけ読んでもダメ、図像だけ見てもダメということだ。

●蟹崎輝武

海辺に人となりて、水練の達者なりしに、斯墓なくも流されたる（① 1 7 4）

「合璧集」海人とアラハ、難波。⇒難破という名詮自性か。

●金碗を金鞠と書くことで七夕と結びつける。

●七夕の日を誰がはれぞ鞠くくり 道淡

馬琴ならば鞠くくりという語を鞠で括ると考えて、万里谷静蓮の娘五十子をまりこととして金鞠と一対にすることもありうる。一対にすることで金碗父子と五十子・伏姫母子の功德により八犬士が誕生したという意味にとれる。

●二輯はあからさまなほどの伊勢尽くしではあるが、まだ見逃していた。番作と手束の出会いの場面は古典文学大系『義経記』巻第二「伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事」を使っている。伊勢音頭だけでは二人の出会いの場が抜け

ていることになる。随分前に書いたように「伊勢音頭」をモチーフとした番作の着物の瓶子は伊勢平氏、手束の着物は伊勢神宮の紋となる。以前『義経記』を読んだ時にはまったく気付かなかったのだから、キーワードというのは改めてすごいものだ実感した。絨毯爆撃で無駄な労力を使っていたのがピンポイントで的が絞れるのだから楽になったものだ。

毛野は義経と静の二人の要素が一人になっていると見ているから、義経関係も重要なファクターである。

●関の山



山車の名札を読んだりしたけど、伊勢で読めば「関の山」である。

挿絵は但鳥跣六業因で跣は関である。跣六は古代の盗賊盗跣からの名前で「跣の狗 堯に吠ゆるは、跣を貴んで 堯を賤しむにあらず」の意がある。犬が人に吠えるのは、相手に対する善悪の区別があるからじゃない、ということで裏見である素藤の導入になっている。

●五輯口絵の追加。読みについては下のほうにある記事を参照。



尺八郎、力二郎図。画中の文は肇輯口絵の八郎のことだが、表面的には恋がキーワードで、力二郎が持つのは関札なので『御蟲眞勸進帳』「色手綱恋の関札」を描いているのだろう、とした。

曳手がもつ駒の手綱は白黒だが色手綱であろう。力二郎は関札を持っている。尺八郎、力二郎図の額縁は義実図の額縁に対応している。同じ図像は同じ意味なのだから、義実図のメインは鯉であるから尺八郎、力二郎図の意味するところは鯉である。鯉は恋である。

尺八郎、力二郎図は芝居絵的には「御蟲眞竹馬友達」や「春駒」であろうが、装飾をとってしまえばテーマは恋、「色手綱恋の関札」なのである。

肇輯口絵も義実を主人公に見ていたが、恋と八郎がテーマなのではないだろ

うか。口絵中でも本文中でも義実の存在は小さい。

恋と八郎といえば、濃萩の実らぬ恋がある。八犬伝中の実らぬ恋というのも元をただせば八郎故である。

八犬伝と恋。意外ではあるが、これもまた作品を動かしていく力である。

八犬伝を艶本化した『恋のやつふち`』がある。なにが恋だよ、江口本のクセに、なんてバカにしていたが、どのような形であれ八犬伝に恋を読んでいたのは江戸人だからか。だいたい「麻呂は男根の事と思ひ、金碗を金精の隠語」（『犬夷評判記』）とか思う江戸人であるから、発想の豊かさ（笑）には敵わないのである。

現代でもアニメの人気作品は同人誌等で艶本化されたりするから、人間の江口心はなにひとつ進化していないということだ。自分はもともと史学科で歴史を勉強していたのだけれど、歴史など学べば学ぶほど古代から全く変わらない、歴史から学ばない人間の愚かさを知るだけでイヤになってくるものだ。歴女たちはおめでたくてうらやましくなる。

●以前に道節母子を毒殺した錠庵は、錠を分解すれば金+定で転倒して定金、すなわち「さだかね」定包とした。これまた「合璧集」に庵とあらば、山下とある。つまり錠庵とは定包山下、山下定包という名前である。もちろん錠庵が定包の後身ということではない。山下定包という名前の男に道節が毒殺された（蘇生したけど）ということに意味がある。

定+金までは分かっていたけど、定包庵ではおかしくはないか、庵は無視するのだろうかとひっかかっていたのだ。もともと分解したり転倒（かえ）したりするのは八犬伝中に例題があり、定金までは分かっていたのだから、問題はコードだけだったのだ。錠を開ける鍵、庵を山下に変換するようなデコーダーは付け合せである。やはりコードブックが敵の手に落ちた暗号は弱い。

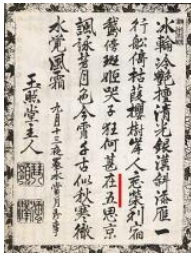
●便文とアラハ。伊勢の使。



●伊勢神宮と鶏。



●こんなところにも伊勢が。



●浜路とは「伊勢の浜路」なのだ。浜路という名前がどこからきたのか分らなかった。伊勢の浜と限定されるのだ。

浦の網乾に浜路の女松②62とは美しい松林が茂っているという二見浦海岸の景色ではないか。

と書いた。浦の網乾に浜路の女松②62、合璧集を見れば、網とあらば「あこきか浦」、「鞠」なのだ。

次に「鞠」である。以前金碗大輔—伏姫—八房と左母二郎—浜路—信乃が同じであるとした。大輔は、大として再生しなければ左母二郎と同じ人間だったのだ。網とあれば、網干左母二郎であり、口絵の金鞠大輔なのである。

伊勢ネームの左母二郎は、さもしい男ではなく、あこぎな魚男である。阿漕をモチーフとした糠助亡き後に現れたのは阿漕な男で共通項を持ちながら、善と悪の阿漕の意味で対となっている。

●江戸名所図会

妻恋大明神の社の記事のあとに「湯島天満宮 妻恋明神の北の方にあり」としている。毛野が現れた湯島天満宮も恋に関連付けられていた。

●ヨーヨーは伊勢参りのお土産

二輯は口絵から浜路の歌と言い特に「伊勢」が目だっていたが、三輯の道節が着ている着物の紋、四輯のヨーヨーと僅かだが「伊勢」が見られる。表紙に伊勢参りの犬が出てくることもあるので、他の輯でもどこかしらに「伊勢」の図像は隠れているのだろうか？

と書いた記事。分からないというのは物悲しいことである。

●以前、伏姫と八房の話は『毛吹草』の俳諧恋之詞から出来ていて、馬琴は伏姫と八房の話を恋物語として書いている、と書いた。その時は思いつきだったし、馬琴が恋かあ？というこっちが恥ずかしくなる先入観もあったのでそこまですておいたが、昨日みた通り馬琴は恋物語を書いているのである。里見と

胙としての鯉の話が先か恋の言葉が先かはわからないが、濃菰の「濃い」も雛衣がこい、「恋」なのも恋物語であるからなのだ。ただ八犬伝での恋は胙として犠牲になることも意味している。八犬伝と恋か、また目から鱗がボロボロ落ちた気がする。

雛衣の父の名が犬村蟹守儀清、犠牲であるのも、蟹は犬を守るために犠牲となる名詮自性である。犬村蟹守儀清の娘である雛衣は恋のためだけではなく、蟹の父の代わりに犠牲となったのである。

婦幼のための勧善懲悪、仁義八行に囚われて八犬伝を読むことがどれだけ内容を矮小化し、自らを視野狭窄にしていたか。常識とは何か、通説とは何か、誰が言い出したものなのか。明治という時代の空気をそのままに、坪内逍遙が八犬士を「仁義八行の化け物」と言わざるを得なかったことを無批判に金科玉条としていて良いのか。ストーリーを追うだけの文面の仮話で八犬伝を読み、評価するのはもう終わりである。馬琴の知的遊戯三昧につきあって遊び尽くすのが八犬伝の「読み」の一つである。付けくわえれば、一部分だけ取り上げて馬琴は言表化するとか、しないとかどっちかに決めつけようとする議論も的はずれである。

とは言ってもこんなことに気付くのに五年もかかっているのだから、まだまだである。

●確かに万葉集を引いて論じるのも良いが、二十四回の作者云を読めば「按ずるにかには（神宮）は、梶原を訛れるなり」②76とあるから梶が分かっている、ここで稽平と七夕のヒントは出ているのである。馬琴が按じた中にもう一つ面白いことがある。かには梶になるということで、かにかじが通じることによるのだろう。蟹は梶でもあるということだ。神宮稽平には忠臣であることと七夕の意味があった。馬琴がとってつけたように出すヒントをちゃんと読まないといけない。このように色々な意味は一つの塊となっているから、どのような視点で読んでもそれなりに解釈できる。八犬伝とは秩序ある混沌なのである。

●「合璧集」に七夕とあらば「やすのかはら」とある。神宮（河原）の稽平も万葉集巻第十秋の雑歌七夕由来の名前だったのだ。故にそのエピソードにも七夕がからんでくるのである。

この流れで巻第十を読んでいくと、

天の原い行きて射むと白真弓ひきて隠せる月人壮子（2051）

に該当するのが何か分かるだろう。第五輯口絵、丁田町進と神宮稽平の「鯨

射る 海の猟夫かしら真弓 張りある心 いさ引いて見ん」である。漁民の稽平が弓を持っているのもそのせいだろう。稽平の絵と伊勢は関係ないが、隣の舵九郎が持っている鯨包丁と鯨射るで関連付けている。さらに気付いてみれば舵九郎の舵は梶だから七夕由来である。舵九郎に恋があるのかというと、妙真への執着が恋なのだが、本人が言うように「さる緩やかなる恋」②365ではないのである。ついでに言えば、「百夜の情深草の例」という妙真の台詞は浜路を思ふ宮六の口絵「軒のつまに 鮑の貝の片思ひ 百夜釣られし 雪の下草」に対応している。図像的には「艶曲を」と「奸智を」が対応している。

九輯下の下の上口絵で分かったように、当該口絵のキーも持ち物で、キャプションの和歌や漢詩をそのままで解釈しようとするは無理があるのは見てきたとおりである。

同じく第五輯口絵。越杉田駄一郎図の鷹。鷹とあれば恋で、隣の額の根五平が持っているものが苧環で七夕を表す。和歌は稽平を詠んでいるので、音音と稽平の変わらぬ恋を表している。

同じく尺八郎、力二郎図。画中の文は肇輯口絵の八郎のことだが、表面的には恋がキーワードで、力二郎が持つのは関札なので「色手綱恋の関札」を描いているのだろう。

口絵を役者絵の看板に仕立てたのは絵師で、それでもって口絵を看板としてみるのではなく、その装飾をとっても残る画中の人物が持つ物などをみることが大事だ。

●垂井とはいいつつも、小文吾が大石をどかして水が湧き出したというエピソード（⑩200）が「垂水〔割註〕津の南にあり。垂水とは水の涌地の古名なり」ということから垂水なのだと分かる。

『牽牛織女願絲竹』

表紙から瓢箪がでてくるし、口絵の椀久は笹飾りと瓢箪を持っている。その瓢箪からは駒ならぬ馬に乗った猿が出てきている。勿論これは馬琴作品では言うまでもない意馬心猿である。馬琴は瓢箪に二星が会う七夕という行事から拡大して、そこから派生する意馬心猿という意味を持たせているのではないか。そう考えると下でみた相撲取りも含めて、瓢箪柄の小文吾があれやこれやと思い悩む人物に設定されているのも分かってくる。七夕が意馬心猿の意味であれば、七夕の夜に切腹して死ぬ八郎から始る、七夕に関する諸々のエピソードが共通の意味をもったものと理解できる。

●小文吾のモデルは谷風である。知見を加味すると、谷風梶之助の梶は火事もさることながら、梶の葉でキーの一つである七夕が導かれる。「江戸百」の「市中繁栄七夕祭」で空に西瓜の飾りが風にはためいているのを面白く見ていたが、もう一つ目をひくものがある。瓢箪である。小文吾はなぜ瓢箪柄の着物なのか分からなかったが、ここに答えがありそうである。

七夕というのはキーワードとして筆端から出てくるのだから、瓢箪⇒七夕⇒梶の連想で、小文吾には瓢箪が付け合わせで、相撲取りで梶といえば谷風梶之助であろう。と「市中繁栄七夕祭」を見て思った次第。テレビで今橋理子氏が北斎の「西瓜図」に七夕を読んだ説を語っているのを偶然に見なければ、こういう考え方は全くできなかったろう。夜は八犬伝（関係）を読んでいるか、こんな雑文を書いているかでパソコンに向かっているからあまりテレビは観ていないのだが、その日に限ってチャンネルをあれこれ変えていて「北斎」の字幕にひっかかったたのだから不思議なものである。

●大津で思い出した、浜田氏「南総里見八犬伝」の口絵・挿絵における芝居絵的考察 から伊勢と鬼を抜き出してみる。

○安西景連（中略）平清盛もかかる扮装をする（文政元年 月中村座、伊勢平氏摂神風）

○額蔵は大津絵の槍持奴の姿。

○力二郎は市川団十郎の鬼童丸によく似る。

○毛野は田楽といいながら傀儡子の姿である。

額蔵も伊勢であった。傀儡子には鬼があるというだけだが加えておく。さて問題なのは筆端から出てくる（伊勢平氏摂神風）である。平清盛もなので限定はできないということにしておく。

●図会巻二 手原〔割註〕又俗手孕村ともいふ。

●図会巻一「粟津合戦」の挿絵も形を変えながら八犬伝のいろいろなところで転用されている。粟津の粟が安房になる。挿絵の文は平家物語であり、道節の家紋（九の下の中総目録）と一致する。

●彼関寺の牛仏は、載て栄華物語（①209）

「伊勢参宮 卷之一」長安寺

或云、小町関寺に住し事何の書にも見る事なし。関寺小町といふ謡曲は、小町になぞらへて、人間の盛衰をさとさしめんがために作りたる、作者の寓言なるべし。

というように、伏姫の話は馬琴が「人間の盛衰をさとさしめんがために作りたる」寓言なのである。『栄華物語』とかどこからもってくるのかと思っていたが、「参宮」に合わせていけばヒントはあるのだ。同じp209に「小野小

町が花に比し」とあり関寺と小町はつながるようになっている。

●今まで雑文中にバラバラであったものが、伊勢が分かれるとそれに引き寄せられるようだ。

ゝ大のモデルは伊勢出身で甲斐に縁をもち、南北両朝の戦死者を弔う天竜寺の開山で夢のひとつである夢窓 疎石であるとした可能性は高くなっていく。『太平記』と八犬伝との関係も周知の如くであり、甲斐での信乃が読むのも『太平記』であり、ゝ大が中継基地としていたのも甲斐の禅寺である。上杉に対して、武田は悪いようには書かれていない。

ついでに言えば、結城法要を邪魔しようとする徳用らは、龍の衝立に背を向けている（百二十五回挿絵）、つまり天竜寺法要に反対した比叡山の僧兵なのであるが、徳用の「用」から三をとってしまうと「徳川」になるのも恐ろしい。

馬琴は統制にかからないように細心の注意を払っていたというから、そんな馬琴なら徳川批判は書かないだろうという裏をかけた執筆かもしれない。国家安康に言いがかりをつけて豊臣を滅ぼした徳川なら徳用から三をひいたくらいが調度良いと思ったかもしれない。さらに推測をすれば打ち落とされた桐一葉とは、砲撃され落城した大阪城、豊臣家かもしれないし、芳流閣の芳は豊かもしれない。

●一昨日、肇輯と伊勢が出てくる二輯との変化は、文化十二年五月、息興継が山青堂に同行して伊勢参宮をしたということが契機になっていると述べた。おそらくそれを裏付けるのが肇輯第九回の次の文である。

持氏の季子を成氏といふ。（中略）成氏の事九代記に見えたり。この下に話なし。①159。

こう書いていた時期の馬琴の構想には、『伊勢音頭恋寝刃』を典拠とする信乃が成氏に村雨を献上する話、それにまつわる宝刀のすり替えという話はなかったのだ。「伊勢」のインスピレーションの獲得こそが「全本となさんこと、両三年の程」①5であった当初の計画を大きく変更させる原因であったと推測できる。

馬琴が肇輯と二輯の間に得た「伊勢」というキーワードの導入は以後の八犬伝の構想、構成全体の核となる重要なものだったのである。さらに言葉は俳諧の付け合せによるイメージの連鎖で別の言葉に置き換えられ暗号化される。それらは融合し、まさに核分裂のような力で「両三年の程」で終わるはずだった八犬伝を巨大化させていくことになる。

●加賀の白山

前に日本地図を転倒して能登半島と房総半島は似ているとか、前田は梅鉢紋とか知り合いがいるとか考えながら体を洗っていて、泡、安房とも考えた。加賀といえば珠姫だ。珠だから関係あるのか？と髪を洗いながら伊勢守に安房守……八房と安房は房つながりなのは考えるまでもなく見ていればわかる。安房……やすふさ、すつつが通うので八房である。八房とは安房なのだ。以前八犬伝は結城系と安房系が衝突し和解しながら物語が進むと考えた。筆口絵の八人は六男二女ではなく、上の四人は伏姫、下の四人は八房であるとした。とすれば、伏姫は結城、八房は安房を表し、その和解の象徴としての八犬士誕生なのである。

小文吾と房八郎。

この二人が争い、ついに房八が小文吾に斬られるのは先祖の贖罪が表向きだが、背後には前身と後身同士の関係がある。構成としては小文吾—義実、房八—八房の関係となる。安房内での先祖の犯した罪に対する和解とみられるが、結城と安房の衝突と和解の結果として親兵衛は犬士として再生するのである。和解の象徴の親兵衛であるから犬士同士の衝突はない。

●第八輯下口絵

魔魅穴鷺鰯坊 冠松鬼四郎

鬼四郎などと分かりやすいではないか、と思っているとちゃんと伊勢もある。

『北窓瑣談』後編巻二

寛政九年丁巳九月、伊勢国櫛田にて異獣を得たり。（中略）四足の爪甚だ鋭にて、鷺の爪に似たり。

馬琴は八犬伝第八輯巻第五附録で「まみ」の考証を詳しくしているが、まみの四足の爪が「甚だ鋭にて、鷺の爪に似」ているとは書いていない。しかし、口絵を見れば爪は鷺のようだ。魔魅穴鷺鰯坊とまみは重なって一体化しているように見える。こう見ると馬琴は伊勢国櫛田限定の異獣「マミ」を表そうとしているのではないだろうか。伊勢の鬼、ここまでやるかという気分である。

二輯の口絵番作、亀篠図も伊勢の鬼である。

●第三輯道節、見八口絵。これまでにいろいろと解釈してみたが、伊勢をキーワードにすると、

宵のまに身を投げはつる夏虫は燃えてや人に逢ふと聞きけむ
という伊勢の和歌がある。

道節も見八も信乃も飛んで火に入る夏の虫だが、三輯口絵の共通項は浜路であり、道節が着る花菱も伊勢神宮の紋であることも加えれば、伊勢のキーワードを使った和歌で浜路を詠んだ絵と解釈するほうがすっきりとする。画中の火

ではないが、田単とも剣術とも違う別の歌が炙り出されてくるのである。

次の見開きの二枚は「阿漕」である。宮六の阿漕は本当？の意味での阿漕である。三輯口絵もすべて伊勢であった。

●神宮のヤス平だったのが梶原（かには）に変わったのは何故か。蟹だったのが梶の葉で七夕と関連付けられているのだろうか。神官梶野葉門という名前も出てくる。親兵衛と七夕と関係があるのか？

●第百四回を読む。

蛸船貝六 小水門目

貝六 目

目 貝六⇒六貝目

六回目を読むと、降る玉梓を八郎に説き伏せられて処刑した義実がいる。百四回では伏姫の「降るを殺さず」との教えを守る親兵衛がいる。反対の六回を導くことで、正しいだけではない義実への批判が陰微に語られる。義実と素藤との対は善悪不二なのである。

●下絵を見ると「富山姫の神遷座行列」は「御遷宮」のように描かれていない。きっと下絵を見た路が「御遷宮」の絵とは随分違いますよ、と馬琴にチクったのだろう。完成画はほぼ「御遷宮」になっている。絵師は「御遷宮」と同じじゃなければ意味がないということを読めなかったのだろう。

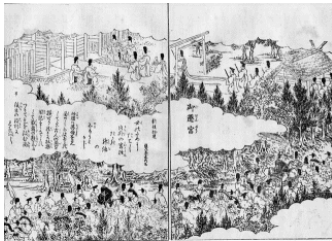
●同じ図像は同じ意味をもつ。

「富山姫の神遷座行列」は『伊勢参宮名所図会』の「御遷宮」のパクリだね。成る程ねえ。この時には馬琴は失明しているから、『伊勢参宮名所図会』の「御遷宮」の挿絵を参考にしてくれと注文したのだろう。馬琴が描くイメージは「伊勢の御遷宮」なのである。伊勢だけで言うのなら、伏姫は天照大御神である。この流れでいくと、親兵衛は右手に宝棒、左手に宝珠を持つ雨宝童子になる。親兵衛が十六、七歳に見えるのも雨宝童子が天照十六歳の姿とされていることによるだろう。親兵衛が伏姫からもらった薬も書いてはいないが、伊勢の神仙丸であるはず。

伊勢神宮の流れに乗ると、御祓大麻は当麻で中将姫を連想させる。南総などと言ってはいるが本質は伊勢である。伊勢参りの犬たちがたどりつくところはやはり伊勢神宮しかないのである。富山は富士山であるという説に対して（というか富山とはなにかを論じたものを他に知らない）、富山は伊勢神宮であると提起しておこう。

管領軍＝元寇、安房＝日本とすると、馬琴が描く安房とは富士山があり天竜

川が流れ、伊勢神宮があるという、まさに神風が吹く日本そのものである。八犬伝は日本そして日本人はこうあるべきだ、という馬琴の理想、夢ではあるが、所詮夢は夢。夢に始まり、夢に終わる八犬伝。ユートピア安房でさえ滅びる。夢が覚めれば現実にかえり、現実をみつめるしかない馬琴なのである。



鬼を追っていたはずの自分も、結局は伊勢神宮に辿り着いたということだ。

● 簀大刀自。

『伊勢参宮名所図会』巻之五、八十末社に「桜大刀自神社」がある。桜に対する梅であろうし、伊勢は海老だし、簀の梅、簀大刀自というように桜が簀に変換されたのではないだろうか。簀大刀自から桜大刀自を連想できるのは、「名所図会」を読んだものか、地元の篠斎くらいなものだろう。

● 八犬

一人は八人、八人は一人

まるで“*One for All, All for One*”のようだ。まあ八犬伝の場合の一人とは金碗八郎のことだけど。八犬士が全員金碗姓になってしまうのも、元に戻ったというだけのことである。

● 『伊勢参宮名所図会』を読んでいたら、巻三に西行法師の挿絵がある。下の太字のことが描いてある。

西行法師が火之御子社の前に来て、子供達が桜の木に登るのを見て「猿稚児と見るより早く木に登る」（猿の子供がいると見るや、素速く木に登ってしまったぞ）とからかうと「犬のようなる法師きたれば」（猿の大敵である犬みたいに薄汚れた坊主が来たからだよ）と返された。

木に登った猿、そして犬。

八十八回、蟹目上の飼い猿が木に登って紐がからまり死にそうになっていたのを毛野が助けたエピソードである。この猿「猛可に悶搔騒」⑤ 1 3 2 いて逃げ出し、木に登ってしまったのである。猿が突然もがき騒ぎだしたのは何故か。西行の話がヒントである。そこに犬の毛野がいたからである。犬猿の仲、猿蟹がベースなのは誰が見てもわかる。猿は蟹目上の心猿を表すものだろうが、馬

琴はそこから一步進めて、西行のエピソードを「伊勢」の中から拾い出し紛れ込ませている。

●赤岩が白山と対だとすると、赤山かなとウィキで、

赤山禪院（せきざんぜんいん）は、京都市左京区修学院にある天台宗の寺院。延暦寺の別院（塔頭）の一つ。本尊は泰山府君（赤山大明神）。京都御所から見て表鬼門の方角（東北）に当たるため、方除けの神として、古来信仰を集めた。拝殿の屋根の上には、御所の東北角・猿ヶ辻の猿と対応して、御幣と鈴を持った猿が安置されている。

比叡山延暦寺の千日回峰行においては、そのうち百日の間、比叡山から雲母坂を登降する「赤山苦行」と称する荒行がある。これは、赤山大明神に対して花を供するために、毎日、比叡山中の行者道に倍する山道を高下するものである。現在では、境内の福祿寿殿が、「都七福神」の一つとされている。また、紅葉の名所でもある。

とある。まずは八犬伝のキーでもある丑寅（鬼門の方角（東北））。福祿寿。面白いのは「赤山苦行」である。あと猿が安置されているというと、八犬伝では「心の猿」である。

ここまで調べたら馬琴の『鞆旅漫録』を見なければいけない。ありました。随筆大成Ⅰ期 1 P239。

近年京にてはやり神は、赤山明神と、深砂大王なり。赤山は叡山の麓きらら越の丑寅三四町にあり。深砂は上醍醐にあり。此神去年開帳のはやり神なりといふ。神体鬼形画幅なり。

赤山明神と深砂大王を合体させると丑寅と鬼形というキーワードを抽出できる。

●近江の三上山は出来のわるき小富士なり、と形を描いている。馬琴がイメージする基本は富士山らしい。

●匠作・番作が番匠。番匠は大工。大工は木工で木工作。木工はもっこう。もっこうは木瓜。亀篠が鬼殺しであったように、表の名詮自性は馬琴お得意のはぐらかしであることは分かっている。コードブックも分かっている。キーワードも分かっている。この方法で多くの人が読んでいけば全注釈ではなく、図像を含めた暗号としての八犬伝の全解説は意外に早いかもしれない。手元にある『日本古典鑑賞講座 馬琴』の頭注のような語義解釈だけでは八犬伝を読んだうちに入らないことは確かである。

●百六十一回をまだ読む。

卑下する莊介。（⑨ 150）やはり幼少期の体験がトラウマになっているらしい。莊介が卑下したあとに、プライドを捨て、腰をかがめるようにして相手におもねるといった小腰小権太表練（ここしのこごんたおもねり）⑨ 151 という名前がすぐに出てくる。



額蔵時代の莊介。まさか小腰小権太表練はこの挿絵？ってことはないだろう。それは遠すぎると言われるだろう。

●百六十一回をまだ読む。

重時という名前。麻呂と安西の過去と現在の時を重ねる人。

●百六十一回をまだ読む。

鍛冶屋の親父の名前が木瓜八。鍛冶は梶。ぼけはちは「老耄て鈍かる本性」が名詮自性のように書いてあるが、これも「～とのみ思わせる」馬琴のテクニクである。

甲斐の木工作が大工で番匠である故に信乃と関わりをもつのはみた。ぼけはちなどと振り仮名を振っているが、木瓜とは「もっこう」で木工である。木瓜八が再太郎の先祖から伝えられた両刀を再太郎に渡す場面が匠作・番作・信乃、義理の親子の別れは義実との対になっていることが分かる。再は再びで又である。再太郎とは父季基と別れた時の、又太郎御曹司（① 18）こと義実との対の名前である。ボケて木瓜八かあ、なんて名詮自性で無邪気に喜んでいた過去の自分はダメダメである。

●「菜草」に梶の鞠があるからといって馬琴の「歳時記」にあるとは限らないので、確かめるとなかった。馬琴の「歳時記」をみていて面白いことに気付いた。富貴草とは牡丹のことだけだと決めつけるほどでもなく思っていた。ところが稲の花の項に、富貴草とある。毛野の弟の母は稲城である。音読みがとおじょうで東条つながりと思っていたがそれだけではないようだ。稲の花＝富貴草＝牡丹となる。信乃の飼犬与四郎が四白で夜白草＝牡丹であったところから、信乃、毛野の共通項に牡丹様の痣以外にも牡丹があった。

信乃・手束の周辺の牡丹（与四郎）

毛野・調布の周辺の牡丹（稲城）

人間の世四郎は道節と組んでいた時は稽平で牡丹男ではなかった。牡丹男になった稽平が次に現れた時は親兵衛と一緒にだった。構造的に親兵衛は七犬士の総集編なので、信乃と与四郎、親兵衛と世四郎という関係で対になっている。

●百六十一回を読む。

鍛冶が出てくる。すでに鍛冶＝かじ＝梶と分かっているので「葉草」で梶をみると七夕に関係する梶の鞠がある。鍛冶屋の屋号は丸屋である。丸は鞠に通じるのだから梶の鞠である。素藤のところで神官梶野葉門なる者ものも登場するので、八郎が切腹した日、荒芽山など七夕も見え隠れしながら重要そうである。七夕というよりは星だろうけど。

●肇輯口絵を鬼でみてみよう。

一枚目。金椀八郎は曳く蟹が鬼蟹。

二枚目。玉梓は鸞の着物を着ているから、鸞＝嘘＝鬼。玉梓は「死しては祀らざる鬼」（①109）である

三枚目。四枚目の八房が啜える首との関係から、安西景連は鬼車。

四枚目。五枚目。役の行者との関連から、伏姫・大輔は前鬼・後鬼とも言えるような。

六枚目。＼大は鬼。

●

右下に一人いる子は「鬼」である。つまり八犬伝では、＼大が鬼である。



2010/10/17

●俺這蝙蝠，但是有鬼的所在，

おれの蝙蝠は鬼の居場所を知っている。とでも訳すのだろうか。蝙蝠と鬼というのもなんらかの繋がりがあるのだろうか。そうすると信乃・浜路図の蝙蝠の額も嗚呼善の着物の柄も鬼の線で考えることができる。

●毛野の台詞中に「高手（じょうず）に鬼（うそ）を搗倣（つきなら）ひ」④ 369とある。鬼の意味にもう一つ「嘘」を加えよう。鬼自体が嘘なものであると言っちゃあお終いである。●搗鬼（そらごと）④300、343、380「そらごと」というと虚談、虚語が多く使われるなかで、この「搗鬼」には特別な意味があるのだろうか。鬼が含まれていることが気になる。

『斬鬼伝』第一回を読んで（？）いたら、いろいろな鬼を列挙した中に「搗大鬼」とあったからだ。鬼が嘘なら大嘘を搗くとなる。ここでまた思い出したのが馬加大記である。記は鬼であるから大鬼となるとしたのは前回まで、大記とは大鬼、大嘘という名前でもあるのだ。大鬼で大嘘をつく男、これが大記の名詮自性である。

『斬鬼伝』ネタ。

便忙似喪家之犬。急急若漏網之魚。

これも網干左母二郎が、さもじ＝魚＝網干魚男でないと意味がない。

『斬鬼伝』ネタ。

願借嫦娥消寂寞。

嫦娥というだけで墓穴と正月（浜路）。寂寞といえば寂寞道人肩柳こと道節。

2010/10/16

●角太郎の玉は、実母が白山権現の石を取り寄せたところ礼の玉だったというもの。



江戸時代にもこの地名だったかは知らないが、赤岩がある。

●八犬伝をイメージ連鎖の連結から成る暗号とした場合、稗史七法則は「反復

は機密保護の敵」という点において欠陥があるといえる。文章、図像の反復は八犬伝を「読む」キーとなっているからだ。ただ馬琴が目指したものが「機密保護」ではなく、逆に分かって欲しいという顕示欲があることも確かだろう。馬琴にとって解かれたくない暗号は、解かれたくない相手に解かれなければ意味はないのである。

2010/10/15

●毛野の兄栗飯原夢之助。栗は安房で泡だから夢之助か。

毛野の姉になる玉枕（たまくら）は、夢を食べるとされる「獏（ばく）」をかたどった枕「獏頭の玉枕」。

安房国も泡の国、泡沫無幻だったと思えば、夢物語の八犬伝の終わり方にも肯けるところがある。●そういえば亀篠は鬼篠だったな、と鬼笹を調べていたら鬼の修正会があった。で、この口絵を思い出した。



第九輯下の下乙上の口絵。額縁は笹。

見開き一枚目には鬼のしこ草。二枚目は下の口絵の鬼の腕でも見た、箕田源二兵衛と角樽。三枚目が上の小才二。

三枚ともに共通項は鬼だったのだ。最初に白地蔵と言ってるだけあって、馬琴のかくれんぼ、鬼探しは徹底しているようだ。分かってみるとほんと馬琴ってのは変なやつである。江戸のホモルーデンスとかっこつけて呼んであげたけど、実に変なやつである。

2010/10/14

●正月に野大根。 正月（浜路）の兄道節の主君は練馬倍盛。

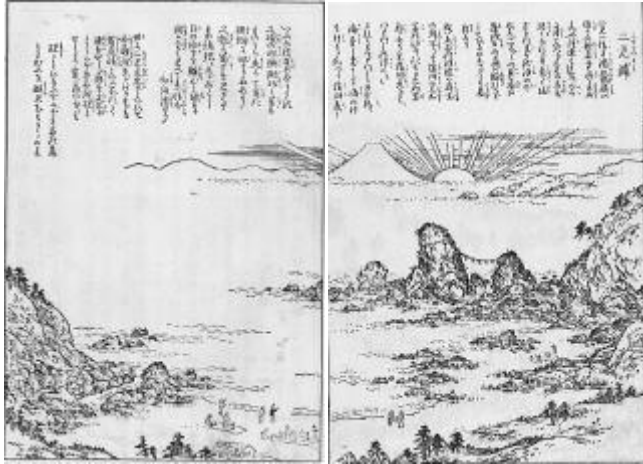
正月に白梅。白梅は飛梅までは毛吹。飛梅といえば太宰府天満宮、太宰府天満宮といえば正月の鸞替え神事。鸞替え神事といえば「袖の鸞」の玉梓。玉梓といえば怨霊。怨霊と言えは菅原道真。菅原道真といえば浜路の挿絵にある管家。管家といえば梅。梅といえば浜路の着物。浜路は正月。

●伊勢と言ったらこの人を忘れていた。犬飼現八の実父糠助である。糠助の密漁話の典拠は「阿漕」である。

現八にも「伊勢の影」が纏わりついていたのである。

今のところ親または本人が伊勢関係なのは、信乃、角太郎、現八である。

●『伊勢参宮名所図会』二見浦



江戸時代だから他のどこからでも富士山は見えただろうけど、夫婦岩、富士山、朝日が印象的に描いてある。

2010/10/12

●軒のつまに あはひの貝の片おもひ もも夜つられし雪のしたくさ
宮六の口絵に書かれた歌。

軒（のき）は「けん」と読む。雪が出てくるので、けんは「犬」である。犬のつまには「犬の妻に」で、もも夜は深草の少将、釣られしは、待たされる。通して読むと、

宮六は犬塚信乃の妻浜路に片思い。深草の少将のように百夜待ったってムダ。あんたは信乃よりも下なんだから。

となる。

と書いた。

古典文学大系「歌舞伎脚本集 下」補注87に

深草墨染町にあったという伝説上の桜。藤原基経の死をいたんで上野の峯雄が「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（「古今集」）と詠じたところ、墨染色に咲いたという。

とある。浜路関連の歌に深草の少将が出てくるのは墨染桜を出すためなのだ。墨染桜で思い出されるのは肇輯口絵の玉梓である。図像的に伏姫と黒白の対にするためだけの桜ではなかったのである。浜路関連のもも夜は深草、玉梓の着物の薄墨桜柄からも深草が読める。これまで見てきたように玉梓＝浜路とする事例は数多いのである。つまり馬琴は、八房は玉梓の後身であるとしたのは文面の仮話であることのヒントを浜路が死ぬまでに数多く残しているというこ

とになる。

●天保期の馬琴は俳諧には眼もくれていないように、あれほど熱心であった俳諧関係の書物を、文化以降、購入ないし筆写していない（『曲亭蔵書目録』より見た馬琴の俳諧 p 334）

おそらく馬琴は俳諧やその付合せ集を読本に利用することで作品を重層化、暗号化できることに気付いたので、直接的な俳諧への興味が薄れてしまったのではないか。

2010/10/11

●以前、八犬伝が演劇を取り入れるのはその限界ではなく、八犬伝の文章とモノトーンの挿絵に音と色をもたらすものとして、そのイメージの拡がり进行评估した。そこで「うち落す鼓のさへや桐一葉」というのは、歌舞伎の効果音みたいなことを言っているのではないか、と考えた。その時はそこまでだったので、もう一度考えてみる。

鼓を「鳴物」雨・雪・風・波などの自然現象、幽霊などの出現を鼓・笛・太鼓などを使って表現する」ものとする、信乃、現八の闘争図とは噛み合わない。

ふと見た歌舞伎用語解説に「早太鼓」早間に打つ太鼓で、捕り物や大立ち回りの場面、捕り手や軍勢などがかけつける場面に用いる、とある。とすると、信乃を敵がたの間諜と疑い、成氏が「彼撃留よ」と下知②180、「君命によって」の挿絵から輯をまたいだ第四輯、芳流閣上の闘い（うち落す鼓のさへや桐一葉）ののちに屋根から水際の子船に転がり落ちた信乃と現八が「往方もしらず」なった②200場面を「早太鼓」の鼓の冴えと表現しているのだろう。

「うち落す鼓のさへや桐一葉」にもいろんな解釈を試みたが、うち落すとは打ち音す、早いテンポで鼓を打つ音が冴える中で一人戦う信乃（桐一葉＝桐紋の信乃）をいうのではないだろうか。本文と「君命によって」「うち落す」の挿絵はそういうイメージで読むことを馬琴は求めているもの考える。



これは八犬伝のずっとあとの「弁天小僧」

(こっちのほうは八犬伝のイメージを借りているのだろう)の場面だが、



歌舞伎に馴染んだ読者には、



この挿絵に声、音、色、空気を見ることが

できたのではないだろうか。

●鬼殺しの酒が分かってから、それ以前とは読みが全く違うものになった。本文だけでは図像は解釈できないことも分かった。勧善懲悪はただ婦幼のためのストーリーの流れにすぎなかった。八犬伝は馬琴自ら、また知音にあてた文字通りの遊戯三昧の書なのである。

ただ知音にあてただけではないのも勿論ある。五輯口絵のように額縁の龍と雲で義実、額縁の中に描かれた人物の力二郎、尺八郎、曳手、単節で「蟹を曳く人よ、八郎」と肇輯口絵を読んだものもある。蟹の八郎は忠臣である。現八

郎、力二郎（蟹男）、尺八郎と八郎を繰り返すことでその重要性和関連性を示しているのである。

信乃・浜路図のように本人の前身を表しているのもある。

馬琴はぼやいているほどには挿絵などをいらないものだとは思っていない。図像は看板ではなく「読める」ように仕組まれているからである。どこに何が描かれていると言った法則らしきものはないが、図像には本文をそのまま読んでいっただけでは理解し得ない事柄、画中の文が描かれている。

下絵は馬琴だけれど本画は絵師なので、良い絵ならば絵師の評価になってしまい、絵の駄目なところは自分のせいにされてしまう。そういった巧拙を批評するような目で絵を見て本文が分かった気になられては困るのだ。なによりも精魂傾けて書いた本文よりも先に、読まれないであろう絵を見られるのが厭なのである。

●毛野の父栗飯原首胤度。栗が安房か？飯に蠅の付合の通り、馬加蠅六郎は栗飯原姓であったはずの毛野に殺されている、と書いた。栗が安房か？とクエスチョンマークだったが、栗と安房は同訓にて（⑨ 3 4 2）とある。

●六斎市

六＝三＋三＝ささ＝篠。篠斎？

2010/10/09

●伊勢音頭

大学 角太郎 一角仙人

なんと山の中の庚申山にも「伊勢」の影が。

殿村安守、殿村篠斎

江戸後期の国学者・歌人。伊勢松坂の人。姓は大神、通称助吉・佐吾兵、名は周表、号に篠斎・篠舎・三枝園・蝙蝠磨等。本居宣長の門に学び、宣長歿後は後嗣の春庭の後見となる。滝沢馬琴と親交し、『八犬伝』の評判記『犬夷評判記』などの著がある。弘化4年(1847)歿、69才。（コトバンク <http://kotobank.jp/word/%E6%AE%BF%E6%9D%91%E5%AE%89%E5%AE%88> より引用）

八犬伝とは篠斎との遊戯三昧の書なのか？こうして八犬伝を図像も含めて読んでくると、馬琴が相手にしていたのは一般市民であるという考え方は完全に的外れであると分かる。現在のように古典や漢籍が簡単に手に入らない時代（ましてやインターネットはない！）、馬琴が真の読者として期待していたのは国

学者・歌人レベルの人達である。



以前この口絵は茨木童子、鬼の腕と読んだ。伊勢音頭を鍵にすると、

貢 イエ、伯母御が見えましたは、アノそれ、オ、鬼の腕を見たいとおっしゃって、

彦太 羅生門があきれるわい。

であろう。鬼の腕（2010/01/22参照）を持っているのは河堀刀祢かわほりとの、つまり蝙蝠殿で、対になっているのは里見次磨である。箕田馭蘭二圓通（みたのぎょらんじまろみち）と対になる山鳩は本を見せている。上の二人で伊勢の蝙蝠磨となり、下の二人で読んでみて御覧、つまり「伊勢の蝙蝠磨殿、読んでみて御覧」という篠斎に対する謎かけとなっているのだ。八犬伝とは結構馬琴の個人的なものである。つまり篠斎自身が解けなければ、一般人は篠斎が蝙蝠磨など知る由もなく、そういった事情が分かるようになった百年後くらいでないと読めないということだ。

●馬琴は伊勢に行ったことがあるなと『羈旅漫録』の伊勢の個所を読んでいたら面白い名前を見つけた。勢州追分内日泉村の「石清水亀六」である。訪ねたが留守だったようだ。

面白いのは亀六である。亀篠の名前は、篠は三三で $3+3=6$ で亀六である。とまず読んだ。亀はき＝鬼、六は戮で殺すで亀篠は鬼殺しであるとした。角樽から直接酒を流しこまれているのも「鬼殺し」という酒からと推測した。二輯口絵が伊勢尽くしであるのは、ひとつには会えなかった亀六に対するあて付けかもしれない。ただ亀篠＝亀六で出したとしたら善意ではない。それが分かるとしたら篠斎だけだろう。伊勢まで行ったのに留守だったのを根にもっていたとか馬琴ならあり得る話である。

海老調べついでに『大和本草』を眺めていたら、鬼鯛があった。鬼なので読むと石の如く堅いとある。三輯口絵の糠助、浜路の婚礼用の籠に入った鯛をさばこうとしているのか、短刀の刃を確かめるように見ている。そのままいい

のだろうけど、意味はない。つまり、石のように堅い鬼鯛をさばくので刃は大丈夫かな、と確かめていると見るのが良い。お目出度い魚だが鬼なのである。

伊勢の海女ついで。

柴田光彦『南総里見八犬伝』口絵・挿絵「讃」抜書抄に「いせのあまりかつきあけつゝかたおもひ あハひの玉の輿にあのりそ」とある。「いせのあまり」では意味をなさないと思うし、「あのりそ」も「なのりそ」でないと文法上も意味をなさないのではないか。

2010/10/08

●下記4の伊勢と浜路で気がついた。浜路とは「伊勢の浜路」なのだ。浜路という名前がどこからきたのか分からなかった。伊勢の浜と限定されるのだ。

浦の網乾に浜路の女松②62とは美しい松林が茂っているという二見浦海岸の景色ではないか。

夫婦岩、二見輿玉神社など八犬伝雑文1の昔から注目していたのに、いろいろと結びつかなかった。結びつかない時は何を見ても結びつかないものである。雑文1なんてもう古過ぎるなんて思っていたが、なかなか役にたつものである。

額蔵が抱く子は夕顔なのだから、夕顔の団扇をもつ浜路なのである。

2010/10/07

●浜路が持つ夕顔の団扇から読めることを追加しておく。

『和漢三才図会』

有朝顔昼顔夕顔之三品。朝顔（牽牛花也）昼顔（旋花也）夕顔（瓠瓜之花）皆以其花盛時称之。

最近注目の夕顔である。

夕顔は瓠瓜の花で、白い花を咲かせる。これは玉梓が義実、八郎に呪いの言葉を放った時の「花の顔朱を沃ぎ、瓠核のごとき齒を切て」①114という姿である。花、瓠核ということで玉梓から夕顔を連想することは可能である。玉梓の朱を沃ぐ前の「花の顔」が夕顔のような白であったことも想像できるだろう。

浜路がもつ情報量は、実は道節の妹であったとか表面的には少ないが、図像から読める浜路の情報量は思っていたよりも多い。全てとは思わないが、画中の文とは前半では特に本文では書けないことを描いている。まあ浜路が死んでしまうと重要な前身—後身がいなくなることも画中の文の面白さが減ってくることに影響があると考え。浜路には月が付合わせだったような、前身のヒントになる図像を繰り返し出すほどの重要な人物はいなくなってしまうのである。

2010/10/05

●馬琴の思考法の原点には少年時から親しんできた俳諧がある。馬琴はひとつの言葉から次の言葉を連想するのに付合を使い話を作っている。

「合璧集」かたなとあらば。竹・まもり・ひし・夢にみる・うつはり・こし・つか・さや・ぬく。

からの連想で（番作は）刀子を撈りとり、梁に釣し大竹（①231）に隠した村雨を信乃に譲るために取り出した場面が付合が使われている。

また言葉や図像の意味を別のものに置き換えるのにも付合を使っている。いわゆるコードである。

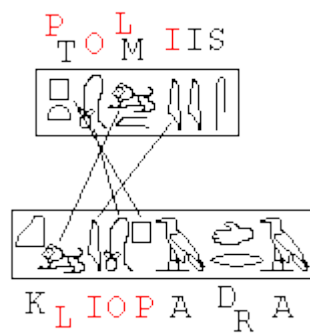
2010/01/05に載せた七輯総目録にある犬の張子。この箱型の張子は嫁入り道具である。この箱型が使われるのが二輯表紙である。他の輯の表紙が初版と全く違うものになるのがある中で、二輯表紙はデザインこそ変われ箱型張子というモチーフに変更はない。「毛吹」の張子には雛・沈香・たばこ・婦入（よめいり）がある。つまり二輯表紙には伏姫の嫁入りと妊娠という動かし難いテーマが描かれているのである。

次に七輯目録の箱型の張子は、この輯の大関目が雛衣の（疑似）妊娠出産にあることを示している。「雛」がある張子の項の先には「孕（はらむ）」の項があり、付合に稲・薄・連歌の句・鯉・鮒・灸餅がある。鯉に注目である。音読では分からないと度々繰り返す雛狗はこいぬと振り仮名がある。子犬では意味がないのだ。雛衣の雛は「こ」で、衣は「い」で、こい＝鯉となる。鯉である雛衣が「孕（はらむ）」のは名詮自性ともいうべき設定である。鯉に恋、龍門の鯉、八犬伝中での胙の意味が混在していることは言うまでもない。

七輯目録の箱型張子とともに描かれた蚕は、①167の「干宝が搜神記」に関連付けられていることもすでに述べた。蚕とは義実も角太郎も自らが一度口にしてしまったことは、どんなことでも守らなければならないという共通のジレンマの象徴であり、伏姫譚と雛衣譚が対になっていることの証しである。

以上のことは二輯表紙と七輯目録にある箱型の張子という、同じ図像は同じ意味をもつといった共通のコードによって読めることである。

自分が以前書いたのを見ると、同じ図像は同じ意味をもつなんて気付いて、画中の文を読み始めてから5年しかたっていないのか。ずっと昔な気がする。まあ5年もたってもこれだけしか読めないというのが正解だろう。雑文のままだし、ちょっと空しい鴨。



● 鋏の付合に作木、蟹、番匠がある。鋏がどうのこうのという話ではなく、馬琴が注目したのは蟹だろう。馬琴は蟹が忠臣であることを知っている。ふっと見れば作木がある。忠臣大塚匠作・番作父子の命名はこんなところではないだろうか。番作・匠作ではいかにも番匠であるし、番作を村雨の番人にするために匠作・番作父子に転倒したと考える。

2010/10/04

● 母は昨日みたので、父を考えてみる。

信乃の父番作。祖父の匠作とともに番匠となる。匠作の娘亀篠が鬼六、鬼殺しになるので、大工と鬼六を考えてみたことがある。村雨の番人の意味とも思える。

現八の父糠助。元安房の住人。莊介の下男時代の名前額蔵と「ぬか」つながり。信乃の庇護者というほどでもないが、糠助が死ぬと額蔵が出てくる。つまり糠＝額である。「毛吹」によると月に額（ひたい）であり、月＝浜路に額蔵となる。また犬には童の額がある。額蔵という名前が幼少期につけられた由縁であろう。

何故信乃の周りには「ぬか」がいるのだろうと疑問を呈していたが、疑問自体が間違っていた。「ぬか」＝「ひたい」は正月である浜路に引き寄せられて集まるのだ。道松の道節も正月の浜路に吸い寄せられたといえる。やはり話の中心には信乃がいるように見えるが、実は4月26日図のように浜路が中心にいた。

莊助の父衛二。まだ考え及ばず。文吾兵衛と「衛」つながり？

道節の父道策。節用集の道節からの派生であろう。道策の策は番作の作と「さく」つながり。

小文吾の父文吾兵衛は節用集の豊後からの派生であろう。兵衛は節用集の犬江新兵衛からで、文吾兵衛と親兵衛の祖父孫関係に使われている。那古は安房の地名。

角太郎の父一角。節用集の大学からの派生と思われる。一角仙人とつながりがあるらしい。

毛野の父栗飯原首胤度。栗が安房か？飯に蠅の付合の通り、馬加蠅六郎は栗飯原姓であったはずの毛野に殺されている。

親兵衛の父山林房八郎。通称房八。◆杉木朴平の孫。房八で八房とされる。現八郎がいなくなると現れ、房八郎が現れると現八郎がいなくなるといった具合に現八と二身一体で金椀八郎の役回りになっている。

元が節用集であるために母親達の命名のように自由が利かず、それぞれが強い結びつきは示さない。母系の八犬伝と言われる由縁か。もともと犬姓なのは犬山と犬川だけなのもそのせいかもしれない。

浜路で網に干されたさもじ（魚）。浜路、左母二で韻をふんで良いねえ。

2010/10/03

●「歳時記」には犬そのものの項目はないが稲木（いなぎ）、稲束（いなつか）がある。

稲木は稲城で毛野の弟の母になる。稲城と信乃の母手束で稲束になる。実母同士の調布（たつくり）と手束（たつか）だとたつ（龍）つながりになる。信乃と毛野の前身は春王・安王なので、母以外にも三年や女装など共通点が多く、信乃と毛野のつながりは強く書かれている。稲城はとおじょう（東条）とも読める。

信乃・毛野の母のついでに他の犬士をみると、名前が分かるのは親兵衛の母ぬい、角太郎の母正香（まさか）、道節の母阿是非である。正と是非（正しいことと正しくないこと）は同じといえる。角太郎と道節の前身でみると、角太郎は東条の郷土蟹崎輝武で道節は神余光弘。神余は東条の氏族（①32）なので二人は一括りになる。

道節の母阿是非を殺す黒白は浜路の実母である。本文中では善悪と黒白は同

じく「あやめ」と読ませているので、是非と同じである。邪正一如である。

母の名前が不明な現八と小文吾は乳兄弟である。

親兵衛の母ぬいが「犬」なのに対し、莊介の母は「犬川衛二の妻」である。

八郎の妻（？）濃萩と角太郎の妻雛衣は共に昨の鯉である。

母親たちの名前にもこういう意味があった。

2010/10/02

●伊勢尽くしの二輯口絵。

額蔵が抱く子と信乃側にある「いせのあまの」歌。

「連珠」に海人とあらば当然伊勢がある。その次の項目に「あまの子」がある。自然な流れでみれば、額蔵が抱く子は「あまの子」であろう。その「あまの子」の付合に「夕顔」がある。「夕顔」には下でみたように「鬼なども」「南殿の鬼」がある。伊勢で『伊勢物語』ができれば、浜路の話から第六段の鬼の話に導かれる。額蔵が抱く子は夕顔なのだから、夕顔の団扇をもつ浜路なのである。鬼探しも飽きたなあと思っけていても、結局は鬼ごっこをさせられているのである。

伊勢の鬼見うしなひたる躍哉（五元集）

ついでに「夕顔」にある「妻戸」という語。

本稿では網干左母二郎は妻立戸五郎の後身としているが、網干左母二郎の網干と左母二郎、つまり「網に干された魚」のような名字と名前でセットになるのが妻立戸五郎である。

（信乃⇄浜路）←左母二郎は（定包⇄玉梓）←戸五郎の前身と後身の繰り返しなのである。

●白き扇の、いたうこがしたるのちょっと先には「物のあやめ、見給ひわくべき人も侍らぬ」と浜路の実母の名前黒白（あやめ）という語がでる。（源氏の引用は岩波文庫による）

2010/09/30

●



この二枚の絵が前身定包の後身八房の子である信乃と前身玉梓の後身浜路を描いている。図像的に読めることを追加する。

浜路が持つ扇や着物の柄に注目。玉梓が持つ琴との対応で朝顔としていたが、夕顔とする。根拠は『源氏物語』の「夕顔」にある「白き扇の、いたうこがしたる」という一文。

定包が持つ白い扇は、信乃の傍らにある薫物に「いたうこが」されて黒になっている。二枚の絵には本文でも画中の文でも定包と信乃との強い結びつきがみられる。

さらに「夕顔」には「むねむねしからぬ軒のつま」とあり、浜路の図像にある

○雨たれのおとしつくして又さらに するこそよけれ軒の月影

○軒のつまにあハびの貝の片おもひ もも夜つられし雪のしたくさ

の「軒のつま」が浜路を表している。軒のつまにあハびの貝の片おもひとはそのまま浜路に片思いと読めば良い。

二枚は「夕顔」によって結ばれた一枚の絵である。

『連珠合璧集』に夕顔とあらば「こかしたる扇」（源氏物語）とあるので、『源氏物語』の「夕顔」をみれば「白き扇のいたうこがしたる」とでてくる。今さら言うまでもないが俳諧本はコードブックなのである。

ふと思えば後の素藤譚に「朝顔」「夕顔」の二人が登場する。裏里見の素藤であるから関係があるかもしれない。

2010/09/06

●2010/05/01にこんなことを書いた。

●将棋盤を片手で持ち上げる親兵衛には大童山の面影を見たのに、なんで小文吾に谷風を見なかったのか自分ながらストコドコイである。小文吾が相撲取りなのだから当たり前すぎたようだ。

整理整頓をしていたら、高田衛「遊戯三味の筆」のコピーが出てきたのでつい読み始めたら、以前は気にも留めなかった一文に目が止った。

天明の頃、不敗の横綱谷梶之介を破って評判の力士、小野川喜三郎の風貌に似た二世市川門之助が、お俊伝兵衛の物語にからんだ立役の関取白藤源太として登場し、大あたりをとった（『文学』2007. 1, 2月号 p 73）

当代周知の立役白藤源太譚と凶人但鳥業因のあざやかなないませ、そして都市的（遊民的）英雄白藤源太譚の抹消という機巧である（同上 p 77）

これを念頭にイメージの連鎖ということで大雑把に見れば、
谷風 VS 小野川喜三郎＝二世市川門之助＝白藤源太
となる。親兵衛譚はその前史（里見と七犬士伝）と対になっているのだから、谷風＝小文吾を大童山＝親兵衛と置き換えてみると親兵衛 VS 墓田素藤となる。相撲という鍵でみると、不敗の横綱谷梶之介を破った小野川喜三郎なのだから、素藤には里見・親兵衛に敵対するそれなりの強さが付与されているといえる。さらに小文吾対親兵衛の父房八の対決が思い浮かぶ。房八は善人だが悪人を装っていた。素藤は悪人だが善人を装っていた対の構図が見えてくる。

ついでにをウィキで小野川喜三郎をみると「体躯、膂力にすぐれる谷風に対して、慎重な取り口と技巧で対抗した。そのために作戦的な立ち合いも多く、江戸の庶民の人気は薄かった」という。

人気は薄かったというのが良い。

悪人だが曲がりなりにも善行をちょっとだけした素藤は、元は（善悪）不二であった。妙真と妙椿が対になっているように、悪の親兵衛と言える美少年録の朱之介ほどではないにしろ、素藤は悪の親兵衛なのかもしれない。

●八犬伝全画集四を開くと、なんと「馬を走らせて親兵衛星夜大山寺を出づ」の挿絵であった。親兵衛の話はよく読んでいないせいか、どこになにがあるか覚えていないので初めて気付いた。

昨晚読んだ「安房国大山寺略縁起」の大山寺とは八大竜王である大八の親兵衛と言うか、八犬士と関係のある寺であった。霊宝の中には正木大膳、八犬伝では政木大全が奉納した陣鞍一口がある。また霊宝蟹香合の蟹といえば忠臣であるから政木大全というキャラを造形するためのヒントになったかもしれない。

●「安房国大山寺略縁起」に載る霊宝から八犬伝関係のものを抜き出す。

- 神楽獅子二頭
- 八大竜王面
- 蟹香合
- 天満天神銅像
- 弁財天女銅像
- 神変大菩薩
- 懷剣 里見義弘室奉納
- 燈籠 大田道灌奉納
- 陣鞍 正木大膳奉納

2010/08/19

●ヨーヨー、てぐるま

車輪柄の着物を着る大八にぬいが見せているのがヨーヨーであり、ヨーヨーとは江戸語では「手車」という。『連珠合璧集』は手車を「手にて引車也」という古語辞典的な意味としている。そして手車の付け合わせに「ゆるさるる」がある。ヨーヨー＝手車＝許さるる、となる。ヨーヨーに手をのばす大八は許しを求めているのである。大八は朴平が犯した罪を背負って生まれてきた。そして八郎の息子であるゝ大によって朴平の罪が許された時、大八は握っていた拳を開く。大八の左手、手車とは朴平が犯した罪を、房八が自らの命で償った許しの象徴である。

2010/08/18

●合璧集

かたなとあらば。

竹・まもり・ひし・夢にみる・うつはり・こし・つか・さや・ぬく。

（番作は）刀子を撈りとり、梁に釣し大竹の（①231）

番作が隠し通した村雨を信乃に譲るために取り出した場面でも付け合わせが使われている。馬琴の発想の方法はということかと思うよりも、村雨譚ならばこの単語から「伊勢音頭」を絡めて話を紡ぎ出していく馬琴の想像力の豊かさを思うべきだろう。伊勢では『大織冠』の「伊勢の海女」で浜路の物語が作られていく等、イメージの連鎖は誘発されていくようだ。

『大織冠』には玉梓のモデルも出てきており、八犬伝ではその二人の女を輪廻転生の悪の前身、善の後身として一体化させている。

読む側としてはなんで完成までに二十八年もかかるかなと思ったりするが、

典拠という裏付け（箔付け？）が必要なことから時間もかかるだろう。確か、使った言葉が正しかったかどうか心配になって、一日中だか何日だか忘れたが出典を探したなんて話があるくらいだから馬琴にとっての重要度が分かる。

2010/08/15

●馬琴は文政元年11月8日付、鈴木牧之宛ての書簡に、『越後名寄』の「参補秦穂丸ハ、伊勢神戸の人」である、と書いている。

寛政十二（1800）年

文化四（1807）年か文化五（1808）年

文化十一（1814）年

文化十三（1816）年

文政元（1818）年11月8日

馬琴が秦穂丸について『越後名寄』の参補で伊勢神戸の人という以外の著作等の情報を得ていたかは分からないが、文政元（1818）年11月8日以前に秦穂丸を知っていたということだけは確かだ。

蝦夷島之奇観：変り図入り / [秦穂丸] [撰] の末尾にこうある。

月日のつもるうちにあやしくも、女神犬の子を孕めり。それより子孫いや榮て今にいたる。故に女は女神の血縁にして、男は犬の後胤なり。

以前、あげまき図は六男二女ではなく、四男四女が描かれているとした。四男四女に「女は女神の血縁にして、男は犬の後胤なり」を当てはめて、信乃・真平・角太郎・毛野は女神伏姫の血縁で、小文吾・莊介・玄吉・道松は八房の後胤であると考えたと、八犬士のありようが新しく見えてくるかもしれない。

2010/08/14

●大木卓著『犬のフォークロア』1図は『蝦夷島奇観』の「女神窟居図」で、洞窟の女神に白犬がなにやら花？か実？がついた枝を咥えてきている絵である。白黒なのでカラーが見たくて早稲田君を検索すると

蝦夷島之奇観：変り図入り / [秦穂丸] [撰]

があった。どうも内容は同じで挿絵が別バージョンのようである。「フォークロア」の東博本は秦穂丸自筆で、寛政十二年の自序があり、文化四年か翌年に増補整理した決定本とされる（p49）。

自筆本が白犬なのに対し、早稲田版は黒白の斑犬であり、自筆本にはない松が早稲田版では描かれている。八犬伝の影響ではないかと想像する。早稲田版

の書写年は不明となっているが、八犬伝十二回がある二輯出版の文化十三年以降ということになるのではないだろうか。

●命名法

史実系—昔の●●にして●●ではない

寄合系—梨とあらば、実は秋也

同音異義系

駄洒落系

2010/08/13

●もう一度、犬塚信乃を殺そうとした泡雪奈四郎秋実。（泡雪梨男秋の実）
歳時記

犬殺：狗子、樹下に有るとき、梨落れば撲れて死す。故に名く。

：二月白花を開く、雪の如し。

合璧集：梨とあらば、実は秋也。

2010/08/12

●2010/02/13に

早稲田君で馬琴の『六三之文車』を見ていたら、口絵に富屋の側室玉梓と出てきた。なんと八犬伝以外に玉梓がいた。おまけにこの玉梓も殺されて怨霊として現れるのだ。

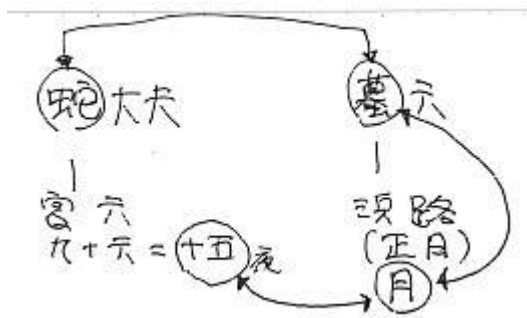
玉梓という名前には殺されて怨霊になる名詮自性があるようである。

と書いた。『連珠合璧集』をみると、書とアラハ。（玉つさともいふ。）の寄合のなかに「恨」がある。八犬伝の玉梓と「文車」の玉梓ともに怨霊となる契機は恨みである。玉梓という名前は恨みを発動させる根拠のある名前なのである。

当雑文では浜路は玉梓の後身であるとしているが、さらに「合璧集」をみていくと、恨の寄合に「海辺の詞」がある。ここから、玉梓＝恨み＝浜路（海辺の詞）ということができる。浜路という名前は、魚男の網干左母二郎と対にするためだけにつけられたものではないのである。浜路と網干の「海浜」というキーワードは分かっていたが、海辺だとは。恨みまでは分からなかった。

2010/08/07

●



2010/08/06

●江戸に多いもの。伊勢屋稲荷に犬の糞。

馬琴が入り婿になったのも下駄屋の伊勢屋。伊勢屋ではないが、伊勢参りの犬は有名で、八犬伝の表紙にもなっている。『毛吹草』だけでは断定できないが伊勢の項に犬はないので、犬と伊勢とは江戸の社会が生んだ組み合わせと言える。

●大木卓著『犬のフォークロア』を読む。大変参考になる。八犬伝にも言及している。それはいいのだが、八房を「愛子伏姫の夜泣きを止める魔除けのために召し寄せ」p32たとあるのは完全な間違い。わざわざ註に名著版のページを明記しているのだから間違えてほしくないところだった。

2010/08/05

●七月は牽牛織女の三星にこだわっていたのだが、思い出してみれば牽牛は犬飼星であった。もともと七夕と犬は結びつくイメージなのである。七夕の夜に死んだ八郎にたいして、現八郎の現八の名字が犬飼であるのもイメージの連鎖であるかもしれない。というか、もともとが犬飼源八なのだから、犬飼から七夕のイメージだろう。

2010/07/29

●挿絵のタイトル

品七が昔物語

品七が昔物かたり

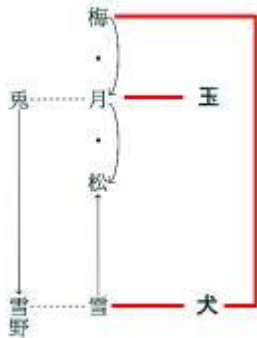
鵲平が旧話を聞く

品七と 鵲平の共通点はよく喋ることである。品には口が三つあり、鵲は百舌で舌が百もある。単純な名詮自性である。小文吾が品七から、現八が鵲平から長話を聞くのも、話者がよく喋るという設定でも対になっている。というか、全画集を見ていて初めて気付いた。「鵲」という漢字に囚われたのが敗因であ

る。

2010/07/24

●『江戸の動物画』P95のイメージ連鎖の図に玉と犬を加えてみるだけで八犬伝のイメージ連鎖図になってしまう。



雪は犬の伯母だし、雪に残る犬の足跡は梅の花に見立てられる。八犬伝の表紙にも犬の足跡や雪上の犬の足跡が使われている。イメージの連鎖を考慮すれば、単にデザインとして「かわいい」だけではないようだ。現代のように「かわいい」が支配する世の中—政治家まで「かわいい」と言われて喜んでいる情けない世の中—を基準にして過去を考えるのは相当ずれていることになる。ただ八犬伝の表紙を見て江戸人が「かわい〜♥」と思ったかどうかは分からないが、「かわいい」と思われる犬が何度も使われているので、日本人の「かわいい」の基準はそう変わっていないのではないだろうか。

ついでに八犬伝的には梅から菅原道真⇒怨霊、玉から龍、基本数である八を連鎖の元に加えれば玉から龍⇒獅子⇒牡丹⇒富貴となる。

2010/07/23

●せっかく馬琴が「画中の文」と言っているのだから、もっと意識して絵を読まなければだめだ。本棚をパッと見れば、

五味文彦『絵巻で読む中世』

米倉迪夫『源頼朝像 沈黙の肖像画』

黒田日出男編『肖像画を読む』

若桑みどり『イメージを読む』

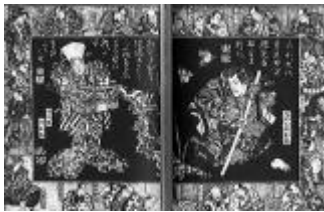
等があって分かっているつもりであってもまだまだ身に沁みしていないようだ。絵は意外にも多くのことを語れないといった考えはこの際すてるべきだ。絵は多くのことを語っているという前提で八犬伝の図像を読むことが肝心である。度々言っているが、口絵と本文は齟齬していることが多いのではない、自分達

が読めないのだという時点に立ち帰らなければ口絵などは読めないだろう。

2010/07/13

●雪月花

●八犬伝の図像中に兎は結構出てくるので、最近凝っている今橋理子の〈月の兎〉の図像と思考（上）（下） 学習院女子大学紀要第3・4号をお取り寄せしてみた。（上）はちゃんと来たが、（下）はコピーをとった人がケアレスミスをしたらしく別の論文が入っていた。それはいいとして、一枚目をめくるといきなりミッフィーなので、なななんだ、これ、何を送ってきたんだ？と頭の中が白くなったしまった。なかなかツカミが上手い。



これも兎に玉＝月とばかり思っていたが、兎に波という図像でもある。

上記論文に

「波の上を走る兎」とは、実景的に「兎」が「波」の上を走っている様子を物語るわけではなく、実は「月の光」が湖面の上をゆらいでいるさまを（見立て）、形容している一種の譬の表現なのである。（P13）

とある。

七輯口絵、夏引・木工作・奈四郎図の額縁に「兎に波」がある。この兎は本文挿絵にある狩られた兎と思っていたが、一緒に波があるから月もあることになる。月といえば浜路なので、額縁は浜路を表していると考えられる。口絵中の歌と闘鶏には大塚の浜路が信乃の部屋から出て行くときに口ずさんだ「天も明ば」の歌の鶏も掛けられているかもしれない。

この口絵の前には全然関係がない偽一角親子が配置されている。その額縁は前にも言ったような気がする「甲斐の八房」と読めるものだ。見開きの額縁だけを読めば信乃と浜路ということになる。

白地蔵と描かれた絵が白地蔵ではないように、図像には「ずらし」があることを忘れてはいけない。「ずらし」が図像を素直にみても読めない要因である。

2010/07/11

●五輯口絵の歌は見開き二首で一つのことを言っているようだ。

竈門三宝平等の「くもりなき～」と「もみちする～」はそれぞれに音音と世
四郎のことを言っているのであって、歌がそのまま該当挿絵のキャプションと
して機能しているのではないことは下で見てきた通り。

●ぼーっと見ていたせいか、竈門三宝平が鉄砲を持ってることに今頃気付いた。

●下記の番組、論文で初めて知った乞巧奠（きっこうでん）。まあ七夕のこと
なのだけれど、これをキーワードにすると図像中の苧環の理解が出来そうであ
る。

五輯口絵の莊役根五平が持つ苧環は音音を、さらには曳手・単節を表してい
ると言える。分かってみればそのままである。

額縁の雲と雨は七夕の雨で、二星が会えなかったことを表しているかもしれ
ない。

ついでに荒芽山には虎がいないのかというと、根五平が猫平に通じるので、
猫＝虎で虎はいることになる。

苧環に関しては、

歌舞伎公式ウェブサイト 歌舞伎美人（かぶきびと）
を参照。

所持品の見方も一つ分かると、隣の口絵の越杉田一郎がなぜ鷹狩りの姿なの
かも考えるヒントになりそうである。

2010/07/09

●「一言信を守て」の挿絵では、伏姫と大輔を隔てる松ばかりに目がいくが、
久し振りに見ると他に竹と梅が描いてあることに気付く。対岸から八房を狙う
大輔、松竹梅の祝いと悲劇は同じところにあるのである。

梅はどこにあるのか？雪に残る犬の足跡は梅の花に見立てられる。つまり八
房がいることで梅もあることになる。

●道節を例とすると分かりやすい。

- ①偽りの自分（寂莫道人肩柳）
- ②新しい自分（忠の珠と痣の意味を知る）
- ③真の自分（珠の文字、痣が消える）

ついでに現八でもう一例。

- ①偽りの自分（獄吏）
- ②新しい自分（信の珠と痣の意味を知る）

③真の自分（珠の文字、痣が消える）

もう今時はいないと思うが、犬士を仁義八行の化け物などと前提としていたら、何も見えてこないのである。

見立てと言葉遊び。

2010/06/18

●妻立戸五郎の名前の解析がやっとできた。名詮自性と言うよりも、前身識らずんば、何ぞ後身を説くのである。名前を考える場合、馬琴が名詮自性を強調するために、名詮自性が全てのようにこちらの考えの範囲が狭められてしまうのである。読者に～とのみ思わせる仕掛けはいたるところに張り巡らされているが、浦の網干に浜路の女松のようなヒントも馬琴は残している。手掛かりもなく分かれというのは無理な話である。

2010/06/15

●前身識らずんば、何ぞ後身を説く。（「石魂録」口絵。原漢文）

2010/06/08

●『仏像図解新書』小学館を見てたら、面白いことをみつけた。

八犬士は八大童子であるという一説が頭にあるので、八大童子の項を読んでいると、

八尊はそれぞれ性格も異なり、像容もバラエティーに富んでいる。那智の滝で修行中に失神した僧文覚を助けたと『平家物語』が語るのは矜羯羅。（P176）

とあった。

滝の川で水垢離をしていて死にそうになっていた信乃を助け出したのは稽平である。稽平と矜羯羅の「稽」と「矜」はほこへんが同じでつくりが「今昔」で対応している。平は平家の平とも言える。稽平の主道節の家紋は平家の蝶である。稽平というネーミングには平家のエピソードがありそうである。ただ「図解新書」には矜羯羅童子しか書いていないが、「平家」巻五、文覚荒行で文覚を助けたのは矜羯羅と勢多伽の二童子である。

2010/06/02

●昨夜から『隅田川梅柳新書』を読む。亀鞠という女が面白い。亀鞠という名前も良い。亀＝き＝鬼と読むべきか。鞠は八犬伝筆輿口絵の金鞠大輔の鞠と同じだ。金碗を犯罪色の濃い鞠に変えてあるのを思うと、亀鞠という名前の悪が

浮かび上がってくる。まだ巻四～六を読まないとならないが、まあ「南柯後記」のようなとんでもない終わり方にならないといい。あれには虚脱した。善人だったのが育ちを知って極悪人に豹変し、また本当の生まれが判明した途端に人間の中身が変わってしまうのだ。江戸時代の人にはあんなのを読んで変だと思わなかったのだろうか。聞いてみたい。

2010/05/29

●「春蝶奇縁」をまた読む。

過世の仇、過世の悪業、過世の因縁と繰り返されるけれど、八犬伝での前世である一回から十七回に当たる話がないので、漠然とした常套句として読んでしまう。こういうことがあるので、八犬伝でも単に常套句である、と思い込んでしまう。そうではないことになかなか気付かない。

2010/05/27

●『江戸文学と支那文学』第二章 読本の人生解釈は非常に有益である。

『日本文学と仏教』第二巻 因果の八犬伝を扱った章で『江戸文学と支那文学』以上に付け加えることは自分には出来ないと丸投げしてしまうのも分からないではないが、思考停止をしたらそれまでである。

P591に

八犬伝の犬江親兵衛の父房八は安房の侠民杣木朴平の転生であるが、義侠の善因により、更に優れた仁者に生れ替っている。

とある。

朴平からそのまま房八と考えたこともあったが、殺し殺されの関係を読んでいくと朴平は小文吾になったのではないと思われるのである。

ぬいは無垢三でそのままいい。朴平から房八とすると小文吾は七郎になる。これだと縁者に生まれ変わってすんなりといくが、スッキリはしない。朴平の後身である房八が七郎の後身である小文吾に殺されることによってプラマイゼロで因縁は消滅しました、と言えばスンナリいく。ただ馬琴という小説家がそれで満足するようには思えないのだ。世俗の臆断で簡単に分かることを馬琴が書くのか、という疑問も残る。「白刃交るとき～」の挿絵を「落葉岡に～」の挿絵にそのまま重ねて見ることも加えて前身後身を考えていたが、「白刃交るとき～」は左右反転して見るのが良かったのか。左右反転の絵が何枚かあることを考慮にいれればあり得ないことではない。これが馬琴地獄である。ただ答えは必ずある。

最近の表記は『江戸文学と中国文学』だが、初版の表記に従った。基本的な

文献として一家に一冊欲しい本である。

2010/05/21

●八犬士の誕生は因果。八犬士の選抜は因縁。因縁は前身が分からないと解けない。

2010/05/20

●『日本文学と仏教』第二巻 因果では5章以外が役にたつなどと、ほざきにほざく似非高言であったが、2－3今昔物語集の四を読んでいたらとても興味深い記事があった。

巻第五 国王、狩鹿入山娘被取獅子語第二についてである。原文、論文は読んでもらえれば分かるので書かない。

獅子、国王の娘、その二人の間にできた子が父の獅子を殺す話。これを八房、伏姫、大輔に置き換える。大輔は八房と伏姫の子ではないが、雑文で繰り返し述べているように伏姫は八郎の後身であるから、大輔による隠微な父殺しである。玉梓は大輔に伏姫を殺させることで、八郎と義実に対する怨みを晴らしたのである。

「この犬誠に得度せり」①224と伏姫が八房に感じた時はまだ煩惱の雲霧は晴れていなかった。八房が玉梓の後身であるなら、妙経の功德で得度した時には雲霧は晴れているはずだが、雲霧が晴れたのは大輔が放った鉄砲の銃声が響いた瞬間である。挿絵でも明らかなように、大輔が渡河している時に玉梓は掌を合わせ、その周りに花が散っている。ただ、違う時間の出来事を一枚に描いたということも言えなくはない。

もし八房が玉梓であるなら怨んだ八郎の子に射たれ、死体を鉄砲で骨が砕け、皮が破れるほどに五、六十回も打たれても、得度した八房（玉梓）は喜んで死んでいくものなのだろうか。まあこの点に関しては現実の話ではないから玉梓の心情を慮っても意味のあることではない。

地の文、大輔の証言、妙経の功德というタイトルの挿絵の三つは互いにずれている。ずらした馬琴の意図は何なのかが問題である。

大輔には主観を語らせているのだから、地の文と「画中の文」を読めという挿絵が考察の対象となるだろう。鉄砲の音、妙経の功德の関連である。

大輔とともに玉梓が描かれているのは、伏姫狙撃の鉄砲の音とともに彼岸を閉ざしていた玉梓の怨念による煩惱の雲霧が開けたという、大輔を因とする画中の文が一つ。役の行者が描かれているのは伏姫による妙経の功德で八房が煩惱の雲霧を開いたというのが一つ。別々の要因が同じ結果に収束したと読み分

は語られることはなかった。「八房は玉梓の後身です。めでたし、めでたし」と言ってるだけの時代は終わった。少なくとも自分の中では終わった。

2010/05/18

●第十二回冒頭の平家引用は、富山での伏姫の日常が、平家→六波羅という連想から六波羅蜜を修することにつながっていたことを隠微に書いたもの。

いちいち伏姫が布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六種の波羅蜜を修しましたなどを書いてしまえば、伏姫が菩薩であることを明示することになる。

2010/05/15

●細川政元の養女吹雪姫はすごい美人なのだが「多病にて、常に虫積の患」⑧57がある。

雑文読みならば、虫は虎と読むだろう。この挿絵は常に虎の患いがある吹雪姫と妖虎という組み合わせになる。また雪は犬の伯母であるから姥雪代四郎と組になるのも分かる。単に代四郎と組になるためだけに吹雪姫と名づけられたとも思えないので考えてみた次第。

●親兵衛再出世の以前と以後では昼夜、善悪が逆転したようになる。悪僧徳用の乳名は二六郎（にろくろう）は足せば八郎になるが、どうしようもないろくでなしの人間である。

大塚で信乃の飼い犬与四郎に噛み殺された紀二郎に似た名前の紀二六は、六名前であるにも関わらず善人である。

2010/05/14

●刀の行方について。

春王の護刀である村雨が後身である信乃に託されたのはそのままだから良い。匠作の後身莊助が亀篠からこれで信乃を殺せと渡された刀が匠作の像見である桐一文字②96であった。すでに信乃は信乃で、莊助は莊助であるから、各々の村雨、桐一文字をかつて自ら所有していたとは気付かないし、知らない。しかし、まるで刀自身が意思をもつかのように元の持ち主に帰っていくのも前身後身ゆえである。

前身後身が分かると、何故こうなるのか、何故こういう関係なのか、目から鱗がポロポロ落ちてきてはつきりする。これに裏の名詮自性である鬼や虎、画中の文等の読みを加えると遊戯三昧、知的遊びとしての八犬伝の一面が見えてくる。

固く読むのも、自分のように遊びの書として読むのも自在。平成の八犬伝読みは、いかに読み手が明治読みの呪縛、固定概念から開放されるか、前提は正しいのかを疑うことにある。

2010/05/12

●下記論文で「美濃～」の人物関係の一覧があったので、早稲田君でみると確かにあった。

それに倣って八犬士の前身を書くと、

第一	犬江親兵衛が	前身ハ	五十子
第二	犬川莊助が	前身ハ	大塚匠作
第三	犬村角太郎が	前身ハ	蟹崎輝武
第四	犬坂毛野が	前身ハ	安王
第五	犬山道節が	前身ハ	神余光弘
第六	犬飼現八が	前身ハ	天津兵内
第七	犬塚信乃が	前身ハ	春王
第八	犬田小文吾が	前身ハ	洲崎の朴平

となる。こういう感じで馬琴は八犬伝も同様に考えていったとみることができる。肇輯と伏姫が死ぬまでに登場する人物の前身後身が明快となっていれば、それに伴う因果関係も設定できる。あとは輪廻の法則ともいえる稗史七法則を適用することで骨組みが出来たと思われる。

2010/05/10

●八犬士は色白であるとされ、痣は黒であると書かれている。

八犬士には黒白＝あやめ＝善悪があるということ。青痣はあるけど青だと刺青であり、それこそ罪人であるから使えない。富貴歓楽のどちらかと言えば悪の牡丹を善悪の黒白と結びつけたところで八犬士の設定に善悪不二を導入できた。

●これを全員にやれば（やらないけど）また何かが見えてくるかもしれない。

信乃の登場が十六回というのも数字に意味を持たせ関連付ける馬琴の手法だと思う。義実とゝ大を忘れていた時は十四回に誰もいないので、水滸伝のように空白の時間だなどと浅墓愚助にも思ってしまった。十三回と十五回をつなぐ役割として十四回でゝ大を使っている。馬琴は上手いな。

●前身後身をみていて気付いたのが、親兵衛の前身五十子が伏姫を思い死にした以外は、全員殺したり殺されたり溺死など非業の死を遂げている。親兵衛が誰も殺さないという特異性は仁であることも勿論であるが、五十子が前身であるということも要素の一つとして考えることができるだろう。

伏姫の教育故にと一瞬考えたが、伏姫は舵九郎を真っ二つにしたり、雷を落として多数を殺傷しているので、やはり親兵衛の特異性は五十子だからと言える。親兵衛の両親との別れは、八郎と大輔の別れとともに、伏姫と五十子の別れも因縁としてあった。

「八犬士ハ、（中略）伏姫母子と金碗父子が、功德よりいで来るもの」であるが、親兵衛は特にである。

ちなみに親兵衛を語るとき、親兵衛が八犬士の随一と名乗ったことが特別かのように捉えている文章を読んだ時はそんなもんかと思っていたけど、他の犬士も随一と名乗るのをみて、一部分だけ切り取ればなんでも特別なことになってしまうのだなあ、と思った次第。

●5日には親兵衛の前身が分からないので苦し紛れに、桃太郎の前身が分からないのと同じと適当なことを書いた。しかし、そんなことはあり得ないのでまた考えた。年長の道節と親兵衛の年齢差がヒントになる。道節の前身光弘が死んでから十数年後に死んだ人間が親兵衛の前身となるはずだ。で、思いついた。伏姫の母五十子である。伏姫と親兵衛との強いつながりからも元母子の関係が窺えるのではないだろうか。

八犬士ハ、犬より生じて、犬より生ぜず。審に見るときハ、伏姫母子と金碗父子が、功德よりいで来るもの也。（『犬夷評判記』）

役の行者を尊信したこと、五十子くどき、伏姫を思い死にした以外には語られていないのに、伏姫母子の功德によって八犬士は生まれたという重要人物であるのだ。

ということで、五十子→親兵衛を追加する。

金碗八郎→伏姫

山下定包→八房

朴平→犬田小文吾

無垢三→ぬい

五十子→親兵衛

大塚匠作→犬川莊介

蟹崎輝武→犬村角太郎

安王→犬坂毛野

神余光弘→犬山道節

玉梓→正月（のちに浜路）

天津兵内→犬飼現八

春王→犬塚信乃

那古七郎→房八

妻立戸五郎→網干左母二郎

岩熊鈍平→与四郎

牡蠣崎小二郎→紀二郎

ここに前身が書かれていない人面獣心の虎や鬼が龍を滅ぼそうと絡んできて話が展開するということだ。

道節を光弘とすると、道節が錠庵＝金＋定を転倒して定金（さだかね）という名前の者に殺されるのも前世の因縁である。里見となんの縁もゆかりもない道節が選抜される理由がないのも表向きなだけで、犬士は犬士になるべく生まれているのである。

こうして見てくると、八犬士の前史が詳しく語られるのも必然である。反対に八犬伝では語られない結城落城時の春王・安王の女装が信乃・毛野の女装になっているとすれば、何故女装の二犬士がいるのかも無理なく説明がつく。前世こそは犬士を活躍させる大関目たる襦染なのである。

2010/05/06

●痣と玉の文字の消滅は、「里見の」八犬士としての識別記号の消滅であり、選抜された因果の消滅であるから初代犬士は里見を去れなどと息子たちに言えるのである。

●天津兵内



そういう目で見ればだが、現八の右頬にある痣と関係付けることも出来るかもしれない。

2010/05/05

●後身の関係は各自の前身同士の関係が反映されていて、里見の犬士として伏姫と言うか八郎に選抜されるべくして生まれてきた理由付けを因果と輪廻転生でもって馬琴がしていたことが分かる。

2010/05/04

●角太郎の前身が分かった。蜷崎十郎輝武である。

角太郎は蜷崎十郎輝武が伏姫を追跡した富山と対になる庚申山に住んでいること。角太郎が泳げないのは、追跡中に富山の川で溺死した蜷崎十郎輝武の後身であるからだ。

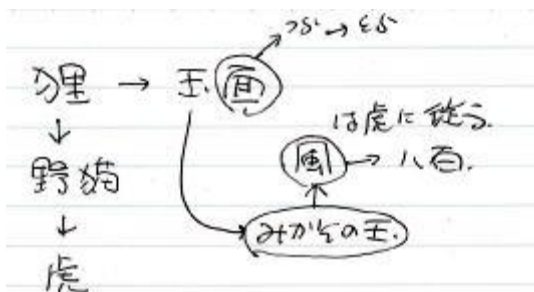
天津兵内が現八の前身であると思う。

あとは莊介の前身が誰かが分からない。莊介の特徴が分かりづらい。ただ伏姫が死ぬ以前に死んでいる誰かであることは確かだ。

前身がまともな死に方をしていないのが後身たる八犬士の人生に反映されているのだろう。八犬士の選抜理由が前世にあるとすれば確たる基準があるのだ。と、莊介も分かれば言えるだろう。

2010/05/03

●妙椿は玉面コースでしか成り立たない。



まだ手書きの図である。このヘタクソな字を見ると侘びしさが込み上げてくる。

●狸から八百（風）比丘尼へ。

面一連、これらは「つら」であるから「虎」に通う。

狸→みかその玉入手→玉面→玉つら→玉とら→玉虎→風を起こすみかその玉+風は虎に従う→風→八百。

尼の妙真との対で比丘尼妙椿、妙珍。比丘尼も隠語としての意味が素藤との関係では当てはまるようだ。

景連も連が虎だと景虎となって、まるで八犬伝ワールドでは仇敵である上杉

家の上杉景虎のような名前になる。そう考えると、安西景連が麻呂などよりも強敵であって、八房＝獅子＝龍でなければ滅ぼせなかったことも納得がいくような。

安西は定包を裏切って見殺しにしたのだから、定包の後身八房に首を噛み切られて殺されるのも因果応報なのである。

「つら」が「とら」に通うなんて馬鹿らしいとは思っていたけど、「つら」が「とら」に通わないと説明がつかないことが多いのである。

連が虎とすると、籠山逸東太縁連も虎となり、虎の舟虫と同じ種類の人間なので、六十七回にある「笛の音によるてふ鹿は」という挿絵の通りになってしまうのである。

ということで、年表に次いで白龍亭さんの全登場人物名を参照して調べると、「つら」名前は安西景連と籠山逸東太縁連の二人だけである。

例えば『里見代々記』の安西勝峯という名前が、八犬伝の世界では安西景連になるのも名詮自性が登場人物の運命を決定付けているからに他ならない。ただし白地蔵のように隠れた名前を見つけないと、舟虫にしても縁連にしても何故に八犬士と激しく対立するのか分からないのである。

●馬琴はよく二身一体というけれど、八犬伝というのは八身一体である。金碗姓に統一されてしまったことによって八犬士は金碗の八人の郎、金碗八郎になったのだ。仁義八行を標榜していた八犬士が二代目犬士に、駄目殿に仕えるのは無駄であるからさっさと立ち去れと言うのは、神余を去った金碗八郎の考え方である。里見由来の痣も消え、玉を手放した八犬士は、伏姫と八房の子ではなく、義実と会う以前の八郎なのである。八郎は伏姫に生まれ変わったが、八犬士を通して八郎は八郎となって八犬伝の世界から退場していくのである。八郎のいない世界では八犬伝という物語は動くことはできない。真の終わりである。

2010/05/01

●将棋盤を片手で持ち上げる親兵衛には大童山の面影を見たのに、なんで小文吾に谷風を見なかったのか自分ながらストコドコイである。小文吾が相撲取りなのだから当たり前すぎたようだ。

身体が大きい馬琴は若いころ相撲取りになったらと、人にすすめられたこともあった（『滝沢馬琴』麻生磯次）とも言われているし、当時の角界にも興味は持っていただろう。

谷風梶之助。本名、金子与四郎。



大童山と谷風（『写楽』内田千鶴子より）

（前略）又八犬士の内中、犬田小文吾は、髻歳より角觥を嗜て、大漢なるよしは、本文に粗見えたり。しかるに出像は凡庸にて、自余の犬士に殊なりとは見えず。惟第六輯の画工栄泉のみ、この意をや得たりけん、第五十八回に、小文吾が市河にて依介夫婦に再会の段の出像には、全身肥満の大漢を画きし（後略）⑧ 17

八犬士は名前が残っているだけで何者であるのかは分かっていない。小文吾が相撲取りの大男であるとか、親兵衛と親戚であるとかは馬琴の創作である。創作であるからこそこういった二人の取り合わせがイメージとして使われたように思う。

大童山—谷風＝親兵衛—小文吾、大童山—金子与四郎＝親兵衛—姥雪代四郎。谷風と金子与四郎は四股名と本名だから同一人物である。信乃と犬の与四郎の関係の再演としての親兵衛と代四郎とみるよりも、親兵衛の庇護者になるはずだった小文吾の二身一体の代理としての代四郎とみたほうが両者の関係は捉えやすいかもしれない。

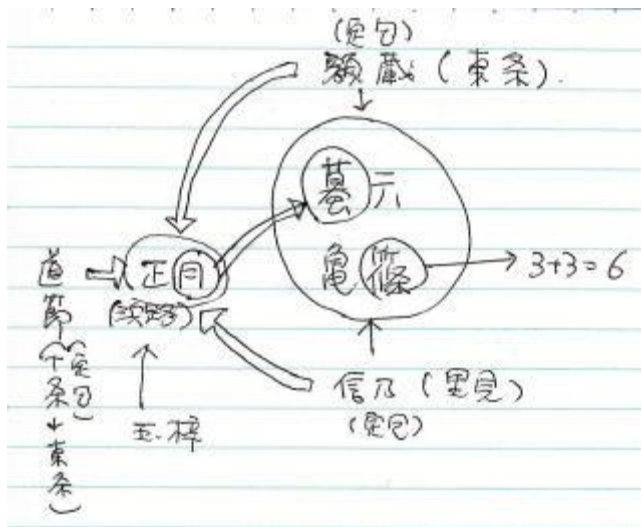
剛毅木訥は仁に近いのだから小文吾が親兵衛仁の親戚としての設定は分かる。しかし、それだけでは相撲取りという設定にはつながらない。谷風をみると、御猪狩風にかかって死んだとある。小文吾が大猪を倒すのは、御猪狩風で死んだ谷風に対する馬琴の追善の気持ちの表れかもしれない。

梶之助の梶を火事と読むと「落人を奇貨として野武士等放馬を撃つ」の挿絵で小文吾だけが火に包まれているのはなかなか面白く見える。

2010/04/26

●正月が墓蛙つながりで墓六の養女になったのはいとして、図にしてみて分

かったのは莊介が墓六・亀篠と関係してしまうのは、そこに浜路がいたからということになる。



神余は東条の一族であるから、東条の額蔵と玉梓の浜路だけの大塚家は平穏であったが、里見としての信乃が転居してきてから安房同様にバランスが崩れていく。物語の中心に信乃がいるようだが、実は浜路に吸引されて集まってきたのである。八犬伝は図や対照表で考えると分かりやすい。

2010/04/23

●伏姫が珠を配って回ったのだから、伏姫からみた八士選抜の理由があるはずと考えていて道節の前身が分かった。伏姫が八郎の後身、義実の娘というところがポイントである。

今までみてきた前身と後身、十条は東条であるとか、錠庵の錠は「定金」であるとか、なやらを考え合わせると、道節の前身は神余光弘である。玉梓＝浜路ということも、光弘→定包、犬山家（道節）→弥々山家という移動につながっている。

八房（定包）の子であり、光弘の後身である道節には、玉梓の後身である浜路を救いたいけど救わない因縁があった。道節が毛野に比べいまいちダメダメなのは前身故と言える。道節があまり小文吾と絡まないのも、自分の前身を殺したのが小文吾の前身ということなのかもしれない。

義実の娘伏姫（八郎）と八房（定包）の子であることが基本であるが、誰々の後身であるということで同じ行動をしてしまうキャラクターに反映されている。

春王→信乃

安王→毛野

朴平→小文吾

光弘→道節
無垢三→ぬい
七郎→房八
八郎→伏姫
定包→八房
玉梓→浜路
鈍平→莊介
輝武→大角
五十子→親兵衛
戸五郎→左母二郎
小二郎→紀二郎（猫）

●蟹と言えはこの人を忘れていた。

馬琴がしつこく神宮神宮いつていた、蟹男力二郎の父神宮の稽平である。稽平は信乃たちを救うために島村蟹説話よろしく川に沈んで死ぬ。死ぬはずだったのが死ななかったのが、元の名前である犬の叔母たる姨雪世四郎、獅子男として再生し信乃の飼犬与四郎の対になるべく親兵衛にくっついていくことになる。蟹の親子であるが、神宮の稽平というのが実名ではなかったのが命拾いした名詮自性である。

2010/04/22

●梓を分解すると木+辛で「きしん」鬼神となる。

月は玉・船であるから、木+辛＝鬼神と虫＝虎との違いになる。

2010/04/17

●『御慰忠臣蔵之攷』の蚊を見て閃いた。二輯口絵の亀と蝦蟇の回りを飛んでいる虫。九匹いる。蚊が九。蚊九＝ぶんきゅう＝蚊牛である。



●大和本草卷之十四。海蛆（フナムシ）

海辺に生ず。舟にも多きゆえに名つく。長二三寸、足多くして速に走る。本草原始海馬の図の下に出たり。綱目等には不載之。船をくふ船虫とは別なり。

逃げ足の早い船虫をイメージするのは上の通りだが、気になるのは「船をくふ船虫とは別なり」というところ。船を食う船虫とはナニモノだ？船＝玉で玉虫になるのはくどく書いているが、船も玉とすれば「玉をくふ船虫」となる。玉を犬士とすれば「犬士をくふ船虫」となる。

●重戸

「おもと」という音だと植物の万年青しか浮かばなかったが、漢字を分解すれば一人の戸が重なるになる。伏姫が重なっているのだからそれで良いとして、『大和本草』巻之十三を見ていたら「ヲモト」という魚がいる。重戸は落鮎余之七有種の妻であり、魚つながりの名前であった。「おもと」という音にも重ねられた意味があるのである。

●2010/01/12に、八百八人の何曾何曾の項を書いた。

風は、八に随ひ虫に従へり。故に虫は八日にして、其卵孚る、と王充は論衡にいへり（⑧383）と言うけど、これは違う。登場人物の言葉をそのままとってはいけないことは分かっている。虫が虎なのも分かっている。

雲は竜に従い風は虎に従うを隠しているのだ。

八百比丘尼妙椿を思い出そう。八百は風である。風には虫＝虎がいる。八百比丘尼妙椿が風を起こす「みかその玉」を持っているのも、風は虎に従うからだ。墓田素藤も虫がいる虎で、これまた虎虎コンビである。

と、書いたのだが、『大和本草』巻之十六に「日本に多キハ虎狸ナルヘシ」とある。妙椿の風比丘尼イメージとして虎と狸は結びつくものなのである。

●大和本草巻之十四

蠣肉蟹となる。

2010/04/16

●船虫を本当の名詮自性だと思って読んでしまうから、名前と実態のギャップの大きさととまどってしまうのだ。隠された名詮自性が虎で鬼で媚薬と分かれば名前とのギャップは感じないはずである。

虫は蟲で考える。同じ場所で小文吾に「這船虫は三度まで、強盗の妻に做り」て、現八に這奴は「三たびまで、強盗の妻になりたる」⑤175と繰り返させることで三を強調してることで分かる。

船虫の悪は虎であり、赤岩では鬼であり、また縁連を誑かせた媚薬である。

●② 286、三十二回を読み始めると面白い箇所があった。287のぬいの台詞、

そはそら言で侍るべし。

下でみてきたように「そらごと」には搗鬼、虚談、虚語が当てられるのが通例かと思っていたが、ここでのそらには漢字が使われていない。どこが違うのだろうか。全てを抜き出さなければ分析は出来ないが、恐らくはその内容によっているのではないか。漢字の搗鬼、虚談、虚語は本当にその気がないのに話している嘘の「そらごと」で、ぬいの言う「そらごと」は小文吾が信乃を守るためについた嘘であって、漢字の搗鬼、虚談、虚語を使ってはそういったことを含まない本当の虚語に限定されてしまうのを避けたのではないだろうか。

と、のちの事例のために疑問を呈しておく。

●伏姫は恐ろしい⑤ 70

重戸の夢に現れた伏姫はこう言う。

自分の言うことを聞かないと親も夫も瞬く間に非命に死ぬことになる。

読者は行徳で伏姫によって空中に持ち上げられた舵九郎が真っ二つに裂かれて死んだことを知っているの、重戸が従って良かったものの、従わなかったら落鮎一家はどんな死に方をしていたのだろうか想像すると寒気がするのである。

●犬士の書き分け。⑤ 47

どうしても仕返しをしないと気がすまない粘着質な道節。それは面白いやと、乗りやすい現八。へらへらしている信乃。そこまでやるか？と思いながらも従ってしまう大角。

●穂北・梅田・柳原。地名に注意。

●下のように誉めていると、

郷武們が枉死の顛末、ここに至るまで一事も漏さず、その筆力を尽す所、当時の形迹当にかくのごとくなるべきを、看官宜く翫味すべし。(④ 405)

なんて書くから興醒めするんだよね、とは思ったが、馬琴が何やらわざわざ書くときは何かしら隠していたり、重ねていたりすることもあるので侮ってはいけないなと思い返した次第。

●いい場面も多々ある中で、何度読んでも良いのが、小文吾・莊介と一緒に

こうと言われて「毛野は聞きつつ歎びて、後につき先に立して、俱にゆくこと二里あまり」④395という場面。歎びてというところにそれまで孤独だった毛野の心情が表れている。黒澤映画のような場面であるといっても馬琴のほうがずっと早いのである。

この場面があるからこそ、小文吾・莊介の前から去っていった毛野の、それでも復讐せざるをえない生き様の厳しさが浮かび上がるのである。自分たちは明治時代の人間ではないのだから、素直に読めばいいのである。

●お尻にあった小文吾の痣（②237）が左の股（④389）に移動している。

●下で鬼が含まれていることが気になると書いたあとも読み進めると、毛野の台詞中に「高手（じょうず）に鬼（うそ）を搗倣（つきなら）ひ」④369とある。鬼の意味にもう一つ「嘘」を加えよう。鬼自体が嘘なものであると言っちゃあお終いである。

●搗鬼（そらごと）④300、343、380

「そらごと」というと虚談、虚語が多く使われるなかで、この「搗鬼」には特別な意味があるのだろうか。鬼が含まれていることが気になる。

●鬼妻（ごけ）船虫④297

庚申山で安達が原の鬼婆のような本性を表した船虫なので、後家という言葉にも鬼妻という字が使われている。前にも書いたように、虎で鬼で媚薬というのが船虫である。

●船虫：水滸の母夜叉母大虫に、似たる強盗なるべきか（④296）

虫つながりで母大虫の虫が何かわかったら、船虫の虫も分かる仕掛けになっている。

●木天蓼丸

縁連から偽一角、縁連から船虫に渡った刀。猫に木天蓼丸というのが設定の元になっているのは分かる。ならば何故に船虫の護身刀（④281）となったのか。④106曲亭主人曰以下に答えがある。簡単に言えば猫と虎は同じだということ。

虫は虎＝猫であるのだから、船虫と木天蓼丸の相性も良いのだ（化け猫とも）。船虫を海辺にうようよいるものの名詮自性だなどと思っていると分からない。

●信乃（④191）と浜路姫（④230）が浜路の霊のことを言わなかったと

繰り返して二人の共通項としてつながりを暗示する。

●八犬伝を冤罪小説とみると、その晴らしかたにもいろいろあるが、甲斐の話は二時間ドラマ的で単純だけど血のついた刀の扱いは推理モノとしても面白い。死体は時間が経っているのに、刀の血は新しい。犯人は何故わざわざ死体を発見されやすいところに置いたのか。

甲斐の話は浜路が布団を引っかぶって寝込んだとか描写が他に比べると非常にゆるい。ハッピーエンドなのも特徴である。上杉ではなく武田だからというよりも、そこが甲斐だからということに意味があるのではないか。

昼無住院（ちゅうむじゅういん）の昼無には夢中があるようだし、無我六には無我夢中、信乃は夢中の心地して（④ 187）と「夢中」が隠されたキーワードのように思える。

無我六のしょうもない読みとしては無＝む＝六で「六が六」といった「だからなに～」と言いたくなるのも考えられる。

●蟹守と雛衣

蟹と鯉。蟹を八郎の象徴とすると、鯉は里見の魚とみることができる。なるほど、犬村の雛衣は選ばれた存在であった。大輔の母が濃菰で、これも鯉である。信乃の母が手束、毛野の母が調布で龍であるから、龍になる前の鯉と龍になっているかの差があるようである。

ふと思うと、犬士が伏姫に選ばれたのではなく、犬士の母が伏姫に選ばれた存在であったのではないか。母系で考えると理解できそうである。

ふとまた思ったのが犬村蟹守儀清とフルネームでみると、儀清（のりきよ）とはぎせい、犠牲である。蟹は犠牲となる、これまた名詮自性の名前であった。

2010/04/07

●4巻を読む。

p106の曲亭主人曰以下は要するに現八・角太郎の化け猫退治も虎退治であるということを言いたいのだ。ただこの場合の虎退治は龍の雛衣まかせであるところが角太郎の情けないところである。

雛衣とは何者かをまとめてみる。

- ・雛草は龍のひげの類である。
- ・雛衣は宝珠を体内に持っている。
- ・雛衣（ひなきぬ）は「こい」とも読む。（雛狗を「こいぬ」と読むところから）
- ・鯉は龍になる。八犬伝世界では胙でもある。

・雛衣は蟹（蟹守）の娘である。

雛衣は角太郎を守り、角太郎の代わりに虎と戦い犠牲になるのが「竟に脱れぬ定業」として設定されている。これが虚花ということであろうか。

前に浜路でもみたが、人物設定には多くの要素が詰め込まれているので、誰々はどうであるなどと決め付けるのは論外である。

●偽一角が角太郎に言うせりふ。

一言いへば二言返して（④69）

なに気ないせりふが上手い。自分が親に言われるそのままである。

2010/04/06

●4巻を六十六回までを読んだ。虚実をキーワードにして読むと、

言の虚実（P37）

虚実（58）

虚泪（そらなみだ）（68）

虚々しき目（71）

虚泣き（そらなき）

虚言（そらごと）（81）

虚滅（そらじに）（87）

虚死（88）

これだけを見れば庚申山が虚の世界であったということが言える。現八の役回りとは虚の世界を実の世界に戻すことであった。現八は現・八郎であるのだから、金碗八郎の役回りも虚の世界になった安房を実の世界へ回復させることであったと逆から読むことができる。現八がもつ玉に信（まこと）＝実の文字があるのもこういった事情によるものであろう。

下の話につながるが、雛衣が守ったのは偽一角によって逆手にとられた角太郎の信であったということになる。伏姫が守ったのは義実の信であり、この点でも角太郎＝義実、雛衣＝伏姫の構図で成り立っている。単に蟹の娘だからということではないのだ。

信（まこと）から見れば仁義八行の化け物といわれた八犬士の中で現八だけが信を体現していて、他の七犬士は初めに信が欠如していて、自らを利するための行動によって事件に巻き込まれていったとも言える。

信乃は浜路に嘘をついている。道節は偽火定で金を騙し取っている等である。

八犬士は他の犬士との関わりの中で信を持ち始めるのである。犬士の成長物語を読まないから仁義八行のばけもの物語になってしまうのである。

自分はなんでも出来ると傲慢にも思っていた親兵衛が泳げないことによって、

自分は間違っていたと反省するところに人間的な成長を読まなければ親兵衛譚は本当に空虚な物語に堕してしまう。仁義八行のばけものという他人が作ったフィルターをはずして、犬士を人間として読み直すことからはじめなければならない。

●亀山郁夫『罪と罰』ノートを読んでいたらドストエフスキーと馬琴の方法が似ているので面白く、久し振りに八犬伝を読む気になった。四月ということで岩波版の4巻をよむことにする。

七輯口絵は甲斐編の登場人物なのに、なぜだか偽一角と牙二郎が紛れ込んでいる。隣の額には夏引・木工作・奈四郎がいるし、他の口絵には浜路、武田信昌もいる。偽一角と牙二郎は全く関係ないのだ。不在なのは信乃である。ここで口絵に信乃を出すことは出来ない。

で、見ると一角・牙二郎の額縁は「甲斐の八房」と読めるようである。「甲斐の八房」こそが不在の信乃を表しているようである。鉢巻が一角のトレードマークなので、画中の文のためにわざわざ関係のないところにもってこられたのだろう。

2010/03/15

●開放文学中の『雪月梅』に《雪月梅》読法なるものがある。馬琴が言ってることと通っている。

もうすぐ随筆大成全巻をチェックし終わるが、おそらくここにも鬼六はいない。ただこの膨大な随筆の中で馬琴ほど鬼神や童話にこだわっているものは他にいない。鬼神は思想大系に入っている新井白石の『鬼神論』くらいなものだ。

2010/03/01

●文政十年三月二十八日

端女の名、これまで鉄と呼ばれ候へども、改名致させ度よし、先方両親被申候二付、昨夜相談のうへ、みちと改名いたさせ畢ヌ。真名にハ路と書べし。

八犬伝は六輯まで出ている。改名はもっと早いのかと思っていたけど結構遅かったのだ。

鉄は金を失うなんてとんでもない名前だけど、なぜ「みち」に浜路の路を選んだのだろう。

●馬琴の周辺を嗅ぎ回るのが良いかも、ということで京伝を見ていたら、寛政八年の『酒の神 餅の神 鬼殺心角樽』なるものがあつた。まあ酒を鬼殺しとも

般若湯ともいうと言ったくらいのことであった。

二輯口絵で五倍二が亀篠の口に無理矢理酒を流し込んでいるのが角樽である。亀篠の名詮自性が鬼六、鬼殺しであるなら角樽を使っているのも頷ける話である。

「大工と鬼六」の話はどこからきたのか

この説が正しいとすると、馬琴が大工＝番（作）匠（作）と鬼六＝亀篠を知っていたことは１００％ないことになる。偶然としても、こんなに出来すぎた偶然があることに驚く。翻案説が本当に１００％正しいのだろうか？

2010/02/22

●鬼柳（こぶやなぎ）

2010/02/13

●早稲田君で馬琴の『六三之文車』を見ていたら、口絵に富屋の側室玉梓と出てきた。なんと八犬伝以外に玉梓がいた。おまけにこの玉梓も殺されて怨霊として現れるのだ。

玉梓という名前には殺されて怨霊になる名詮自性があるようである。

富屋の正妻は「陽良（うはよ）」という上辺は善人という名前である。陽良に対する玉梓である。八犬伝の玉梓をもって悪女の名前とイメージしてしまうが、やはりこの名前にも正月になるような善悪不二があるようである。

八犬伝に出てくる名前はなんとなく特別な名前のように考えるまでもなく思っていたので、玉梓が出てきた時はそんなに重々しい名前ではないのか、と意外な感じがした。

『六三之文車』の見返しには馬琴の落款と宝珠、斗の縦棒を耳搔きのように長くデザイン化した「魁」の文字がある。「さきがけ」に意味があるのだろうか。『六三之文車』は文政四年出版で、八犬伝は四輯まで出ている。鬼鬼言っている馬琴であるから鬼と斗に分けて「鬼ばかり」と読むのではないだろうか。

それにしても義実（よしざね）とは虚実に通じる稗史的によく出来た名前である。戯言を弄してしまう人物なのである。もっと名前をいじくってみれば、義実（ぎじつ）とは偽実（にせのまこと）であり、伏姫の信（まこと）でもって補われるものなのである。

2010/02/05

●犬士にとって牡丹の痣が出来、玉の由来を知ることは、虚、偽りの自己から真の自己へのアイデンティティーの確立を意味する。それ以前の犬士は狗の子であり、女装をさせられたり、名前を変えられたり、偽ったり、望まない仕事をさせられたりして真の自分を出すことは出来なかった。生まれて後にまた生まれるとは、伏姫から生まれて後に現世の母から生まれることもあるが、現世の母から生まれた後に玉＝魂を得て伏姫の子として生まれ変わるということも意味している。

犬士の現世の母達は虚花であり、魂の母である伏姫こそが実花なのである。

●玉梓の着物の文字の形に鹿の子模様が加えられている。こんなに手の込んだ手抜きがあるのだろうか。と思うとまるで証拠を隠滅でもするかのように鹿の子に変えられているのもある。この件に関しては自分の考えが及ぶところでもなさそうなので、思考を停止する。

2010/02/03

●節分

●肇輯口絵玉梓

初版本にある鶯の袖の文字が後印本ではなくなっていて、そのあとに埋め木をして鹿の子模様に変えている。襟だけだった鹿の子を大幅に増やしている。手抜きの後印本と言われているから、なんか汚くしてしまったのかと今まで思っていたが、そのまま桜にでもすればいいようなところまで鹿の子にしているのだ。わざわざ面倒な（と思える。江戸人はどうも自分たちとは人間が違うようなので、面倒ではなかったかもしれない）鹿の子にしているのを手抜きと言っているものだろうか、甚だ疑問である。

鹿の子にも意味があるのだから、その意味を知っている人間にしか多くの模様がある中で鹿の子への変更は指示できないのではないだろうか。

2010/02/02

●雑文も随分貯まってきたので、

『八犬伝の名詮自性』

1. 「六」とは

○名前の「六」

悪人の名前

○六はりく、戮

2. 亀篠という名前

○亀は「き」、鬼

○匠作と番作

3. 鬼六と白地藏

なんてまとめようかと思いつつも、そんな集中力があったら絵を描かなければならないので難しいな。もう二月だし。

2010/01/31

●信乃の周りには何故「ぬか」がいるのだろう。現八の実父の糠助。額蔵のぐくも「ぬか」である。

2010/01/29

●師腕坊豪菁→ケチなのに豪勢。

菰見利金太→睨んで力んだ。

2010/01/28

●犬山道節の眼前の黑夜 四凶挑戦す

この挿絵を見ている読者の目は道節の目になっているのである。

●八という数字から離れてみると、伏姫、八房とㄥ大は一体として、八犬子で十大家族となる。なぜ九輯にこだわったのかも十牛図に空一円相があることを思えば分かるような気がする。十輯は「空」なのである。そこには何も書かれてはいけないのだ。九輯がどんなに長くなろうとも、あるべき十輯は空でなければならないのである。

●仁義礼智では信乃・毛野が他の犬士と違って、女装という別のグループになるのかは説明できない。禅と八犬伝のつながりからみると、八犬士は八識ということになる。眼職・耳職・鼻職・舌職・身職・意識の六犬士と末那職・阿頼耶職の二犬士となる。あんまり意味はなさそうだけど、闘牛は十牛に通じるから十牛図まで考えが及ぶとなにがしかの関係はあるかもしれない。なんでもかんでも神仙にしてしまうと、やけに牛と関係がある小文吾があれやこれやと自問自答したりすることにも何の意味もなくなってしまう。

●「大織冠」

龍女→玉梓 船虫

海女→濃菰 浜路 めい
(大輔 大八)

彼の浦に着き給ひ、浦の景色を見給ふに、海女ども多く集りて、潜（かづ）
きする事おびたし。（「大織冠」）

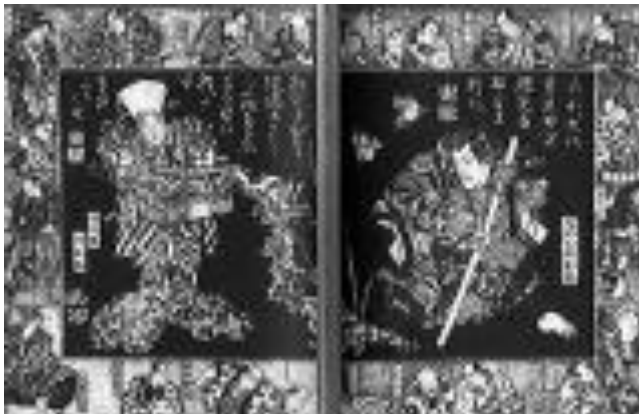
いせのあまの かつきあげつつかたおもひ あはひの玉の輿になのりそ

●定包とは、定を包んだ者。

定包の悪とは八房に生まれ変わったあとも情欲として残っていたが、伏姫の
読経の功德によって情欲を制し、心に定を得られることにより解脱した。水滸
伝の魔君のように本来持っていた本善に帰ったのである。

2010/01/26

●兎＝月＝玉



兎が玉に変身。

●鮫の守りに凝る馬琴

あきさめのもる夜わひしもうつはりの くにしは袖をぬらすものかは
つかさめの守りかたなに手をおふて よみにいそくはをこのしれ人

●千鳥は浜路を表している。

●この二枚もまた同じである。なんだかよく分からなかった現八・道節図の水
の額縁も、信乃・額蔵図の貝の額縁と対応しているとなんの疑問も起こらない。



信乃・額蔵図の奥の着物は玉梓のものであったし、現八（ここでは見八）・道節図の柳は玉梓の肩にかかる黒髪を「春柳に糸垂て」（① 1 1 1）と描写していたことによる。柳には腰であり、腰は奥につうじる。

信乃と現八信道には信（まこと）があり、額蔵と道節は虚の姿である。信乃と現八が同じポーズをとっているのも対応している。首を切られていない浜路なのに、道節が持つ首を浜路の首に思い込まれるが、首を刎られたのは玉梓である（① 1 1 4）。額蔵の懷で顔だけ出している幼児と、道節がもつ首の女は同一人物であり玉梓→浜路なのである。

●役の行者と前鬼、後鬼



「金比羅船」のこの姿からみると、役の行者の後鬼が伏姫、前鬼が大輔に置き換えられなくもない。

- 大雑把に捉えるならば、
発端～七犬士伝→水滸伝
親兵衛譚→平妖伝
管領戦→三国志

2010/01/24

●馬琴の嗜好

『燕石雑誌』（十）物の名

近属江戸にて、琉球芋を炮烙をもて蒸焼きにしたるを八里半と号て売るなり。こは甘くして、その味ひくりにちかしといふ謎なり。亦浪華にて、味噌の中へ番椒何くれとなく辛きを摺まじへたるを天竺味噌といふ。からすぎれば天竺へ至るの謎なり。その滑稽殆ど絶倒す。野夫にも功の者ありとはかかる事をやいふべからん。

まあ分からない人はいないと思うが、

八里半は味わいがくりにちかいから、栗に近い、九里に近いで八里半。

天竺味噌は辛すぎる味噌、唐（から）を過ぎると天竺に至るから天竺味噌。

いやあ～面白すぎわあ、よくこんなの考えた奴がいるなあ、と喜んでいるのが馬琴なのである。自分も負けてられないな、と考えたのが、鬼も殺すほどに

辛いという酒鬼殺→鬼六の謎かも。

文政十年の干支は「丁亥」。猪年である。

なみ→ $7+3=10$ →と（う）。四郎→し男。つなげて読むと、とし男。

猪に大当たりの、亥年の年男並四郎

等々の謎である。



高島ひさ

浮世絵でもモデルの名前を出してはいけないと御上から言われれば、それを逆手にとって判じ絵にするくらいだから、江戸人にとっては当たり前なのかもしれない。とは言っても、八犬伝における画中の文はこんなに単純なものじゃないけどね。

●20日に、碗は鞠に通じる。五十子は万里谷で八犬士前史のキーワードは「まり」ではないか。「まり」だから、五十子・伏姫母子と金碗父子の功德云々という表現になる。と書いた「まり」の共通項は獅子である。

●あの斬った腕が乗っている口絵も鬼切の剣のことと分かれば、『燕石雑誌』に書いてある。『燕石雑誌』をちゃんと読めよ～、と言ったところだ。で、面白いことに気付いた。

かぐや姫について、「古今未生の妖婦たる竹取の翁が女（むすめ）」（燕316）と書いてある。

伏姫は襁褓の中より倅なく、彼竹節の中より生れし、少女もかくやと思ふばかりに①132

ということなので、見方を変えれば、伏姫は妖婦ということになる。妖は徳に勝たず。

2010/01/23

●正月（浜路）が何故墓六の家の養女になったか。

月にいるのは日本では兎だが、中国では墓蛙だから。

浜路の場合、本名の正月で考えないとその正体は見えてこない。

●『幸若舞』「大織冠」の万戸と龍女で玉梓説話を作り、盤瓠『搜神記』、盤護『元中記』で伏姫・八房説話を作る。そこに龍が持つ宝珠や獅子が加わり、

八才龍女やらなにやら。馬琴のことだから「万戸」は盤瓠に通じるなんてことで簡単に結びついてしまうのだろう。簡単に結びつくところがすごいだけだ。

こうしてみると、八犬伝とはなんでもかんでも貼り付けて出来た一枚の巨大なパッチワークなのだな、という感を強くする。いろんな布（引用）がみえるけど、その布一切れ一切れに意味があって、全体で一枚の作品になる。布一切れ一切れに意味を持たせ繋ぎ合わせて統一させるのが稗史七法則である。

引用がどうのこうのではなく、それを自家薬籠中のものとして使いこなし、一つのテーマで物語を作り出す馬琴の記憶力、想像力、創造力、構成力、遊戯三昧遊び心を読むべきなのだろう。遊び心を含めた総体としての八犬伝を読まないから固くなるしい仁義八行の化け物話としか読めないのである。

●「大織冠」

さしも賢き万戸とは申せども、やがてだるまかされ（欺かれ）

とあるように、八郎が義実に対して玉梓に騙されるなど言ったことは正しいのだろう。もう少しでボンボンの義実を騙しおおせると思った瞬間に失敗したのだから、玉梓は逆ギレしたのだ。このように里見への怨み、悪意などは逆恨みなのである。義実に「信（まこと）」がなかったから招いた災いではあるが。

2010/01/22

●東洋文庫『幸若舞』「築島」

名月は聞こし召し、げにげにさる事のありしぞや。住吉詣のありし時、輿の先に玉章を引き結びて落とせしを





奥の先の着物が玉梓のものとは言っていたが、文献上にそのものが出てくるとこれを崩すのはかなり難しい。

「大織冠」もそうだけど、「築島」では善悪の捉え方などに八犬伝の世界と共通するものがある。

「築島」の善も悪を先とせり。それ、善悪の二法といっぱ、裏と表のごとし。（幸若 1－290）

などは、八犬伝の世界を一言で表しているようなものである。

●茨木童子。鬼のキーワードは分かったので、片腕を加えてググると、以前分からなかった口絵から出てきた鬼ごっこの鬼。見る人が見れば、箕田源次兵衛后綱と斬られた腕で、すぐに茨木童子って分かるんだろうね。



●玉梓→幼女→浜路で転生を示す。

文中の絵、画中の文。二つを一緒に考えないと、八犬伝の完全版は読み解け

ない。不可解に思われていた図像も、単独では読まない、言葉も図像も変換する、というコードを適用すれば全ての図像は読解可能であるはず。大前提は種史七法則で本文を読むことではあるが。

●



(三枚が並ぶように見ること)

斧琴菊なんてのに騙されていたのだ。斧琴菊は信乃・浜路図の蝙蝠であり、禍福倚伏である。

額蔵の着物の琴と抱く幼女だけが必要で、額蔵本人はいないのと同じである。

玉梓が持つ琴は、額蔵の着物の琴の形をした袖と描かれている。

額蔵のは嘘の袖で、玉梓の着物の鷺の袖と対応している。額蔵が全く本人でないのも嘘である。玉梓の着物の襟の鹿の子と、額蔵が抱く女の子の着物が鹿の子である。定包の白黒の着物に牡丹の着物、薄い石畳模様はそれぞれに信乃の黒い牡丹の痣と着物に対応している。

信乃が口絵で持っている柄杓は「定包扇を笏にとり」①35と対応。図中の両者の扇も対応。

亀は鬼であるから、定包が疫鬼①34でいい。三脚の蝦蟇と硯は、信乃・浜路図の三脚しか見えない机と硯である。

蝦蟇と亀の周りの羽虫は信乃の机上のペン立ての羽と壁が対応。

信乃・額蔵図の蝦蟇と亀の周りの虫は蚊であろう。蚊にしても羽虫にしても、信乃、浜路、額蔵、墓六、亀篠が飛んで火に入る夏の虫には変わらない。

信乃・額蔵図の糸巻きの漢詩は定包・玉梓図の漢詩。信乃・額蔵図の扇の歌は信乃・浜路図の扇の和歌。二輯口絵は前後の二枚を結ぶとともに分岐を表し、信乃・額蔵図の糸巻きは前後の図を廻る因果の糸車を表している。

信乃・浜路図の画中の文は、 有一日信乃は、子舎に籠りて、独机に臂を倚かけ、訓閲集を読んでをり、浜路は窃に歎びて（後略）②40がそのまま描かれているように見えるが、実は

このとき山下定包は（中略）御簾を半捲揚たる、もたれ柱に身を倚て、（中

略) 尺八の笛吹すさみ (① 1 0 0)

であることも分かっている。

伊勢の海女とは「大織冠」に出てくる海女で浜路を指している。

と、言うことだ。三枚組というのを見落としていた。

2 0 1 0 / 0 1 / 2 0

●「大織冠」に出てくる海女は、濃菰、浜路、ぬいのモデル。それで口絵に「いせのあまの かつきあけつつ」が載る。

思いつきの 6 4 5 が玉梓、浜路、濃菰、ぬいの原型にぶつかるとはついている。特に玉梓と浜路が同じ書に出てくるところが、浜路は玉梓の後身説にはもってこいである。

大織冠と伊勢音頭がつながってしまうところが、表の話を作るためにはなんでもありを明らかにしている。

「大織冠」のどことどこが八犬伝と対応してるかは読めば分かるのでいちいち書かない。

●九十七回、誠心まごころ⑤ 2 3 6

里見関係者の誠心を挙げた後に、

●鬼六

素藤の父親が、胆吹山の鬼跣六。跣だけで盗跣の名なのだから、とってしまおうと残るのが鬼六。八犬伝の文中で鬼六を見つけるのは簡単だが、文外で探すのは難しい。『今昔物語』にでもいそうだけど。いるのか？鬼六。鬼殺しという酒の名前で鬼六とつけたのが、偶然にもあとから出来た鬼六の話と同じだったのか？

亀篠と匠作・番作父子の組み合わせも偶然なのだろうか？

『聴耳草紙』には、「大工と鬼六」を胆沢郡金が崎の老婦から聞いた話とある。『聴耳草紙』に収録される以前には胆沢郡以外で知られたことはなかったのだろうか？

●紐一本でつないでいる。

原作を見れば、紐と鎖が竹で接続されて一本になっている。仮名読みの作者と絵師は原作にある善悪不二も理解していないし、愛憎も不二であることを理解していない。

善の中に悪があり、悪の中に善がある。愛の中に憎しみがあり、憎しみの中

に愛がある。この二つが車輪を動かす動力となる。善だけでも、悪だけでも車は動かない。善悪を超えた八犬士に物語を作り出す力はないのである。

八犬士は仁義八行の化け物などと言うのは坪内逍遙がかっこつけで言っただけで、そこだけを取りあげて祀り上げた明治維新以降の日本の近代こそが薄っぺらなバケモノなのである。今の自分たちは薄っぺらなバケモノの後裔なのである。

●トレーニング

藤原鎌足→大織冠→大食漢→大食い男→大悔太郎

思い切り後悔してる男は表の名詮自性、実は藤原鎌足。

入鹿は分解して八+鹿、八・殺し。八郎、殺しになる。八郎は忠臣で中臣。八郎（中臣）に殺される入鹿は定包になる。

● 11日に6：45の語呂合わせの例で適当に書いた大化の改新だけど、これは本当に良いかもしれない。

蘇我蝦夷、蘇我入鹿。法興寺の打毬で、中大兄皇子の皮鞋が脱げたのを中臣鎌子が拾って中大兄皇子へ捧げた。これが縁となって二人は親しむようになった。

筆輶口絵をみて分かるように、碗は鞠に通じる。五十子は万里谷で八犬士前史のキーワードは「まり」ではないか。「まり」だから、五十子・伏姫母子と金碗父子の功德云々という表現になる。中臣は忠臣につながる。

などと思いだしたのは、幸若舞の「大織冠」に出てくる龍女が玉梓の原型であると考えからである。前にみたように、琴の本体は龍に関する名称で構成されている。その琴と一体化している玉梓も龍であり、悪龍であり毒龍である。故に玉梓は人に屠られる。玉梓の玉もまた宝珠であるが、みかその玉があるように、悪い玉もある。玉梓と伏姫も虚花と実花であり、邪正一如であり、善悪は不二なのである。

蘇我蝦夷、蘇我入鹿の二人には、虫と鹿がいて、虎は殺される名詮自性を馬琴なら読んだかもしれない。

中大兄皇子＝里見義実、中臣鎌子＝金鞠八郎、蘇我入鹿＝山下定包との置き換えも可能である。もっと言えば、八犬伝世界での前身後身かもしれない。

2010/01/19

●名著版の人物一覧を見てたら、船虫のむしに蟲を使っていて、一人で虎三匹

かと思った次第。しぶとい訳だ。

●『兎園小説』第六集

○土定の行者不死、土中出現の観音

えせ行者の話だが、これがまた「神田の原大塚のもとにて、来る六月十五日に火定せんとふれて町をめぐる」とある。火中に自ら入ったとも、弟子に突き落とされたとも言われたらしい。後者では笑話である。

で、これで思い出す道節もえせ行者である。道節がニセ火定をしたのが六月十九日であるから、この四日のズレにはなにかあるに違いない。

土中出現の観音の話が文化十三年。

道節が土中から再生した話の三輯が文政二年。

親兵衛の玉が川中から網にかかって出てきた話の第四輯が文政三年。執筆していたのはその前だから、玉の出処を土中から水中に変えたところが隠微なところかね。

馬琴が引用した、神田大塚にて行人火定の事のオリジナルは、『日本庶民生活史料集成』第八巻、見聞記の「慶長見聞集」に載る。この「慶長見聞集」、八犬伝の元ネタのような話がいくつかある。蟲

一つ(?)と思ったのは、馬琴の紡ぎ出したアニミズム的作品世界にあっても(中略)蛇と蝦蟇の対立関係は見当たらない。とあるけど、墓穴殺しの簸上宮六は簸上蛇太夫の息子であり、代理蛇と蝦蟇の対立関係にある。

2010/01/18

●三脚の蝦蟇。守銭奴の墓穴、亀篠も表す。

頭に角のある大の蝦蟇



序とラストの回国頭陀との会話『夢中問答』。天竜寺と延暦寺。

●小文吾は牛と関連付けられている。十牛図との関連があるかもしれない。禪

語と小文吾という訳で、

虎生まれて三日、牛を食うの機有り。（大慧普覺禪師語録）

船虫は虎である。牛の小文吾を食らう機会をいつも狙っているのも名詮自性。虫が虎に置き換わらないと八犬伝世界での意味をもたない。

● 黒白＝あやめ＝善悪

黒白斑の八房は善と悪の犬。八犬士も黒と白の斑犬である。八犬士の痣も痣と見るからいけない。

漢字と意味の変換も重要なのに、誤脱を入れ木までして訂正させる馬琴が、十条のじゅうに振り仮名がふらなかったのは読解のヒントなのだ。～とのみ思わせるのが馬琴の常套であるが、「じゅうじょう」とのみ勝手に思ってしまう読者の既成概念を逆手にとった手法である。十条＝とうじょう＝東条の置き換えが分かると、頭の中の思い込み、誰々の説といった煩悩の霧が拭うが如く晴れわたって、八犬伝の世界を見渡すことが出来るのだ。

● 番匠

匠作、番作父子は番匠、大工からの命名であることは、番匠をググれば、確認のために古語辞典をひいてもわかる。亀篠が鬼六という名前も分かった。馬琴が知っていたかは分からないが、大工と鬼六という話はある。

馬琴が大工を番匠としていたのは『烹雑の記』に「江戸にていふ大工を番匠といふなり」とあるので明らか。あとは大工と鬼六が馬琴の周辺から見つかるかである。

鬼六については、青空文庫で読める。[ここ](#)。

これまでの「お伽噺」という定義によらず、「童話」を日本で初めて集成したもの、だそうだが「童話」の定義が分からないことには、鬼六がどの時代からある話なのか分からない。

● 庚申（寛政十二年）の夏、居を卜して旧燕の栖を得たり、房を曲亭と呼び、堂を著作と號く（同書 p 35）

● 雷水解（らいすいかい）



雷水解だけでも、馬琴の本名の滝沢解とともれる。

琴馬亭曲一言葉って曲だと、どうも尻切れトンボのような納得のいく解ではなかったが、解をいれると「言葉って曲がって解く」となる。つまり曲解するという意味になる。

八犬伝の基本とは曲解にある。義実に語らせる名詮自性の一解を、読者がそれで全てと曲解することで謎は作られていく。船虫を単に海辺の海蛆の名詮自性とのみ思わせる、曲解させることで作者の深意を隠していく。「～とのみ思ハする」とは読者を曲解に導くテクニックであろ。さらに読者は表の名詮自性を曲解しないから、なんか辻褄の合わないような漠然とした袋小路に追い込まれてしまうのである。これも一解である。

まあ八犬士は光の戦士みたいに曲解して読むのも梨、じゃなく有りだから良いけど、それじゃあ戯作者馬琴が可哀想ではないか、とちょっと思う。

馬琴をまことにして、また琴を分解すると、真に今は王が二人（天皇と将軍）となり、曲亭を曲がっているとすれば、今は将軍と王という二人の王がいるので正しくない、ともなる。廓で誠のバカな奴よりはずっと馬琴の深意がありそうで良い。

全ては曲解かもしれない。冗談好きな馬琴のことだ、難しく考えさせるけど、案外「亭を曲がったら、馬がいて、琴の音が聞こえた」くらいかもしれない。

名詮自性から説き起こして、曲亭馬琴というペンネームで論文一本出来そうだね。書かないけど。

2010/01/17

●蟹

前に肇輯口絵で八郎が引っ張っている蟹は怨みの顔を持つ平家蟹だと思っていただけ、これだけ鬼探しをしているのだから、「本草」にある鬼蟹にした。

鬼蟹 蟹譜曰背殻若鬼状者眉目口鼻分布明白。常宝翫之。

鬼で忠臣というところが八郎らしい。決定。

●2009/08/28に、舟が玉なら、船虫は玉虫？いろいろと姿を変えて現れるのは玉虫だから？と疑問をていした。

『嬉遊笑覧』の「玉虫」に、

漢土に媚薬といふことあり「本草」にも往々見ゆ。其物を貯へもてば人にめでいつくしまるとあり。玉虫も是等の意にや（下略）

とある。船虫は媚薬の玉虫だから「人にめでいつくしまるる」のか。人だけでなく、化け猫にもだけど。で、本草を見ると、これがまた面白い。笑った。

玉虫は金亀子と書くのだ。金鬼かよ！鬼に金棒である。

船虫を単に海辺の海蛆の名詮自性とする、なんでこれほどに手強い相手であるのかの説明がつかない。

虎で媚薬で鬼、名詮自性、最悪な女なのだ。

●大輔の母濃菽（こはぎ）が濃い→鯉、恋なのはこれまた分かっていたけれど、なぜ菽でなければならないのか。もういちいち書かない。

●小文吾のお尻のおかげ（苦笑）で『源氏物語』の二十一帖「少女」が分かってしまった。

八郎・濃菽と信乃・浜路に『源氏物語』か。女を見捨てて出て行く男の対には典拠も同じ作品が使われていた。八犬士の基本は八郎であるから、当たり前と言えば当たりの話である。典拠内での対というのも考える余地はある。そこまでしないけど。

●小文吾の牡丹の痣が、なぜお尻にあるのか分かった。なぜ親兵衛ではなく小文吾が巨石をどけて湧き水を出すのか分かった。つながっちゃたよ。

●虚実

そもそも八犬伝世界の因果の発生の原因は結城合戦にあるのだけれど、世界のあらゆる生き物を動かすのが義実の戯言と伏姫の信の虚実である。

義実は虚の代表であり、五十子と伏姫は実、信の代表である。だから伏姫母子の功德ということになる。

義実（ぎじつ）は虚実に通じるのである。

現八が初めて角太郎宅を訪問した時に角太郎が行っていたのが維摩の行。

机のうへには、何の経文にや、五六局可あり（③398）

よっぽど捻くれてない限り、この経文は『維摩経』であろう。下で見たように、角太郎と富士山はセットになっている。富山を富士山と見たのは鋭いが、そのあとが肝心なのであった。

伏姫に偉そうに語った牧童の言っていることも不二の説明である。

中公文庫の『維摩経』よりもネットで出てくる『維摩経』のほうが漢文もついているし分かりやすい。

●不二法門に八犬伝的要素を加えると、邪正一如。

2010/01/16

●虚実をキーワードにすると、今まで分からないところがあった九輯下の上口絵も読める。



なんとなく仲が悪い二人で取り上

げた道節と毛野。

道節と毛野はよく変装するので虚。

現八と妙真の組み合わせが分からなかったけど、犬飼信道とあると分かりやすい。二人には信と真のまことがある。他の九輯下の上口絵も虚実、虚花（あだばな）と実花（なりはな）の組み合わせである。

虚実、嘘と誠、善悪、禍福、生死これらは不二であり、二身一体であり、分かťことは出来ない。

曲亭馬琴の名詮自性、虚実、嘘と誠が分からなかったら、なんとなく分からなかった現八と妙真の組み合わせだったね。いつまでも廓で誠なんて言ってるようじゃ馬琴の深意は分からないね。

●口絵の法則。

全部みてないけど、虚（嘘）と実（信）の組み合わせである。

本文の言葉で言えば虚花（あだばな）と実花（なりはな）（10-273）である。下の口絵で見れば、同じように描かれている玉梓は虚花であり、伏姫は実花である。曲亭馬琴というペンネームにはこう言う意味があったのか。廓で誠の野暮な奴という意味に分解されたんじゃ馬琴も泣くぜ。って言うか、これだけ世の中に広まってんじゃ、自分が知らないだけで馬琴自身がどこかで廓で云々という意味だとか言ってるのかな。どこが出处なのか。廓で誠じゃ全然隠微じゃないね。

●浜路は今の女の子に似げなく、鄙言にいふ馬鹿正直（②62）

2010/01/15

●親兵衛話

山林房八の息子親兵衛の本名は山林真平しんぺいという。「まっぴら」である。真平御免、でどうぞお許し下さいという意味。山林は小文吾の伯父さんにあたる那古七郎を殺した杣木朴平の杣木から作った苗字。山林真平とは名詮自性、那古七郎を殺した杣木朴平をどうぞお許し下さい、という余りにも余りな贖罪の名前なのである。定包を排斥しようとして犯した罪。善悪は不二である。その贖罪のために戸山（富士山＝不二の象徴）で一度真平は死に、犬江親兵衛として再生したのだ。

●大八の親兵衛を出したついでに分解すると、一人八で転倒して、八人（随）一の親兵衛。郎が省略されているとみて、大八郎の親兵衛＝スーパー八郎の親兵衛、八犬士のトップで、宝珠を持つから八大竜王の親兵衛（肇輯口絵にある将棋の駒からも竜王は導きだせる）等なんでもありになってくる。

大八車は、一台で八人に代わる運搬ができることから「代八車」の意味で、大きな二輪から「大八車」になったといわれる。

一人で八人に代わる親兵衛。確かに親兵衛がやってることは七犬士とゝ大の対だからそうとも言えるかもね。

●『燕石雑誌』（十）物の名には、今まで頭を悩ませてきたものがサラッと書いてある。

●馬琴は八房について八総と書くのは間違っているとわざわざ言っている。房に意味があるからだろう。ぼう、ふさ、安房のわ。義実に八房の分解を「一つ

の尸八方」とか言わせているけど怪しい。それでいったら房八も「一つの尸八方」になってしまう。義実の一解のみを全てと思わせるところに目眩しがある。

八房を、玉梓が後身とのみ思ハするハ、世俗の臆断に宛たる也。作者の面目にはあらず。この間、なほいひがたき所あり。後の評を得バ、復其処にて分解せん。今しばらく待給へ。（『犬夷評判記』中之巻）

八房は本当は定包の後身じゃないですか！などと後の評を得なかったので、そのまま馬琴は黙っていたのである。

●犬塚家の飼い犬は「四白よしろ」とも「与四郎」とも呼ばれた（①294）。与四郎のほうに通称になっていて四白を忘れてしまうが、よしろ＝夜白、夜白草で牡丹である。

信乃の飼い犬は「牡丹」という名前の犬だったのだ。「大八の親兵衛」というのも鍵だ。一人に二つの名前。名詮自性、与四郎は「獅子の牡丹」だ。

こうしてみると、八房に獅子と牡丹を読んだ高田衛はすごいな。あの本がなければここまで楽しい八犬伝ライフは送れなかった。獅子男の与四郎が親兵衛にくっついているのは分かってたのになあ。牡丹＝富貴草にばかり目がいつていた。犬にまで本当の名詮自性が隠されていたとは。やられたな。

「毛吹」や「歳時記」は一つの単語を別の単語に置き換えるのだから、まさしくコードブックである。

●兎巷幸弥太遠親（うちまたこうやたとおちか）

●基本

○按ずるに唐山の小説などにも（中略）蟹と虎と闘ふ事はある。（燕石435）

○蟹が（中略）類を尽して猴を責たるは義なり。（燕石441）

忠臣が海に没して自殺して蟹になるとか蟹尽くしの燕石は参考になる。力二郎（りきじろう）も蟹男と読まないと意味がない。ただ尺八と二人合わせて八房にされてしまって、それこそ狗死になのだ。力二・尺八兄弟の父、神宮川（かにわ）のヤス平もヤス平は蟹ということ。忠臣だったヤス平は改名して犬の親兵衛の忠犬になってしまった。

そういえば義実と八郎は三十匹あまりの蟹を殺した（①68）ので、蟹の怨みの報いにあつたとも言える。

●竹林の虎を調べていたら「鵲虎図」にぶつかった。鵲はなにかググってみたら「かささぎ」とでた。



馬琴の「歳時記」烏鵲橋の記述に月をととても愛した夫婦があり、加えて「葉草」には「鵲は畿内・東北の国にこれなし、筑紫に多し（中略）羽に黒白あり、尾長し」下89とある。先日みたように、黒白は浜路の実母であるし、善悪でもある。筑紫といえば筑紫琴で玉梓と浜路の共通アイテムである。月は浜路＝正月である。筑紫で怨霊というのもつながった。

上図の鳥にはあれこれ考えさせられて、雲雀やらなにやら随分迷走したけど鵲に決定！雲雀じゃ月とか夫婦、黒白、筑紫は出てこない。

節婦竹の如しかとそのまま思っていたが、夏は寅をもって正月にするとか、竹林に虎とかも考え合わせれば、正月であった浜路は殺される運命にあったということになる。

2010/01/14

●趣向によって名前をつくる。名前によって趣向をつくり、その趣向によって名前をつくる。このイマジネーションの連鎖が多いほど一人の人物にあれやこれやの属性が詰め込まれていくのだ。誰々は何々とだけ決め付けられない理由がここにある。伏姫は何々、八犬士は何々と絞り込むこと自体が無意味なのだ。

●稲戸津衛（いなのとつもり）

莊介・小文吾の二犬士は（中略）稲戸津衛に謀られて、矢庭に搦捕られしかば、（④337）

雑文読みなら稲城（いなぎ）を「とうじょう」と読むのは当たり前。稲戸津は「とうとつ」＝唐突と読むだろう。

莊介・小文吾の二犬士は（中略）唐突（突然）に謀られて、唐突（突然）に搦捕られしかば（④337）で、くどいのだ。

●暴風の舵九郎（②358）あかしまのかじくろう。

悪人の雇われ水手。暴風で舵をとるのに苦労する、という行徳らしい名前にみえるがちゃんと虎がいて暴れ虎である。

風は、八に随ひ虫に従へり。故に虫は八日にして、其卵孚るなんて敵等なこと言ってるけど、もう風＝虫＝虎の趣向は分かっちゃったなあ。風（虎）は、

八（犬士）に随ひ。当然だけど、虎は犬士に敵わない。

パソコンで出ない漢字のもがりの犬太だって虎落だし。

みかその玉のように風（虎）を思いのままにコントロールできる方が有利であるが、風も雨もコントロールする龍の伏姫のほうがみかその玉の妙椿よりも一枚上手なのだ。妙椿は伏姫に蹴られたり（⑥ 2 7 3）してるし。

伏姫は生前に男勝りだったせいか、舵九郎を空中に引っ張り上げて真っ二つに引き裂くとか凶暴である。暴風あかしまなのは伏姫である。それに引き替え自分では何も出来なかった玉梓の怨霊など、息子大輔に父の後身伏姫を撃たせただけで満足してしまうのだから、伏姫に比べたら善意の怨霊なのである。この凶暴なところが毛野にあるのかな。八房譲りだと思ってたけど。

●信乃・毛野、道節・莊介、大角・小文吾・現八

ここに親兵衛が加わると、信乃・毛野、道節・莊介、大角・現八、小文吾・親兵衛となり二身一体となる。それで四天王の両目になる。ここら辺は玉を返せと言ったゝ大の言葉をよく読めば良いだろう。

●ゝ大の変名、風外道人という名前。

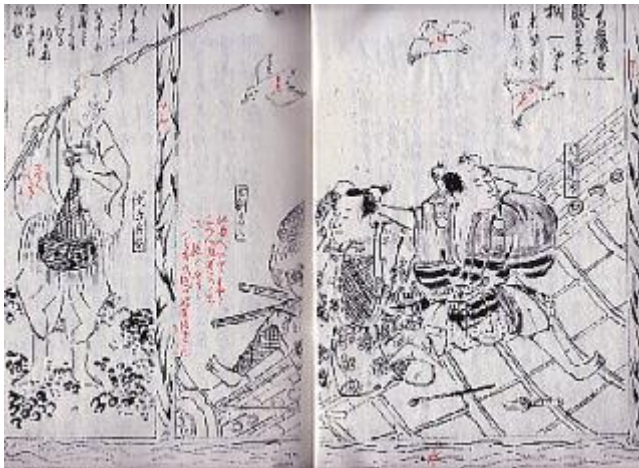
管領軍に名詮自性を考える人間がいたら、風外は風害に通じると読んで風外道人の言うことは聞くべきではないと那古七郎のように諫言しただろう。まあ、聞き入れられることはないが。虎に従う風は龍の支配下に入っているものである。

●鷗尻の並四郎のつづき。

カモメの尻を獲って鴨。

鴨は雁より後に来たり。（「葉草」下 3 6 6）→鷗尻の並四郎は狩りの後に来た。で、四輯巻一の口絵のような挿絵を思い出した。

鷗と鷗尻。鷗には鷗盟、隠居して悠々と暮すという意味があるので文五兵衛のことである。



並四郎には猪年の年男なんて、オマケのサービス問題の名前もついてるけど、並は波で下方にある水を表している。対になっているのはこれ。



川と山。善と悪。釣りと狩り。並四郎が猪に跳ね飛ばされている絵が別のコマになっているのも文五兵衛が別の縁にいるのに対応している。「毛吹」では、猪に新田四郎。

- 媽祖は、天妃・天后聖母・老媽・娘媽・菩薩などと呼ばれる。
- 中国の中南部で広く信仰されている航海守護神である。親兵衛の家は船主である。伏姫が親兵衛に水練を教えなかったのは媽祖隠しとも思える。

● 媽祖は宋代に実在した官吏の娘、默娘が神となったものであるとされている。默娘は建隆元年（960年）、福建省興化府の官吏林愿の7女として生まれた。幼少の頃から才気煥発で信仰心も篤かったが、16歳の頃に神通力を得て村人の病を治すなどの奇跡を起こし「通賢靈女」と呼ばれ崇められた。しかし28歳の時に父が海難に遭い行方知れずとなる。これに悲嘆した默娘は旅立ち、その後、嶺山の山頂で仙人に誘われ神となったという伝承が伝わっている。

なお、父を探しに船を出し遭難したという伝承もある。福建省にある媽祖島

（馬祖島、現在の南竿島とされる）に黙娘の遺体が打ち上げられたという伝承が残り、列島の名前の由来ともなっている。

媽祖信仰の盛んな浙江省の舟山群島（舟山市）には補陀山・洛迦山があり渡海祈願の神としての観音菩薩との習合現象も見られる。もともとは天竺南方にあったとされる補陀落山と同一視された。

媽祖は千里眼（せんりがん）と順風耳（じゅんぷうじ）の二神を脇に付き従えている。この二神はもともと悪神であったが、媽祖によって調伏され改心し、以降媽祖の随神となった。

この話が面白いところは、媽祖の事項もさることながら、その名前。媽祖になる前の名前、黙娘。分解すると黒犬娘になる。また媽を分解して女馬、馬は龍なので、転倒して龍女となる。犬が龍になっているのだ。伏姫は役の行者と思われる老人から宝珠をもらって、犬から龍になった。媽祖が神通力を得たとされる１６歳には、伏姫が富山に入っている。伏姫が観音じゃ悪いみたいに思われてるけど、伏姫は観音である。

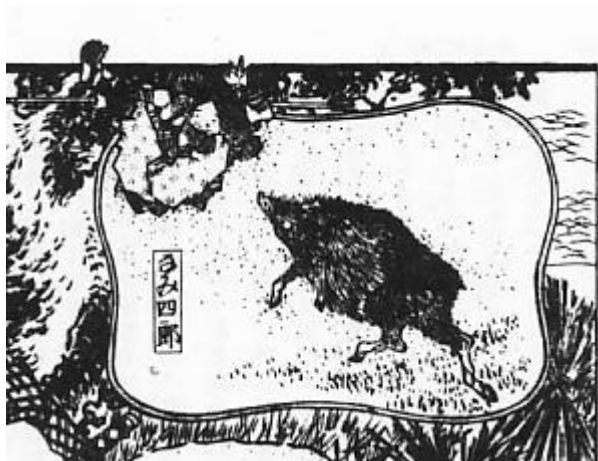
千里眼・順風耳という名前も八犬伝に出てくる。悪神千里眼・順風耳を二神一体として八房に置き換えると、八房はもともと悪神であったが、竜女伏姫によって調伏され改心し、以降伏姫の随神となった。

悪神なんて言うとなすぐに悪い神であると思っではいけない。神（しん）は心（しん）であるから、悪の心を持った八房は調伏されて善の心を持った犬になったということである。

船で遺体といえば音音（１０－２２）。って死んでないんだけどね。

2010/01/13

●名詮自性



この猪に跳ね飛ばされた男並四郎という。挿絵中ではなみ四郎。
六輯が出版されたのは文政十年。と書けばピンとくる人がいたら雑文通である。

文政十年の干支は「丁亥」。猪年である。

なみ→7+3=10→と（う）。四郎→し男。つなげて読むと、とし男。

猪に大当たりの、亥年の年男並四郎。

趣向によって名前をつくる、名前によって趣向をつくる。出版された年の干支所縁の名前がまだあるかもね。

ちなみにこの猪、猪なんだけど暴れる様は「勢ひ虎彪に敵すべく」③229
もので、小文吾には牛じゃないの、と思ってもちゃんと虎退治をこれで二回、
虎鬼村の鬼退治もしていたのだ。

●額蔵（莊介）のシンボルは糸巻き？



二輯口絵



五輯口絵

額蔵（莊介）は道節の音楽一味と何かある。153回でもペアにされていた
道節・莊介→隠れ東条だけなのか？

思い出した。九輯下の上の口絵も莊介と音音のペアであった。



臭うな。何かあるぞ、この二人には。額縁に輪宝と思
える円形のものが描かれている。

隣の信乃・浜路図の雲と龍・石橋と鯉登り、里見の家紋とくれば筆輯口絵の義実・八郎図に重なる。

もう一枚、莊介、音音、糸車。



●里見を危機に追い込む安西景連は「老狸（ふるたぬき）① 1 2 1」、親兵衛編で里見に危機をもたらすのは妙椿狸。親兵衛編は全て里見と七犬士伝の対になっているから当然と言えば当然だけど、本当の狸を出してくところが新趣向なんだろうね。

玉面（たまつら）、景連（かげつら）、縁連（よりつら）、「つら」とは何だ？

玉面（たまつら）の妙椿が八百比丘尼の虎だったから、つらはとらに通う。

●馬加大記。馬は竜、加＝鹿＝戮、記＝鬼で、龍殺しの大鬼という名前だ。配下の季六が鬼六だからボス鬼なのだ。

こんな読みばかりしていたので、福祿寿が伏六呪に見えてくる。呪い殺すが潜んでいる。なにか良い意味はないのかと考えたら、六字の呪文が潜んでいる、と読める。で、六字の呪文をググってみると、

六字大明呪（ろくじ だいみょうじゅ）、正式には六字大明王陀羅尼（ろくじ だいみょうおう だらに）とは、仏教の陀羅尼（呪文）の1つ。六字真言とも。唵（口+奄）－麼－拏（手+尼）－鉢訥－銘－吽（Om－ma－ni－pad－me－hum、オン－マ－ニ－パド－メ－フン）の6字から構成される短呪。

この真言には様々な意味が込められているが、最も知られているものが、「白蓮華の宝珠よ、幸いあれ」である。それぞれ、オンが「幸い」、マニが「宝珠」、パドメが「白蓮」、フンが呪文の完成を意味する。

これは良い。

妙真の帯には白蓮ではないが蓮華がある。左奥の見えないところに、梅で表されている宝珠を持った親兵衛が昼寝をしている。その周囲を瑞雲が囲んでいる。まさに「白蓮華の宝珠よ、幸いあれ」である。特待生の親兵衛にはぴったりである。



摩尼宝珠だと宝珠宝珠

2010/01/12

●馬加大記

いつも馬鹿と読んでいたのが正解だったようだ。馬は竜、加＝鹿＝戮、記＝鬼で、龍殺しの大鬼という名前だ。配下の季六が鬼六だからボス鬼なのだ。毛野も鬼退治と虎退治をしている。

●八百八人の何曾何曾

風は、八に随ひ虫に従へり。故に虫は八日にして、其卵孚る、と王充は論衡にいへり（⑧383）と言うけど、これは違う。登場人物の言葉をそのままとてはいけないことは分かっている。虫が虎なのも分かっている。

雲は竜に従い風は虎に従うを隠しているのだ。

八百比丘尼妙椿を思い出そう。八百は風である。風には虫＝虎がいる。八百比丘尼妙椿が風を起こす「みかその玉」を持っているのも、風は虎に従うからだ。墓田素藤も虫がいる虎で、これまた虎虎コンビである。

登場人物の台詞はミスリードを誘い、～とのみ思わせて答えを限定させてしまうのだ。牡丹の隠微を語らなかった毛野は隠微を明らかにしていて、ゝ大の解説もミスリードの一つである。

虎に従う風を竜の犬士が従わせる。そこが隠微なところである。趣向によって名前をつける。名前によって趣向をつくるのが作者の深意である。

●八字文殊？

（前略）變成男子の法（中略）、八字文殊（の法）（中略）、護摩の煙は内苑に満（中略）、何なる悪魔怨霊なりとも、障碍を成難とぞ見えたりける。（『太平記』 卷一）

玉をもらったあとの伏姫には玉梓の怨霊も障碍を成難かったようだし。

●馬琴は輪廻転生を物語の軸におく。それは何故か。物事がうまくいかない時に、これも輪廻のせい、あれも輪廻のせいと投げてはいけない。誠をもって行動すれば輪廻のせいにする宿業というものも必ずよく転回する、と馬琴は言いたいのである。儒教の徳目などは譬話なのである。単なる道具である。聖玉などと素晴らしく後生大事なもののならば、仁義八行の文字は消えることはない。八犬士が玉を返還してしまうのも、玉よりも大事なものがあるからである。玉も痣もない本来の自己である。本来の自己であるから、駄目になった安房からはとっとと去れと息子たちに言えるのだ。それは馬琴の若いころの自己の投影だろう。

八犬伝は自分である、と言っている馬琴が神仙小説など書かないだろう。鬼神などは字面通りの鬼探し、遊戯三昧な話を作る肉付けに使ったのである。

●趣向によって名前をつける。名前によって趣向をつくるのが作者の深意だったら、随分分かってしまったんですけど。良いんですかね。

●「十牛図」

「十牛図」（じゅうぎゅうず）と呼ばれる禅の文献がある。十牛図に示された牛は「本来の自己」を表していて、これは本来の自己を捜し求める旅を表している。

禅と八犬伝だから「十牛図」には注目してたのだが、分かった。

小文吾に代表される牛との関わりは、八犬士の流浪が「本来の自己」を発見する旅であることを言っている。

とうぎゅう闘牛も十条が東条と同じ読みだ。闘＝とう＝十で十牛、闘牛図は十牛図となる。

ついでに分かったのは、八輯上総目録の縁。

慶弔に使えるさや形の地に扇、馬、犬、虎。

扇ガ谷は虎、犬士は馬＝龍ということだ。

兎を見たら、月・玉を思う。



兎と犬殺しの梨男。兎＝月＝玉。この挿絵の次は亡霊の浜路がでてくる。この兎、目立つ顔なんだよね。

●義実が竜門の鯉に乗っているように、親兵衛は馬ではあるが竜に乗っていると見るべきである。

雛衣＝鯉＝龍であるから、「こい」を見たら龍と見るべきである。

これが八犬伝を構成している全てとは言わないけれど、対と言うよりも別のモノだけどイコール（＝）、音のイコール、意味のイコール、図像のイコールというコードを見つければ、いつまでも儒教だとか、薄っぺらい勧善懲悪の戦隊ヒーローもののようになっている今よりも充実した八犬伝ライフが送れるはずである。

●満れば欠く。

犬江親兵衛 仁

犬川莊助 義任→額蔵→額→欠く

犬村大角 礼儀→角→欠く

犬坂毛野 胤智

犬山道節 忠与→道→満ちる

犬飼現八 信道→道→満ちる

犬塚信乃 成孝

犬田小文吾 悌順

これを分析すると、親兵衛と小文吾は、朴訥は仁に近いで親戚で対、毛野と信乃は前世でも兄弟と言う四人を除くと、額蔵（欠く）が最初に会うのは道節（満ち）で、角太郎（欠く）が最初に会うのは信道（満ち）の現八で、満ちれば欠け、欠ければ満ちるという対になっている。というところに、

定包（八犬士の基本は定包）と玉梓と戸五郎

↓

道松（道節の幼名）と正月（**浜路**の本名）と**網干左母二郎**

という輪廻によって解く因縁と本当の名詮自性が加わって話を複雑そうにしているのだ。浜路の本名である正月の月は玉だし、前世の玉梓のように満ち欠けがある。すべては禍福倚伏である。伏姫という名前には福（伏）があり、福があれば禍は寄り添っているのである。犬姫というのも表の名詮自性である。

おそらく馬琴は『水滸伝』の伏魔殿に禍福倚伏を見つけたのだろう。



2010/01/11

● 鶴亀



この凶暴で好戦的に見える鶴と亀が本当に長寿を表しているのだろうか？

亀は鬼であった。鬼と鶴じゃいまいちだ。鶴、つる、かく。鬼を釣るというのは、あるかも知れないが聞いたことがない。

「かく」でかくかく、漢字を思い浮かべると、角太郎の角。鬼と角。鬼の角。鬼六はいなかったが、ここにも鬼は隠れていた。

●もともと江戸語になると犬っていうのは、義理を知らぬ人間のたとえ、犬畜生、似て非なるもの、まわし者、岡っぴきなど良い意味では使われない。

八犬士が生まれた富山＝富士山とは善悪不二の象徴である。八犬士は定包の後身八房の子供だから黒白を併せ持って生まれてきている。黒とは定包の富貴歓楽の象徴であった牡丹を模った痣である。八犬士は仁義八行の玉＝魂を得ないことには黒を押さえ込むことは出来ない。玉と痣を同時に持つことが犬士のバランスをとっている。八犬士はそのことを意識せずに仁義八行で鬼や虎と戦い、勝利した時黒い牡丹の痣は消滅し、相殺されて仁義八行の文字も玉から消えた。すなわち稗史七法則でつくられた因果の消滅である。

●2009/08/01の記事●『増補俳諧歳時記栞草』は面白い。
形見、出家落 墮落をいふ。

金碗八郎は濃菰に子供が出来てしまったので、これはマズイや、と出奔してしまった。その後濃菰は子供を産んで死んでしまい、遺された子を濃菰の父一作は主（八郎）と娘の形見として加多三（後の金碗大輔）と呼んでいた。

主と娘が形見

喃加多三

故主と女兒の形見

加多三々々々

憐れ八郎は玉梓に崇られたために、今際の際に「お前は墮落した」と五回も連呼されて死んでいったのである。

金碗大輔もまた憐れである。彼は父の墮落の象徴として生まれたのだった。

と書いた。八犬伝はどこを読んでもおもしろいので適当にページを開いて読むことが多い。岩波版①167を読むと、伏姫を八房の嫁にやらなくてはならなくなった段、伏姫の台詞、

よに受がたき人の身を、受て生れて成長る、親の遺体をまざまざと、畜生には穢さるべき。

の遺体にはかたみのふり仮名がふってある。

形見とは、死んだ人や別れた人を思い出すよすがとなるもの。残された品。遺品。遺児。過去を思い出させる記念の品

親がくれたこの体ととるのが自然だけど、遺体＝形見では意味が通らない。この時点では伏姫の両親ともに生きている。形見加多三と連呼していたのを考える。親の加多三と置き換えられる。そこでうまい具合に転倒してしまうと、加多三の親である八郎となる。という訳で伏姫は八郎の後身説につながるってこと。

● 肇輯口絵の金碗大輔孝徳のまりには「鞠きく」が使われている。

鞠問 罪を問いただす

鞠罪 罪を問いただす

鞠獄 罪を裁く

等の使用例があって、女四天に囲まれた金鞠（碗）大輔孝徳は罪人なのである。ボールの「まり」だと思っていると明後日の方角をみることになる。

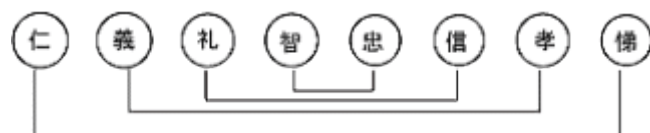
「まり」だと万里谷入道静蓮の娘で伏姫の母五十子も「鞠」である。つまり伏姫も大輔も罪人ということになる。

ちょっと見ると伊豆にあることが分かった。伊豆国、北条の荘官犬川衛二則任の息子は犬川荘助義任である。

● 満れば欠く。

って考えると、息子の嫁を鉄から路（みち）に改名したのも、満ちだからかね。欠くにしても満ちてくれなきゃしょうがないし。

● もう一つ復習。並べてみるとセットになっているのが分かる。



犬士が会う設定にも対が使われている。なんで孝の信乃が一番初めに会うのが義の荘介なのか。弱きを助ける義の荘介ということよりも実際はこんな単純な法則（と言えるのか）に則っているのかもしれない。

仇を狙う同士 of 智（毛野）と忠（道節）。近すぎて反発か。まあ言葉を探せば「両雄並び立たず」ってところ。

2010/01/10

●大人

『玄同放言』「姓名称謂」（大成155）

大人はおとな（傍点）と読べし。印行の書紀、及続紀に、大人を、ウシ、老人を、オキナヒト、と傍訓たるはたがへり（大成155）

と書いていながら、「八犬伝」では大人をうしと読ませるのだ。大人を全部見たのではないから、はっきりとは言えないけれど、大人＝うし＝牛である可能性は高い。意味を成すかは今思いついただけだから、ちょっと分からないね。

●横堀史在村

落鮎余之七有種

どちらも「あり」＝犬殺しの梨で、犬士を殺そうとしたのに前者は悪で、後者は善なのはどうか？

在村は梨がいっぱいになっているが、有種はまだ種で梨の実にはなっていないかったから反省する余地があったのだ。

で、2009/09/05の●「夏行有種四犬士を歓待す」にある兎の置物（剥製？）という挿絵の読みにつながる。

兎を見て犬を呼ぶという諺。失敗したあとで改めても遅すぎることはないを意味していて、二犬士を疑ったことを反省している夏行有種である。

●網干左母二郎

網に干された魚男の左母二郎だが、具体的に言えば「鱈」。

左母二郎は色白の男であり、干鱈は『毛吹草』俳諧四季の詞では正月の付け合せだからである。鱈には犬の伯母の雪があり、信乃とも関わりを持つ。

正月だろうが浜路だろうがどっちにしろ、玉梓—正月のちに浜路、妻立戸五郎—左母二郎という輪廻の宿業からは逃れられなかった浜路である。

網浜 あみはま 漁に使った網を干す広い浜辺のある地に由来。浦の網干に浜路の女松②62という譬は良いね。

●信濃 木曾麻衣（『毛吹草』）



●八犬伝言葉遊びの基本が分かったと信乃と浜路に害をなす夏引という女の名前もすぐに分かる。

夏引→なびき→「な」をひく→「びき」が残ってびきはひきと同じだから「墓」で、虫がいるから夏引は虎ということになる。虎と鬼はいたるところに隠れていて犬士に害をなすのだ。

ことば遊びが名詮自性とは……。遊戯三昧！万歳だ！

墓穴→虎は殺される

亀篠→鬼は殺される

季穴→鬼は殺される

●



鯉、龍、八郎、蟹、節。この口絵に全て出ているじゃないか。肇輯口絵の全てに不二も輪廻転生も全て出ているではないか。



白地藏（かくれあそび）にも鬼はいるではないか。河童に見えるけど甲羅をつけて玄武の玄吉は、亀で隠れた鬼である。ちゃんと読者は白地藏をしているではないか。

馬琴が隠した鬼を見つけたではないか。馬琴と遊んだではないか。遊戯三昧したよ。まだまだ八犬伝の中に鬼はいるだろうが、最後に見つけるのは自分の心の鬼だ。

●いつも八犬伝は音読の書ではないことの例にひく雛狗（こいぬ）①288。

雛狗だから雛衣（ひなきぬ）は「こきぬ」だけど、衣（きぬ）は「い」で、「こい」→「鯉」となる。

義実と八郎が会う原因となったのは「昨には大きな、鯉魚を備る」①56ことであり、庚申山に現八郎（八郎）が現れて、角太郎（義実）と会うのも、

雛衣という「胙には大きな、鯉魚を備る」ことであった。

なんか分かったよ。鯉は「胙」なのだ。「胙」「膳」「燔」にも「ひもろぎ」の字訓が宛てられているが、これらの元々の意味は神前に供える肉である。雛衣の死は、角太郎の首途（かどいで）にとっての胙だったのだ。

八郎が見捨てた大輔の母濃菰の死も（濃い→鯉）「胙」であった。死とは首途を祝う胙であった。

鯉は「胙」、恋も「胙」。浜路の恋も死も信乃の首途を祝う胙だった。
死のなかに福があるのだ。

雛草（たつのひげの類）で宝珠を飲んでしまうくらいなら雛路でも良いのだが、雛衣は雛衣という名前でなければならないのである。名詮自性とはこういうことなのだ。

玉阪飛伴太 たまさかひばんた たまたま非番だ、なんて見つけて喜んでいたうちは八犬伝の髓を知らなかったと言えるだろう。

●鬼車

鬼車（きしゃ、Kueiche）は、中国に伝わる怪鳥。九頭鳥（きゅうとうちょう）とも呼ばれる。

ミミズクのような姿で、頭が九個あり、人間の魂を吸い取るとされる。本来は十個の頭を持っていたが、犬に噛み切られたとも、古代・周王朝の宰相・周公旦の庭師に撃ち落されたともいわれる。そしてその無くなった頭から、常に血を滴らせているという。

頭を犬に噛み切られたというところがなんとも良いではないか。逆から考えると、八房に首を噛み切られた安西景連は鬼車となる。で、周公を思い出すと、定包・玉梓図、八房が噛み切った首を銜える伏姫・八房図である。

見開きのように並べると、全部漢文で統一される。この二枚は一組で初めて意味が通じる。玉梓は鬼（死しては祀らざる鬼とならん（①109））で伏姫が神、これまた鬼神なのだ。

●最近急に鬼に注目し始めたので忘れていたが『毛吹草』を見れば、鬼の項に「蜻蛉」があるではないか。「女」「心」もある。馬琴が好きな「鬼神」論である。神は心。鬼は人間の心である。

やっぱり『毛吹草』はコードブックだったな。例えば「馬琴の大夢」には『毛

吹草』の毛の字も出てこない。なんでもないものが、無造作にポンと目の前に置いてあるようにする。これが隠すテクニックである。作中ではあるが犬塚家の天井にぶら下がっていた村雨に誰も気付かなかったではないか。水滸伝とかビッグネームを出して、そちらに注意を引き付ける。これも隠すテクニックである。

●

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目錄	
卷之四十	卷之四十
第百七十九回	第百七十八回
拾出野坑親兵衛受賜 掃除風葉諸勇士立談	奔馬逐北犬江籠暴雛會 再戰場親兵衛會五知己 衝突三陣體諸奏再功 報答舊恩成孝全前言
第百七十回	
神藥施得敵兵再生	

この目録の縁。そのままだと蝶とトンボに見える。しかし、見たままじゃないということは分かってきたと言うよりも、鬼の線で考えたほうが良い。で、『和漢三才図会』を見ると、蝶とトンボが並んでいる。さい先が良いではないか。



●鳳蝶あげはのちょう/蜻蛉やんま・とんぼう

鳳蝶をみると、鳳子車に鬼車とあり、蜻蛉の説明に馬大頭と書いてヲニヤンマが。ここでも鬼鬼言ってたのか。さすがは稗史七法則の鬼、馬琴である。

2010/01/08

●蚊牛（ぶんぎゅう）→蚊→か→火→火牛なので、番作に火葬（いわゆる証拠隠滅）にされた。なので後の管領戦で信乃が「火牛の謀」⑨281を思いつくことになる。牛が集まらないので猪になったけど。

●



『抱朴子』

玄牡（くろきこま）を龍のごとく跼（おど）らせ

天竜川、龍でこの場所が龍が棲むと言われる富士山であることを示す。前にみたように肇輯口絵の大輔は『海道記』に書かれた富士山を形象化している。ダメ押しのような玄牡である。

●犬飼現八信道の幼名は玄吉というのだけど、『抱朴子』に「玄（みち）は自然の始祖にして（以下略）」とあって道と玄は通じていたのだな、と分かった次第。玄は黒で、顔に黒い痣があるから玄吉、つまり黒吉という名前になった

のか。黒吉じゃあんまりだしねえ。

●信乃と毛野の母には、子供出生にまつわる三年があり、女装させることに理由があり、手束（たつか）・調布（たつくり）と名前に龍がいることを上げたが、隠れたのを一つ見つけた。



蚊牛に踏まれた帯に麻の模様がある。麻の布、麻布である。調布（ちょうふ）って地名でしょ、と思ったのもあながち間違いでもなさそうである。麻布（あざぶ）と調布（ちょうふ）の地名つながりの母でもある。

鹿の子模様の最近の情報を付け加えると、番作の後ろに鹿の子模様がある着物がかけてあって、戮なのだなあ、と分かる次第。

●黒白話

幼い道節を殺害しようとした正月（後の浜路）の実母黒白（あやめ）。もう一つあやめと振り仮名がふってあるものに善悪がある。黒白＝善悪である。

八房の毛は「白きに黒きを雑へて、首尾八所の斑毛」① 140である。つまり八房は善悪を合わせ持って生まれてきた犬なのだ。八房と言う犬は禍福倚伏そのものである。

2010/01/07

●基本は第二回の安房にある。

①朴平と無垢三は、定包暗殺のために、丑三の頃から落葉囃の東北（うしとら）にある岡に隠れていた。

②丑寅とは鬼門である。

八犬伝の牛、虎、鬼が3点セットになっている。これに第一回の龍、輪廻転生、名前の読みを加えて、稗史七法則で味付けすれば八犬伝の大枠は出来上がりである。

発想の原点は龍だと思う。龍の宝珠、獅子は龍の八番目の子、富士には龍が住む。富士の形は八の字である、富士は不二で、善悪は不二である等イメージは膨らんだに違いない。龍と闘うのは虎である。龍のイメージからは天竜、天竜川、天竜寺など、虎からは悪政は虎よりも猛しである。このどこかで犬と獅子がつながった時に節用集にあった里見の八犬士と結びついたのである。里見の資料を狩猟すれば必ず春王安王の女装脱出失敗の話は知るはずである。信濃

と上（毛）野という犬士がいたことも馬琴にとってはラッキーであった。探したのだろうけど嘘のような出来すぎた地名が本当にあったりしたのも馬琴のイマジネーションを高める原動力になっただろう。パズルを作り出す本人が一番楽しかったかも知れない。八犬伝は馬琴なのだ。

●墓田素藤の父は「胆吹山の鬼跣六（おにせきろく）」と人に恐れられた男であった。鬼の子墓田素藤征伐は親兵衛にとっては鬼と虎退治の一挙両得である。

●鬼

八郎が玉梓に言ったこの一言が八犬士に影響しているのだろうか？

死しては祀らざる鬼とならん（① 109）

八郎の中に因果あり、八郎の中に業報あり、八郎の中に八犬伝あるなり。ただ伏姫を八郎に変えただけな跣のだが、こっちのほうが八犬伝を表していると思う。

●ト部季六

「すえろく」なんて名前だけど、季＝き＝鬼で、また鬼六なんですけど。ほんと鬼ころしが好きだよな。

<http://www.excite.co.jp/News/bit/00091160010210.html>

「なぜ、“鬼ころし”という名前なのですか？」

もともと「鬼ころし」というのは辛口な日本酒の代名詞で「鬼をも殺す程、“辛い”」というたとえから生まれた名前です。だから、当社だけではなく様々な会社さんが作っていますよ。広辞苑など辞書を見ると、辛口で雑味が多くあまり良くないお酒と説明されていますが、それは甘口全盛の時代に出来たイメージ。一時期は、その「イメージ」と「殺す」という言葉の過激さから、全国の酒屋さんから減ってしまいました。

辛四郎（辛子男）なんてのも悪者で犬士に殺されてしまうし、犬は辛いものが嫌いなのか？って言うか、馬琴が辛いものは嫌いなのか？

●虫亀村の須本太は牛なのだけれど、スッポンは亀だから虎鬼村の鬼という名前になる。で、小文吾と関わってしまうのだ。

●虫は虎。亀は鬼。墓蛙はなんだ？と漢字にして分かった。墓にも蛙にも中に

虫がいるではないか。墓穴という名前、虎は殺されるという名前である。二人の最後は蛇の息子に殺されるのだが、蛇に蛙はまだしも亀は合わない。大体が亀や蛙が龍・獅子の信乃に害をなす理由がないのである。虎や鬼だからだ。こう考えると、墓田素藤は虎がいるから苛政をし、龍である親兵衛と対峙するのだ。



やっぱりね、墓穴の「ひき」だって「匹」や「曳」があるから音読では八犬伝は理解できない。「匹」や「曳」には虫がないのである。

●鬼殺し話

亀篠の名前は亀+三三（ $3+3=6$ 、 $6=戮=殺す$ ）、亀は「き」で鬼、鬼殺しという名前なのは分かったが、馬琴の鬼神論に面白いことが書いてあった。

酒、煙草、蕃椒（とうがらし）に鬼ころしの名あり。（『燕石雑誌』348）
亀篠の名前が鬼殺しと分らないと面白くない口絵。鬼殺しに鬼殺しである。以前考えた瓶にささ（酒）じゃあストレートすぎて、亀篠の恐ろしい顔も意味がなさそうである。一段階じゃストレートすぎて面白くないけど、二段階が分かると、面白さが増す。馬琴、面白いよ。

●番匠話。

番匠には意味があるのに、何故に大塚匠作、大塚番作という順番の親子なのか。転倒すれば良いだけじゃ意味がない。何故転倒するかが大事だ。これこそ単純な名詮自性である。番作は村雨の番人なのだ。それも信乃に渡すまでずっと隠し通した巧みな番人である。番人なるが故に、信乃に村雨を渡すと御役御免で退場となる。

親子としても番匠の順に番作が匠作の父になってしまったら、隠すのが匠なだけの匠作が信乃の父になってしまい番人という意味がなくなる。匠作から番人の番作へという村雨の委譲が必要なのだ。番作が不自由になったのも村雨の番人になるべくないたのである。

親子の名前が反対というのにもちょっとした意味があるのだ。

●木工作とは何者か

番匠とは木工（もく）である。匠作、番作は信乃の祖父、父である。木工作が信乃を助けたり、気にいったり、結城合戦と関係があるのは木工作という名前故であり、安房と関係があるのは四六城→１０城→東条という苗字によるものだ。東条番匠作という名前になる。「もくさく」ではなく「むくさく」としたところが無垢三に通う隠微なところである。

人面獣心の名詮自性とかは薄皮だったのだ。

なるほどね、分かったよ。馬琴って面白い男だ。

●鬼六と書いていて思い出した。

『大工と鬼六』である。大工と言えば、番匠である。以前に匠作と番作親子の名前を調べて出てきた言葉だ。番作と匠作の作は両者に共通だから消してしまうのだ。算数みたいなものである。順番からいけば匠番だけど、匠番では意味をなさない。転倒すれば良いのだ。

番匠（ばんしょう/ばんじょう）とは、中世日本においてに木造建築に関わった建築工のこと。木工（もく）とも呼ばれ今日の大工の前身にあたる

なんで大工の親子なのか分からないし、意味不明なので追跡はやめていた。で、「大工と鬼六」である。大工が鬼に難題を突きつけられる話である。大工とは番作と匠作。鬼六とは下でみた亀篠のことだ。

これがいつからある話かは分からないが、大きなヒントになったことは確かだ。

●亀篠について篠＝三三。実は亀六、とまでは考えた。亀殺しという名前でも良い。吐いた息が白く見えた時に閃いた。馬琴の「鬼神論」だ。鬼は気である。亀は「き」であり「鬼」である。亀篠の名前は「鬼六」である。



現八が庚申山に登る前の茶店の挿絵部分。亀を力一杯に引っ張る変な子供。これから起こることが目度くないから反対の亀かとも思っていたけど、これから出てくる亀＝鬼＝船虫を表しているとも思える。船虫は鬼婆である。

2010/01/06

●四六城木工作。4 + 6 城→十城（とおじょう）→東条。ここまで分かっているが木工作って何か分からなかった。甲斐での出来事は『新編 八犬伝の世界』では大塚での出来事としていたけど、当雑文では安房での出来事であるとした。浜路と浜路で大塚とってしまうが、安房である。木工作は無垢三に通うのだ。東条の無垢三である。

無垢三一定包一玉梓←八郎 伏姫 大輔

木工作一奈四郎一夏引←信乃 浜路姫 大

無垢三抜きの三人で考えていたからいけない。

第二回の冒頭「安房は原、総国の南辺なり」と第六十八回冒頭「奈末与美の甲斐州は、州の四境皆山なり」は対になっている。甲斐と安房は山と海で反対だが、国主がまともなのは照応である。

安房で言えば、大輔が救えなかった伏姫と信乃が救った（ような）浜路姫は反対である。大塚関係で言えば、浜路を救わなかった道節と浜路姫を救った道節は反対である。

浜路の亡霊が現れる甲斐州は黄泉の国でもある。

●

○雨たれのおとしつくして又さらに しるこそよけれ軒の月影

○軒のつまにあハビの貝の片おもひ もも夜つられし雪のしたくさ

軒が「けん」で犬なのは明らかである。犬の月影、犬の妻なら意味が通じてくる。

雨たれ、雨といえば村雨。村雨に犬、月といえば正月の浜路。犬（塚信乃）の妻、浜路に片思いの左母二郎、宮六。雨たれのおとしつくして又さらに しるこそよけれ軒の月影

雪のしたくさ（虎耳草）

犬塚信乃の妻浜路に片思い。ずっと待たされたのは虎だった。

で、2009/07/31の記事につながる。

●『増補俳諧歳時記栞草』は冒頭から衝撃的だ。

正月 夏は寅を以正月とす

夏といっても季節のなつではなくて、古六曆の1つである夏曆のこと。それはいいとして、浜路の元の名前は正月（むつき）であった。睦まじい睦月ではなく正月を選んだところが馬琴の作意である。

正月に生まれたから正月である、というのは名付けとしてはもっともではあ

る。しかし、馬琴はなぜ浜路を正月生まれに設定したのかという疑問の答にはならない。

浜路は虎であった。

と言ったように、一人の人物には様々な要素が詰め込まれて因縁を作っている。誰々はこうである、と一つに決め付けることは出来ないのである。これは八犬伝全体にも言えることである。バカバカしいところだけを抜き出して語れば、八犬伝はギャグ小説である。

●寛正六年・毛野生まれる（これが毛野の特異性につながっている？）と書いたのも今なら分かる。殺戮の毛野だからだ。

●六名前

ト部季六。小文吾暗殺を図ったが、旦開野に殺された。

ついでに以前抜き出した「六」を再掲する。大雑把に見ただけだから遺漏ありと思う。こうしてみると但鳥跣六業因（素藤の父親）⑤ 3 2 7 が六なのも納得である。

玉梓処刑は第六回

六歌仙（② 2 4）酒の席の喧騒で喩え。

酷六、墓六、宮六、孟六、氷六

寛正六年（莊介受難の年）、第二十回作者云で寛正六年を再び繰り返している。

六月十九日（② 1 2 2）

六月二十一日（② 1 9 6）

道節六才（② 1 4 6）殺され再生・

十六才小文吾、犬太殺害）

ぬい十六才、房八と結婚

五月十六日（③ 3 2 7）毛野、復讐を果たす。

六里（② 2 4 5）

六ッ七ッ（2 8 0）

六尺あまり（③ 5 4）の木に額蔵処刑のため吊るされる。

巨田新六郎（③ 2 1 8）

ト部季六(③ 3 1 2

舟虫処刑は六犬士

六稔歴にける戸田河原の、危窮(⑤ 2 7 1)

くみこ六人(① 4 7) 義実らを取り囲む

強いて言えば、定包は禄(ろく) 山

おん身が懐胎六个月(① 2 1 7)

定正は(中略) 明る六日の申の比(③ 8 2) 道節暗殺失敗・犬士苦戦
曳手・単節・?平・音音・力二郎・尺八(六人の夜)

丁六(③ 1 8 5)

舟虫は、年歳も三十のうへを六ッセッ(③ 2 3 7)

六布七布(③ 2 3 8)

寛正六年・毛野生まれる(これが毛野の特異性につながっている?)

六尺袖(毛野③ 3 0 1)

次の日〔六日〕(③ 3 3 8) →わざわざ注を入れている。

四六城木工作(甲斐の話では「四」が頻出)

浜路といふ六斎の市場(④ 1 3 5)

溷六(どぶろく)(④ 3 2 7)

馬加蠅六郎(④ 3 5 5)

筵才六枚(⑤ 3 0 4)

但鳥跣六業因(素藤の父親) ⑤ 3 2 7

有年の六月中(⑤ 3 2 7)

高梨六郎(⑤ 3 3 0)

六角家

往る六月某の日(⑤ 3 4 7)

六岐の枝(⑤ 3 6 2)

東六郎辰相(⑤ 4 4 4)

(親兵衛) 手には六尺ばかりなる棒(⑤ 4 6 4)

六稔以前の事にして(⑥ 2 7)

六稔以来の(⑥ 2 8)

荒磯南弥六(⑥ 4 1)

貝六(郎)(⑥ 4 4) 以下略

六稔前つ秋(⑥ 4 5)

ふみ月六日のことなりき(⑥ 4 5)

巨田新六郎 (⑥ 4 7)
六稔の程に (⑥ 5 4) 以下六稔は略
六月の祇園会 (⑥ 1 1 5)
六字の名号 (⑥ 1 4 1) 名号の六字 (⑦ 1 2 2)
仙駝麻嘉六 (⑥ 1 9 6)
鳶野戸郎六 (⑥ 2 4 5)
去歳の六月信濃路にて (⑦ 7 0)
直塚紀二六 (⑦ 1 6 5)
六道山能化院 (⑦ 2 9 3) 結城七郎朝光の建立
六才子 (⑦ 3 4 0)
香西復六 (⑦ 4 4 8)
二六郎一徳用 (⑧ 4 6)
香西再六 (⑧ 5 6)
六十斤一徳用
山幸樵六 (⑧ 1 1 7)
京都の五虎+妖虎→六虎

大野の六地藏堂 (⑧ 2 9 1)
従六位上 (⑧ 3 0 1)
晋六武佐 (⑨ 8 5)
十二月六日 (⑨ 1 2 0)
印東小六 (⑨ 1 2 8)
錐布五六 (⑨ 2 6 0)
生入永六 (⑩ 9)
浮浪六稔を歴て (⑨ 4 3 2)
六個の使人 (⑩ 1 2 7、1 3 2)
小六位の下 (⑩ 1 2 9)
今より六日の後 (⑩ 1 3 1)
松山五六 (⑩ 1 4 8)
使者の快船水路六里を往還 (⑩ 1 6 7)
六月五日の朝 (⑩ 1 7 2)
六月六日の早天 (⑩ 1 7 2) 上洛
宇賀地野見六 (⑩ 1 8 6)
六郎一八犬士結婚の媒酌人 (⑩ 2 2 1)

●福祿寿

六は戮であり、祿である。

禍福倚伏

意味 福の中に禍が潜み、禍の中に福が潜むように、災いと幸せは順繰りにおとずれるものだということ。▽「禍福」は災いと幸い。「倚伏」は禍が福のもとになったり、福が禍のもとになったり、禍福が互いに因果的に生じること。

「倚」は寄り添う、また、ちなむ、原因となる意。「伏」は潜む意。

『老子』五八章。「禍は福の倚る所、福は禍の伏す所なり」

伏姫と言う名前に天機がある、というのを義実には人+犬の伏と解釈させて、のちの「禍は福の倚る所、福は禍の伏す所なり」という意味の仙童の言葉に上塗りをしてしまう。伏姫の伏はふく、福であり、福姫という名前には禍が潜んでいたのだ。

蝙蝠が描いてあったら「禍福倚伏」を読むのだ。猿や馬があれば「意馬心猿」と読めと馬琴が言うように読めばいいのだ。蝙蝠をみて、蝠は福ではない、で止まってしまっただけではいけない。禍福倚伏と四文字熟語で答えるのが正解である。

2010/01/05

●弥々山墓六と言う名前。六が殺すと分かれば、八八山→十六山墓殺す、となる。十六日に殺す、墓六が信乃を殺そうとするのもその名前故なのである。信乃が十六と関係なかったら、弥々山という苗字には何の意味もないのだ。

墓六が神宮河で信乃を殺そうとして失敗したのが十七日（②71）。十六日だったら信乃は墓六に殺されていただろう。馬琴うまいな。神宮河が「かには河」→蟹は河であったから信乃は助かった。まあどちらにしても主人公なのだから殺されないのだから、それを言っちゃあおしまいなのだ。

名詮自性も読んで字の如しというほど単純ではないようだ。名詮自性が文面の仮話に使われているのだ。

墓を「引き」＝わが手に入ること、またその物。余得。

弥々山墓六→十六日を限度に信乃を殺して（村雨を）手に入れる。

酢もあらばいざぬたにせん網（網干）さかな（左母二郎）

（隙があったら、左母二郎も殺してしまおう）

殺すことばかり考えていたから自分が殺された、という因果応報の名前かもしれない。と考えていて亀篠が分かった。篠＝三三。実は亀六、亀殺しという

言う名前であって、目出度い亀が名前についていても寿ではない。もともと墓六とは似た者夫婦なのだ。

結城落城嘉吉元年の四月十六日。

春王と安王が美濃で斬首されたのは嘉吉元年（辛酉）の五月十六日。（①260）

●八犬伝というだけあって、数字をみていくだけでも面白い。

●当雑文の下の方で「六」について考えたことがある。下の文で分からなかった六の意味、分からないまま「魔の六月」と名づけたが、何故魔かというとき殺戮の六月であったからだ。親兵衛が登場してから六が良く転じたのも、親兵衛が殺戮しない人物に設定されているからだ。

六は八犬士にとって縁起が悪い数字だ。岩波一巻から十巻までの六をざっと抜き出してみたが、馬琴が「六」という数字を使うのを意識的に避けているのが窺われる。悪人名に使われるのがほとんどで、災厄の最たるものが「魔の六月」であることから「六」が忌む数字であることが分かる。

八犬士にとっては悪魔の数字のような六だが、自ら六月の悪夢を背負った親兵衛が再登場するとラッキーナンバーに変わってしまう。六尺の棒を持って現われるなど、六なんてなんでもないのだ。そんな親兵衛が京都で退治したのは「六」だ。のちの六月六日など、親兵衛が再登場するまでは、どんな災厄が襲ってきてもおかしくはない日が栄光の日に変っている。

親兵衛が退治した「六」の暗号とは何なのだろうか。「六」の最終形態は、伏姫、大、四天王だが、その完成した六も馬琴は壊していく。「六」の意味がはっきり分かれば、何故良く転じた六まで壊したのか分かるかもしれない。

●「鹿」で六「ろく」を導くのもありだけど、「ろく」の読み方を間違えていたのだ。酷六、墓六、宮六等が「鹿（かのしし）」なことではない。

鹿は六で「りく」である。六国史という読み方の「りく」だ。余りに「六」が分かり過ぎていて漢和辞典をひかなかったけど、ひいてみると、六には「殺す」という意味がある。殺戮の「戮」である。酷六、墓六、宮六の名前に合っている。鹿の子模様、じつは船虫のためにあるような柄なのだ。

船虫の最後の挿絵のタイトル、「目前地獄 二兇就戮」にもそれが表れている。

肇輯、二輯の鹿の子模様を見ると、「殺す」場面で使われている。例えば肇

輯口絵の大輔に「弥勒」をみるなら、やはり勒は鹿、六で戮であり、大輔は八房を殺す人なのだ。



犬江親兵衛 仁
犬川莊助 義任
犬村大角 礼儀
犬坂毛野 胤智
犬山道節 忠与
犬飼現八 信道
犬塚信乃 戌孝
犬田小文吾 悌順

I. 仁

II. 義任
 礼儀
 忠与
 信道
 悌順

III. 胤智
 戌孝

IV. 忠与
 胤智

名前の設定でも特別な仁は一人で、五人は徳目を頭につけている。

信乃と毛野は徳目を後ろにつけていてセットになっている。春王、安王型である。

「とも」「敵を狙う」つながりなのに道節と毛野は反対に設定されているので仲が悪い。犬士の設定にも七法則は適用されている。隠微はなにか、誰と誰が前身と後身なのかという輪廻転生である。主客、伏線、襯染、照応、反対、省筆は輪廻転生という隠微を明らかにするもので、稗史七法則は隠微六法則とも言えるものである。

2010/01/03

●政木狐の台詞。

悄悄地に安房・上総なる城隍、土神達を招よせて、那里の安否を問試しに（⑦36）

政木狐の対になる妙椿狸が里見の内情に詳しいのも「悄悄地に安房・上総なる城隍、土神達を招よせて、那里の」情報を得ていたからで、そのため浜路姫についても詳しいのだ。ずっと里見を怨んでいたのだから、鷲を使役して浜路姫をさらわせたとも思える。

●玉の輿の屋根についている、桜にかかった菊模様。ほら、菊だと何も考えずに思ってしまう。これは1日に得た情報を加えてみれば因果車ではないか。

さらに、目を移せば額蔵の「斧琴菊」も、固定観念を払ってみれば、琴と菊（因果車）だけに意味があって、幼児の鹿の子模様、貝＝玉の縁とともに玉梓から浜路、信乃、額蔵の因果を描いているのだ。

2010/01/02

●鹿の子模様ということで『京鹿子娘道成寺』なんてのに当たっていたのだが、テレビをつけたらなんだか分からないけど歌舞伎をやっていた。その最後に登場人物の一人が掲げた指の形がこれ。



大きな鐘が置いてあるし、もしやと思って終わったあとに題目を見たら『京鹿子娘道成寺』であった。

謎の手だと思っていたが、これは鹿の子模様に注目しろという暗号なのではないだろうか。

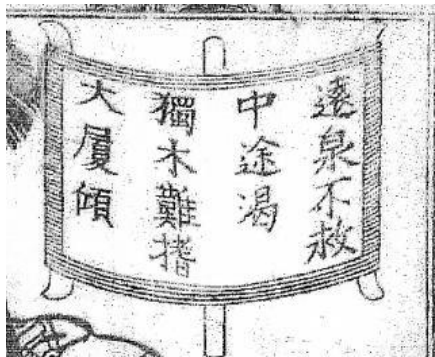
それに歌舞伎が演じられているのをみると、歌舞伎を使うのは馬琴の限界だとは思えない。読者は想像力を働かせて八犬伝に鮮やかな色を見て、鼓のさえを聞き、台詞の間を読むのだ。錦絵の八犬伝は、そういった八犬伝受容の一助になったにちがいない。

●八郎 義実 定包 大輔

玉梓 五十子 濃菰 伏姫

の八人が稗史七法則の核になっている。

●



大廈の覆んとするときに、一木いかでかこれを柱ん。(①64)という八郎の言葉がここで出てくるのも、この絵がタイトルとは別のことを語っていることを意味する。

●糸巻きにある「遠泉不救中途渴云々」。糸巻きは奴胤と奴隸額蔵のつながりに見えるけど、書かれていることは信乃、額蔵が出てきてからの内容とは結びつかない。大体が墓六の家が大廈な訳はないのであって、別のことを描いているとみるのが自然の成り行きである。



●八犬伝を読む時の注意。

○譬話は結論ではない。

○梟は梟ではない。

○馬琴はミスリードする。

●そういえば、新玉の年の正月でしたな。元日は正月（浜路の旧名）の推定誕生日でした。（2009/08/31参照）



浜路ではないかと推定していた謎の子。鹿の子模様の着物を着ている。抱いている額蔵は「よきこときく」だけれども、ちっとも良いことはないのだ。琴だけに意味がある。玉梓に琴である。

2010/01/01

●さや型に注意が行っていて気付かなかった。 下の記事で貝は玉とまた書いていてやっと分かった。

玉の輿の玉は玉梓の玉じゃないのかと見ていて分かった。梅の浜路に何故桜があるのか。最近注目していた鹿の子模様で気付いた。輿に掛けられている着物は玉梓の着物である。やっぱり定包の傍にいたのだ。



もうひとつ分かった。

「戯言を信じて八房敵将の首級を献る」「義実怒て八房を追んとす」の伏姫の着物に鹿の子模様があるのも、玉梓の怨霊が伏姫にまとわりついている証拠である。

船虫にしても、なんで鹿の子模様なんだろう？ 肇輯口絵大輔図の「正夢と起行鹿や照射山」と関係があるのだろうか？

2009/08/26に、●という訳で、貝は玉に置き換えて図像を読めば、今鉄砲の音とともに拭うが如く謎の霧は晴れてしまうのだ。と書いた裏がとれた。

八犬士は、自然と獲たる霊玉あり。（中略）天造地作の宝贝（たから）にあなれば（後略）⑦21

である。



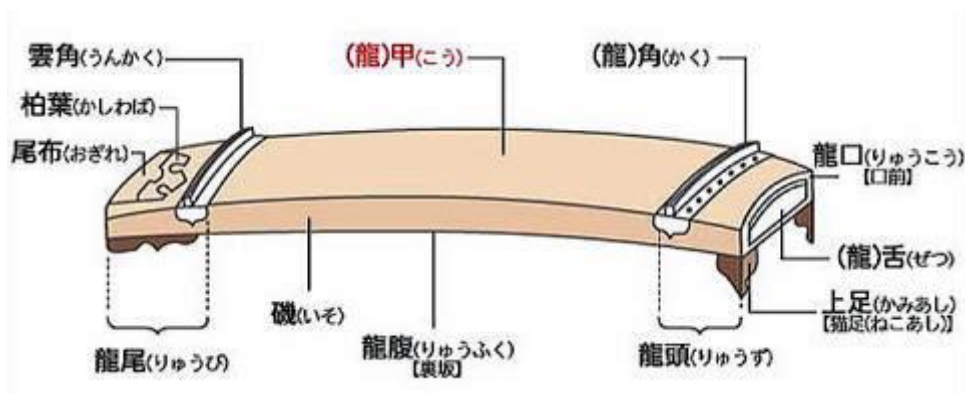
この貝尽くしの縁も、



この縁のように玉で囲われていると解釈すべきである。見た目を信じてはいけないのだ。

● 竜の第二子を囚牛という。

音（なりもの）を好むものなり。琴鼓の飾にこれを付く。



玉梓が琴を弾いたという描写はなく、琴の意味を考えるしかないのである。玉梓の玉を宝珠とすれば、囚われた竜とは玉梓を意味する。竜の性は淫であり、玉梓は淫婦である。玉梓は害をなす悪竜であり、人を殺す「錦の囊に包る、毒石に異なら（① 1 1 1）ない」毒竜である。竜には欲があるので人は竜を屠る。

囚牛という言葉は、八犬伝に出てくる牛を考えるのに良い。

五十子（いさらご）と言う名前、伏姫の母と同じ名前の城が信乃によって攻められる。いそ・こであればやはり屠られる竜である。まあ五十子の解放とでも考えたほうが良いかも。

五十子の危篤を義実伝にきた使いは、柏田（かえた）という名前の専女（おさめ）である。（① 2 4 6）

音（なりもの）を名前にもつ道節一味を、宝珠をもつ竜の道節は好きなのだ

ろう。

このあたりは以前と同じにしか考えられないので自分としては定説というところだ。

ある程度は九ッの子の属性をもって犬士は性格付けられていると思える。

第一子：犬士は鳴かない。

第二子：音楽が好き

第四子：陰しいのが好き（好きで芳流閣の屋根に上っている訳じゃないけど）

第五子：殺すのが好き（好きで殺してる訳じゃないけど）

第六子：文が好き（読書は好きだな）

第七子：訴えが好き（好きで訴えられてる訳じゃないけど）

第八子：獅子

●過失とはいひながら、妻をも子をも手にかけて、殺して竟に身を殺す、輪廻応報かくまでに、ありけるものか犬田殿（②300）という房八の言葉も古那屋輪廻図が分かっていないとただ漠然としたものになってしまうのである。

2009/12/31

●例え話は答えではない。

譬ば八房が前身は、その性僻る婦人なり。①217

●もう一つ分かった。玉梓処刑から「一言信を守て～」の挿絵までに出てくるさや型は、玉梓がまつわりついていることを表しているのだ。

●



玉梓は「錦の囊に包る、毒石に異なら（① 1 1 1）ない」のである。その子伏姫にまつわりついて、八房乱入時に琴を倒したのは玉梓だし、挿絵のようにその子義成にまつわりついているのも「錦の囊に包る、毒石」の玉梓なのである。まつわりついている玉梓が八房に生まれ変わっている訳はないのである。そして八犬士誕生と玉梓の怨霊との関係はない。

●汝等（戸五郎等）が奸悪は、生をかえ、世をかゆるとも、頸を续べきよしなきものなり① 1 0 8

戸五郎の後身左母二郎も、額蔵に首を斬られて、榎の木に掛けられた。額蔵は「輪廻応報眼前（まのあたり）」にしたのだった。② 1 5 8

ちょっとここで考えれば、額蔵が見た「輪廻応報」は本文でははっきり言って意味不明なのである。単に親の因果が子に報いというだけである。で、思い出さなくてはならないのは、挿絵「名刀美女の存亡 忠義節操の環会」の「環」の字である。ループである。偶然に出会う巡り会いとは意味が違う。挿絵中の四人は「環会」わしたのだ。四人の誰も輪廻応報とは言っても自分の前世を知っているのではなく、それでも前世を繰り返してしまう。それが環会、輪廻転生である。

●以前、八郎の後身である伏姫が言葉を話せなかった（物を得いはず① 1 3 2）

のは、義実の考えを変えさせた八郎の言葉にある、と書いたけど、また読んでみると違う。上の考えでもいいだろうが、直接的には罵り狂う玉梓に対して「物ないはせそ」① 1 1 4 と八郎が処刑を執行させたことによるだろう。怨霊のすることともちゃんと照応しているのだ。



国会図書館のサイトで見られる八犬伝九輯卷三十四上の表紙。松竹梅鶴亀、と縁起物好きの江戸人らしい表紙だとばかり思っていた。大系本弓張月で千鳥を探していたら挿絵があったので、その近辺を読んでいたら（上）の220にこんなことが書いてあった。

国乱れて忠臣あらはれ、雪厭（おし）て松の操をしる。

で、上の表紙を思い出した。見ると、雪に八匹の（忠）犬がいる。これは八犬伝だから当たり前。松竹梅鶴亀、これも当たり前。あれっと思ったのが、竹であっても竹の子があるから季節的には春だろうし、梅も春。ところが常磐木である松だけに雪が積もっていて枝が垂れ下がっている。なるほど目出度いものは目出度くないってのが基本だけど、ここまでこだわっているとは思わなかった。国が乱れている、と馬琴はこっそりと裏表紙で言っていたのだ。

そういった目で見ると、吉祥なはずなのに、とずっと違和感を感じていた九輯卷四十二の鶴亀もお互いに口を開き睨み合っている闘争状態にあることが分かる。世の中は見た目とは違うのだ、と馬琴はいつも言っていたように思える。里見がユートピアで終わらないのも馬琴なりのリアリズムなのだろう。

ついでに言うと、最後の里見と八犬士の家紋の表紙。あれも単に「里見八犬伝 終」ってだけだろうね。

●国会図書館のサイトで見られる八犬伝九輯卷四十六



表には全面にお宝尽くし。裏になるとこれも吉祥紋である不老長寿を意味する橘が加わる。いろいろ解釈できるけど、今年はしない。

2009/12/29

●天津九三四郎。

九三四＝108とか言っていたら、この九三四郎が出てくる九輯中の附言に「水滸は一百八箇の豪傑」「水滸百八人」⑥6とあって、そのあとに稗史七法則の解説が載る。馬琴が108を意識して、つまり水滸伝を意識して里見前史をもってくる九三四郎という名前の男を登場させたと見て良いだろう。

本人は意識してなかったのに、挿絵に天草と読めそうなところがあると分かってビビっていた馬琴がここまで天草四郎に似た名前を出すには、もともと天津は実際にある地名であるし、天草四郎ではないという根拠があったのだ。

2009/12/28

●八輯の表紙も本文と対応している。八輯以外は口絵などで伊勢を示唆することはあっても本文と直接の交渉のない絵であった。

八輯は表紙同様に伊勢参りの犬が本文に登場する。

犬犬犬……で覆いつくされた三輯表紙のように、それは違うだろうと思われるのを仮に抜いてみると、表紙全部からひとつの文脈を導くのには無理があるが、その輯の内容を表しているものがあると見るほうが自然である。「表紙もやう」も馬琴がデザインしているからだ。

●九念次→（九念の次）最期の十念③326。

●越後の小千谷に行った小文吾が事件に巻き込まれるのも、亀石屋次団太と会ってしまったからだ。この次団太、もとの名前を鯛髻源八という。尺八郎が尺

八、房八郎が房八、現八郎が現八なので、源八も源八郎であってもおかしくはない。小文吾はたいてい義実の役回りをさせられているのだから、亀石屋次団太は鯛聲源八郎なのである。

鯛の婿源八（たいのむこげんぱち）[マツカサウオ]

小型な発光魚として有名な、和名マツカサウオ（松毬魚）のことを、各地で古くから色々と呼び慣らしてきた。佐渡で鯛の婿源八と呼ぶことは、滝沢馬琴の『燕石雑誌』と『烹雑乃記』に出てくるが、田中葵園の『佐渡志』にはない

●旧姓M岡の吉Dさんから送りものがあつた。それがなんで八犬伝と関係があるのか。その品は

新玉の年 幸福を願い…名づけて 福玉

また玉梓と正月か、と思うのはまだ早い。その販売者は鎌倉にある豊島屋である。鎌倉といえば八犬伝の隠れスポットだし、豊島といえば犬山道節関連でしょ。いまだに道節ってのはなんだか分からないので、読まないといけない。道節と仲が悪い毛野だけど、二人はとても八房的なのだ。道節と毛野がセットになっているのは間違いないだろう。もっと言うと道節は定包的である。道節の幼少譚に出てくる錠庵も金＋定で逆から読むと定金、さだかねとなる男である。尺八を吹いていて、その尺八で喉を刺されて死んだ定包に対して、道節一味は道節を含めて音楽一味なのである。毛野も音楽とは切っても切れない環境で育った。

2009/12/27

●墮八（おちはち）。第八回の落ち。

与四郎。4＋4郎。八郎だ。八郎や現八郎が現れると物語は動きだす（現八郎が不在な時に房八郎が現れて事件を起こす）。大塚での八郎の役は与四郎だったのだ。四白とかうまく騙されたものだ。

偶然なんだかどうか、九三四郎（9＋3＋4）、南弥六（7＋3＋6）、与四郎（4×4）は16になる。

結城落城嘉吉元年の四月十六日。

春王と安王が美濃で斬首されたのは嘉吉元年（辛酉）の五月十六日。（①260）

毛野が対牛楼で復讐を果たしたのは、文明十一年（己亥）の五月十六日。（③

327)

●百三回から出てくる貝六。六回を見ると話がつながったりする。

●天津九三四郎。

天草四郎を連想させるけど、それでは安直すぎるように思えるけど。

九三四が数字なのが気になる。 $9 \times 3 \times 4 = 108$ ってだけなのだが、馬琴ならこんなしょうもないことを考えていそうだ。水滸伝男か煩惱男か。足して16男ってのもありか。

荒磯南弥六、なみろく。736。足して16。

2009/12/26

●小文吾

江戸っ子の俠気とそれを際立たせるための忍耐。

ということで、高橋京子『南総里見八犬伝』の小文吾の悌に隠された堪忍と親の愛情 を読みたくなって国会図書館にコピーを申し込んだらもう来年なのね～。

2009/12/25

●稗史七法則に5W1Hを足してみると分かりやすい。Who、When、Where、What、How、Why 例えば照応だと、誰と照応？いつ照応？、どこで照応？何が照応？どうやって照応？なぜ照応？ヒントはいつも引用する一文にある。

尊氏・直義の前身（もとつみ、サキノヨ）は、在昔大友天皇に、薦めて天武天皇を、亡ひまいらせんと謀りたる、金・赤兄でありければ、今生にても大友の御後身なる光明帝に、仕へて素懷を遂たる也。（「侠客伝」十五回）

江戸時代の評者たちは反対やら照応やらを見つけるのに躍起になってしまい、肝心の「何故？」という問いかけを忘れてしまったのだ。

2009/12/24

●広東烏蠶戸の采珠（たまとり）

で、蠶崎輝文は珠の搜索に出掛けるのか。

与四郎という名前。与は四で「し」、つなげて「しし」＝獅子となる。獅子男の与四郎と名前は似ている犬殺しの梨男奈四郎とは根本から違うのであった。

泡雪奈四郎なんて名前で幻惑されてしまった。

2009/12/22

●例えば、馬琴がいう水滸伝の隠微が前身と後身ならば大体分かってきたではないか。

春王—信乃

安王—毛野

朴平—小文吾

無垢三—ぬい

七郎—房八

八郎—伏姫

定包—八房

玉梓—正月のちに浜路

妻立戸五郎—左母二郎

岩熊鈍平—莊介

無垢三の「むく」はむく犬のむく。

刺身の妻、肴の妻

さもじ さかな（魚・肴）の女房詞

酢もあらばいざぬたにせん網（網干）さかな（左母二郎）

（隙があったら、左母二郎も殺してしまおう）

2009/12/20

●なるほど、四輯口絵大八（親兵衛）の後ろにある張子の犬と、親兵衛再出世の九輯中套総目録にある張子の犬は対応してるのか。ほんと馬琴って細かいのだ。

七 輯総目録にも張子の犬はあるが、これは犬の形が違うし、蚕は第九回義実の言葉①168に対応しているので、親兵衛の張子とは関係がない。

●時知らぬ山は富士のねいつとてか鹿子まだらに雪のふるらん

●七輯をまだまだ読む。

七輯は何についてこだわって読んでいたかというと、鹿の子模様なのだ。予想通り、七十三回に「鹿児島斑かのこまだら」（④237）という文字が出てきた。

●時に文明十四年、壬寅の夏四月（④236）。読み流してた時は気付かなかったけど、寅に関係していたのか。小文吾というと牛との関係ばかりに目がいくが、漢字が出ない「もがりの犬太」も、出てくる漢字では虎落（もがり）である。八犬士はどこかしらで虎退治をしているのだ。

船虫の虫が虎だなんて、この位真面目に読んでしか分からなかったことだ。奈四郎が梨男で犬殺しとか分らないと、名詮自性も字面だけでは面白みに欠けるようである。淡雪奈四郎なんて単に犬と関係がある雪つながりで姥雪与四郎の反対の人物だろう、と勝手にいただけだった。

●七十一回にある道節

美濃・尾張に到りしに、犬山はわが先祖の、苗字の地④191

●七輯をまだ読む。

○（浜路が）常に奥まりてかきならず、筑紫琴の調妙にして④124

○信乃が読む『太平記』の場面の中に

書置し君が玉章（たまつさ）身にそえて後の世までの像見とやせん
という歌がある④127

○浜路の亡霊に憑依された浜路が現れる④128

○魂魄はなほ旦暮に、おん身のほとりにまつわりて夤縁（まつわり）て④128という亡霊浜路の台詞は、玉梓が悪念は、良将義士に憑依くことかなはず、その子その子に夤縁て①115という玉梓処刑後の馬琴の言葉を受けている。

肇輯口絵で玉梓がこれ見よがしに持つ筑紫琴は玉梓＝筑紫琴であり、玉梓→浜路の襷染なのである。ついでに言えば、八房が伏姫の部屋に乱入した時に、筑紫琴が伏姫の着物の裾に倒れて動けなくしたのは、玉梓の怨霊がまつわりついていることを暗示しているのである。

2009/12/14

●梨を犬殺というので閃いた。梨は無しにつながるので別名「ありの実」と言うんだそう。信乃を殺そうとした「あり」と言えば横堀史在村がいる。蟻屋梨八ありやなしはち、有りや？無しや？なんてオッペケな男がいたはずだが、どんな梨男だったか覚えていない。⑧の主要人物一覧をみると良い人だな。親兵衛最出世後は不吉な6が不吉でなくなったりするので一人だけではどうこう言えないと少し思ったりもする。

●

姥雪与四郎一音音 泡雪奈四郎一夏引

夏引楽（雅楽）＝音音

泡雪奈四郎については雪—犬関係の良いほうにしか考えられなかったので矛盾にぶつかってしまったのだ。雪のような白い花を咲かせる梨は犬殺しである。忘れてはならないのは、八犬伝ではつねに善悪は不二であるということだ。雛衣を死に追いやったあとの角太郎の横に富士山の絵があるのは象徴的である。その富士は肇輯口絵の金碗大輔と重なるように描かれているのだ。伏姫救出という善と、誤殺するという悪は不二なのであり、角太郎もただ善であると馬琴は言っていないのだ。こういった矛盾は馬琴が抱えていた矛盾なのかは知らないが、単純な善は親兵衛を待つしかない。

2009/12/13

●甲斐国は山梨郡、八代郡、巨摩郡、都留郡の四郡からなっているのだけれど、馬琴の上手いところは初めに甲斐国について詳しく語っているように見えて八代郡以外は名前を出さないところだ。読者は分かったような気になるが、山梨を出さないために音が同じ奈四郎秋実とはなかなか結びつかないのだ。

これと同じことが結城合戦にも言える。義実と番作で合戦とその後を詳しく語っているようにみえて読者は納得してしまうが、春王・安王の女装脱出未遂については全く触れない。女装の二人の兄弟という情報は読者には提示されないままに「俗（よ）にいふ結城合戦とはこれなり」と断言されて、またひとつ頭がよくなった気がして終わってしまうのだ。肇輯口絵の信乃、毛野という二人の女子と春王・安王は結びつかない。読者に「～とのみ思わせる」馬琴のテクニクである。

●梨から当たったけど、同じ秋の部に「犬殺梨」の項がある。訳が分からない解説がまた良い。おまけに一葉も一葉の舟も出てるし。

●馬琴はほんとに面白い。

七輯巻四から出てくる淡雪奈四郎秋実。雪は犬の伯母だし、信乃の飼犬与四郎と名前は似ているのに何故悪党なのか分からなかったけど、今分かった。奈四郎秋実という名前に答えがある。つまり「梨は秋の実」である。で、「歳時記菜草」秋の部、梨子の項に「二月白花を開く、雪の如し」とあり、種類が多いその中に「犬殺（いぬころし）」があるのだ。それで淡雪奈四郎秋実は犬の信乃を殺そうとする設定なのだ。梨男、名詮自性。馬琴、面白すぎるぞ。分かったと笑ったあとに脱力するけど……

左母二郎は魚男だし。というか八郎→八人の男→八犬士というのは良い。

●七輯を読むに限るって言う訳で、七輯も読み進めて巻之四、六十八回ともなると馬琴の単純さが表れてくる。

富野・穴山をp 115で2回、116で一回繰り返し、そこが富野・穴山→富山であることを言っている。そのあと信乃は伏姫・八房よろしく鳥銃で撃たれてしまうのだ。どこに行こうと事件が起こるところは富山なのである。

2009/12/12

●馬琴『俳諧歳時記』には「水紅花（いぬたで）」の表記で掲出。

<http://www2.rainbowsoft.co.jp/pugpug/sakurako/monyou/monyou.htm>

小鹿の背の斑点に似ていることからこの名があり、別名<疋田（ひった）絞り>、<疋田鹿の子>とも言います。

絞り染めだけでなく、染めや織りの技法としても

<染め疋田><鹿の子文>として表現されます。

後印本というのか名著版や早稲田版で見られる七輯の表紙はかなり面白い。今までは表紙に大した意味はないとか言っていたけど、七輯は違う。親兵衛を除く七匹の犬が揃っていて、「船虫編」とでも言えるような表紙に取り替えられているのだ。七輯だけにある偶然なのか、意図的なものなのか。七輯を読むに限る。

●網乾左母二郎

悪報必ずや天の網に入る

2009/12/08

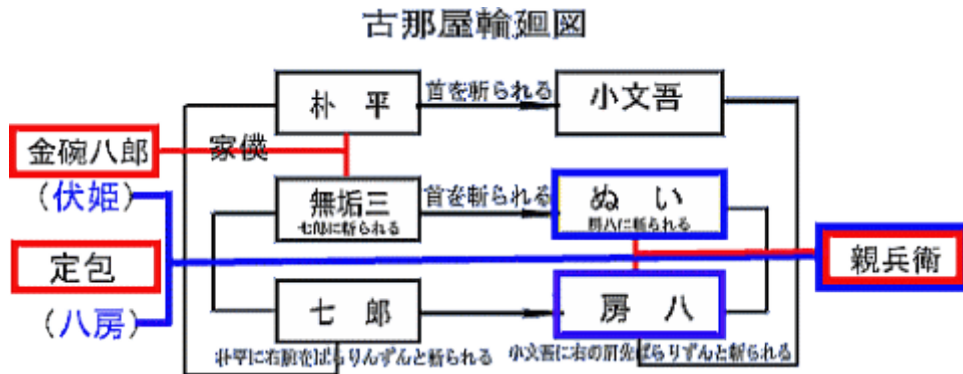
●玉梓の怨念の余怨というのは、玉梓の怨念を楔子（契機）とした、狸個人の里見家への怨みをいうものである。玉梓の名前が出てくるだけで玉梓には直接関係しないのだ。

本来は本文、挿絵にあるように自分を連れてきて八房を育てさせた玉梓の怨霊を怨むべきなのだが、怨霊を怨んでも仕方ないので、怨みの鋒先が自分を祀ってくれなかった里見に向かったという、里見にとっては非常に迷惑な話なのである。

大塚での犬と猫のケンカが後の全て事件の楔子だったように、親兵衛の妙椿、素藤征伐の楔子も些細なことなのだ。

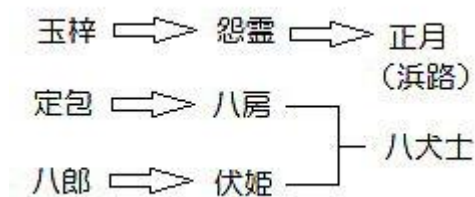
2009/12/04

- 以前作った古那屋輪廻図。



心安かれ山林、和殿（房八）とわれ（小文吾）と前世は、相殺したる讐敵（② 301）という小文吾の台詞も、余りに仲が悪いとあいつとは前世で敵だったに違いないなどと適当なことを言ったりするのと同じくらいに思いがちだが、八犬伝の世界ではまさに前世は「相殺したる讐敵」なのである。

- 前世は、相殺したる讐敵



玉梓の呪いは八郎の息子大輔が伏姫を射殺したところで終息しているのだ。あとは狸の怨みなのである。

馬琴の言うことを信じない人たちが、玉梓⇒八房となるとなんの疑いもなくコロリと信じてしまうのが不思議である。

2009/11/27

- 山林は富貴、五山は衰う、唯邪師のみ有って、正師無し。

山林は富貴というところに親兵衛が富貴草（牡丹）の痣をもつ所以があるのではないだろうか。

念玉、観得は「我慢の悪僧」②222で邪師である。



一竿を把って漁客と作（な）らんと欲す



江湖近代、逆風吹く。



2009/09/19

●『狂雲集』

山林は富貴、五山は衰う、唯邪師のみ有って、正師無し。
一竿を把って漁客と作（な）らんと欲す、江湖近代、逆風吹く。

2009/09/06

●「夏行有種四犬士を歓待す」にある兎の置物（剥製？）

兎を見て犬を呼ぶという諺。失敗したあとで改めても遅すぎることはないを意味していて、二犬士を疑ったことを反省している夏行有種である。

●妙真と音音。



2009/08/31

●浜路は寛正三年一月一日生まれ。

正月生まれで正月（むつき）と命名されたのは分かるが、元日に生まれていたとは。本当に、目出度いことは目出度くない、と言った逆名詮自性の典型のような浜路である。

正月のはじめに生まれしかば（①292）とあるだけなのに、何故元日に生まれたと言えるかというと、

疱瘡もこの春の比、いとかろやかにしはてにければ（同）

とあるのがヒントになる。

『烹雑の記』中の巻、痲娘々に「世に痘を病ざるものあり。正月一日と、八月十五日に生れたる男女これのみ。およそこの両辰に生るゝものは、生涯痘を病むことなし。病むといへども極てかろし」とある。つまり「いとかろやか」＝「極てかろし」なので、はっきりとは書かないが、馬琴は浜路を一月一日生まれと設定していたのではないかと推測できるのである。

2009/08/30

●犬川莊介の不幸も父が伊豆国、北条の莊官だったからか。鎌倉の北条氏だと思ってるけど、元は伊豆の豪族である。北条の莊官の息子でなくなることが莊

介をして犬士たらしめる条件であった。それだけでなく、北条氏は源氏の親戚であるので、そういったこみいった事情が八犬伝の複雑さに反映されている。

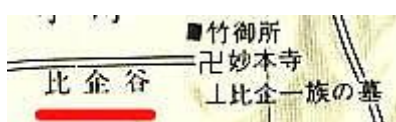
●これだけ鎌倉がでてくると、以前朴平、無垢三の定包暗殺未遂には鶴岡八幡宮で公暁が実朝を暗殺したことに重ねられていると書いたけど、それもありかも知れない。目出度いものは目出度くない鶴だし。鶴岡八幡宮に対して落羽岡だし。

北条義時⇒山下定包

源実朝 ⇒神余光弘

義実にしても出来た人間というばかりでもなく、暗君な面は北条高時などの要素も盛り込まれている。神童なんて言われる親兵衛も出てくるが、その実八犬伝中に完全無欠の登場人物は一人もいないのだ。そこを履き違えると八犬伝は人間が描けていないなどという誤った認識にはまり込んでしまうのである。

●



北条に滅ぼされた比企氏は千葉一族のモデルのようだ。毛野の人物造形はやはり義経と静の二人が核となっているとみて良いだろう。

馬加鞍弥吾には鞍馬。旦開野・毛野には義経関係の事柄がちりばめられている。

まあ亀もいたことだし、墓六の「ひき」の由来かも。

●



鎌倉や田楽といえば毛野だし、犬懸村は八房の出生地。

●



吉祥の亀が何故亀篠のような悪なのか分からなかったけど、下の一行を書いたあとに鎌倉の地図を見て分かった。扇ガ谷は亀谷郷にあるのだ。そして亀篠に化粧がつき物なのも化粧坂があるからだ。

亀篠、実は扇ガ谷に関係していたから信乃に敵対する設定なのだ。これでまた一つ目出度いものは目出度くないの法則が成り立ったのだ。

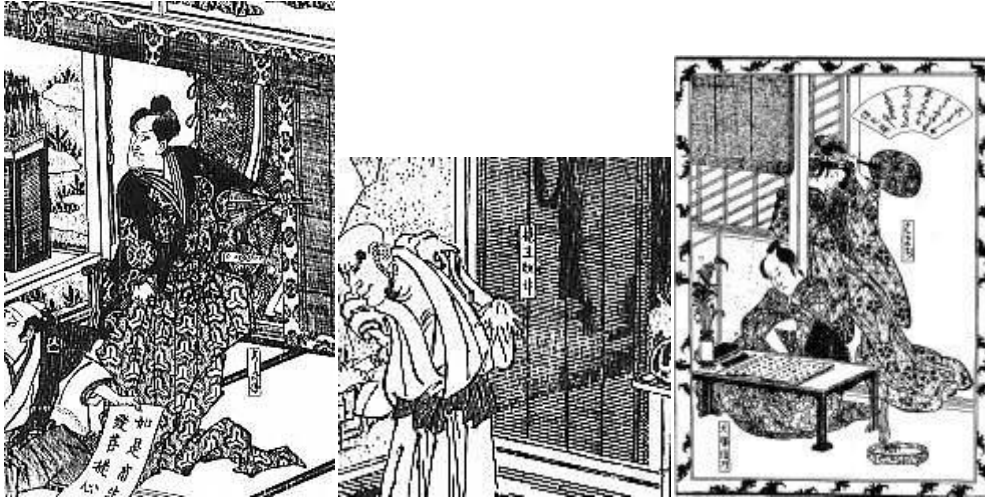
庚申山に入る前に茶店で休む現八の挿絵に亀を引っ張っている子供が描いてあるが、雛衣が死ぬなど吉祥だけの意味だけでとらえることは出来ないのである。

巽がたつなのに善人でないのも巽荒神などという神社があれば納得である。巽も遠い扇ガ谷なのだ。

●長尾・上杉・扇ガ谷は一族である。結城合戦の怨みのために悪役にされている。

●御簾とか。





2009/08/29

●漢詩や和歌になっているのは別の意味があるとみていいだろうと思う。という目で見ると、信乃・番作の挿絵にあった燕が道節・見八の口絵にも「田単破燕之日」とでてくる。共通項は燕と村雨である。で毛吹をみると雨には燕がある。風に柳とか、漢詩・和歌全体に意味があるのか疑問だ。菅家だけに意味があったりするし、難しく考えすぎて馬琴に幻惑されているとしか思えないのである。

肇輯口絵の伏姫・八房図の意味ありげな漢詩にしても意味があるのは「簾を捲く人」だけである。御簾に関係しているのが定包と八房と信乃であるのがその意味である。

定包・玉梓図の漢詩にしても「白居易読史詩」の「読史」で、『読史余論』でも読めば良いのではないだろうか。

●尺八、力二兄弟の口絵に八郎のことが書いてあったり、浜路のところに玉梓のことが書いてあったり、下の浜路姫の口絵では全く違う場面との付け合わせになっていたりと、一組にしてようやく意味がとれる図像がある。

苦舟の 同じ流に墨田川 心隈なき 月の夜の友という歌は全く違う絵を表していた。こういうこともあるので要注意である。

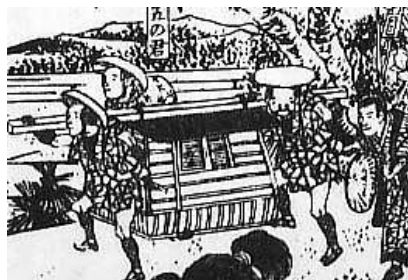
●桐一葉は舟であることは分かったけど、いまいち意味不明なこの絵。



どうも下の七輯口絵と関連して読めるのではないかと思う。



陸路を使って安房に帰った浜路姫（姫うへに俱し奉りて、海上は好しからず。
遠くとも



陸をゆき給へ④ 2 2 2)だから、これこそ口絵は本文と齟齬しているなんて言われそうである。そのままみればそうだけど、そういった絵も画中の文を読めば、直近の文章を描いているのではないが、本文に沿った絵であることは今までみてきたとおり。

上の四輯口絵状の挿絵と絡めると、
苦舟の
同じ流に墨田川
心隈なき
月の夜の友

とある歌が鍵になりそうだ。

「同じ流に墨田川」とは上の挿絵には利根川が描かれていて、隅田川は利根川の支流であり、同じ流れである。

「心隈なき月の夜の友」とは行徳に流されたあとの信乃と現八。

浜路姫は鼓を打っていて、これが「鼓のさえ」なのだろう。

浜路姫が乗る舟は霧に包まれていて、霧一葉である。

葦と雲と鳥の取り合わせも同じである。

うち落す鼓のさえや霧一葉とは信乃と浜路姫との関係を隠微に表していたのか。最初からの腹稿なのか、七輯口絵を四輯口絵状の挿絵に無理やり合わせたかは分からない。

余談だが、芳流閣の屋根は舟の見立てであるという信多説はまさにその通りであった。



舟や貝だけど、実は玉が描かれている。

む。舟が玉なら、船虫は玉虫？いろいろと姿を変えて現れるのは玉虫だから？

いろいろと姿を変えろといえ、船虫は裏毛野といえ。小文吾につきまとうのは裏毛野だからか？確かに仇討ちしようなんてこともするけど。

上の目録だって手っ取り早く名著版からスキャンしたけど、字

●やはり牛も牛ではないのか。「十牛図」のような意味を持っているのだ。

2009/08/27

●（前略）ここにいふ一葉は、雲一朵の雲、乃チ魔雲なり。（同P240）

●奴隸（しもべ）額蔵



本文では小厮（こもの）で、奴隸ではない。奴の姿なので奴だけに意味がある。信乃の台詞に「不義の奴」②209がある。口絵の段階では分からないが、額蔵が「義の奴」であることが分かってくる。そして奴が「侠気の人」なのだから、額蔵は義侠の人ということが読み取れるのだ。

●捕らえた二犬士を夏行が殺そうとしたのを止めた重戸は、八房を殺そうとした義実を止めた伏姫に重なるのだけでも、その場面を描いた二世柳川重信に対して馬琴が、障子の骨を外側に向けているのはおかしいから入れ木をして訂正するように申し入れたところ、重信から芝居の道具立てのように描いたからあれで良いんです、と返事がきた。それを聞いた馬琴は芝居でも「おくへ建る時ハ舞台の方が裏面なれば骨を見物の方にして建ることあれども、縁頬杯の舞台さきへ建る障子の骨を見物の方にせしはいまだ見ざりき」と答えた。後に重信が入れ木をして訂正したので、馬琴は重信が最初に負け惜しみを言ったのだと言っている。

『戯場訓蒙図彙』巻四の障子の項には「障子は縁側の方へ骨を見せること多し」とある。重信は負け惜しみを言ったのではなかったのだ。画才がないと思っている重信だから、なんでもかんでも気に入らない、間違えていると馬琴が決め付けていたのではないだろうか。悲しいかな北斎ではない重信は自分が折れるよりなかったのだろう。

2009/08/26

●徳を以て仁を行なう者は王たり。

前から思っていたけど、行徳ってのは本当に良くできた地名である。大八が犬江親兵衛仁として再生するのにこれほどの適地はないだろう。大八は市川から行徳に来ていたのだ。行徳が架空の地名でないということが馬琴の運の良さである。

●という訳で、貝は玉に置き換えて図像を読めば、今鉄砲の音とともに拭うが如く謎の霧は晴れてしまうのだ。

九輯上の目録額縁には上に帆かけ舟、下にいろんな貝が描いてある。意味不明だったけど、毛吹で読めば上には玉、下にも玉である。玉に囲まれた額縁である。で、目録には百三回に親兵衛の再出世がある。

額蔵、信乃の口絵額縁の貝、念玉・妙真の額縁の貝も玉だ。念玉にはご丁寧にも「玉」がある。これまた見かけと中身は違う、貝は貝ではないのだ。

分かってみれば信乃側に「鮑の玉」とあって貝＝玉のヒントはあったということになる。

貝は甲斐で、後に信乃と結婚する里見五の君の浜路姫がいたところである。浜路の女松でなく、浜路の貝ということになる。

2009/08/25

●『毛吹草』

玉

貝 口絵の額縁によくでてくる

目 小文吾は目が見えなくなる

牛 と言ったら伏姫、小文吾

舟 頻出するがやはり船虫。

正月 浜路の元の名

湯 湯島天神

水 言うまでもない

刃 言うまでもない

鉄砲 わざわざ出てくる

龍 言うまでもない

あったっけ？というのが、藻・藍・昆若・匂・暦

龍

舟 白龍を目撃後、義実が舟で安房へ渡海した

葬礼 伏姫等

雨 犬士が危機に陥ると降る。村雨の切っ先からの龍（挿絵）
都 親兵衛は都へ向かう
目貫 刀といえば村雨
天井 村雨は天井からぶら下げた竹の中に隠してあった
そこそ？けっ！などと爪弾きをしてはいけないのだ。

2009/08/21

●蝙蝠柄の着物の鳴呼善。福の蝙蝠柄も八犬伝では福ではない。蝙蝠は蝙蝠ではないのが八犬伝の基本。



●白膠木紅葉（ぬるでもみじ）
葉の上に虫あり、五倍子を結び成す。（『増補俳諧歳時記栞草』下74）



なんで軍木五倍二（ぬるでございじ）と亀篠の組み合わせなのかと思っていたが、見れば葉（篠）の上に虫なのだろう。
亀（瓶）に篠（酒）とか馬琴ってこんなことばかり考えていたのか。



これも道節の周りに飛んでいたのが火虫だったので、単純に虫でいいだろう。亀篠上に虫がいるのだ。

●三枚をみれば水というか川であることは簡単にわかる。人の説をみて楽しようとすると迷宮に入ってしまうのだ。



①



②



③

①②に共通な現八と柳。

①③に共通なのは糠助。現八を抱く糠助と松の盆栽（浜路）を持つ墓六。実子と養子の反対を相似形で表している。

①をみれば川なのは分かるのに、現八側にある風に柳という固定概念ではぐらかされてしまう。柳には俎板が付合せというのには俳諧フィルターを通さないと簡単に結びつかないのだ。

口絵、挿絵等の図像の解釈は、本文とは当然としても、前後にある図像を絡めて解釈しないとなかなか意味はとれない。

2009/08/18

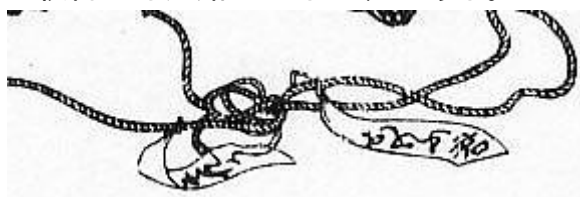
●三枚の口絵に共通の額縁。



何を意味しているのかさっぱり分からなかったけど、なんか分かったような気がする。

加藤論文をみても「風？」とあるのでやはりいまいち分かっていないようだ。現八側に「風の柳」とあるところから「風？」と推測されたようだが、それでは下の二枚に意味をなさない。当然のことながら、同じ図像は同じ意味を持っていなければコードは解けない。三枚には共通項があるはずである。

道節がもつ首は浜路以外には考えられない。（この首も浜路＝玉梓のコードである）。下でみたように二枚目の墓六が持つ盆栽は浜路である。とすると、三枚目にも浜路がいるはずである。



縄に結び付けられた短冊のような布のようなにある文字は「おもふ君」「それかし」である。「それかし」こと宮六が鮑の貝の片思いで「おもふ君」とは

浜路である。

これは「風？」ではなくて観世水のようにデザイン化された「水」である。

2009/08/17

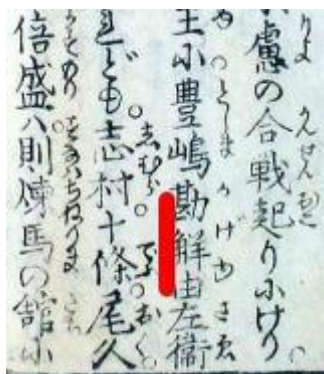
●浦の網乾に浜路の女松（②62）



これは雑文2で読んでいた。雑文のままなので1，2で書いたことを忘れていたりする。いっぱいある重複してること、いまでは考えが違ふことを整理してまとめないといけないようだ。

2009/08/14

●面白いところをみつけた。



八犬伝の漢字には全てふりがながふってあるのに、見ての通り十條の十にだけふりがながないのだ。何を意味するのか。つまりどう読んでも良いのだ。八犬伝の基本は里見と東条である。金碗は東条の氏族なのだ。十条力二、尺八が八犬士に絡むのは十条を「とおじょう」と読めるからだ。

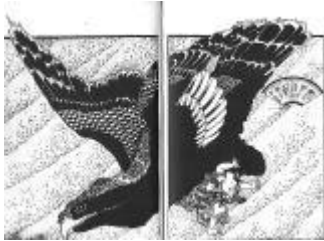
上の場合でも、十条（じゅうじょう）は、東京都北区にある地名であり、上十条・中十条・十条仲原・東十条・十条台などの町域の総称である、となんの疑いもなく思ってしまうが、馬琴はふりがなをふっていない。どう読むか、「じゅうじょう」と決め付けて読んでしまうか、「とおじょう」と読むかは読者に

委ねられているのだ。

～とのみ思わせるのが馬琴の手法であるが、ここでは読みを限定せずにそれを逆手にとっているのだ。

2009/08/12

●芝居ついでに久し振りに『戯場訓蒙図彙』を見てたらまた面白い。



幼児の浜路姫が鷲にさらわれた図。

鷲 これも他国の鷲よりおとなしく、もし人をさらふ段になれば、小児をうばふといへり。其外小鳥さまさまあれども、多くは八幡宮御用の外は飛行することなし。自分用には飛ばれぬ国なるか。

つまりお約束なのである。

もう一つお約束。

●梓弓はるをもまたぬ野梅哉（犬子集 卷第六『新日本古典文学大系69』）

正月に破魔矢を買うけど、もともとは「はま弓」らしい。

一、正月のはま弓は、いつの比より始まるという事しれず。（『貞丈雑記1』東洋文庫）

そう言えば著者は伊勢貞丈である。

2009/08/10

●女兒山鳩（⑩213）

たったこれだけしか本文に書かれていないのに最後の口絵に登場する山鳩。一緒にいるのが八犬士が見限った里見実堯。これこそ本文と乖離してると言えるのではないか。ただ馬琴に限ってそんなことはないので、おそらく隣の河堀刀禰も加えて考えなければ意味がとれないのではないかと思う。

まず河堀刀禰が蝙蝠というのは分かる。蝙蝠が福だから、目出度いのかと思うが、信乃と浜路の挿絵の額に蝙蝠が描いてあったからと言って、二人に幸せな結末は訪れなかった。目出度いものは目出度くない、というのが八犬伝だ。とすると八犬士等が築いた里見ユートピアも暗君のせいで滅びに向かう、くら

いは本文から読めるが、山鳩が分からない。

と、思ってたら閃いた！

鳩は源家の氏の神① 9 5

山鳩の祥瑞あり① 9 6

やはり馬琴流の目出度いものは目出度くないであったか。八犬士を集めた義実と八犬士に見限られた実堯の対になっている。岩波版でいうと十巻の問題の答えが一巻にある。こんなのを最後の口絵にするなんて、馬琴ってのは真の稗史七法則の鬼だったのだ。

うーむ、馬琴。

善悪は不二であるのか。

この口絵のあとに有名な

知吾者。其唯八犬伝歟。

不知吾者。其唯八犬伝歟。

がある。

それにしても、切断された腕と本の対応する意味がまだ分からない。

箕田源次兵衛后綱なんて扇谷定正随従の兵頭(ものがしら)⑨ 4 4 2 っただけなのだ。みたのげんじべえのちつなという名前だけに意味があると思えないのだ。これも隣の額と対になって鳩は源家の氏の神① 9 5 を意味している。

構図でも河堀刀禰—里見実堯、箕田源次兵衛—山鳩が対応しているのは明らかで、腕—本、禁札—本の対応になる。

2009/08/09

● どうしてなのかは調べてないけど、「毛吹」に額—風呂がある。信乃と額蔵がお互いを認め合うきっかけになったのが行水である。① 3 4 6

● 「毛吹」のあの項にある語句を使うと四輯のハイライトができそう。

● 活字本ばかり見ていたら、八犬伝の見返しを忘れていた。



左から三輯、四輯、五輯、六輯。

全てではないが、梓と正月の刊行は付き物なのだ。玉は正月だし、玉梓の裏の名前は正月である、

2009/08/07

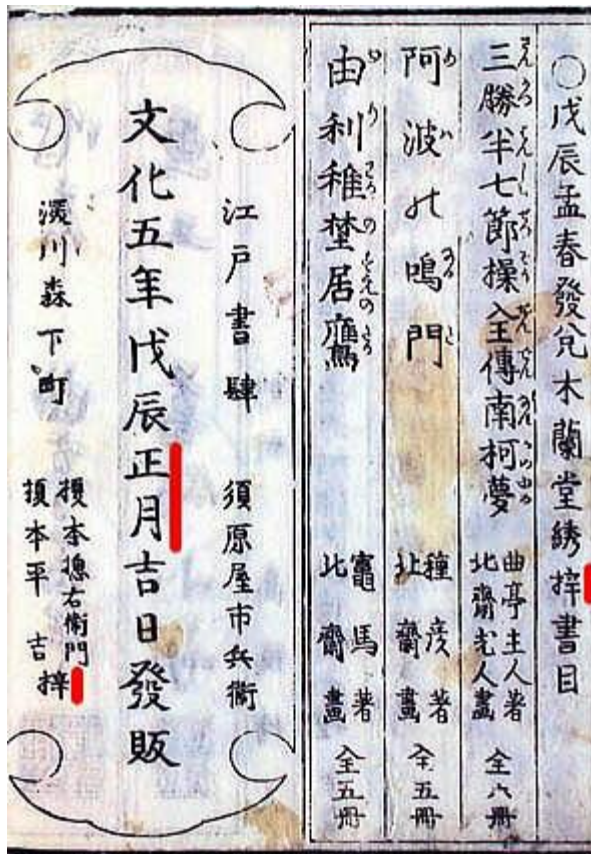
●八犬士の基本は伏姫ではなくて八郎にあるとは前から言っていることだけど、『増補俳諧歳時記栞草』下を読んでいても一つ分かった。

柘榴 榴は瘤也。

八郎が登場した時の様子に「裂たる柘榴」①60とある。偽行者の道節に「左の肩尖に一塊の瘤」②121があるのに対応している。この八郎の属性に伏姫を加えると、肩の瘤に伏姫が持っていた宝珠があることで、肩に龍、肩柳という名前ができる。もう一つはそのままに肩瘤だけど、宝珠のことを考え合わせれば肩龍の字義が良いだろう。

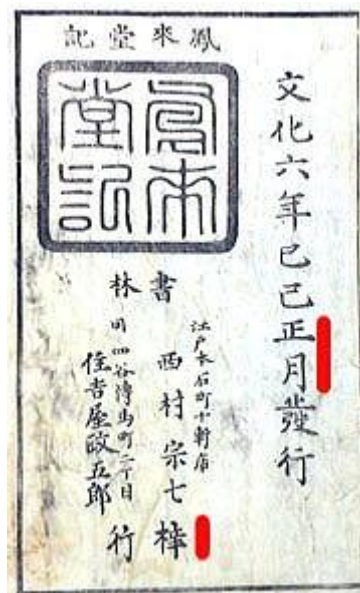
柘榴が瘤につながってこそ意味がある。

●



2009/08/06

●正月発行、梓行したのが西村宗七と住吉屋政五郎。



[7 輯](#)下「文政十三年庚寅正月吉日発行／江戸小傳馬町三丁目 書林 丁子屋平兵衛／江戸数寄屋橋御門通り加賀町 書林 美濃屋甚三郎梓」

読本の刊記は一般的に正月が多い。

浜路と玉梓。浜路の旧名の正月でもって考えないと浜路が何者か分らない。
月を玉ともいう。これはすぐに分かる。次に梓と正。梓だと梓弓がすぐにで
てくるが、正と特につながりはない。すぐに玉梓に神性をみようとする傾向が
あるから梓弓なんて言葉しかうかばない。

素にもどって梓を調べると、木版印刷に用いる版木のことを梓というらしい。
成程、本を出版することを上梓すると言う。読本は正月発売である。出版人の
馬琴がそのようなことを知らないはずはないのだ。

『稿本南総里見八犬伝』にある日記をちょこっとひも解いてみても、「版元
は正月中にぜひぜひうり出したいと申居候へども」とある。

やっと梓と正月がつながった。

2009/08/04



この三輯口絵。右の道節側に、田単燕を破るの日とかな
んとか堅苦しい漢文が載っているが、馬琴がこの絵に意味したのは『犬子集』
巻第三にある

我と身をやくたひなしや夏の虫
である。

俳諧集ってのはコードブックであって、共通のコードブックがなければ馬琴
出題の絵解き遊びはできないのだ。

この道節については、飛んで火に入る夏の虫であることは以前に書いたけど、
状況証拠であって裏づけがないことが弱かった。それに偽火定で住民を欺く益
体のない男であるとまでは読めなかった。益体なしが、きちんとしたけじめが
ないという意味でとれば、道節は復讐のためという大義名分を振りかざしなが
らも偽火定で軍資金を稼ごうとするきちんとしたけじめのない男であった。八
犬士にはもともと善（珠の文字）と悪（牡丹の痣）の要素があって、仁義八行
の玉を持つとは、仁義八行の魂をもったまっとうな人間になることなのである。
それが果たされたころ、善（珠の文字）と悪（牡丹の痣）は相殺されて、どち

らも消えてしまったのである。

ちなみに田単にしてもただ火つながりというだけで、田単の火牛の計ならぬ火猪の計を使ったのは道節ではない。

●白膠木紅葉

葉の上に虫あり、五倍子を結び成す。（『増補俳諧歳時記栞草』下74）

●万年青の前おき

牡丹の胴、松の胴とて、立花に用ふるなり。（『増補俳諧歳時記栞草』下85）

重戸（万年青）と犬士（牡丹）は立花つながり。そ、それだけなのか、馬琴?! まあ分解すれば一人の尸が重なるとなるから、どうにでもとれるんだけど。

●五十子の五十はいそであり、琴の部分名称の磯であるとした。琴が龍と関係しているからなのだが、親兵衛を殺そうとした磯九郎を思い出して困った。龍が悪くていいのだろうか? で、馬琴に聞くのが一番なので、義実の龍の講釈をみると、

害をなすはこれ悪龍、人を殺すは毒龍なり（①28）

とあるので、磯九郎の磯が龍と関係していても全く問題ない。かえって悪龍・毒龍であったのだから、宝珠を持つ龍の子犬士が不在な時に龍女伏姫に殺される位でないとつりあいが取れないのである。

●桐一葉＝霧の船

●金碗八郎孝吉

口絵で洪団扇を持っている。これまた『毛吹草』で大和の項をみると、洪団扇と鞠がある。息子の大輔の口絵には金鞠大輔孝徳という名札をつけている。字は違えど、共通項で二人になんらかの関係があることを示唆したのかも。ただ鞠にもいろいろと意味があるから、アイデアを得たというにすぎないかもしれない。

●百二十回挿絵、「ゝ大に謁して重戸十念を受」で重戸と対面しているゝ大の背後にあるのは「万年青」?

2009/08/02

●六月は扇をつかふかなめ哉

扇⇒扇ガ谷定正

かなめ⇒蟹目

この「かなめ」＝要に「蟹目」を当てて、猿蟹合戦を連想させ忠臣物語を作っていくところが馬琴は上手い。しかし、それらは馬琴著の『燕石雜志』に載せる秦武文、島村貴則等の話を知らないことにはその意味は分からない。

秦武文、島村貴則の二人が主を救い、水中に没して後に蟹に化したことをしらないと力二郎（蟹男）の行動も理解出来ないのだ。

徳田氏は馬琴が相手にしてたのは一般大衆だ、と言っていたけど表向きはそうかも知れない。何も知らずに読んでも面白いからだ。しかし、知音になるには読み流す読者では駄目で、やはり馬琴が真に読者として想定していたのは、『燕石雜志』などを読み、かつ八犬伝を読む人々であつたろう。

2009/08/01

●なんで信乃は血に関係してるのか分からなかったが、これまた『毛吹草』で分かった。血の項に薄がある。信乃の名前の由来に、長生きしてして欲しいとの願いから、穂の長い薄をしのすすきというなどがあるので「しの」にしたというのがある。しのすすきの薄が血につきものなので、信乃は何度も血を浴びるはめになったのだ。

●『毛吹草』俳諧恋之詞では富山での伏姫譚で使われる語句が多い。馬琴は伏姫と八房の話を恋物語として書いていたので、八房の気を受けて伏姫が妊娠してしまうという結末になる。

蛙と亀の項目が並んでいたり、貝の項目に杓子がある。貝は二輯口絵信乃と額蔵の縁になっていて、伊勢参りをする信乃が柄杓を持っている。

四輯口絵の玉と蛤の額縁の左右二枚、この二つも「する」という語で一括りにできる。

文五兵衛の口絵。犬がくわえているのが衣である。衣をみると、木の葉と雲がある。それぞれの絵の額縁である。木の葉が何なのか分からなかったが、参考書がないと分からなくて当然なのだ。

馬琴はどうも毛を吹いて傷を求めてしまったらしい。たいした意味はなかったのだ。

●『増補俳諧歳時記菜草』は面白い。

形見、出家落 墮落をいふ。

金碗八郎は濃菰に子供が出来てしまったので、これはマズイや、と出奔して

しまった。その後濃萩は子供を産んで死んでしまい、遺された子を濃萩の父一作は主（八郎）と娘の形見として加多三（後の金碗大輔）と呼んでいた。

主と娘が形見

喃加多三

故主と女兒の形見

加多三々々々

憐れ八郎は玉梓に崇られたために、今際の際に「お前は墮落した」と五回も連呼されて死んでいったのである。

金碗大輔もまた憐れである。彼は父の墮落の象徴として生まれたのだった。

2009/07/31

●『増補俳諧歳時記葉草』は冒頭から衝撃的だ。

正月 夏は寅を以正月とす

夏といっても季節のなつではなくて、古六曆の1つである夏曆のこと。それはいいとして、浜路の元の名前は正月（むつき）であった。睦まじい睦月ではなく正月を選んだところが馬琴の作意である。

正月に生まれたから正月である、というのは名付けとしてはもっともではある。しかし、馬琴はなぜ浜路を正月生まれに設定したのかという疑問の答にはならない。

浜路は虎であった。

信乃と浜路。龍の子である信乃と、元は虎であった浜路が結婚することはなかったのである。

では何故浜路になったかという、魚男の左母二郎と同じ場所で死ぬ設定であったからだ。としか思えない。

と、ここまでは名詮自性。浜路の本体を表している訳ではない。

●『毛吹草』を八犬伝の取り合わせ辞典という意識でもって見ていくと、分かってくるのが少なからずある。

例えば、鯉をみると「祇園会の山」がある。読んでいる人には分かるから詳しく書かないけど、鯉は里見義実と関係がある。祇園会は裏見である墓田素藤と関係がある。どちらもそれに絡むと物語が動き出すのだ。

次に琴。きりぎりす、蟹、床、法場（のりのには）、鶯、鶯、屏風がある。肇輯口絵で玉梓が琴を持っているというだけでキーワードが出揃ってしまったかのようなのである。六回では法場を「おきてのには」と読んでいるが同じことだ。

師子には田楽、将棋、文殊などがある。田楽はそのまま毛野だし、将棋の駒

柄の着物を着た道節や莊介の子供時の挿絵をみれば、やっぱり彼らは龍の八番目の子供である獅子であったかと納得するのである。

とは言っても、琴に法場なんて自分としてはお手上げなので、雪一犬の叔母一雪上の犬の足跡梅の花くらいのレベルで喜ぶのが自分の蟹の穴である。

そうそう『毛吹草』。「毛を吹いて傷をもとめる」というのが馬琴の常套句。

2009/07/30

●結城親光

●（春王、安王）下総へ落給ふを、結城氏朝迎とりて（一回①17）

（春王、安王）鎌倉を脱去て、下野国に赴き、結城氏朝に請待せられて（十五回①256）

世にいう里見の八犬士の犬坂上毛を下野にしたのにはこういう訳がある。馬琴は隠した両公達の女装脱出と鎌倉から義経を導き出した。義経といえば静だし、毛野という乳名が女の名前のように見えるので牌史的に二人を合体させた。で、もう一つ義経といえば弁慶なので、名前は小さい大男の小文吾を組ませた。ここら辺は馬琴なりのユーモアであろう。義経に弁慶を背負わせながら八艘飛びならぬ綱わたりをさせたのだ。

下の挿絵の伏姫を小文吾、八房を毛野に代えてみるといい。ギャグである。絵的なスケール感でいえば、右図の信乃が与四郎を背負っているとみたほうが良いだろう。

●諏訪湖



信乃たちがいた甲斐の石和がある甲州街道と中仙道の合流点であり、天竜川の源流。京都までの八犬伝関連の地図でいえば中心といったところに位置している。

富山の川の描写には『海道記』中の天竜川が用いられている。

●『義経記』に義経亡きあとの静は出家して天竜寺のふもとの草庵に住んだとある。注によると、鎌倉時代にはない天竜寺が出てくるので、『義経記』の成立は南北朝時代の天竜寺造営以後であろう、とある。八犬伝の鉄砲みたいなものである。八犬伝では馬琴はわざと鉄砲を出した。『義経記』の作者も故意に書いたのだろう。と言うのは、都で旱魃があった時、龍神に雨を祈る舞を白拍子百人に舞わせたが、百人目の静が舞ったところ龍神の知見があり、「三日の洪水」になったというエピソードを載せている。どういうことか分からないが、『義経記』の作者には静を龍もしくは天竜寺とを結びつける意図があったのだ。この操作を馬琴は毛野においてあからさまに行っている。

初登場の毛野は鎌倉からやって来た女田楽の旦開野であり、舞ったのは「壇ノ浦」である。次には相模こぞうと名乗り、鎌倉いざりと共に乞食をしていた。その場所が天竜川の源流である諏訪湖であった。

毛野自身が相模国生まれの龍であることに加え、鎌倉もまた毛野に付き物なのだ。

以上のことは、旦開野を

華夏の静娼は、鶴岡の社壇にて、廷尉別離の愁訴に代るに、吉野山の歌を吟じて、右幕府の震怒をを恐れず③ 3 1 5 と静になぞらえ、

相模こぞうを

鞍馬で遮那王④ 3 6 8 と鎌倉いざりに言わせていることで明らかである。。

毛野の両性具有性はまず安王が女装をさせられたことにあり、その後の人物造形には義経と静という男女が毛野一人に使われたことによる。ここが同じく女装をさせられていても、そのことでたいしたエピソードもない信乃との違いである。そして、平家を滅亡させた義経のように復讐を成功させた毛野と、そういった根拠のない道節が復讐に失敗ばかりするのもまた仕方のない話なのだ。

●やっぱり毛野は義経と静を合体させたキャラであるという結論しか出てこない。

●八犬伝は見たまま読んだままをストレートに解釈してはいけない。富士山は山そのものではなくて、不二を意味している。肇輯口絵の富士山を表していた大輔の意味するところも不二である。

それを頭に入れておくと下の二枚の口絵に書かれていることは同じであることが分かる。

魚目玉に混じ

蕭艾蘭を素る

倭は賢者に似
巧は衆愚を惑わす
碓砦玉に混じ
紫の朱を奪わんを懼る

2009/07/28

●なるほど馬加大記が持っているのは首桶だ。太刀と首桶を持つ馬加と短刀と壺を持つ船虫は対応している。美男に描かれている胤度といかにも悪人の隈取をした縁連は対応している。そして額縁の富士、鷹、茄子が左右二枚で一枚の意味を持つことを示唆している。

馬加大記—船虫は同じで胤度と縁連は反対である。

例えば、下の二枚。自分のように話の筋を知っていて見るのと、なんの知識もなく初めてみた江戸の読者とは受け取り方が違うはずだ。左の口絵をすでに見ている読者は、両方の額縁に雲が描かれていること、すでに悪人と知っている帆大夫と同じに馬加が首桶を持っていること、似た内容の漢詩があること、簾上が悪人だったから胤度も悪人なのではないかと思ったかもしれない。～とのみ思わせてミスリードするのが馬琴の手法である。



左の口絵の稿本を見ると、帆大夫に「じつあく」、社平に「かたき役」とあって、きっと歌舞伎的な見方ができる人なら両者ともに悪人であることは一目で分かるに違いない。自分はできないけど。

2009/07/27

●五十子（いさらこ）という名前についてどういう意味をもつのか考えていた。

『江戸名所図会』に地名が出てくるが直接にも間接にも関係なさそうである。で、読み方を変えてみる。いそこ。磯子かと思うが、手束・調布が「たつ」だけに意味があったように「いそ」を調べると、あった。琴の側面を「いそ」と言う。以前書いたように琴は龍なのだ。



玉梓は琴と一体となって龍であることを示し、伏姫は宝珠を持った龍であり、五十子もまた龍であった。役の行者は五十子が龍であるから宝珠を授けたといえる。こう考えると義実が龍の講釈の中で人は龍を屠る（①26）と言っているのも頷けるのだ。龍（玉梓、伏姫、五十子）は人（義実）に屠られたのである。

2009/07/26

●妙真という名前のもととは京都の妙心寺に由来するのではないかと思った。しかし、馬琴が妙心寺を知らなければなんにもならないので、京都旅行について書いた『羈旅漫録』をみると、

○妙心寺の松は甚だよし。四方え枝もうつこと十四五間。しかれどもから崎の松におよばず。

とある。馬琴は妙心寺に行っていた。おそらく松だけを見て感心して帰ってきた馬琴ではないだろう。

●何故村雨は村雨なのかと言うと、挿絵を見たままに龍であるからだ。水を司る龍神であるからこそ犬士を火災から護ったのである。そういえば番作も護られたっけな。火遁を使う道節とは相性が悪く、水性である女の格好をしていた信乃と相性が良いといった刀なのだ。と言うか、元々春王の護身刀（①257）であるから春王の後身である信乃がもつことに意味があったのだ。

2009/07/25

●剛毅木訥は仁に近いということで、杣木朴平の後身である小文吾は親兵衛の伯父になっているのだが、ちょっと前に杣木朴平は林子平？と疑問を呈した。

朴平の子孫が山林と改姓したのは八犬伝読みなら周知として、朴は果たして朴訥の「ぼく」であろうか？という前提で考えると、ぼくは自分を言う「僕」であり、男子の自称としての「子」なのである。

子を孔子やらの「子」とすれば、孔子の子と子平の子はつながり、子＝僕は剛毅木訥近仁から朴平及び小文吾と親兵衛の人物が創作されるのである。

杣木朴平という名前、人物には林子平が重ねられているとみて良いのではないかな。

2009/07/24

●新織帆太夫の後ろの木にとまっている蟬。なんの意味が分からなかったけど、『毛吹草』をみると蟬の付け合せに「帆柱」とある。単なる遊びである。

●蓼科太郎市 四六城木工作の父

『毛吹草』犬の付け合せをみると、

盗人 乞食 童の額 張子 蓼 山椒 槓 籠城 狩 桜 柘 死骸
がある。太文字は八犬伝中で重要な意味をもつものもある。

額蔵って名前は犬か、とか四六城木工作は十城もあるけど、父が犬関係であったかなどが分かる。

●浅木碗九郎＝浅黄碗

●鈴：犬、馬。⇒犬坂毛野の仇討ち時巻き添えで死んだ馬加鈴子。どちらかと言うと、鈴と言ったらネコなので死ぬことになっていたのかも。

●扇：網 左義長 月⇒網乾左母二郎、扇谷定正の扈從であった。

●鉾では、蟹、番匠があり、蟹は忠臣であるから、同じ付け合わせである大塚匠作・番作父子は忠臣であるという設定になる。

●糠助という名前も、糠の付け合せが網引であるから密漁と関係があることが分かる。糠味噌しか思い浮かばないとなんだか分からないのだ。

糠助が死んだあとの家に入居したのが網干というのも頷ける話である。

2009/07/23

●

見るめが海松なので、口絵の浜路の着物の紋も伊勢神宮を表しているとして、伊勢と海松を調べると、講談社文庫『万葉集』巻十三 3301

神風の 伊勢の海の 朝凧ぎに 来寄る深海松 夕凧に 来寄る俣海松 深海松の 深めしわれを 俣海松の復行き反り 妻と言はじとか 思ほせる君

神風が吹く伊勢の海の、朝凧によって来る深海松、夕凧によってくる俣海松よ。深海松のように心を深めて思う私を、俣海松のようにまた帰って来て、妻と呼ぼうとは思ってはいないだろうか、あなたは。

というまるで許我に旅立つ信乃を思う浜路の気持ちのような歌が浮かび上がってくるのだ。本文の「見るめは暗き孫廂」と口絵の伊勢が補完して初めて『万葉集』の歌、浜路の気持ちが書かれていることを知るのだ。口絵と本文は乖離しているなどという誤った認識はすぐに改めるべきである。さらに馬琴の知識と想像力が合体して創造された、表面に表れない八犬伝の深さを認識するべきである。

ちなみに、次の３３０２の歌には梓弓という語が出てくる。



『房総軍記』巻一、結城合戦の事

春王安王は女の姿に似せ、輿に乗りて城を出でけるを、長尾因幡守これを生捕る。

ここのところを八犬伝では、「両公達は生拘られ」①１８、「両公達は生拘らる」①２５６と二か所ともさらりと流している。

２００９／０７／１８



古墳から出土した刀剣の図はないものかと『耽奇漫録』を見ていたら、巻三に煩惱の犬の絵を見つけた。煩惱の犬は斑であるらしい。



2009/07/17



八犬伝	官途	節用集
犬江親兵衛仁	兵衛尉	新兵衛
犬川莊介義任	長狭介	莊介
犬村角太郎礼儀	大学頭	大学
犬坂毛野胤智	下野介	上野
犬山道節忠与	帯刀先生	道節
犬飼現八信道	兵衛権佐	源八
犬塚信乃戌孝	信濃介	信濃
犬太小文吾悌順	豊後介	豊後

八犬伝を読んでいる人なら節用集から八犬伝の名前の異動について説明できるだろう。例えば源八を現八にするに当たって馬琴は、見八が玉の意味を知って現八と改名したとする。ところが毛野の上野から下野への改変には本文からは説明できないのだ。何故だろうと疑問に思ったら、馬琴が選んだ下野の意味を探るしかないのである。そのために稗史七法則という作者と読者共通のツールが用意されているのだ。

2009/07/16



当雑文では信乃は春王の転生した者であるとしているので、五十子城攻めの折の「犬塚信乃ここに在り。我もまた、大父匠作三戌の主君なりける、故鎌倉の管領、持氏朝臣の両公子、春王・安王の奉為に、嘉吉の怨を復さんず。命惜

くば城兵們、降参せよ」⑤262という台詞は感慨深いのである。

八房は八房にして八房となり前世を覚えていないのと同じで、信乃も信乃となり自分の前世が春王であるとは知らないのである。

玉面（ぎょくめん）が「たまつら」で玉梓（たまつさ）と同じになる馬琴流のこじつけ読みに従えば、春王＝しゅんのう、信乃＝しんの、と通ってしまうのだ。こういった馬琴のお遊びにつきあって読まないで八犬伝は面白くないのだ。

●

嗚呼善（おこぜ）

おこぜってのは魚の名前だとは知っていたが、漢字で「虎魚」と書くのは今知った。

。嗚呼善（ああ、善！）なんて意味ありげな当て字ではぐらかされていたのだ。虎は姿を変えていたところに潜んでいるのだ。

●小文吾の東北は、小文吾の前身である杣木朴平が定包暗殺のために丑三から落羽嶺の東北（うしとら）の岡に隠れていたことによる。暗殺は失敗し、朴平は仲間の無垢三とともに定包の罠にはまり殺されたのだから、東北＝牛と虎は後身の小文吾にとってもツキのないものなのだ。

ところで杣木朴平は林子平？

2009/07/15

●

小文吾は分かりやすい。

牛島、対牛楼、闘牛。もがりの犬太。船虫。牛と虎である。

船虫が初めに住んでいたのは「鳥越山の根がたより、東北（うしとら）へ三四町」行った阿佐谷であった。丑寅の方角は鬼門なのだ。船虫は鬼でもある訳で、なんとも恐ろしい人間として造形されているのである。

●

舟という字が母に似ているから、船虫は水滸伝の母大虫を連想させる、と前に書いた。

小文吾はもがりの犬太を殺している。その「もがり」だが、虎落とも書く。つまり小文吾は虎殺しなのである。水滸伝で虎殺しといえば武松である。で、母大虫。大虫は虎なのだ。船虫は虎だ。までは以前考えていた。

小文吾を集中して読んでいたら、なんと自分の目はやはり節穴らしい。

七十六回に船虫についてこうある。

あの賊婦は（中略）水滸の母夜叉母大虫に、似たる強盗なるべきか④ 296

はっきりと母大虫に例えている。船虫は海の岩場にウヨウヨいる虫の名詮自性ではない。船虫は虎である。だから強いし、龍である八犬士と激しく対立するのだ。化け猫の偽一角と夫婦になっても生きていられるのだ。名詮自性というのも馬琴流のカモフラージュなのである。

2009/07/13



輪廻によって解くとはどういうことか。「侠客伝」十四回に、

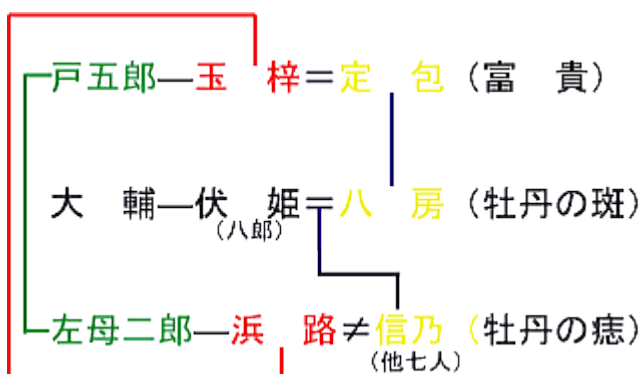
尊氏・直義の前身（もつつみ・サキノヨ）は、在昔大友天皇に、薦めて天武天皇を、亡ひまいらせんと謀りたる、金・赤兄でありければ、今生にても大友の、御後身（ごさいらい）なる光明帝に、仕えて素懷を遂たるなり。このよ南北両朝に、名ある文官武將らは、前世に或は大友に仕へ、或は天武を幫助まつりし百官の、宿業により今生にも、敵躬方となるか、

とあるように下の表のように後身は前身と宿業によって同じことを繰り返すのである。しかし、それでも仏力・法力によって、至誠心にて修せば、定業なりとも必ず転じる。馬琴はこのことを言いたいのである。

2009/07/12

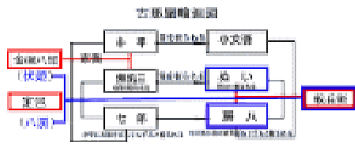


前にかいたことを表にしてまとめる。



牡丹の別名を富貴花という。

以前に書いた古那屋輪廻図のように、家系が詳しく語られるには輪廻を明らかにするという理由がある。



道節は「輪廻によって解ときは」と言うのだが、その説明は輪廻によってい
るとは言い難い。「輪廻によって解ときは」というヒントだけが提示されてい
るので、それを解くのは読者なのである。

2009/07/11



八犬伝の数字の基本も結城合戦にある。

三年籠城の三は信乃、毛野の出生等に現れる。

十六は結城落城、春王と安王が処刑された日で仏滅のように悪い。

弥々山墓六は墓蛙だから信乃に仇なすのではない。やや・やま、つまり八八
山であり $8 \times 2 = 16$ なのだ。

名詮自性だけでは何故「弥々山」なのかの説明はつかないのである。

浜路は何故浜路なのか。

元の名前の「正月（むつき）」には「臨月早春なりければ」②146という
理由がある。しかし墓六の養女になった時には「件の養女を浜路となつて」
①293とあるだけで理由は分からない。本文から読めるのは左母二郎（さか
なおとこ）と対になる名前であるということだ。本当にそうだろうか。

正月⇒浜路という改名にも馬琴は暗号をしのばせているのだ。

十条は「じゅうじょう」ではなく「とおじょう」だし、四六城は「よろぎ」
ではなく、 $(4+6)$ 城で十城、つまり「とおじょう」である。これらは「東
条」という共通項、キーがなければ全く意味をもたない。つまり正月⇒浜路に
もキーがある。稗史七法則ってのは、キーなのである。

このくらいのヒントがあれば、馬琴の暗号のひとつは読めば分かるはず。

2009/06/23

●一富士二鷹三なすび

馬琴が導きたいのは富士だったのか？馬琴が提示したヒントから導くキーワ
ードは「夢」なのではないか。

●松にはふまさきのかづらちりぬなり外山の秋は風すさぶらむ（新古今・秋下）

●蟹目前。かなめのまえ。扇谷定正夫人。名詮自性、扇の要（かなめ）だけでは何故蟹なのかを説明していない。蟹は主を救い、悪と戦うものなのだ。それには死が不可分にある。

●吹雪姫と姥雪代四郎。雪つながりだし、雪は犬の叔母。代四郎と言う名前は信乃の飼犬与四郎と同じ読みであるところから吹雪姫の名前は考えられている。

2009/04/10

●水滸伝を精読し、その隠微を発明した馬琴なら「忠」が一番馬鹿らしいことであるのに気付いていたはず。道節の描かれ方にはそういった面が反映している。そう。「忠」に価値があるなら「忠の権化」道節の復讐が何度も失敗することはないだろうし、道節の発言がいちいち否定されるなどという道化的な扱いはしないはずである。

仙人になった八犬士は息子たちに向かい、暗偶な主君を諫めて自身を滅ぼすことに益はないし、「危邦には入らず、乱邦には居らず」と安房を去るようにと教え諭す。

そこには君主または国に対して、まごころを尽くすことという「忠」の精神はない。これはもう一つには、主家に対して「忠」を持たなかった馬琴の生き方に起因しているのだろうか。

2009/04/09

●馬琴がどんな水滸伝を見たかは知らないけれど、この挿絵だと伏魔殿の「伏」の一字だけが印象的である。人と犬が魔を伏す。伏姫の名前はそんな意味かもしれない。

伏姫（人）と八房（犬）が玉梓（魔）を伏したのだから、やはり玉梓は八房には生まれ変わっていないのだ。八房に生まれ変わったのは定包である。こんなことは自分しか言ってないけど、それでいいのだ。



2009/03/20

●八郎が自害して果てるまでを徹底的に読んでみる。

白龍雲を挟みて南に帰く

帰ることに「おもむく」と振り仮名をふっている。龍はもともと南にいたことになる。

天皇を龍に例える。

龍には欲があるために、人は龍を屠ることがある。

龍は種類が多いのに、目撃したのが白龍であるから義実は源氏と結びつけた。とかなんとか見ていくと、この龍は後醍醐天皇のことではないか、と考える。

●ぎゃおで『水滸伝』を観ていたら母大虫が出てきて気がついた。大虫とは虎のことなのだ。

舟と母。

『水滸伝』を読んでいた江戸の読者なら、虫つながりで舟虫という名前に母大虫を経由して「虎」を読んだかもしれない。

舟虫が小文吾に執拗に絡むのも、その正体が虎であったとすれば納得がいく話である。

もがりの犬太の「もがり」には虎落と書くこともある。虎退治の小文吾なのだ。ここでも『水滸伝』の武松をイメージさせる仕掛けになっているのだろう。

原來但凡世上雲生從龍，風生從虎

『水滸伝』二十三回の原文を駒田信二訳では「そもそもこの世では、雲の湧くところからは竜が、風の起こるところからは虎がでる、ときまっているものである」となっている。八犬伝で言えば、額縁に雲が描いてあればそこには竜がいるということになる。芳流閣決闘場面の額縁に雲が描いてあるのは、そこが屋外だからではなく、宝珠を持つ二龍の戦いであるからだ。

夜の場面にも関わらず、荘介と道節の戦い場面の挿絵の額縁に雲が描いてあるのも、宝珠を持つ二龍の戦いであるからである。

●「侠客伝」有像第三十一
虎為百獣王 遇獅子無用

佞人を賢臣として、真の賢臣を登用しない。八犬伝では隠微にしか言わないことを「侠客伝」でははっきり言っている。「侠客伝」は八犬伝の参考書である。

2009/02/20

●相模小猴子の小猴子。中国小説の用法なのかもしれないが、弁天小僧や鼠小僧の小僧を念頭にしているであろう。問題は「猴」の字。

猿というと後に毛野は湯島天神で蟹目のペット猿を助けたりしている（89回）。犬猿の仲の犬が猿を助けたとも言えるし、猿が猿を助けたとも言える。まあ姿は猿は猿でも馬琴流でみれば心猿、心の猿なので毛野が助けたのは、蟹目の悩み事解消である。

馬琴は「猿蟹合戦」がお気に入りなのか『燕石雜志』で考証している。忠臣が自殺して主を救い、後に蟹と化した話を載せている。中国の話には猿と蟹の戦いはなく、蟹と虎が戦う話はある、とも記している。

①蟹は忠臣である。蟹は善を救う。

八犬伝で考えれば、蟹は忠臣八郎を救ったし、力二郎通称力二（りきじ）片仮名読みで力二（蟹）は、自ら犠牲となって犬士を救っている。

②蟹は悪と戦う。

馬琴がさりげなく書いている、虎と蟹が闘うことはあるが重要。虎は苛政、悪政、つまりの悪の象徴である。

犬猿の仲、猿蟹合戦をただちに連想させるが、意馬心猿、蟹と虎の闘いがメインである。相模小猴子の「猴」の字も後に毛野と猿を結びつける仕込みであったかもしれない。八犬伝において善の蟹と悪の虎の闘いは虎が勝ち、最終的に宝珠を持つ龍たる犬士が虎に勝つという構図になっている。

八犬伝を擬人化ならぬ擬獣化して読むと、「昔より童蒙のすなる物語」の延長線上にあることが分かる。例えば大輔の話も擬獣化して読むと「ふくろう」になってしまうのだ。すると視覚的には『竜宮苦界玉手箱』の魚くんのようにしょうもない絵になる可能性もあり、かなり恥ずかしいのだ。

2009/02/19

●なぜ「相模小猴子」なのか文面によれば、毛野は相模州足柄郡犬坂の里生まれだからだ（③ 3 2 1）。このことが↓でみたことの「文面の仮話」なのかは分からない。単純にそのまんまなのかもしれない。

足柄といえば、親兵衛再出世の様子は「足柄山に生育たる、又酒田公時ならずは、童話に聞こたる、桃太郎にあらずや」⑥ 2 5と書かれている。

親兵衛は親兵衛だけれども、稗史七法則によって、先行七犬士の総集編的な立場や行動をとらざるを得ないので、なにがしかのつながりがあるのは当然と言えば当然である。

●昨日の話の流れからいけば、諏訪湖畔で何故「鎌倉蹇児」なのか、何故「相模小猴子」なのかのほうが気になる。

鎌倉は相模国にあるのだからイコールで考えて良いだろう。毛野の両性具有性は義経と静ふたりの要素を兼ね備えているものであるとは以前考えた。ならばここでも相模や鎌倉を出すことで、なんらかのエピソードを下敷きにしていることを示しているのだろうか。

諏訪湖の意味もいろいろあるだろうが、天竜川の源流であることがそこに犬士が集まる要因の一つであると推測する。

静と八大龍王については『義経記』巻六「静若宮八幡宮へ参詣の事」にある。

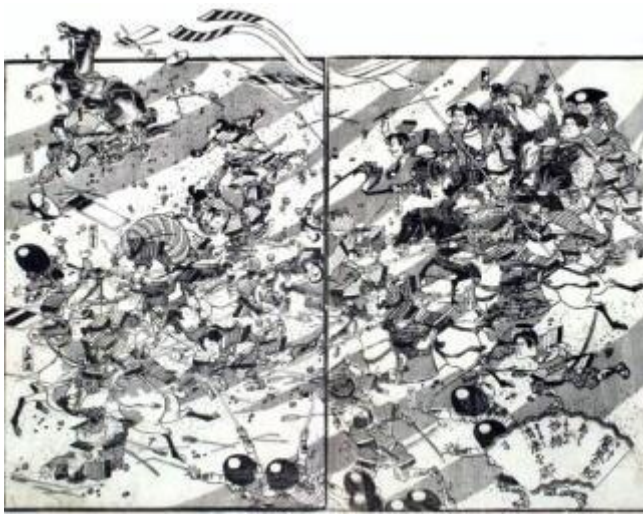
2009/02/18

●上水和四郎束三（うえみずわしろうつかみつ）＝鷺掴み

2009/01/19

さっそく全画集が役にたった。下の二枚は話の内容そのままに悪と善の対が同じ構図で描かれている。前から言っているように図像も対（反対も）になっているのが多い。これは画題が「～を破る」つながりで分かりやすいけど。

伏姫の姿はないが、「妙椿」と「伏姫」の対である。



魔風を起志て妙椿清澄を破る



火猪の大功信乃現八雙で寄隊を破

る

2009/01/07





国会本筆見返しにある山青堂の印。早稲田本の見返しで犬の左前方がやけに開いていて殺風景だなと思っていたら、この印がないのだ。（下にある見返し集参照）

早稲田と国会本の表紙は同じでも、早稲田のには山青堂がないんだから、国会よりあとってこと？

後刷本の表紙って、子犬たちが雪中戯れているんじゃないかったっけ？

諸本考とかの論文コピーがそのうち届くから楽しみだ。きっと二つの論文がこの疑問を解消してくれるにちがいない。

度だが、国会本は犬が後ろ向きに座っていることがはっきりしている。これを見るとバックのまだら模様を今までは単純に雪かと思っていたけど、散ってる花びらにも見えるので考えを改めつつある。

2009/01/04

●

●襟が立っているように見える衣裳は「小忌衣（おみごろも）」と呼ばれる歌舞伎独自のもの。

2009年以前

●

簡端或説贅弁でも二世柳川重信へ文句を言っている。

馬琴と二世柳川重信のやりとりなんてのも見たいものだ。こいつは言っても分らないな、と諦めた馬琴はどんな様子だったのだろうか。

●八犬士の身体にある牡丹の痣と各自所有の珠の仁義八行の文字は、ほぼ同時

期に消えてしまった。プラス（仁義八行の珠の文字）＝善、マイナス（富貴歓楽の象徴である牡丹の痣）＝悪はゼロになったということ。相殺したのだ。

善悪不二どころか善悪を超越してしまったのだから、八犬士は仙人になる他ないのである。



この名前のない黒駒、梅との関係で磨墨のエピソードを表しているのかと思っていた。

しかし、バックに流れる川が天竜川なので、この馬は竜馬である。さらに黒駒で竜馬と言ったら、聖徳太子が乗っていた甲斐の黒駒である。

トミサンを馬琴はトヤマと読んでるから富士山ではダメダメなのではなく、この挿絵では黒駒、竜馬、聖徳太子で富士山を導くようになっている。ここでは言い換えが重要なのではなく、画中の文を読むことで実体を知ることが大事だ。

トヤマの川は『東関紀行』の天竜川の描写で書かれている。何故馬琴は引用するのか？トヤマの川を天竜川とは書けないから、分かる人には分かる先行イメージを利用することで自分が発するメッセージをぶれなく正しく受け取り、解釈してほしいからだろう。本文で天竜川と気付いたとしても情景描写の引用だけかもしれない、と思うが挿絵の大河を見ることで天竜川であるとダメ押しできる。

この川を天竜川と見立てることが出来れば、八犬士と竜、川との関係、富士山には竜が棲むといわれることへのつながりなど読みの幅は広がる。そしてここにも天竜という語がひっそりと隠されていることに気付くだろう。

本文と挿絵が補完し合ってる以上、馬琴が理想としたのは挿絵のない読本ではなく、本文よりも先に挿絵を見たりしない、かつ本文と挿絵等が補完し合っ

ていることを理解する読者である。

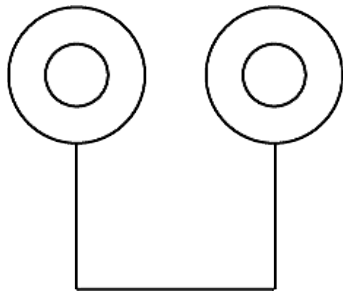
ついでに言えば、馬琴が否定しているのは挿絵等ではなく、馬琴のイメージ通りに描けない絵師である。



この挿絵を見るたびに、目の玉飛び出してるよ、ひえ～、と思っていたが、『戯場訓蒙図彙』巻六を見るとこうある。

眼 眼は明らかにして、遠方を見付くこと早く、アレアレ向こうへ見えるは見えるはといえども、他国の目には見えず。またまんざら傍ですることを見付けぬことあり。目の玉は抜けやすきと見えて、首すじを引つつかむと、いけぞうさもなく、ひょっくりと抜けるなり。





目の玉ぬけ出たる図

ここを口にくわへる。 このすじへ赤綿の血流れあり。

確かに現八は首すじを引つつかんでいる。

いけぞうさもなく、というところが笑える。歌舞伎に親しんだ江戸人にはなんでもない絵なのだろう。かえって「いけぞうさもなく、目の玉出てるよ」と笑ってたかも知れない。

馬琴の下絵にも目が飛び出た様子で描かれていて、馬琴の画像的想像力もこう言った歌舞伎的「お約束」の上にあり、見る者もその「お約束」を前提に見ていたのだろう、と思う。

ここで言う「他国」とは、舞台上を「狂言国」と見立てているので、舞台以外にいる人即ち観客は「他国の人」ということ。

●浜田啓介氏「南総里見八犬伝」の口絵・挿絵における芝居絵的考察

しかし口絵の方は、積極的に芝居絵に接近している。当初から場面上の臨場感、リアリズムとは決別している。口絵は場面の説明画ではなく、書冊の看板であり、装飾もの、デザインものである。登場人物をスターとして華々しく見せるものである。その事によって説明されるのではなく、装飾されるのである。

とある。芝居絵的考察という視点に立てば肯首できるものだが、額縁、前後の絵も含めて考察すれば画中の文が読めるものであり、芝居絵的装飾（虚飾）に幻惑されず、それを取り払って馬琴が絵に込めたメッセージ（というほど大袈裟じゃないものもある）を読み取るべきである。

●左の初版では浜路がいる額は夜であると認識できるが、左母二郎等を加えると全体が夜であることは分らない。右の完全後刷りの名山閣版では浜路ががんどうで左母二郎を照らし出している状況を薄墨を加えてはっきりさせている。

下で検討した信乃・現八図もだけど、どうも初版は最後の薄墨の板を彫り終わる前に見切り発車で出版されてしまっているのではないだろうか。初版口絵

には絵全体の意味がとれなくなるような白地が多く残っているのを見るとそう思ってしまう。

馬琴が後からまとめて彫り間違えの誤字を訂正しているように、後から巻を調整するように、本屋が原稿をひったくっていくように、初版は馬琴の理想とする本ではなかったのだろう。

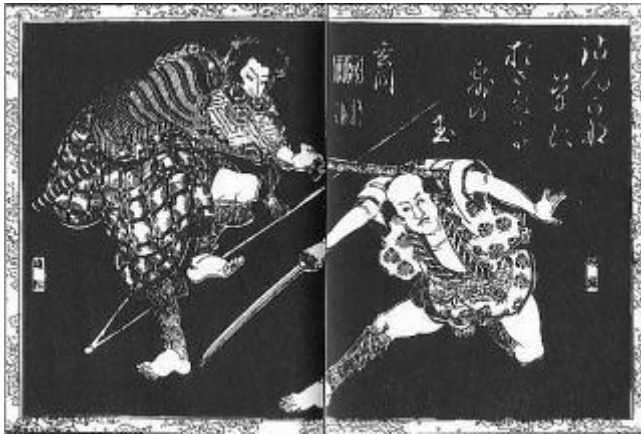
後刷本の薄墨を加えた行為は改変ではなく、中途半端な初版本を最終的にあるべき姿にすることを目的とした本来為される既定の工程の一部である。改変を目的にわざわざ彫られた板とするには、後刷は手抜きであるという意味においても反している。

いつから本の初版信仰が始まったのかは知らないが、こと八犬伝に関してはその信仰を、後刷本は手抜き、または豪華本という考えとともに見直すべきなのかもしれない。

初版はとにかく刊行だけはしておくことを優先したために、馬琴の意に沿わない形で不完全なままに出版された本である、と。



夜の場面ならおそらく下ののように黒でつぶしただろう。そのほうが絵としてカッコ良いからだ。



●水しぶきと確定すれば、この絵は改変されたことによって本文に沿ってそのまま描かれているのが分かる。



信多氏が言われるように三十一回の「御錠ざふ」の現八の台詞から、釣りに出ていた文五兵衛が流れてきた「船中に両個の武士あり」と気付くまでの経過がこの絵の中にある（「最近の馬琴研究」P176）。

前にも肇輯口絵の大輔図から富士山を導くのは無理があるんじゃないか、と思っていたら『海道記』に描写されている富士山を発見してしまったし、今回も服部説に乗って挑戦したが、背景に大河の坂東太郎が描かれてあると分かれば信多説が正しいと認めざるをえない。一人相撲だが二連敗である。崩そうと思ってがんばると追認する結果になる。まあそこも面白いところではあるが。

●馬琴は下絵の段階で人物の在り様に「じつあく」とかの歌舞伎用語で指定している。演劇風に仕上げなければならないのは、それが限界なのではなく馬琴と読者共通のコードであるからだ。

舞台や役者を知っている人ならば、八犬伝の中に役者の顔、声、動作、それに色や空気までが脳裏に再現できたはずだ。



(『週刊朝日百科日本の歴史 85』より)

これなどは弁天小僧と捕り手であると知らなかった時はパッと見て芳流閣の信乃と思ってしまったほどだ。このように既存のものを使うのは、イメージの共有を前提にしているからこそだ。

演劇に近づけることはテレビやビデオのなかった時代の読者に、八犬伝の文章と静止画である挿絵などに動きと音響をもたらす効果をしたと思われる。演劇と文学はもちつもたれつの関係にはあったが、それは限界ではなく現代に続いている発展のかたちである。



あげまき図で富士山に結び付けようとしたら、一番手っ取り早いのが、道松が着ている着物の将棋の駒柄。

富士講の元祖と呼ばれるのが、長谷川角行。

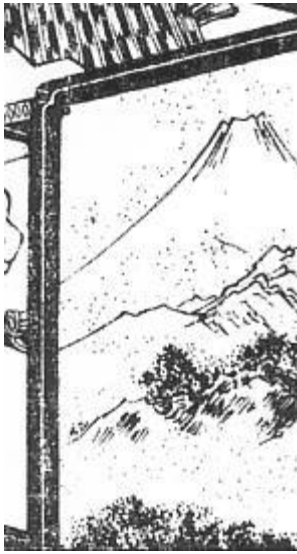
●只野真葛

●八犬伝には前田家に関係するものが多く出てくる。

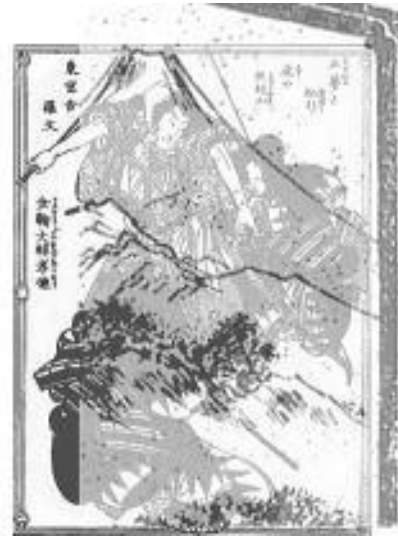
例えば鸞替え神事の大宰府天満宮は梅と菅原道真。前田家の祖は菅原氏とされる。前田家の家紋は梅鉢紋。前田利家は前田犬千代。加賀白山。加賀獅子頭など。

●人物と富士山を重ねる手法を使った絵を前に出していたのに忘れていた。

八犬伝六十六回挿絵と肇輯口絵金鞠大輔。



富士山を反転させる。



反

転使用も江戸の絵師の常套手段である。

富士山から見て手前のとって付けたような樹木も、一番下の樹木も女四天の不自然な動きに合わせて描かれているのを見れば納得する。二枚の絵の大きさは全く違うが、今まで見てきたように、江戸の絵師たちはぶんまわし（コンパス）と定規を駆使して作画している。コンパスと定規を使えば、同じ比率で拡大縮小なんて簡単にできるのだから大きさの違いなどは問題にならない。

●八の字のふんばり強し夏の富士

北斎が詠んだらしい。ここで面白いのは、江戸人は「八」と言う字の型に富士山を連想する共通の認識を持っていたようだ。確かに八の上を閉じるような書体では富士山である。ということは、八犬伝は「富士犬伝」ってことになる。題名にも富士山が隠れているというのは面白い。

節用集に里見の八犬士を見たときに、馬琴の中で富士山と八犬士がつながったのかもしれない。

●なんで親兵衛は将棋盤を持ってるのか疑問に思っていたけど、大童山のイメージだったようだ。馬琴が描いた稿本の下絵でも親兵衛は将棋盤を片手で持ち上げているので、よほど八歳の怪童大童山の印象は強かったようだし、当時の人も親兵衛のこのポーズからは大童山をイメージしたのではないだろうか。



単純に二枚の絵を見れば、四十四年前に写楽が描いた大童山の絵を、馬琴はよく知っていたと考えられる。これだけでは絵だけだが、馬琴は写楽の絵をイメージできる点においては、接点があったことは窺える。

馬琴をみれば北斎が、北斎を見れば馬琴が分かるような部分もある。口絵は二代目柳川重信だが、初代重信は北斎の娘と結婚していた（離婚したが）。重信—重信—北斎というルートからみれば、馬琴はひそかに写楽の正体をポロっと明かしていたのかも知れない。

●十三回タイトル。 雲霧を払てあやしみ（漢字）はじめて休（やむ）。「休」というのがミソ。「止む」のではなく「休んだ」だけなのだ。玉梓は解脱したけど、八房を育てた狸は怨みをはらす準備をしていたという訳だ。

●定包と言えど毒を盛るのが得意だ（①36、⑥40）。道節母子を毒殺したのが今坂錠庵。錠の字を分解して金定、逆にして定金（さだかね）と読んだのは正しいようだ。

●東条—神余—金碗

八犬士の父とも言える大は東条であるから莊介、道節（道節の場合はかなりこじつけだが）の二人が八犬士になれる条件を満たした。

信乃と毛野が春王と安王の後身と分らないと、二人を結城系で括るのは難しい。

●莊介というのは役割も性格も誰かが強いと言えない。それは「義」というものの性質からきているのだろうか。

しかし、八犬伝を動かしているのは「節義」であるから、信乃～莊介～道節ルートは重要視されていいだろう。

●丁田町進（よぼろだましのしん）。田＋丁で町。田と丁が逆だから「ちま」。ちまちま進む。

いくら遊び心とはいえ、こんな名前ばかりなのか？

●千輛壇内（ちともだんない）。ちっとも構わない。

●杓木羅犬太（もがりのいぬた）

「もがり」は「虎落」とも書くので、小文吾に殺された。親兵衛の虎退治の対。

●親子

金	碗	八	郎	孝	吉
金	碗	大	輔	孝	徳

転倒（かえ）せば「大八」

●重戸（おもと）

つい植物の万年青かと思ってしまうが、それは違う。

戸の字を分解すれば一人の尸となる。全体として「一人の尸重なる」となる。つまり、現八と角太郎を救った重戸は、重戸であって重戸ではない伏姫であるということ。

●稻城（いなき）＝とおじょう（東条）。四六城が4+6城、「とおじょう」だったのと同じタイプの読み。

墓田素藤の藤も不二。裏里見の素藤。善悪は不二なのだ。

富士山の襖絵とともに初登場の舟虫。善人のようだったが……



●百回のキリの良さに注目すると、一回～四回と九十七回～百回が対応しているのが分かる。九十七回はなかなか重要な回のようなのだ。

●初出回をみると妙椿が第百回と区切りの良さが意味ありげにみえる。

●二十四回末尾の作者云でしつこく「かにかに」言ってるのをつい忘れる。紙が余ったから書いておく、なんていかにもなんでもないので書くのが馬琴だ。

●東から西へ行き虎を征伐した親兵衛を、西国大名を討ちに行った徳川ととれる。しかし、西の妖虎（西国大名）が狙い、半殺しにしたのは徳用（徳川）であった。征伐されるべきは妖虎ではなく徳用なのだ。親兵衛の虎退治が主題のようだが、その実は妖虎による徳用退治が眼目である。家斉時代を風刺したとされる妖虎だが、風刺・警告はそれでも文面の仮話であり、その裏に馬琴はもっと過激な夢を描いていたのだ。

●もし庚申の日に孕むことあれば、その子必ず盗賊となる。故に凡そ庚申の日子ある月に子を生ものは、その子に名づくるに金をもてず。（『燕石雑誌』（四）丙午〔附〕十二獣）

墓田素藤の元の名前は但鳥源金太である。つまり素藤は盗賊になってしまったのだから、素藤の母親は庚申の日に孕み、庚申の月に素藤を生んだことになる。素藤も八犬士と同様に庚申に関わる男なのだ。

素藤というのは裏里見・裏八犬士といった存在である。

●八犬伝中にはお間抜けネームがいっぱいあるが、赤岩の門生たちの名前も良い。

玉阪飛伴太

たまさかひばんた

たまたま非番だ。だからなんなんだと言うところだ。

●蟹の意味

『燕石雑誌』「猴蟹合戦」

相伝ふ。正慶二年一宮（尊良親王）の隨身秦武文松浦枝に謀ら御息所を奪ひ去らる。武文これを逐ふて大物浦に自殺し、冤鬼風濤を発して主を救ひ、遂に化して蟹になる。或はいふ、享祿四年細川高国、三好海雲と戦ふて敗走す。その臣島村貴則苦戦して主を救ひ、遂に安里河に歿して化して蟹になるといへり。

●適当に開いた頁を読んでいたら出てきた名前。

長城枕之介惴利⑦244

おさきまくのすけはやとし。

お先真っ暗。早や、歳。

やな名前だ。

●義実や信乃といった登場人物に解釈を語らせることによって、～とのみ思わせるのは馬琴の手法。信乃には力二と尺八の意味は「八房」とであると語らせて、読者に「そういうことだったのか」と満足させ「蟹と八郎」という意味をくらませてしまうのだ。

八犬伝は馬琴が見た夢の中の物語を書いたという建前なので、夢中の人物の発言が夢を見た馬琴の考えそのものではないという構成をとっている。それが「～とのみ」思わせる手法なのだ。

●第七十九回では「鞍馬で遮那王、僧正坊でも弁慶でも」④368と相模小猴子に変装している毛野の容貌の良さを義経に例えている。遮那王とは牛若丸に次ぐ義経の名前である。鞍馬、義経は毛野に関連付けられている。なぜ鎌倉かと言えば、休題再説のあとから馬加＝北条氏への復讐が行われる枕詞みたいなものだ。

●毛野と小文吾の関係は義経と弁慶。こう考えると、小文吾が牛とやけに絡むのも、弁慶と牛若丸を引き出すヒントになる。

毛野には静を連想させる描写がいくつかあり、馬加大記の息子の名前は馬加鞍弥吾で、義経と関係がある鞍馬が隠されている。

八犬伝は鎌倉・南北朝史を下敷きにしている。

朴平等の神余光弘誤殺は公暁による実朝暗殺の陰謀主北条氏に山下定包を重ねている。馬琴は源氏滅亡に北条氏が裏にいたように考証しているし、大記の妻戸牧の名前も北条時政の妻牧の方からの命名であろう。

毛野の復讐は義経と静の北条氏への復讐でもある。

静は捕らえられたあと、産まれた義経との子が男子であったために殺されているし、鶴岡八幡宮で北条時政等の前で舞わされている。

旦那開野としての毛野の復讐は、稗史的な静による北条氏への復讐劇であったととれるのである。

毛野の人物造形には義経と白拍子静の二人の男女が用いられていて、二人のもつキャラクターが女装の男という一人の毛野という人物に反映しているのだ。

犬坂毛野がもつヒーロー性は、義経と静がもつ普遍的、日本的悲劇性にあり、同じく復讐の相手を付狙う道節との根本的な違いである。

ついでに毛野の母調布（たつくり）の名前には竜がであり、宝珠をもつ毛野は竜である。静にも竜に関するエピソードがある。

旱魃が続いたために百人の法師が仁王経を講じたが効果はなかった。そこで容顔美麗な白拍子百人に神泉苑の池で舞わせれば竜神が雨を降らせてくれるだろうということになり、九十九人舞ったが効果はなかった。百人目の静が舞った時に、黒雲とともに「八大龍王鳴り渡り、稲妻ひかめき（中略）三日の洪水」となったのだ。

●信乃・莊介・現八・小文吾・道節⇒力二（漢字でりきじ、片かなで力二）

角太郎⇒犬村蟹守儀清

毛野⇒蟹目前

角太郎の場合は名詮自性、蟹が守るのだ。思い出そう。八犬伝中で一番最初に蟹に助けられたのは誰であったか。肇修口絵で蟹とともにいるのは誰か。

●馬琴が考証している童話に「猴蟹合戦」（『燕石雑誌』）がある。その中に「唐山の小説などにも（中略）蟹と虎と闘ふ事はある」とある。親兵衛譚が童話だとすると、蟹を親兵衛として、京の五虎やら画中の虎やらと闘ってはいる。しかし、蟹は守ってくれる存在だから、やはりよく読まないと分からない。

●親兵衛—犬江屋。房八（八房）とぬい（伏姫）の子。

莊 介—犬川。東条。

角太郎—蟹が助けて犬になる（義実・角太郎。八郎・現八。伏姫・雛衣）山の中だが安房系。

毛 野—安王の後身

道 節—犬山。十条（じゅうじょう）⇒とおじょう。甞生

現 八—現・八郎。洲崎関連。伏姫は八郎の後身であるから、洲崎もまた八郎と関係あることになる。

信 乃—春王の後身

小文吾—朴平の後身

角太郎の育ち、莊介の遠い東条、道節のこじつけのような十条（東条）などから、八犬士の出身は義実が関与した結城系と安房東条（神余）系であることにしよう。結城系と安房系の接点が八郎。

里見の八犬士と言っても後に全員が金碗姓になるなど、東条（神余＝金碗）の八犬士なのだ。金碗八郎に始まり、金碗八郎（金碗姓の八人の郎〔おとこ〕＝八犬士）に終わる。それが八犬伝の芯だ。

●対牛楼での毛野が八房なのは前にも書いた。細かく見ていくと、「（八房は）飛鳥よりもなほはやかり」① 173、毛野は「飛鳥の如く」③ 320 小文吾のもとに走ってきた。このような対は「ばらりずん」やら「我あやまてり」などの語句からも容易に明らかになる。

小文吾抑留さる⇒小文吾、毛野と会う⇒毛野、大記の首をとってくる⇒毛野、小文吾を乗せ、脱出。

小文吾抑留譚に伏姫譚に当てはめると、

伏姫、富山に籠る⇒（番作、手束と会う）⇒八房、景連の首をとってくる⇒八房、伏姫を乗せ富山へ入る。

となる。

伏姫・八房譚にはなかった番作・手束譚を組み込むことで、対は単純な繰り返しではなく業が転換していくことを示している。

●角太郎の名前は肇輯口絵の将棋の駒から分かりやすい。将棋の駒の角が成って「龍馬」。

●「尨犬(むくいぬ)」

朴平⇒小文吾

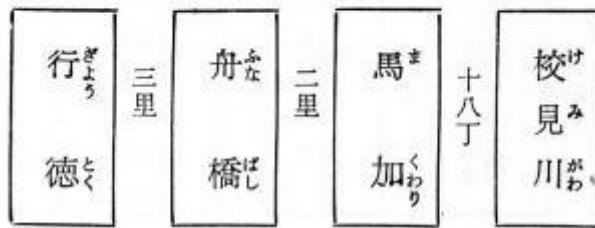
無垢三⇒ぬい

無垢三の「むく」は清らかな「無垢」ではなく、尨毛の「むく」。

無垢三（尨）⇒尨犬⇒ぬい（犬）

●船虫は舟橋？

文政版 行徳より上総への道法



（岩井良衛『新修五街道細見』P 1

14より）

小文吾⇒船虫⇒馬加大記

●八郎こそが八犬伝の根幹であり基底部である。

●犬川莊介が犬士になったのは、「里見の家臣蜚崎十郎輝武といふものは、原は彼処の豪民なり（①349）」というところにある。

輝武は富山へ行く八房と伏姫を追い川で溺死したことが、いとこの莊介が犬士にされた原因かというそれだけではない。輝武は「原（もと）東条の郷土」①173であることが莊介をして犬士にさせた遠因である。

伊豆とか北条とか考えてみたが、北条ならぬ東条がキーだったのだ。

川と言えば山の犬山道節の場合はどうか。

平信盛といふ武士ありけり。させる大名ならざれども、志村・十条・尾久・神宮なん、数郷を管領し（②34）

下でみたとおり、十条はじゅうじょうと読まずに「とおじょう」であり、東条である。もともとの苗字が変わらないのは犬山と犬川だけで、二人にはそのまま「東条」が隠されていたのである。

●馬面郎（うまづらをとこ）⑤336

●親兵衛の愛馬青海波の鱗のような模様を見ていたら分かった。



肇輯口絵。竜になる鯉に乗っている義実

に対応している挿絵のもう一枚は、



これだ。

雑毛の波濤に似たれば、竜種ともい

はばいふべし（⑥80）。さらに伯父小文吾が取り押えた暴牛須本太は「雑毛の鱗に似たるは、是竜種」（④241）、「那竜種なる暴牛」（同261）であり、雑毛の鱗模様と竜種が強調されている。波濤に似ているとはぐらかしているが、挿絵でみる青海波の雑毛は鱗である。

義実が竜門の鯉に乗っているように、親兵衛は馬ではあるが竜に乗っていると見るべきである。

素藤が裏義実であるし、ある意味パロディーなので、親兵衛はミニ義実であり、世四郎は八郎の半分である。

大八の親兵衛の「大八」は八大竜王からのネーミングでもある。

あげまき図の道松の着物の将棋の駒も竜王のヒントになっている。

●玉面嬢というのをヒントにして亀篠を分解すると、亀竹條となる。きちくじょう。鬼畜嬢、亀篠にピッタリである。

●現八は現八郎、尺八は尺八郎。こういう書き方をしている人物を忘れていた。大八である。大八こそ大八郎でありスーパー八郎なのだ。登場時に義実

を助けたのは八郎と大八（郎）の親兵衛である。七犬士にもそれぞれ八郎の属性はあるが、八郎の集大成が大八の親兵衛なのだ。

●村雨とはもともとどういう刀であったか。

足利持氏が「いとはやくより、春王君に譲らせ給ひて、護身刀にせられたり」
① 2 5 7 とあるように春王の護身刀であった。つまり村雨は春王の後身である信乃が手にしてこそ意味のある刀だったのだ。荒芽山の危機から信乃を護ったのは村雨であった。ゆえに左母二郎が持とうが護身刀にはならなかったのだ。

●玉なすごとき玉梓① 1 1 1

玉梓は「玉」であるとして玉だけに注目して、馬琴流に分解すると「正」となる。

●時鳥正月は梅の花咲けり（芭蕉）

●名詮自性と言っても墓穴が墓蛙、亀篠が亀といったふうに単に動物性を表しているものだけでもない。船虫の場合、フナムシ（船虫）は、甲殻綱・等脚目・フナムシ科に分類される動物の総称とみるからなんとも気味の悪い女とされるが、船虫もただ「船」だけに意味があると言えるのではないか。ということから、大輔の母濃萩を考えてみた。「こはぎ」と一つにしないで「濃」と「萩」に分ける。

まず「濃」に注目する。「こい」とすると、八郎に関するのは「鯉」「恋」である。肇輯口絵から義実＝鯉とする。萩は「接（はぎ）」とする。「接」はつぎあわせることである。濃萩は「鯉と接ぎあわせる」という名前なのだ。

義実と八郎だが、八郎の切腹によりその関係は切れる。それをつぎあわせたのが濃萩が生んだ加多三こと大輔なのである。里見と金碗との接着剤の役目を名詮自性濃萩はしていたのである。それは濃萩の八郎への恋心ゆえであった。

萩を接ぎとまでは考えて濃萩にも意味はあるとまでは考えたけど、濃を「鯉」「恋」とするにはいかなかった。

母の名前シリーズと言え、信乃の母の「手束」も「たつか」で、かは関係なく「たつ」＝竜であった。読んで字の如しでは「手を束ねる」などと意味不明な名前となってしまうのだ。信乃と前世でも兄弟であった毛野の母の名前も調布も「たつくり」で、くりは関係ない。

●後に犬飼現八（犬飼現八兵衛佐金碗信道）が神余城主になったのも、現八が

現・八郎であることを思えば分かりやすい。

前にも書いたけど、古那屋事件は信乃が現れたために起きたように見えるが、実は刺身のつまのような存在に見える現八郎（八郎）が一緒に来たから起きた事件なのだ。同じく庚申山事件も角太郎（義実）の前に現八郎（八郎）が現れたからこそ起きた事件なのである。

●南方無垢世界が無垢三の名前の由来かと思っていたけど、「無垢称」なんてのも音が似ていて面白い。無垢称が「汚れなく名声の高い者」を意味しているので当てはまるかもしれないが、無垢三の名声が高いとも思えないので面白いにとどめておこう。

●『維摩経』長尾雅人訳注

不二の法門

調伏慧菩薩が説く。「輪廻と涅槃というのが二である。輪廻の本質を見きわめることによって、もはや輪廻せず、したがって、涅槃にもはいらない。というように理解することが、不二にはいることです」

↓

伏姫

富山に入ることは「不二にはいること」

●見方が分かったと、この口絵も面白い。

左の番作の着物に瓶子紋がある。瓶子（へいし）とは、壺の一種で、口縁部が細くすぼまる比較的小型の器形のものをいい、主として酒器として用いられた（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）ものである。酒器というところがみそ。

右には樽から酒を口に注ぎ込まれている亀篠がいる。

亀は瓶（かめ）で、篠は酒（ささ）である。名詮自性。つまり亀篠は酒をいれる瓶の扱いを受けているのだ。同音異義語の言葉遊びである。

『伊勢音頭恋寝刃』やら「伊勢」を志向するもの等いろいろと詰め込まれているのである。

こういった他愛もない遊びから『海道記』の富士山を忍び込ませた金碗大輔の口絵まで、図像解釈は一筋縄ではいかないようだ。

- 東条が氏族（うから）たる、神余長狭介光弘（① 3 2）
金碗は神余の一族（① 6 4）

●四六城が東条であることは分かった。ならば十條尺八郎、力二郎兄弟はどうか。十條も東条ならば、神余、その一族である金碗も東条であり、東条＝金碗（尺）八郎となる。二人の名前を合わせて八房になるから八犬士と関わり助けたのではなく、十條兄弟は義実を助けた八郎の役割をしているからこそ犬士を救出した後に戦死することになっているのだ

。

十條兄弟の口絵を読むと八郎が出てくるのもこういった訳だったのだ。

- 四六城（よろぎ）は $4 + 6 = 10$ 城ではあるが、「じゅうじょう」ではなく、「とおじょう」なのだ。

東条の氏族である神余光弘が木工作。定包が泡雪奈四郎。玉梓が夏引、八郎が信乃に置き換えることができるのだ。

ここでも馬琴はヒントを残している。雪は犬と関係があり、奈四郎という名前は信乃が飼っていた犬の名前与四郎と近い。置き換えをイコールにすると、定包＝泡雪奈四郎＝雪＝犬となり、つまり定包＝犬となるのだ。

浜路と信乃をだして大塚の出来事と同じに見せかけているが、実は八犬士前史をここにも重ねていたのである。

前にみたように、甲斐の話では「四」が頻出する。数字に注目したのは良いがツツコミが足りなかった。

- 十條尺八郎、力二郎兄弟は犬士を助けて死んだ。

四六城木工作。よろぎむくさく。四＋六は十。十城（じゅうじょう）となる。なぜ「じゅうじょう」は、犬士と関わり、死ぬのか？

●



この挿絵に関して馬琴はタイトルのほかに、左下に「禽獣の怨霊は文外の画なり。看官（みるひと）宜意をもて解すべし」と書いている。

この絵で看官はなにを解さなければならないのか？

まずはこの回までに読み、見たことを思い出さなければいけない。ずっと見てきたように、同じ文、同じ図像には七法則に則って同じ意味があるからだ。怨霊という言葉からは八郎が切腹した傷口から出ていた玉梓の怨霊、そして鉄砲からは伏姫と八房が大輔に撃たれた場面だ。

文外の画では、木工作は殺した動物の怨霊のせいで奈四郎に撃たれたと読む。伏姫が大輔に撃たれたのは玉梓の怨霊の仕業である。そこで対比するために、上の挿絵をみると八房に相当するものがない。ここが文外の絵で、後のを見ると、前の絵が理解できる。玉梓は禽獣の怨霊がそこにあるのと同じに怨霊のまま、八房には生まれ変ってはいない。馬琴が八房は玉梓の生まれ変りとわざわざ書いたのは得意のずらしだったと分かる。

大輔渡河図に玉梓の怨霊が解脱した姿を描き、馬琴はそれにもこれは「文外の画」とすると特に注意書きをしていたではないか。玉梓が解脱した姿を伏姫・八房とは別に大輔と一緒に描いたのには以上の訳があるのだ。

春王・安王を斬首するよう命じられた、番作が思う「当座の讐敵」① 2 6 1
長尾因幡介の因縁は、長尾の箴大刀自という形となる。

●浜路という名前に倒言やアナグラムはなさそうである。ならば、浜路はなぜ浜路なのか。

浦の網乾に浜路の女松② 6 2

網乾左母二郎とセットになるべき前世を持った名前であるからだ。

浜路と左母二郎との間には、同じ場所で時を同じくして死ぬだけの因縁があ

ったと見てよくはあるまいか。（『里見八犬伝』川村二郎P102）

この因縁に対して以前は上記のように名詮自性のセットであると簡単に考えていた。しかし、

●以前、玉梓と浜路が同じ怨みの言葉を残して死んでいった（①114②136）のを指摘し、浜路の魂魄が転生しないで現世に留まっていたのだから、玉梓も八房には転生していないと結論付けた。

大輔が父八郎の生まれ変わりである伏姫を撃った瞬間に現世に留まっていた玉梓の魂魄は八郎に対する怨みを晴らし解脱し、転生できる資格（？）を得たのだ。

しかし、前世の因縁は残っていて、玉梓は正月（浜路）に、定包を殺した妻立戸五郎は網干左母二郎に転生し、戸五郎が玉梓に懸想しおよばぬ恋に物思いにふけた（①100）ように、左母二郎は浜路に懸想した訳ではないと言いながら、鮑の貝の片思いすることになる（②66）。浜路が言う「これ将過世の悪報」（②137）である。

信乃は伏姫＝八郎であるから、浜路＝玉梓は「宿世の讐（あた）」（②86）なのである。

以前は下のように状況証拠から考えてみたが、妻立戸五郎の存在を含めて考えれば、正月（浜路）＝玉梓と考え直さざるを得ない。

と書いたように、確かに二人には「同じ場所で時を同じくして死ぬだけの因縁があった」のである。

房八とぬいが「八房」と「犬（伏姫）」であったように、名前というのも名詮自性だけではなく、その人物がもつ因縁を含めて考える必要がある。

玉梓が直接に呪った八郎の生まれ変わりの伏姫、伏姫の子である信乃と玉梓の生まれ変わりである浜路とは「宿世の讐」②86であり結ばれることはなかったのである。

口絵、挿絵をみても浜路には満月がセットになっている。浜路の本名である正月は望の日（満月の日、旧暦一月十五日）のことであり、月の枕詞「あらたまの」とも関わってくる。



描かれていない八郎の存在をこの挿絵ではみるべき。



ここでは描かれていない定包の存在をみるべき。牡丹柄の着物を着ていた定包に代わって、牡丹と獅子が描かれている。獅子と牡丹が八房であるなら、定包の代わりに描かれている獅子と牡丹こそが定包なのである。



上の挿絵の八郎と玉梓、下の信乃

と浜路の位置関係に注意。
挿絵にある歌は、

慈円『夫木和歌集』

思ひくまの
ひとはなかなか
なきものを
あはれに犬の
ぬしを志りぬる

であるが、この場面を読んだ歌は、慈円のつぎにある定家の

定家『夫木和歌集』

さとひたる
いぬのこゑにて
しられけり
たけよりおくの
ひとのいへゐは
ではないだろうか。
竹より奥にいる人は浜路である。

●『八犬伝の世界』P339に、船虫という悪女を媒介に提起される江戸と悪に
対して、

たとえば、『八犬伝』のなかで巨悪というべき簸大刀自などの〈悪〉はいった
い何なのか。

とある。しかし、簸大刀自を単に〈悪〉と言えるのだろうか。

縦莊介、小文吾們は素より悪意なきものなりとも、法度を犯し有司を害して、
法場をさわがせしを、なほその罪あらずとて、ゆるさば今より下として上を犯
さぬものなく、律令立ず、法度廢れて、国治る時なかるべし（七十八回）

八犬士鼻屑で読めば権力者側の論理となるが、これを悪と言うのか疑問だ。
伏姫をやるとの約を違えて八房を槍で突き殺そうとした義実を諫めた伏姫の言
葉と同じではないか。

「簸殿のけつ断は、公道ならず聞ゆれども、婦人に稀なる勇敢智計」と莊介
も簸大刀自本人を否定してはいない。

善と悪は立場の違いでしかないのだ。仁を除く七つの徳目は、善であれ悪で
あれあるものだ。例えば、悪と言われる側にも忠臣はいる。忠というのはそう

いうものだ。

「仁」の親兵衛が加わって初めて八犬士は

●牡丹の痣は刺青と同じ意味。しかし、消すことが出来ない刺青と違って消失（きえうせ）るはずの痣に変えたところが馬琴の上手いところ。

●以前、小文吾は首に関わるようである、と書いた。小文吾は義実の役割をしているから、首級と同じ意味をもつ鯉を釣って来いと言われた義実と信乃の首をとって来いと言われた小文吾の二人は同じとした。

前世と生まれ変わりは同じことをする。

小文吾は朴平の生まれ変わりとした理由はこれまた以前に書いたが、首ということで重要な件を見逃していた。

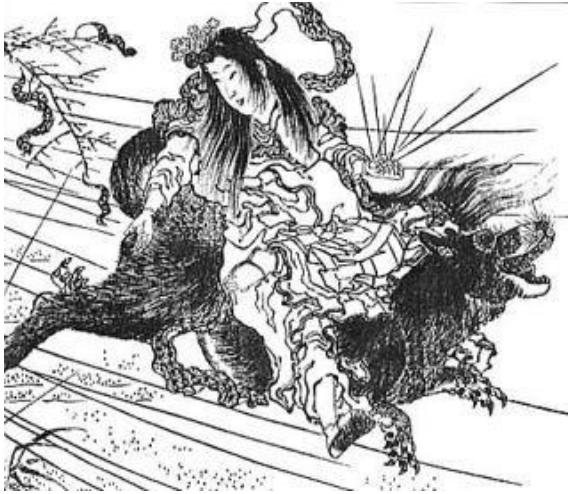
定包の罾にはまった朴平と無垢三だが、朴平は先に命を落とした無垢三の首を持たせられて牽立てられたのだ。（①42）

友の首を持たされた朴平は小文吾となり、友である信乃の首を持つはずであったが、房八一族の定業がよく転じた結果として、信乃代理の房八の首を持つことになった。

●見た目は違うが、同じなのだと思う。



こんなのを見つけたので、前の二枚も載せておく。



●大男の小文吾に伏姫、小さい毛野に八房の役回りを振るところにも馬琴は変な男だと言うのが分かる。

●仁義八行の徳を行う場所が行徳。架空の地名を作らずとも実際にあるのだから馬琴はついている。

●『三国志』第二十一回

酒至半酣，忽陰雲漠漠，驟雨將至。從人遙指天外龍挂，操與玄德憑欄觀之。操曰：「使君知龍之變化否？」玄德曰：「未知其詳。」操曰：「龍能大能小，能升能隱；大則興雲吐霧，小則隱介藏形；升則飛騰於宇宙之間，隱則潛伏於波濤之？。方今春深，龍乘時變化，猶人得志而縱橫四海。龍之為物，可比世之英雄。玄德久？四方，必知當世英雄。請試指言之。」

●小女郎が蜘蛛に体に乗っ取られたのは『封神演義』で、妲己が千年の女狐に襲われたところを彷彿させる。

●額蔵の莊介義任の登場順というのも気付いてみると順当なのだな。

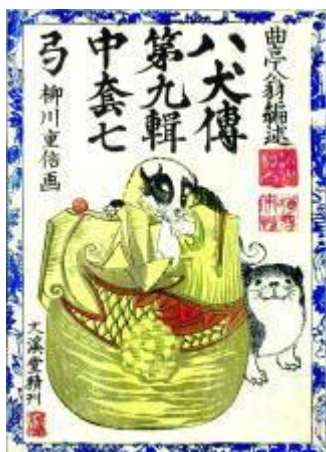
「義」によって助太刀いたす額蔵だからこそ信乃は守られた訳だ。

忠の道節であつたら墓六等に忠実だろうし、礼の角太郎だつたら悪いとは知ってはいても墓六等との板ばさみになるだろうし、智の毛野だつたらそりが合わなかったかも知れないし、現八だつたら信乃を殺す代わりに下男から解放してくれと道中に殺してしまったかもしれないしとか考えると、「義」の出番はグッドタイミングであつた。

●八犬伝と禅の関係を追及してきた（それほど大袈裟ではないけど）が、そのものズバリがあった。

狗児仏性趙州会識。相接犬牙先独突然。（⑤ 3 0 9）

前半は『無門関』の冒頭にある有名な一節、趙州狗子からである。
とこれまた以前書いた。



この見返しについては服部仁氏「馬琴における読本の口絵・挿絵の位相」で篆刻の印が趙州和尚と狗子仏性であることを知った。自分は読めなかったので助かった。

岩波版の次の頁九十七回に「八房の犬児（いぬ）」（⑤ 3 1 0）とある。「児」ではなかった八房に「児」と表現するには狗子仏性が底意にあるからだろう。

向六道四生中遊戯三昧

●諺。鷲の見つけた子。



絶対に逃がさない喩え。浜路姫を絶対に逃がさないとはばかりに付狙ったのは誰であったか。

●回外剩筆⑩ 3 3 7

本伝第一輯二輯なる、八房の毛色の、形牡丹の花に似たるとあるを訝りてとあるが、ちゃんと読んでいないのか肇輯二輯にそのように八房を描写した文章は見つけることができない。

『新・八犬伝』育ちの自分などは最初から八房の斑は牡丹の形と思っているが、前にも書いたように、八房の八つの斑が牡丹の形をしていたと言うのは、四輯巻三の三七回になって初めて「八房てふ犬は、その毛白きと黒きを雜へて、黒きは牡丹の花に似た」②317とゝ大によって明かされるのだ。

文章で牡丹が出てくるのは、信乃が与四郎の首を斬った時に飛び出した玉が腕に当り、「左の腕に、大きやかなる痣いて来て、形牡丹の花に似たり」①342とあるのが初出である。何の予備知識もないままに読めば、この段階で信乃自殺未遂時にできた牡丹の形の痣が八房と結びつくことはない。

図像を見ても八房の斑がはっきりと牡丹であると判別できるものはない。ゝ大が明かすまでに図像で出てくる牡丹は、肇輯口絵の定包の着物、八郎切腹時の襖に描かれた唐獅子と牡丹、番作が座る座布団の唐草模様と牡丹である。信乃前史で牡丹と関わるのが定包と八郎というところがポイントではなかろうか。

定包が富貴歓楽を極めた象徴である富貴花の牡丹の着物を着ていたことに関しては、最後まではぐらかした馬琴であった。

●馬や猿は「意馬心猿」、犬は「煩惱」、ならば牛は何か。「十牛図」に出てくる牛であると考えてもおかしくはない。

肇輯口絵のゝ大と八犬士を囲むお宝尽くしの帯を円環とすると、ゝ大は弥勒の化身である布袋、八犬士は牛を探しに行った童子ということになる。という面からみても布袋になってしまうか。達磨ではなさそうだ。

伏姫が会った牛に乗る童子は騎牛帰家を表しているのだろう。

●馬琴は挿絵のゝ大について、何年生まれでこの時何才だから、老人ではないのに老人のように描かれていると文句を言っているが、馬琴自らがゝ大をして「われは行脚の老僧」②315と語らしているのだから、何年生まれとか考えずに本文だけ読めばゝ大は老人であると思ってしまうのも無理のないことのように思える。

●（前略）楼上の東向には、僧一山が款印ある、対牛弾琴といふ、四大字を掲げて（下略）③306

対牛弾琴

牛に対して琴を弾いて聞かせても、その音色の素晴らしさはわからないことから、効果がなく無駄なこと。愚かな人に難しい話をする事。

詩的またはなんか大そうな意味の四文字熟語かと思ったら、上のような意味。

楼閣にはそぐわない内容である。馬加大記が牛なのか、小文吾が牛なのか微妙なところだ。小文吾は牛と関係が深いし小千谷でも牛の相手をするのだから、小文吾に説教された馬加大記が牛、つまり馬鹿ということになる。

僧一山に馬鹿にされた額をかけてるのだから、やはり馬加は馬鹿である。

まあ真面目すぎる小文吾も馬鹿と言えば馬鹿ではあるが。

●以前、旦開野が踊る口上を述べる季六の台詞（③301）は『新猿楽記』からの引用であることは書いた。

その時は岩波の思想大系本をみたのだが、その中に「八犬」とあるところにひっかかった。早稲田の曲亭蔵書に『新猿楽記』があるので見ると、馬琴は「八犬」という箇所には赤で傍点をつけていた。馬琴もひっかかるものがあったのだろう。「就中」以下の引用部分に傍点はなかった。

●



第七輯総目録にある蚕・繭玉と張子の犬の絵。

蚕は安房が侵略されるイメージだとか読んだことがあったけど、そんな後のことを描いてるのではない。

肇輯巻五、第九回（①P167）で義実が語る搜神記にあるという「太古のとき大人」ありのエピソードにでてくる蚕の話を取り上げることで庚申山もまた富山であり、庚申山の出来事が伏姫譚と重なることを示している。

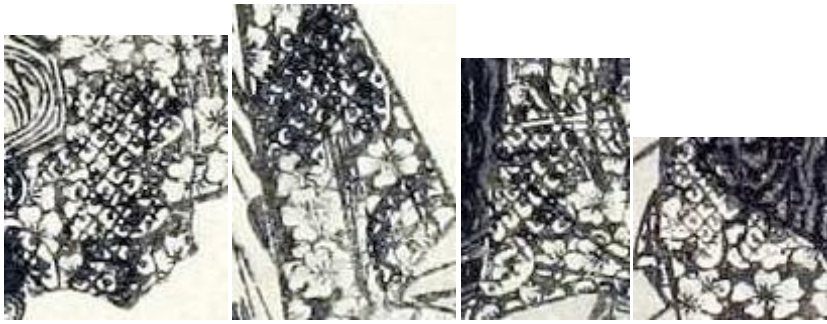
●玉梓の着物から文字を消し去ったのは誰なのか？版元なのか、馬琴なのか？それぞれに理由は考えられる。

一、やはり意味を解し得なかった版元がその美意識から着物の柄に統一してしまった。

一、馬琴が「鸞の神」もしくは「袖の鸞」と読まれるのがいやだった。

一、柳川重信が勝手に描いたので消した。

改変できるのは馬琴だけとしてしまえば二番目と三番目の理由になる。二番目ならば馬琴は読者に玉梓の正体を考えさせるヒントを消してしまったことになる。



●隈取をみると江戸の人たちが親兵衛をどういうキャラとしてイメージしていたか分かる。



●蜥蜴（いもり）⑤⑨⑨

頭領は原修験者⑤⑨⑨。八犬伝中で修験者は胡散臭く人を騙すものとして描かれている。



「八犬伝」稿本

「八犬伝」稿本九輯口絵の鶏と「美少年録」稿本の鶏をみても同一人物が描いたものとは思えない。馬琴が描く鳥はコロっとしているのだ。

「美少年録」第七版巻之一の稿本挿絵は、馬琴が以前に描いた稿本を手本に

して路女が描いたのではないだろうか。

●



この口絵については、伏姫が持つ鎖は捕り物に使う分銅が仕込まれている杖になってること、大輔は女四天に追捕されていることから左右ともに追捕を表しているのはすでに見てきたとおりだ。

さらにこの口絵のなかには犯人に対する言葉が含まれていることに気付いた。金碗大輔が金鞠大輔と書かれていることだ。

日本古典文学全集『近世説美少年録』③128の「鞠問」の注に「鞠は、罪人をしらべる意。せめただす」とある。金鞠大輔の「鞠」はたんに「碗」の装飾当て字ではなく、大輔が罪人であるという意味が込められていたのだ。

漢字ひとつの意味にもこだわる馬琴らしさが最初から出ていたのだ。

八房は紐と鎖に見せている分銅仕込み杖でもって、愛すべくまた憎むべき存在として描かれ、大輔は追捕され「せめただされる」存在として描かれていることになる。

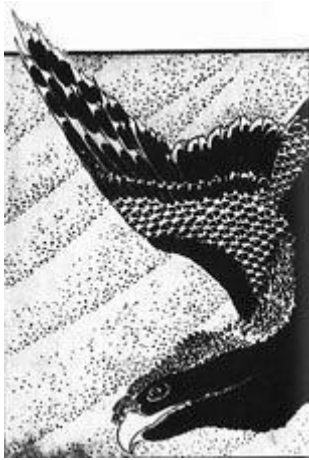
ボールの意味の「鞠」と思っていたのは麻墓愚助であった。

●最近では伊勢とのつながりを忘れていたが、ヨーヨーが伊勢参りのお土産と知った。

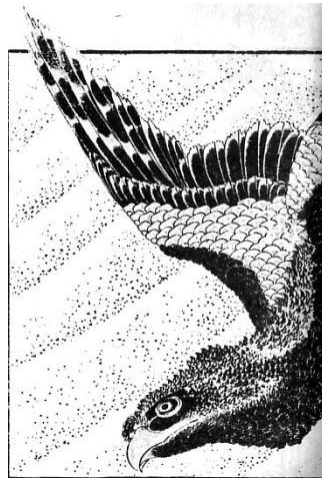


二輯は口絵から浜路の歌と言い特に「伊勢」が目だったが、三輯の道節が着ている着物の紋、四輯のヨーヨーと僅かだが「伊勢」が見られる。表紙に伊勢参りの犬が出てくることもあるので、他の輯でもどこかしらに「伊勢」の図像は隠れているのだろうか？

●鷲の羽などを改変することに意味があるのだろうか？



初版（岩波）



後刷（名著）

後刷のほうが羽らしいことは確かだけれど、こだわる程か？という気はする。ただこだわってみれば、初版の羽の様子は犬士等に災いする舟虫等のニセ市松に見えることだ。ここで想像をたくましくすれば、浜路姫をさらった鷲は、浜路姫をさらうべくしてさらったのだと言える。後に妙椿が浜路姫ばかりを付け狙って攻撃を仕掛けてくるのは、この鷲が妙椿に使われて浜路姫をさらったからではないか？

学習してきたように、相似な図像は同じ意味であるとの見方を応用すると、浜路姫をさらった妙椿の挿絵から、三才の浜路姫をさらった鷲も実は妙椿に使われたのではないかと推定できるのだ。



ニセ市松で初登場した舟虫

鷲の挿絵は後の大関目である妙椿出現の下染めなので市松に見えてしまう羽の様を変えたのではないだろうか。

画題の形が両方ともどちらかに同じなら確実だが、違うので推定の域は出ないが、羽を変えたことは羽の模様に意味があるからだということは言えるだろう。

●

創

この「かい」の字。『水滸伝』44回に出てくる。首斬りと割注がある。馬琴がよく「やつざき」にするという意味でつかう「かい」だが、音とおりに「八つ裂き」とってはいけないのは前に書いた。

信乃が傷ついた与四郎を安楽死させるためにその首を斬った時、「彼創口（きりくち）」より玉が出た（①338）。

●三年塞がりの大將軍、結城三年籠城の三年を八犬士にまつわる三年の根拠としてきた。しかし、龍と神話を中心に据えて八犬伝を読む層での根拠とするには弱い。

で、二つの条件を満たす三年がある。

『日本書紀』巻第二、神代下

已にして彦火火出見尊、因りて海神の女豊玉姫を娶きたまふ。仍海宮に留住りたまへること、已に三年に経りぬ。（中略）猶郷を憶ふ情有す。（岩波文庫①162）

とある。しかし、これは八犬伝の表層に過ぎない。八犬伝全体を動かすバックボーンにはなっていないからだ。竜の層では八犬士が何故戦うのかははっきりしない。正義の龍と悪の獣の戦いも擬人化物語の表層だ。八大竜王による仏法護持の戦いにしても、戦隊ヒーローの化け物が化け物と戦っているにすぎない。

なんのための戦いか。正義の戦い、聖なる戦いなどと言っているうちは表層しかみえない。仁義八行が最終的な目的であると思えないからだ。仁の王国を作るのが目的？子供の読みだ。岩波十巻を通して読んで「仁の王国」では八犬伝はくだらなさすぎる。仁義八行の珠の文字は何故消えたか。仁義八行など所詮は関係ないからだ。

伏姫もいつまでも聖女では浮かばれまい。

馬琴も白者扱いでは成仏しないだろう。

●親兵衛の台詞中の「富貴利達」（⑧186）という語に気付くと、政元と親

兵衛の会話は、景連に攻められ籠城した時の義実と八房との会話？である。

●那虎、故画の変化なりとも、既に霊ありて人を傷れば、必是形体あるべし。
(画虎は) 弓箭をもて、征する術のなからずや (⑧ 1 8 5)

よしや彼犬年ふりて、人を魅入るる霊ありとも、目に遮るものならば、撃にかたきことやはある (① 2 3 1)

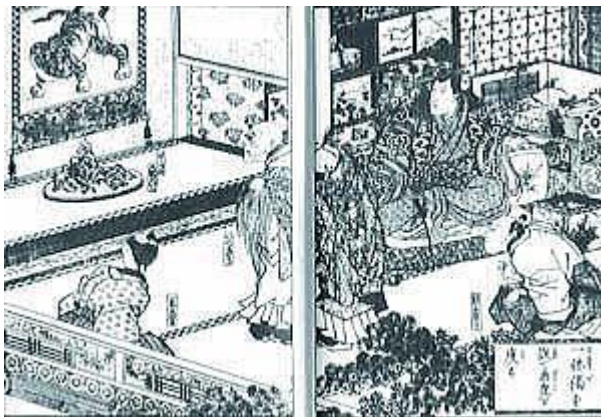
上の親兵衛の台詞によると、八房を鉄砲で撃った大輔は間違っただけをしてしまったことになる。口絵のように弓で八房を射れば伏姫誤射もなかったかもである。

画虎で言えば、麗しの稚児にも鉄砲を使わなければ、こういった騒ぎのもとを作らずに済んだともいえる。

独断で八房を殺しに行った大輔と政元の命で画虎を退治に行った親兵衛は反対。伏姫誤殺と吹雪姫救出も反対。

浮いてるように見える親兵衛譚も例外ではなく七法則によって構成されていて、基本は親兵衛以前のエピソードと対応している。

●虎と富士



この挿絵中で虎と対するように「峨眉山」という盆石が置かれているのは何故だろう？峨眉山と対するように床の間の横にある富士山。この場面での富士山も富山なのであろうか。

峨眉山は中国仏教の聖地だそう。峨眉山を置くことで富士山を強調したのであろうか。強調する理由は何だろう。

画虎は都を恐怖に陥れた「悪」ではある。しかし、そのしたことと言えば徳用等悪僧の手足を噛み切るそれこそ「懲悪」の「善」である。画虎とは善悪不二、邪正一如の化現なのだ。

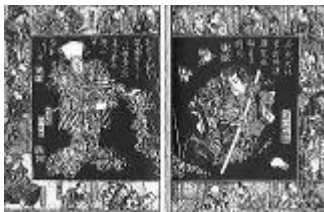
猿が出てきたら「意馬心猿」を読むように、富士山が出てきたら「善悪不二、

邪正一如」をその場面で読みとるのだと思われる。

富山は富士山であった。大塚も芳流閣も古那屋も庚申山も富山であった。全て富士山であり、「善悪不二、邪正一如」なのだ。

●第六輯口絵

初版と後刷版とでは口絵・挿絵に異同があるのは知っていたけど、下の六輯口絵を比べたら、毛野・旦開野図のバックがまるで違うのでビックリ。後刷ではよほど気に入らなかったか出来が悪かったのか、歌がばつさりと削除されている。



岩波（初版）



名著（後刷）

と言うか、初版は最初誰も内容を知らないで読むから何をみてもヒントにはならないが、後刷ではある程度ネタバレになっているので、あまりに分かりやすいのは図像（例えば浜路の幽霊）や上のように歌も削除、改変されたと見て良いだろう。

肇輯口絵の定包・玉梓図でも改変された部分こそ馬琴が隠したくなったところなのだ。

●しかしながら、富士山が富士山では八犬伝の在り様を説明できたとはいえない。富士、藤は不二であり、善悪不二、邪正一如のことなのだ。

肇輯口絵の大輔が富士山に重ねられて表現されているのも、大輔が伏姫を救出しようとしながら射殺してしまったのが善悪不二だからである。

馬加大記の口絵や船虫初登場の挿絵に現れる富士山の襖絵を良い面だけに考えると説明がつかなくなる。一番目出度いものは一番目出度くないくらいにしか説明がつかない。船虫が市松と紛らわしい帯をつけて現れるのは邪正一如である。

素藤がまるで義実をなぞって裏返しにしたように、善悪は不二であり、、邪正は一如なのだ。

●小文吾が義実の役割をしていると分かったと、「景連信時義実を威す」と「帆太夫途に小文吾を搦捕んとす」の挿絵が両方ともに首を捕って来いと言われたことに対応してると気付く。本文でも景連は鯉を釣ってくるのは首を捕ってく

るのと同じ(①56)と言っている。小文吾は義実の代わりとして八房(房八・毛野)が登場する場面で七法則の完遂に務めるという損な役回りをしている。

●小文吾や親兵衛が牛や虎に絡む訳。

朴平・無垢三は、定包を暗殺するために、丑三から落葉囃の東北(うしとら)にある岡に隠れていた。(①36)

●犬太と小文吾の挿絵は竜虎を表している。

ずっと前に書いてたので忘れてたけど、小文吾も虎退治をしていた。もがりの犬太のもがりは「虎落」と書くのもある。ゝ大は言う。「兇勇にして残忍なるは、虎狼に等し」(②314)いと。犬太は虎であったために小文吾に殺される定めにあったのだ。小文吾というと牛というイメージが強いので忘れがちだが、叔父と甥はともに虎退治をしていたのだ。

犬太の挿絵と名札は「虎落」を指している。

●伏姫の伏は人+犬だという。もっと分解すると、人+一+八+ゝとなる。義実風に解釈すると「八人で一、」だ。

八房は「一の尸、八方に至る」である。しかし、実際は一は一人ではなく一匹で、八方に至ったのは牡丹の斑と仁義八行の玉である。

姫も加えて、つなげて読んでみよう。

一匹の尸と姫の仁義八行の魂(玉)は八方に至り、八人で一つとなる。

七犬士はそれぞれが「孝」や「忠」全てを兼ね備えているが、親兵衛が出てこない「仁」が欠けているので一つになれない。

かなり良い感じである。

●潤鷺手古内美容(うるわしてこないよしかた)

大した人物でないのに口絵に登場する。

(肌が)潤わしてこない美容(びよう)、と否定形のギャグネーミングだと思っていた。ところが詩の中に「佳人後身」とある。潤鷺手古内は誰か佳人の生まれ変わりであるので「潤わしてこない」ではない。

「てこない」なんて名前は変だし、良く読んでいなかったのが、苗字は潤鷺手と勝手に思い込みで決め付けていた。ちゃんと読めば潤鷺、潤鷺と言っている。手古内(てこない)が名前なのだ。源義経をみなもとのよしつねと言うように、潤鷺手古内は「潤鷺の手古内」であり、「麗しの手古名」なのだ。

⑨269に真間手古名の墳云々と言っている。

第141回には「うるわしのちご」も出てくるので馬琴は「麗し」いのが好きなようだ。

●軒のつまに あはひの貝の片おもひ もも夜つられし雪のしたくさ
宮六の口絵に書かれた歌。

軒（のき）は「けん」と読む。雪が出てくるので、けんは「犬」である。犬のつまには「犬の妻に」で、もも夜は深草の少将、釣られしは、待たされる。通して読むと、

宮六は犬塚信乃の妻浜路に片思い。深草の少将のように百夜待ったってムダ。あんたは信乃よりも下なんだから。

となる。

前の口絵の歌、左母二郎、信乃に隙があったら殺してしまえ、と言いろくな事は書かれていないのだ。きっとお上品に読むと別の意味があるんだろうけど、当雑文ではこんなもんだ。

●芳流閣が結城であったのは、古那屋の子舎での一人信乃の
身は落人となり果て（②275）
という思いで表されている。

●第百四十七回
紀二六月下に真刺に逢ふ
親兵衛湖上に三関を破る
↓
『無門関』黄竜三関

禅と八犬伝は関係があるとにらんで読んだ『無門関』。『玄同放言』（日本随筆大成）の引用書目にあった。

巻二には〔第十六〕正月門松、がある。浜路と道節が兄妹の由縁。

●回を倍にして対応させている手法もみたが、『玄同放言』に

二は偶の首（はじめ）、八は偶の尾（おはり）なり。二二を四とし、二四を八とす（P21）

とある。馬琴には掛け算をした数字に意味を持たせるという考えがあったことは確かで、それを八犬伝の章回の構成に取り入れ、整然とした形で二～三年で完成すると見込んでいたのだろう。

「二は偶の首（はじめ）、八は偶の尾（おはり）なり」という首尾一貫な考えが隠微をのぞく照応など六法則という手法につながるのは当然の成り行きであったはずである。



ついでに神話でみれば、この口絵も神話だ。

まず伊勢参り、伊勢音頭、瓶子、花菱で伊勢神宮。

手束の周りに散る折れた櫛。伊勢名物の山田櫛でも良いだろう。

この伊勢だらけの口絵も神話とからめて読むとまた違った顔が見える。

本文で分かる足が不自由になった番作。妻の名前は手束。この二人は足名椎神と手名椎神であり、櫛は娘の櫛名田比売命である。信乃の立場は櫛名田比売命であり、そのための女装であったとも言える。

番作を語る墓六の言葉に「蛭児に劣る腰ぬけ」（①305）があり、義実の夷、文五兵衛の蛭子神姿と重なる。

この口絵でも①竜②伊勢音頭③神話の三層それぞれの意味がある。ひとつの層に絞って語らないとこの雑文のように何度も同じ口絵・挿絵を持ってくる羽目になる。しかし、絞って語ってしまうと八犬伝の深さは分らない。

照応だけで言えば、文章同士で照応し、文章と図像で照応し、図像同士で照応する。

例えば岩波版①～⑩全ての照応を語り、その他六法則も①～⑩全部語り、①～⑩の中の日中古典、演劇等出典を語り、全ての図像を分析し、全体を語るくらいでないと八犬伝の姿は見えない。

膨大な論文などもまだ氷山の一角に思えて仕方ない。

●同じ言葉で関連付ける馬琴の方法は随分と例を見てきた。下で錠が「金＋定」というのも分かったので、定包について八房の誕生から大輔に殺されるまでの文章中に「定」「包」という語があるか読んでみた。あった。

ふたたび楚（しか）と見定ん（① 1 3 8）

女を楚（しか）と推包み（① 1 6 8）

あるのは予想していたが「楚（しか）と」とハッキリと同じ言葉で結び付けられているとまでは思っていなかったので、馬琴って結構単純だなあと改めて思ったのだった。

●幼少の道節と母を殺した医師の名前は今坂錠庵。暴（にわか）② 1 4 6に、という単語にあれっと思い、錠庵の「錠」を分解すれば金＋定、金定を逆から読めば定金、さだかねになる。

定包は八房となり道節の父となったのだから、これもまた父による子殺しと言うことになろう。道節の場合は回りくどいが、ここにも父に殺され再生するというパターンが隠されていたのだ。

再生した道節の証言により錠庵は斬首された。大輔が父八郎の生まれ変わりの伏姫を撃って殺したように親殺しも隠されていた。

「暴（にはか）に」「俄頃（にはか）」のヒントを置いといてくれるところが馬琴は親切である。くどいけど。

●二輯口絵の左だけに注目すると。



『伊勢音頭恋寝刃』番作の着物柄に瓶子があり「伊勢平氏」を表す。



伊勢参り



三重・伊勢神宮
《花菱》

浜路の着物にある紋は伊勢神宮の花菱。

三枚に共通しているのは「伊勢」と「闘争」で、同じ意味があるはず。バラで見るとバラバラだが、セットでみると三枚共通の構成、構図があり全体とし

てみることも大事だ。

本文の信乃との別れに残した浜路の歌は

天も明ば狐に啖なん腐鶏の未明に鳴てせなを遣つつ

で、『伊勢物語』第十四段にある。

この一連の伊勢尽くしに何を読むか。『伊勢物語』の第八十二、八十三段等を読むのだ。

山崎

桜の花ざかり

交野

大御酒

睦月

月

等々。

このボロ傘の山崎が忠臣蔵の山崎街道へとミスリードする。

八十三段に登場する惟喬親王は、惟仁親王と相撲で皇位争いをして、四輯巻一の小文吾と房八の相撲でも例に引かれている。

●小文吾と旦開野の刃傷（？）場面は番作と手束の刃傷（？）場面の繰り返しであるとは前に書いた。とこればかりなのだが、道節対額蔵の円塚山での決闘（？）も番作と手束の刃傷（？）場面のバリエーションのひとつだ。照応の照応は照応でしかないのだからそういうもんだな、と思えばそなものだ。

やよ待給へ家尊大人（① 1 6 2）伏姫—義実

やよ俣給へ、いふことあり（① 2 7 3）手束—番作

やよ等一等、いふ事あり（② 1 5 6）道節—額蔵

やよ待給へ犬塚生（② 2 1 0）現八—信乃

やよ等、犬田、いふことあり（② 2 9 1）房八—小文吾

やよ等しばし（② 3 7 5）照文・文五兵衛—舵九郎（② 3 7 5）

やよ犬田ぬし（③ 3 1 3）旦開野—小文吾

「やをれ」でも面白いはず。

●

定包（手裏剣）⇒戸五郎（① 1 0 1）

道節（手裏剣）⇒左母二郎（② 1 3 8）

毛野（手裏剣）⇒季六（③ 3 1 2）

現八（手裏剣）⇒牙二郎（④ 7 2）



定包の容姿と道節の容姿。尺八を吹いて余念がない定包（① 1 0 0）と、手に入れた村雨を見飽きることなく嘆賞に余念がない道節（② 1 3 9）。



花嫁強奪を図り伏姫を殺してしまった大輔と、これまた花嫁強奪を図り浜路を殺した左母二郎は同じタイプの人間。本来ならば道節に斬られた左母二郎のように、義実には斬られていなければならなかったが、ゝ大に再生することで左母二郎的人間から脱却できた。

伏姫の腹から出た八犬子のように、村雨から竜が出ていることに注目。

「名刀美女の存亡 忠義節操の環会」というタイトル。「環会」に注目すると、挿絵に描かれているのは

定包—八房—額蔵、道節

玉梓———浜路

妻立戸五郎—左母二郎

であり、まさしく輪廻の環会であった。

急に話は変わるが、舟虫を突き殺した須本太牛は竜種であった（④ 2 4 1）。舟虫を殺すのに自分の手を汚したくない犬士は自らの代わりとして竜種の牛を使ったのだ。牛も竜であると読むと、牛に乗った仙童は竜に乗っていたことになり、竜と何故か関係が深い役の行者ともつながる。牛頭天王を祭る日、対牛楼も表向きは牛であるが、八犬士と竜の関係に合わせたものであろう。

須本太牛は雑毛（ぶち）の牛であり、同じく斑の八房を義実が徴したのに対し、須本太牛の飼い主は越後の守護長尾が徴しても進呈しなかった（④ 2 4 1）。と言うように序々に牛の位置が見えてきた。

火牛の代わりに火猪が使われたのもこんなところに原因があるのかもしれない。



前に朴平と無垢三が踏みつけているのは尺八であり、定包であると書いた。虚無僧姿の氏元が尺八を持っていないことを強調しているからだ。

輪廻によって解ときは、小文吾は朴平の生まれ変わりなので、尺八（定包）が朴平と小文吾を結びつける（三十五回、五十二回）。

船虫が小文吾を罌に落とそうと使ったものは「古金欄の袋に納たる笛」であった（③244）。

定包は隣から（ちっ、オレのことを踏みつけやがって）と左手を（ワナワナと？）握り締め朴平等を睨みつけているのだ。

肇輯口絵の解は六輯巻一第五十二回にあるのだから、後の大関目をだすためのしこみはとんでもないところにある。

三巻を読んでいても結局一巻の肇輯口絵に戻ってしまうのは、肇輯が八犬伝を規定する稗史七法則の原点だからだ。原点がなければ、それに対応する主客、伏線、襯染、照応、反対、省筆、隱微は自然あり得ないのだ。

●八房：大きなこと犢に等しく（①161）

一個のくさかり童（中略）黒き犢に尻を懸て（①211）

仙童が乗っているのが犢なのだから八房は巨犬なはずである。口絵、挿絵の八房は並の大きさに描かれている。特に左の八房では伏姫を背に乗せて富山を登っていったとは思えない。小文吾を大男に描かないような絵師の仕業なのであろうか？

しかし、本文だけから読めば八房は犢のように大きいのだから、仙童の姿は伏姫でもある。伏姫は牛に乗って富山に登ったと読める。

抑留された小文吾の心情は富山での伏姫の心情に重ねられていたし、牛頭天王、対牛楼、小千谷での闘牛譚など小文吾と牛は切っても切れない関係にある。

八房は牛でもあった。小文吾はまた義実の役割をしている。義実と八房の相性の悪さがそのまま小文吾と牛との相性の悪さになっているのだ。

小文吾を背負った毛野の姿は右の挿絵で伏姫が犢を背負ったようなものであり、想像するとかかなり悲惨ではある。しかし対牛楼の仇討ちの毛野は八房として描かれているのでそのパロディー性は伏姫譚との反対となっている。

毛野の諧謔性は、毛野の行動が義実・八房の反対、伏姫・八房の反対、番作・手束の反対と反対尽くしになっていることに由来しているのであろうか。



前にも書いたけど、八犬士の在り様をこれだ！など一つに決めようとすることは不可能だ。

竜は神物で、その変化はもとよりきわまりないし(①26)、その種類は尤(すぐれて)多いと言われるように、毛野の変装もまた(おそらく)きわまりないだろう。竜のようにAND、AND、AND……が伏姫及び八犬士なのである。それ故に、いろんな角度から光を当ててもそれなりの解釈ができるのだ。龍だけを追っていけば、龍だけで八犬伝は語れるし、輪廻を追っていけば輪廻だけで八犬伝を語ることも可能だ。

八犬伝が重層的になっていることはもはや動かしがたいだろう。どの層に視点を置いて辿っていくかだけの違いなのだから、当時の政治的文脈で読むのは流行らないとか、流行り廃りの問題ではないのだ。

●富山で繰り返された義実の言の咎は八房も大輔も夫ではないと伏姫を引き裂き、節を守るために伏姫は自決した。親による子殺しである。富山におけるこの親による子殺しというモチーフが繰り返されたのが古那屋である。

房八は大八を誤ってではあるが蹴り殺してしまった。

そして、大八は自ら望んだものではないが、親の死と引き換えに八犬士として再生した。

富山で再生したのは誰であったか。義実による擬似斬首で一度死に、再生したのは大輔である。大輔は、大として再生した。伏姫の死と引き換えにである。伏姫は大輔の親ではない。ならば何故親として死ななければならなかったか？伏姫は大輔の父八郎の生まれ変わりだからだ。前にも書いたが、玉梓の怨霊が解脱したのは大輔が鉄砲を撃った瞬間である。

時なるかな去歳よりして、川よりあなたは靄ふかく、絶て晴間もなかりしに、

今鳥銃の音とともに、拭ふが如く晴わたり（① 2 2 8）

怨んだ八郎（伏姫）を子である大輔に殺させて、玉梓は八郎と義実への怨みを同時に晴らしたのである。ここに子は親の死（親殺し）と引き換えに再生するという業が八犬士に与えられたのである。

小文吾は義実の役割を与えられているので他の犬士とは自ずから違うのは当然だ。義実が結城で父季基と生き別れその最後を知らないのと同じに、小文吾は古那屋を出たあとに再び文五兵衛と生きて会うことはなかった。

●道節が輪廻によって解ときは（② 1 4 7）というのを「侠客伝」（199 侠客伝の引用は新大系本）の「後の惑ひを解べき与に、輪廻の理りを示さんか」以下を参考にすると、前世と生まれ変りは同じことを繰り返すのだと言うことが分かる。この見方をすると稗史七法則の八犬伝ほど分かりやすいものはない。筆者が稗史七法則とは「輪廻の法則」と言うのはそこである。

「侠客伝」の神女仙が「這も輪廻なり、那も亦、業報也と生悟りして、君父の為に怨みを雪めず、その身の仇を思はずば、形の武士に似たりとも、その行いは出家に同じ。恁ては五常を蔑如して、蒙々たること未視（まだめのあか）ぬ、雛狗児（いぬのこ）に異ならず。抑亦悲しからずや」（202）と全て運命だからと諦めてはいけないと言っているのだ。。

八犬伝について「侠客伝」の言葉を借りれば、「未視ぬ、雛狗児」の犬士が、玉と痣によって戦う獅子としての自覚をもつこと、その自覚の上での戦いによって輪廻も業報も変えることができるということを、馬琴は主張しているのだ。

輪廻について馬琴の考えがはっきりと分かる点言えば「侠客伝」は八犬伝と対になってると思われる。未完は残念である。

●

八郎—伏姫

| —道節（他7人）

定包—八房

玉梓———浜路

妻立戸五郎—左母二郎

戸五郎は定包が放った尺八の手裏剣に右腕をうち脱れた（① 1 0 1）

左母二郎は道節が放った手裏剣に左の乳の下をうち脱れた（② 1 3 8）

妻立戸五郎は（中略）一旦息絶しは（① 1 0 4）

左母二郎は呼吸環会して（② 1 3 9）

●以前、玉梓と浜路が同じ怨みの言葉を残して死んでいった（① 1 1 4 ② 1 3 6）のを指摘し、浜路の魂魄が転生しないで現世に留まっていたのだから、玉梓も八房には転生していないと結論付けた。

大輔が父八郎の生まれ変わりである伏姫を撃った瞬間に現世に留まっていた玉梓の魂魄は八郎に対する怨みを晴らし解脱し、転生できる資格（？）を得たのだ。

しかし、前世の因縁は残っていて、玉梓は正月（浜路）に、定包を殺した妻立戸五郎は綱干左母二郎に転生し、戸五郎が玉梓に懸想しおよばぬ恋に物思いにふけた（① 1 0 0）ように、左母二郎は浜路に懸想した訳ではないと言いながら、鮑の貝の片思いすることになる（② 6 6）。浜路が言う「これ将過世の悪報」（② 1 3 7）である。

信乃は伏姫＝八郎であるから、浜路＝玉梓は「宿世の讐（あた）」（② 8 6）なのである。

以前は下のように状況証拠から考えてみたが、妻立戸五郎の存在を含めて考えれば、正月（浜路）＝玉梓と考え直さざるを得ない。

●荒芽山も基本は一回と十五回で、これも結城であることは確かだ。

荒芽山から落ちる場面は里見季基と義実、匠作と番作がそれぞれ道節とやす平等である。

このエピソードでの力二、尺八兄弟二人の首は春王、安王兄弟の首であり、番作が二人の首を奪取後、村雨を使い切り抜けたことの照応である。

●反対

義実声をふり立、やおれ大輔狼狽たるか（14回① 2 4 2 1 4）

在村は、忽地怒れる声をふり立、そは甚しき粗忽なり（30回② 1 8 0）

倍ではないが肇輯卷五第十回ラストに載せられた予告のような挿絵「一言信を守て伏姫深山に畜生に伴わる」と三輯卷五第三十回ラストの予告のような挿絵「君命によって見八信乃をからめ捕らんとす」は照応、反対。

独断で八房を殺し伏姫を救出しようとした大輔と、主命によって信乃を捕縛しようとした現八は反対。

冒頭におかれた「平家」と「塞翁が馬」は同じ意味。

芳流閣は三層の楼閣。

芳流閣も富山であるなら、信乃が関わった大塚（富山）—芳流閣（富山）—古那屋（富山）となり、別の対牛楼と庚申山も富山である。

荒芽山が富山となるかはよく読まないと分からない。図像的には同じであるから、本文も同じ結果がでるのではないか。

●最近これとは思えるのは、あげまき図が今まで六男二女で描かれているというのが、実は伏姫と八房の両親図に対応させるための構図上の都合で四男四女であったということかな。その中で信乃と毛野をはっきりと女に描いたのは、春王と安王が結城落城の折に女装をして脱出を図り失敗、後に斬首されたという八犬伝には書かれていないエピソードを示しているのだと読んだことくらいだ。

八犬伝の原点たる春王と安王がただなんとなく出てきているということはないのだ。

兄弟の首ふたつという頻出するエピソードの原点も番作が奪った春王と安王の首にある。

里見親子、大塚親子の結城合戦譚は補完しあって一つなのだ。

里見親子にはない、番作と手束の出会いの場面はのちに小文吾と旦開野で繰り返されている。

●八犬伝の構成の方法に、二倍にした回を対応させるというのがあったのはみた。

馬琴は算数の書『塵却記』からパクった『鼠子婚礼塵却記』などと言うタイトルの本を書いていた（麻生磯次『滝沢馬琴』P30）ので、八犬伝の「稗史七法則」に算数的な考えを取り入れ形式化したと考えてもおかしくはない。

●

八犬伝にも上記のようなオマヌケ名前がいっぱい出てくる。いちいち挙げないが、筆者が好きな名前は

仵足澆太郎（きったりはったろう）

である。

馬琴命名のオマヌケネームも狂歌などのギャグ物の延長線上にあるのではな

いだろうか。。

●金碗八郎とは名詮自性、金碗姓の八人の男、八犬士である。

●四十三回は、結城合戦を法場に置き換えた話。

義によって(①18)義実らは結城方につき、信乃たちは同盟の義(③55)によって額蔵を救出した。

額蔵救出時の暴風は「にはかあめ」と振り仮名がふってあって、雨を強調した暴風雨であった。義実が三浦で龍の出現を目撃した時の状況と同じであり、姿は見えないがこの時も龍がいたと考えるべきだ。さらに伏姫が親兵衛を救出に現れた時に暴風雨が起きたことを考え合わせれば、伏姫の出現はすなわち龍の出現なのである。

やす平が和歌を歌いながら船を漕ぎ寄せたことにふと気付くと、第一回で貞行が雇った船を和歌を歌いながら義実等に漕ぎ寄せたことのリピートである分かる。犬士が川を渡ったのは義実が安房に渡海したことに重なる。

このあとに起きる荒芽山での出来事は義実が安房を統一したことの反対となっている。照応だけではそれこそ「二の町」で終わってしまう。「反対」がないと物語は次の段階には進めないのだ。

●狸に育てられた八房が古狸の景連(などて彼老狸に、欺れ給ひぬる①121)を噛み殺す。一回から十四回に出た者たち(動物)の行動が稗史七法則の基本となっている。

一回から十四回に隠微もあると言えるのではないか。

馬琴が水滸伝の隠微とした「初善中悪後忠」にあたるのは八房しかいない。八房以前に八房のような人間や動物がいたか。八房と定包比較表でみたように、定包しかいない。

●老狸(①121)

現犬は狐狸の為に、忌憚るゝもの(①139)⇒妙椿：那(かの)犬江奴(⑥145)

●老狸と書いて思い出した。この老狸という言葉こそ妙椿譚のしこみであり、景連が伏姫に目をつけたのと、妙椿・素藤が浜路姫に目をつけたのはこれまた照応、反対になっている。

里見—安西

素藤—里見

単身乗り込んできて浜路姫をさらって行く妙椿はこれまた八房の反対である。

●親兵衛は那古七郎であり、金碗八郎である。七犬士は八郎と重なる部分があるが、光弘が襲撃された時の七郎のように義実が襲撃されたその場にいた犬士は親兵衛だけである。

光弘を守れなかった七郎に対して親兵衛は義実を守る。まさに「衛る兵」である。「身ひとつにては」定包を討てなかった八郎（① 1 2 6）に対して、親兵衛は八房が一匹で安西景連を噛み殺してきたように、いつでも単身乗り込んで素藤を討つ。親兵衛とは伏姫つまり「親に衛られた」八房ゆずりの「兵」つわものであり、忠臣七郎・八郎の因果が生み出し、たスーパー七八郎なのだ。

●世四郎の親兵衛に対する位置は、七犬士の代理人である。

京師の説話は、親兵衛に七犬士の遍歴と戦いを稗史七法則によって一挙にさせてバランスをとるためにあった。七犬士のその時々信乃に額蔵が、小文吾に毛野、角太郎に現八がいたように、親兵衛には世四郎がいるという関係にある。。

●定包譚に対応するものが素藤の父業因譚。この二名をつなげると、定包業因で「定リタル業因ヲ包ム」となる。

この二人を読むと、定包譚で「やつざき」にされ梟首されたのは定包、玉梓、鈍平、戸五郎の四人。業因譚で「やつざき」にされ梟首されたのは、業因他三人で、それぞれにその首を「観るもの日毎に堵の如し」① 1 1 5、「是を観るもの堵の如く」⑤ 3 3 4であった。

業因が定包となると素藤は義実となる。

素藤が面白いことを言っている。

盗むにも亦方あり、国を盗みて国主といはれ、城を盗みて城主になる（⑤ 3 4 8）

素藤にとっては義実も自分も同じなのだ。

と書いていて、司馬遼太郎の『国盗り物語』を思い出した。結構タイトルの典拠はこんなところかも知れない。

は置いといて、定包を「定まった業因を包み隠した」男と読むと面白い。誰も定包が八房になった業因に気付かないのだ。

富貴歓楽を極めた八逆の定包が八つざきの刑にされ、牡丹（富貴花）の斑を八つもって八房に生まれ変わり、伏姫読経の法華経八巻の功德で、伏姫と八房の間に人道の仁義八行の玉（魂）と牡丹の痣（斑）を持つ八犬士が生まれた。悪い「業」が良く転じた基本。

- 酢もあらばいさぬたにせん網さかな えびとかにはの船で味噌すれ
網さかな＝網干左母二（魚）郎

神宮川の船上で村雨とナマクラ刀をスリ替えろ。
信乃に隙があったら殺してしまえ、左母二郎。

- 口絵、挿絵に鯛がある。海老で鯛を釣る。わずかな元手で大きな利益を得る。
- 親子なのになんで③と④を重ねてみるって気付かなかったかなあ。

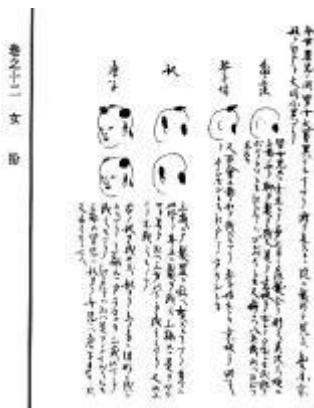


なぜ犬士が二列なのかも重ねてみると分かる。伏姫図と同じボリュームをもたせるための絵画的な工夫だろう。おそらく馬琴は一系列の「子をとろ子とろ」



図を稿本で描いていると思う。『守貞漫稿』遊戯。偶然だと思うけど、鬼以外が八人というのが面白い。

信乃、毛野は明らかに女兒だが、親兵衛はお多福、角太郎は女兒の唐子の髪型をしている。



『守貞漫稿』女扮。

小文吾の唐子頭と角太郎の唐子頭が区別されているのもそこをはっきりとさせるためだ。

「あげまき図」は男児四人、女児四人ではないか、との疑問も解けた。

上の四人が伏姫、下の四人が八房になっている。これは伏姫・八房の両親図に対応させたのである。信乃と毛野二人だけが姿、名前からしても女児であると見せることが重要なので、角太郎の腕を異様に太くして女っ気を消しているのだ。図像的には陰陽を四対四にしてバランスをとっているとみえる。

道節が将棋の駒の着物を着ているのは、竜王であり、高麗犬である。現八が河童でお尻に甲羅をつけているのは河童の「尻子玉」を示し、かなり苦しいが先頭の二人で「龍の玉」、宝珠をもつ獅子の子八犬士の属性を表している。右から順にみていけば、そのまま話の流れに沿ったダイジェストの予告編になっている。

●浜路の足が出ている挿絵を見て、浜路が裾を引っ張っているように見えるので、亀篠が裾を踏んでいるのを振り返り見た、と考えた。

舵九郎が妙真の着物の裾を引っ張り、妙真の足が出て振り返っているのを見てやっぱりそうなのか、と確信した。

左の挿絵には左母二郎がいる。「さもじ」とは魚のことなので、船の「舵九郎」と対応する。

浜路図は浜路以外全員悪党であり、妙真図では舵九郎だけ悪人である。節婦竹の如しの浜路だけが、ひとり竹が描かれた襖（額）の中にいることが生死の分れ目であった。



- 富山と戸山（古那屋）は図像的に同じであるのはみた。
 さらにもう一枚加えると、富山＝戸山＝庚申山であった。
 覗き見の妙真と籠山逸東太縁連。横たわる大八と牙二郎。生血は薬となり、
 親子の証明となる。
 そして親兵衛と角太郎が犬士となる。

- 定包隠しのために改変された後刷本定包の着物と袴。



はっきりとあった八房の牡丹

と里見関連を表す市松（薄墨だが）が消されている。

ついでに言うと玉梓の袖にあった「鸞」の字も消されている。琴にまつわりついた裾の「鸞」は消されていないので、袖に「鸞」があることがまずかったのだろう。袖の鸞ではそのまま鸞替え神事、天神、怨霊といった連想に簡単に結びついてしまうからだ。

妙真は五十子である。

一回から十五回は「主」であり、後のエピソードはすべて一回から十五回の「客」であり、伏線、襯染、照応、反対、省筆、隠微の稗史七法則からなるバリエーションである。

無理に部に分けるなら、第一部は序、一回から十五回。第二部は十六回から

回外剰筆まで。

親兵衛譚、管領戦は独立してるわけではない。

●舵九郎ついでに言えば、「舵九郎を屠戮して神霊一犬士を隠す」の挿絵は第一回の「義実三浦に白龍を見る」との対応。

八房は獅子である。その獅子は龍の八番目の子供である。犬士が持つ玉は宝珠であって、龍の玉だ。

そして龍は暴風雨をともなつて現れる。

暴風雨を起こし、八房に立ち姿で乗る伏姫の姿は騎龍観音の姿に重なる。伏姫と龍の関係が明かになる一枚である。龍の講釈は、馬琴が知識を誇りたいがための余計なものと思われているが、こうした話へのしこみだったのだ。

親兵衛を殺そうとした舵九郎の腕が突然痺れて殺すことが出来なかったのは、信乃が自殺しようとした時に腕が痺れて出来なかったこととこれまた同じであり、信乃の側にも伏姫がいたことを窺わせる。

またついでに言うと、よく分からないのが四輯で死んだ舵九郎が五輯の口絵に出てくることだ。なんだろうか？

●伏姫のキーワードのような「堤婆達多品」にある八歳竜女の話。竜女が男になったことばかりがクローズアップされるが、竜女はどこに行き悟りを開いたかが八犬伝では問題だ。

竜女は南方の無垢世界へ行ったのだ。南総とは無垢世界でなければならなかったのだ。無垢三が定包を除こうとしたことは「無垢世界」を作り出すことであったが失敗に終わった。犬士たちが無垢三と関係があるのも「南方無垢世界」建設の意志を引き継いだからだ。

南総に無垢世界はできた。しかし、「堤婆達多品」の話がある十二回には伏姫が受胎したことを告げた仙童の言葉にこうある。

物の汚穢は、潔白よりなる（① 2 1 7）

八犬士が築き、里見が「威を八州にかがやか」せた無垢世界も「潔白」なるゆえに再び「汚穢」な世界となり里見は滅びる。仙童が漏らさなかった「天機」とは最終的な里見の滅亡であるように思われる。

●閲者（みるもの）彼賊婦が怨言にころをとめて見なし給ひね。（① 1 1 5）

馬琴がはっきりと言表し、わざわざ書くことには読者に「～とのみ」思わせる意図がある。玉梓だけに注意を向けさせ、ミスリードするのだ。

●釣り三日目に義実、出会った八郎を癒す。病人を待つこと三日、素藤病人を

癒す（⑤ 3 6 2）病人が来たのは辰の刻。

●素藤が普善（ふせ）村＝布施村に着いてから急に伏姫関連の言葉がでてくる。布施はそのまま（ある意味布施姫でもある）、下の絵にある梅の鞍をのせた黒馬は「名馬磨墨」⑤ 3 5 8、伏姫が城を出て行く時に持っていった硯は磨墨の出陣地蘇々利村＝硯村である。硯は筆鞆口絵の定包の傍らにもあって、素藤譚がこれから伏姫・八房譚にリンクしていくキーワードになっている。

●毛野は八房的であると前に書いたけど、馬琴はもっと面白い。

牛のように大きい八房は伏姫を背に乗せて富山に向かった。

毛野は「ふたかさも、いと大きな小文吾を、たやすく背負ふて」馬加屋敷を脱出した（③ 3 2 8）。牛と関係が深い小文吾はパロディーにされている。

幽閉された小文吾は山籠りした伏姫と同じ感慨をもつ。

川。

言うまでもないが義実を籠城させた安西景連の首と、小文吾を幽閉した馬加大記の首は同じ意味をもつ。

地味な現八は八郎の代わりとして重要な役割をしてたが、小文吾もかなり義実や伏姫の役割を当てられている。玉梓に逆恨みされ崇られた義実・伏姫、舟虫に逆恨みされ狙われた小文吾。

●房八、房八と言うけれど、ほんとは「房八郎」なのだ。② 2 2 3

現・八郎がいない間は房・八郎がいて、房・八郎が死んだあと現・八郎が帰ってくる。八郎も二人いないとばかりで、ここまでするか？の馬琴である。

●なんとも言えないこともだが、

紀二郎が糠助宅の厠の屋根で友猫と喧嘩をしてころころと落ちたのは芳流閣の決闘の反対なのだ。

糠助宅が芳流閣だから笑える。まあ、だから現八とつながる訳で。



紀二郎対友猫。相手は斑なのが面白い。斑は猫だが仮想

八房で獅子、紀二郎は虎のように描かれている。

犬士対虎・（化け）猫の原点は糠助宅の厠の屋根にある（笑）。

●八郎切腹⇒伏姫切腹（八犬士）⇒番作切腹（犬士）～小文吾以外は両親が死んでから犬士になっている（親兵衛は両親の死に際だが）

↓

義実八郎の首を切る⇒小文吾房八の首を切る

●信乃・現八は義実が舟で結城（戦場）から安房に向かったように、芳流閣（戦場）から行徳に流される。

小文吾は義実が期限を区切って鯉を釣ってくるように言われたように、信乃の首を獲てくるよう言われる。

犬と八房から犬士が生まれ、犬と房八から犬士が生まれる。

犬士誕生に立ち会い、富山から犬士搜索の行脚にでたゝ大が戸山に戻ってきて、親兵衛の犬士としての誕生に立ち会う。

古那屋輪廻図でみた七郎と八郎に起因し、義実が関与し富山で発した因果の決着点が古那屋（戸山＝富山）であった。古那屋は前半におきたことに一応の因果の結果をみる区切りなのだ。

古那屋にまず結城系と安房系の四人が揃ったのも後半へのターニングポイント的な意味があったからだ。

後半では遠い安房系の莊介をふくむ道節・毛野・角太郎が中心になってくる。小文吾は義実なので、八房の毛野と関わり仲介役をつとめる。

●滝で死に掛けた信乃を助けたのは現八の父糠助。古那屋で死に掛けている信

乃を救おうと薬を求めに出かけるのは現八。

八犬伝は一見波乱万丈の物語だが、「稗史七法則」を作ってしまったばかりに、見え始めるとこれほど単純なものもないと言える位に単純な構成だ。やはり「隠微」だけが複雑なのであろうか。

●雪は犬の叔母といい、雪は図像的にも頻出するし、信乃の飼い犬与四郎と同じ名前で犬士を補佐するような姨雪与四郎も登場する。

で、泡雪奈四郎。悪党のくせに何で犬と与四郎に近い名前をしているのか。

左は十九回、墓穴の下男に殺されそうになり瀕死の与四郎の首を斬る信乃。

右は七十三回、下男媼内に殺されそうになり瀕死の奈四郎の首を斬る信乃。

十九回の信乃。「阿、与四郎はまだ死ざりけり」と猶も苦痛をさせないために首を斬った。

七十三回の道節の台詞。「奈四郎は尚死なずして、御辺（信乃のこと）に首を刎られしは、天の分配、寔に妙なり」

与四郎を信乃が斬った話（しこみ）に照応やら反対をするには、房八のように善人を殺すことはできないので、哀れ泡雪奈四郎、信乃に斬られるがために出てきたのだ。

「天の分配」とは馬琴が作った（訳でもないが）稗史七法則であり、十九回の出来事を七十三回で持ち出したことに「寔に妙なり」と自画自賛しているとも読める。

●そうか、現八と信乃の芳流閣の決闘は、房八と小文吾の相撲と同じだな、と思ってその辺りを読むと、

河辺のかたへころころと、身をまろばせし覆車の米包（たわら）②200とある。

ちょうど琴欧州が優勝した相撲で、「俵をわる」とは、相手に攻められて土俵の外へ出されるという専門？用語である。

現八というのは不思議な男だ。房八のしこみになっていたりする。大八もだが八が名前につくのは特別なのだろうか。

現八が信乃のために薬を求めに行くというのにも何かあるに違いない。●

義実八郎を釣り、文伍兵衛は現・八郎を釣った。

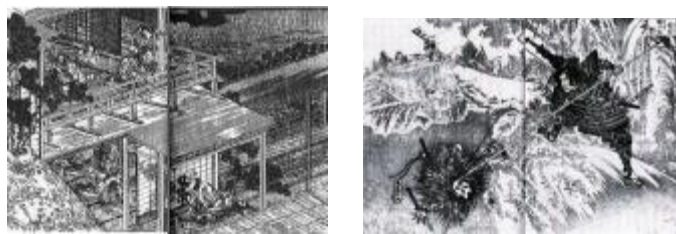
要するに義実が結城から安房上陸そして伏姫切腹、八玉飛翔までと芳流閣の決闘から親兵衛が伏姫に拉致されて飛んでいってしまうまでの構成は同じだ。その場かぎりの一枚として図像をみるのではなく、どこかで対応している絵があるとみるべきだ。

八郎切腹と伏姫切腹の挿絵は左右対称になっているのはみたが、他に気付かなかったので特異なものかと思っていた。

二冊並べて読み、見比べるのが八犬伝の読み方であるから、巻ごと一冊になっていた出版当時の姿が一番八犬伝を読む・観るのには適した形態だったといえる。



●八郎が基本だと分かったと、下の二図も違う時間の一人の人間を同じ画面に収める構図は同じで、かつ毛野の挿絵にはないが子供が転落死、転落の巻き添えで死ぬというパターンも照応である。



（ここに八郎「笛内に孝吉酷六を撃」の挿絵と対牛楼の仇討ち図を入れたが転送できないので、本を持ってる人は各自で確認してください）

事後に顛末を八郎は義実に「辞せわしく演説」し（① 7 8）、毛野は小文吾に「息吻あへず説示」している（③ 3 2 7）。省筆。

大袈裟に言えば、岩波版で第一巻を読めば、全十巻のことは分かってしまうだろう。「稗史七法則」とはそういうことだ。

●定包が、尾髭の塵をとりしかば（① 3 3）

ここも巧妙にずらしている。媚びる意味なら「御髭の塵をとる」が正しい。ところが「尾」である。諺で言うなら「虎の髭をとる」「虎の尾を踏む」であるはずだ。定包を虎に比しているのだ。

馬琴お得意の「苛政は虎よりも猛し」を文外に置き、竜に導かれた義実との竜虎の戦いにしている。八犬伝中に繰り返し出てくる竜虎の戦いはここにルーツがあった。

八犬士は獅子だが、竜の玉である「宝珠」持っているのも竜でもある。

紀二郎や化け猫、もがり（虎落）の犬太、京の五虎は日本にいない虎の代理で、極め付けは画虎となる。

宝珠を体内に持ってた与四郎は信乃の代理で、大塚の苛政の象徴である紀二

郎と犬猫の喧嘩ではあるが竜虎の戦いを大塚でしていたのだ。

●前に九回と十八回に「翁丸」が出てくるので試しに $2 \times 9 = 18$ をヒントにして倍の回をみた。そこにはちゃんと構成法があった。掛け算の数字に意味を持たせることは

三四（さんし）十二个村に、今また二増倍すれば、三十六所の長（① 7 9）と例題を出しているの数字を考える上では有効な方法だろう。

ちなみに、

$12 \times 2 = 24$ だし $12 \times 2 \times 2 = 48$ だし、二増倍というのは $(3 \times 4) + 24 = 36$

なのか。

●管領戦は結城合戦で死んだ「八騎の従卒」の復讐戦。

八騎の従卒一人も残らず、みな乱軍の中に撃れて、鮮血は野径の草葉を染、馬蹄の塵に埋といへども、その名は朽ず、華洛まで、立のぼりたる丈夫の、最もはげしき最期なり（① 2 0）

朽ちずに都まで立ち上ったほどの八人の名前を一人も書いていないところがミソだ。無名の八人に代わって親兵衛は上洛し、八犬士の名前を「立のぼ」らせる必要があったのだ。

●義実による山下定包の滝田攻城戦は結城籠城戦のパロディーになっている。

定包を裏切った岩熊鈍平と妻立戸五郎は巖木五郎を分解した名前だ。

馬琴の上手いところは大塚親子の籠城譚には落城は巖木五郎の反忠によるものだと書いているのに（① 2 5 6）、巻頭の里見親子譚にはそれを書いていないところだ。

里見親子の籠城譚と大（犬）塚親子の籠城譚が同じように繰り返されるために、始めから巖木五郎の名前が出ていたように錯覚してしまう。しかし実際には書かれてないので里見親子譚の後にでてくる岩熊鈍平と妻立戸五郎が巖木五郎であることに気付かされないのだ。

春王・安王公達が女装で脱出を図ったことも書かないなど、馬琴の操作は巧妙である。

●こう見てくると、犬士の識別記号としての牡丹の痣の使い方が上手いな。現八の頬の痣が小文吾のようにお尻にあったら、文吾兵衛も気付かないでそのまま舟を流しやったはずだ。痣は玉がなくても犬士の関係者にはわかる識別記号

としての役割もある。

まあ聖痕などではなく識別記号だから必要がなくなれば消えてしまったのだ。

●つい信乃が古那屋と関わって物語が動くような気がするけど、実は信乃と共にやってきた現八が重要な役割をしていた。

富山での伏姫の死の再現である房八とぬいの死と、雛衣の死の両方に関わるのは現八である。八郎が義実の前に現れた結果が伏姫の死、犬士誕生なので、それを繰り返す現八はやはり現・八郎なのだ。

八郎は義実（結城系）と那古との接点であり、現八も信乃（結城系）と古那屋との接点である。

船で流されてきた二人のうちの一人がかねて知っていた現八でなければ、文吾兵衛は「土地の煩勞なるべし」と関わりを避けようとした（②203）

古那屋輪廻図で朴平→小文吾、無垢三→ぬいとした。現八が八郎の生まれ変わりとは思わないが（現・八郎だから）小文吾兄妹との関係があるのもまた八郎の宿縁によるものであった。

●角太郎と現八の関係も義実と八郎の関係のバリエーションのひとつだ。

二階松先生を通じて両者は接点がある。

●糠助をとおして信乃と現八が知り合うことになる。ということは、大塚に糠助がいたから信乃と額蔵が知り合ったのだと言える。

さらに糠助を通して現八は小文吾と乳兄弟となる。安房と行徳を結びつけたのも糠助である。

安房—行徳—大塚と糠助（親）は現八（子）の代わりに犬士の接点となっていたのだ。密漁して追放された無理心中未遂男が何故に八犬士の一人の父となり重要な位置を占めるのだろうか？

役の行者の霊地で密漁したのを役の行者が同情したから？役の行者の崇り？（笑）●毛野の話を読んでいて前に以下のようなことを思った（赤丸）。

●馬加大記の妻の名前の「戸牧」で思い出したけど、北条時政の妻「牧の方」が名前の由来ではないか。

馬加大記のモデルは、北条時政？

●鎌倉なる女田楽（③300）

●『吾妻鏡』文治二年五月十四日条

毛野の復讐はまるで、静の代わりに北条氏に復讐しているかのようだ。

↓

読み進むと、毛野を静にたとえていた。

又華夏の静娼は、鶴岡の社壇にて（③ 3 1 5）

●素本の源氏を読に似たり（③ 3 0 1）→源氏は源氏物語ではない。源氏は「静」を引き出すための縁語のようなもの。

●抑是は讃岐州、八嶋壇の浦のほとりなる（③ 3 0 4）

●

信乃—与四郎 親兵衛—与四郎

信乃—浜路 親兵衛—浜路姫

小文吾—もがり（虎落）の犬太 親兵衛—画虎、五虎

角太郎—山育ち、弓の講釈 親兵衛—山育ち、龍の講釈（これは義実の照応）

道節—仮死状態からの再生 親兵衛—仮死状態からの再生

道節—体内から玉が出る 親兵衛—体内から玉が出る

毛野—単独行動 親兵衛—単独行動

現八—化け猫を弓矢で撃つ 親兵衛—画虎を弓で撃つ

莊介—墓六・亀篠 親兵衛—与四郎・音音

●古那屋の場は第一回の結城合戦から伏姫・八房の死～八玉飛翔までと芳流閣からぬい・房八の死～親兵衛空へ神隠しまでが先にみた輪廻図とからめて「稗史七法則」そのままで作られている。

さらに親兵衛が行方不明になり富山で現れるのも、ゝ大が八つの玉を搜索に富山を出てから古那屋に現れるまでの照応だろう。

親兵衛は房八とぬいの子だが、八房と犬（伏姫）の子でもあり、ゝ大＝犬（大輔）と犬（伏姫）の子でもあるのだ。

「大八の親兵衛」や「大八車」が強調されるのは、「大（輔）+八（房）」という二人の父を持つ親兵衛の出生の特異性を表したものである。仮死状態にあった親兵衛をゝ大が抱き上げた時「わっ」と泣いたのは、父であるゝ大にとりあげられ、親兵衛として再生した産声だったのだ。

●

結城⇔芳流閣

渡海⇔川を流される

安房⇔行徳

義実（釣り）、八郎と会う⇔文吾兵衛（釣り）、信乃・現八（現八郎）と会う

八郎⇔房八

大輔（加多三）⇔親兵衛（大八）

上総の一作⇔戸山の妙真

富山⇔戸山

誤殺⇔誤殺

伏姫・八房の死⇔ぬい・房八の死

大輔⇔ゝ大

八玉空へ⇔親兵衛空へ

首⇔首（首が窮地から脱出させる）

古那屋の場は七郎との因縁、朴平と無垢三の輪廻転生が絡んで話しを難しく見せるが、基本は伏姫・八房の死⇔ぬい・房八の死による八犬士誕生⇔親兵衛、犬士として再生である。

第一回から十五回と三十回から四十回は同じ構成をしている。この同一性を明らかにするために古那屋の秘密は詳しく語られているのだ。

鯉を釣ってこい（義実）⇔信乃の首をとってこい（小文吾）

義実（首の代わりゝに大輔大の鬚を斬る）⇔小文吾（房八の首を斬る）

●

○上総へ赴き、下総へうち越へ、上野・下野・いへばさらなり陸奥の尽処までも、旅より旅に日を弥る。便着には倣得たる、剣術拳法の師範と呼ばれ（①64）→現八（他犬士）

○仇を狙う（道節、毛野）

○乞食（毛野、あくまで一人で仇を討とうとする毛野は、義実の力を借りた八郎の反対）

○鯉の講釈（角太郎）

○妻を置いて出て行く（信乃、角太郎は子供が出来ちゃった八郎の反対）

○八郎—大輔—ゝ大 房八—大八—親兵衛（親に因んだ名前）

こう見てみると、全部八郎一人のバリエーションである。ちょっとしか出てこない八郎を悪く書かれると馬琴が怒ったのは、伏姫を否定するだけでなく八犬士を否定、ひいては八犬伝を否定されることになるからだろう。

八郎の中に因果あり、八郎の中に業報あり、八郎の中に八犬伝あるなり。

●大輔の母、濃萩

接ぎ（つぎあわせること）

濃萩が大輔を産んでいなかったら、八郎の切腹で話はそこで終わり。八郎と一作の口から語られるだけの濃萩だが、里見と金碗との濃い関係を接いだ重要

人物である。

そうか母親が不幸というのは、大の母濃菰に端を発しているのか。濃菰（八郎出奔）の死と五十子（伏姫城を出る）の死は同じだ。

前に八郎と伏姫の対照表と挿絵でもって、伏姫は八郎の後身としたが両者はさらに深い関係にあったし、濃菰という不幸な妻で母でもある一人の女の悲しみと子供を残しての死が、大の子でもある八犬士に影を落としているのだ。

母濃菰病死、父切腹⇒大輔⇒大

母手束病死、父切腹⇒信乃⇒犬士

●下では庚申山の話は八犬伝前史に重なると書いたけど、ここではそれだけではない。

庚申山は大塚の照応でもある。

信乃⇒角太郎（親のために妻を見捨てる）

浜路くどき⇒雛衣くどき

額蔵・立ち聞き⇒現八・立ち聞き

墓六⇒偽一角

亀笹⇒舟虫

紀二郎は化け猫。腹を切り、傷口から玉が出た雛衣は与四郎でもある。

信乃は父番作の血を浴び、角太郎の父一角の髑髏は息子の血を吸収する。

村雨⇔木天蓼（④ 3 1 刀の鑑定時に村雨の話がでる）

墓六・亀笹、（偽）村雨を手に入れ、浜路を死においやる⇔偽一角・舟虫、木天蓼の短刀を手に入れ、雛衣を死に追いやる。

●

信乃・浜路—莊介⇒道節の肩の瘤から刀傷により玉出現

角太郎・雛衣—現八⇒雛衣の膨らんだ腹から刀傷により玉出現

肩柳⇒肩に龍（宝珠）

雛衣⇒雛草・たつのひげの類（宝珠）

●第百三回

里見源老侯富山に亡女を弔ふ

犬江親兵衛高峯に勅寇を拉ぐ

●

以前、

三十三回のタイトル

小文吾夜喪麻衣

現八郎遠求良薬

を見て、

ん？現・八郎？じゃ、昔の八郎は誰だ。と思えば、出てくるのは金碗八郎孝吉。ここで八郎の名前がでてる意味はなんなのか？

と雑文1に書いた。字面を合わせているのかとも思ったが、そんな単純なことではなかった。現八が主役の庚申山の話の構成を思い出して、ようやく現八が現八郎である意味が分かった。

庚申山の話は富山との「照応」であるとはつとに言われているがそれだけではない。

神余光弘⇔赤岩一角（両者とも諫めを聞かず殺される）

定包（城の乗っ取り）⇔偽一角・化け猫（家の乗っ取り）

定包・人啖馬⇔偽一角・化け猫（両者とも喉を刺され絶命）

玉梓⇔舟虫

八郎⇔（現）八郎

義実（竜の講釈）⇔角太郎（弓の講釈）

八郎・義実（定包を打倒）⇔現八・角太郎（化け猫を殺す）⇒主・親の仇討ち

伏姫⇔雛衣

八郎と現八が現れたことで安房と庚申山の物語は動き出し、死と再生の結末を迎える。

挿絵もあるし劇的なので、つい伏姫と雛衣の切腹⇒犬士誕生ばかりに気をとられてしまうが、前史たる八郎譚がここでも再現されていた。すぐに姿を消す八郎だが、その存在を抜きにして八犬伝は成り立たない。

古那屋が結城落城から富山での犬士誕生が重ねられていたように、庚申山では古那屋で登場しなかった発端である定包と玉梓の話も重ねられていた。

定包・人啖馬⇔（八房）⇔偽一角・化け猫（三者とも喉を刺さ（撃）れ絶命）

この点が古那屋にはない人獣混淆の暗さをもたらししているとおもわれる。

●下でみた結城⇔芳流閣に甲斐での出来事を加えると、

義実（釣り）八郎と出会う⇔信乃VS現八、文吾兵衛（釣り）と出会う⇔信乃VS奈四郎、木工作（狩り）出会う

富山⇔戸山⇔甲斐（山）

誤殺⇔誤殺⇔誤殺（？）信乃が鉄砲で撃たれるのは、大輔が伏姫を鉄砲で撃った反対

伏姫・八房の死（八犬士誕生）⇔ぬい・房八の死（親兵衛再生）⇔木工作の死（浜路姫再生）

大輔⇔ゝ大⇔ゝ大

八玉空へ（富山）⇔親兵衛空へ（富山）⇔浜路姫空へ（甲斐）・山

首⇔にせ首⇔にせ眼代

となる。信乃の与四郎騎乗が伏姫の八房騎乗のミニチュアだったように、信乃の話は伏姫譚からパターン化されている。

こうしてみると、以前の疑問「何故信乃は二度も血を浴びなければならなかったか」がわかる。一度目は伏姫の切腹（番作の切腹は信乃の代理切腹の意味が濃い）、二度目は与四郎を楽にさせようと首を斬ったことの繰り返しだ。

●なるほど、墓六を殺した宮六は蛇太夫の息子だ。

蛙は口故（諺）

「蛙は口故に蛇に吞まれる」の略。黙っていればいいのに、なまじっか口を利いたばかりに身をほろぼすことのたとえ」

蛇太夫—宮六—墓六っていうワンクッションがあるから判りづらいけど、墓六の最期は諺のとおりだ。

●御教書（糠助）現八の実父⇔骨相図（妙真）親兵衛の祖母

犬士の関係者と分かるまでは信乃を窮地に追いやる役目をする。

大塚では信乃・額蔵の二人、行徳で信乃・現八・小文吾・親兵衛の四人。

●番作は（中略）春王・安王両公達の、最期の為体を物がたり（①302）

●信乃は（中略）歎きはおなじ煩悩の、犬飼に目をあはしつゝ（後略）②33

児孫まで、畜生道に導きて、この世からなる煩悩の犬となさん（① 1 1 4）

義実からみて伏姫は児で、八犬士は孫。房八とぬいの死による信乃と現八の歎きも玉梓の呪いのせいだってこと？とは思わないけど、そうともとれる文章ではある。

●義実が遁世して「突然」と号した訳を悟ったのは毛野だけであった（⑤ 3 1 5）。つまり、大も分からなかったということになる。これは非常に良い情報である。のちに八犬士の痣が牡丹であるのは何故か義実が訊ねたときに毛野は自身に関わる隠微だからと答えなかった。そのあとに、大が牡丹純陽論を語るのだが、恐らくは毛野の答えとは違うだろう。大は隠微を悟れる人間ではないのだ

●妙真の謎の手が分かった。

妙真がなんでこの場で突然髪を梳かすのか不思議だった。名前の類似だけではなく、化け尼妙椿と対にするために、妙真が有髪の「尼」であることを髪を梳かすことで強調しているのだ。帯に手を入れる仕種がどんな意味か分からないが、妙椿も同じ特異な動作をしていることで二人が対であることを表しているのだろう。

さらに妙真の後ろの煙を出している氷裂紋の火鉢と、妙椿の後ろで煙を出す香炉と氷裂紋の机がこの二人の類似を強めている。本文でも二人が親兵衛がらみというのもある。

肇輯から四輯、四輯から九輯と口絵・挿絵をみると馬琴が執筆段階でどこまで先を構想していたかが分かり非常に興味深い。

とは言っても、といつものことだが、稿本をみると妙椿は帯に手を入れてないし、机の氷裂紋も馬琴は指定していない。図像の中に馬琴が考える以上の意味を持たせているのは絵師なのではないか、とまたもや思うのである。

しかし、しかしである。絵師が十五年後に登場する妙椿のことが分かるはずもなく稿本に描かれていないからと言って馬琴の考えではないとは言えないのだ。それに十五年もかかるとしていなければ、妙真を出した時には妙椿譚の腹稿があったとも思える。まあ、もっといろいろと分析しないとなんてとも言える段階だ。

●

そうか。この一枚（二枚）は、梅と雪の額縁で、描かれている内容はこの口絵を二分割したのであったな。

八房を隣の額からみる大輔、大八を隣の額から見る念玉（ゝ大）で同じ三角構図である。構図の相似も図像を読む上でのキーになっている。

大輔が下手人だから捕り手がいるのは分かるが、それがなぜ女なのか分からなかった。これも八犬伝の中に答えが用意してあった。

伏姫—ぬい

八房—大八

大輔—念玉（ゝ大）

捕り手の女—人相書きを見せる女（妙真）

捕り手をわざわざ女にしたことで、後に念玉（ゝ大）に人相書きを広げる妙真を対にしてだすことを想定していたことが分かる（両者とも追捕を表している）。つまり肇輯口絵の段階で馬琴はすでに第四輯口絵を構想していたであろうと思われるのである。四輯の稿本校了が文政三年で刊行も同年である。肇輯の稿本校了は分からないが、仮に校了と刊行が同じとすれば文化十一年。その間六年。どこまで腹稿があったかを問題とするなら、思っていたよりも話が長くなってしまうことはあっても、四輯までは確実に肇輯執筆当初からの腹稿があったと言えるだろう。

刊本ではぬいが胸をはだけている以外は、馬琴の下絵と基本は同じである。とすると、元になっている肇輯口絵も大方馬琴の下絵通りに描かれたと思われる。

肇輯（富山）と四輯（古那屋）は図像の上からも、同じ構造をしている。

大輔図には頭巾、腰帯とその形態で図像として『海道記』で表現された富士山が隠されており、富士山＝富山なので、富士山＝富山＝戸山である。念玉がわざわざ黒頭巾を被っているのは、肇輯大輔の白頭巾の反対である。それだけ頭巾を強調したいがためだろう。

挿絵口絵は単独ではないこともすでにみた。まだまだ図像には「読める」ことが多そうだ。

ただ、稿本での念玉は伏目勝ちで妙真が広げる人相書きを見ているようなので、大八をハッキリ見ている刊本の絵は、肇輯口絵に合わせた絵師の「読み」によるものかもしれない可能性はある。

ついでに言えば、富山（とみさん）を「とやま」と読むことも、「とみさんの

妙真」では話にならないからだろう。

八房をつなぐ鎖と大輔を囲む鎖。

房八一家と伏姫・八房・大輔との類似が大八に対する伏姫の最頂のもとかも。

大輔—八房・伏姫（伏姫は誤射）—義実（伏姫蘇生）

房八—大八・ぬい誤殺—大（大八蘇生）

大輔—大（改名再生）＝大八—親兵衛（改名再生）

義実—小文吾（大の鬚＝首の代わり—房八の首を斬る）⇒こことは関係ないが八房と旦開野に対しても同じ。

●

信乃—芳流閣—現八—利根川—共に流される

毛野—対牛楼—小文吾—墨田川—別離（小文吾と牛）

●信乃は何故二度も血を浴びなければならなかったのか。

●当座の讐敵、長尾（① 2 6 1）

●長尾因幡介、番作に両公達の首を奪われる（① 2 6 1）

長尾景春の母簀大刀自、莊介・小文吾の偽首を得る。（④七十八回）

●第十回のタイトルは「腹を裂て伏姫八犬子を走らす」だが、実際に同名タイトルの挿絵があり伏姫が切腹するのは十三回である。

下でみたように、二倍した二十回をみると信乃が切腹しようとして失敗している。

おそらく腹稿では第十回で伏姫が自殺し、二十回で信乃が自殺に失敗するという計画だったのが、伏姫切腹までが長くなってしまったためにタイトルと内容の齟齬が起こり、タイトルだけが法則の辻褄合わせの名残になってしまったのではないだろうか。

と、この事情は馬琴自身が肇輯卷之五、第十回の巻末「作者云」で述べているのでその通りなのだろう。この「作者云」によって、馬琴が肇輯卷之五第十回と二輯卷之五第二十回を対にしようとしていたのは明らかだ。馬琴がエピソードごとの対を作っているのは七法則で自明のことだが、ずれてしまっているが大きくは巻、回でもって対にするという整然とした姿を馬琴は構築しよ

うとしていたのかもしれない。思ったよりも長くなってしまったという想定外のことが返って八犬伝に揺らぎをもたらし、その規則性を分かり辛くさせたという良い面に作用したといえるだろう。

肇輯巻末では「思ふにまして物語は、ながながしくなりしかば」と書いているのに、二輯の再識では題目と挿絵の齟齬を「その大かたをしらせん」として先に出したと書いている。さらに、もともと肇輯は七巻、十四回としたかったが本屋の都合に合わせて毎編五巻とした、という。

肇輯は七巻、十四回構想というのは本当だろうか。もともとは肇輯巻一第一回到結城合戦があり、二輯巻一第十一回に再び結城合戦、十回到伏姫の死、二十回到信乃の八犬士としての再生をもってくるという構想だったのではないか。初めは十一回～十四回がない単なる水滸伝式の八玉飛散を想定していたのかも知れない。整然とした構成でもって「全本となさんこと、両三年の程になん」と馬琴はふんでいたのだろう。

十一回～十四回が「思ふにまして」長くなった部分ではないだろうか。

本屋の都合と言うのもあるだろうが、わざわざ書いたことで自分の腹稿の変更を本屋のせいに行っている部分があるように読める。

●あとで『犬夷評判記』を読んでみたら、「初編を綴りし頃は、伏姫自殺の段までを、第五巻のをハりにせん、と思」っていたとある。

「第五巻のをハリ」とは第十回であるから、腹稿としては十回伏姫自殺、二十回信乃自殺未遂という七法則にのっとりた単純な構成をしていたのだろう。七巻、十四回というのはミス隠しの言い訳なのだ。しかし、思ったよりも長くなってしまった計算ミスが八犬伝にとっては幸運だったと言える。

●下では三や八と言った数字に意味を持たせ関連付けていく馬琴の小説作りの手法を見た。

同じ言葉や状況で前後を七法則で結びつけていく手法もみた。前に義実と小文吾が「われあやまちぬ」という台詞・独白で、八房と旦開野（毛野）に対して同じなのもみた（ここでは首を獲ってきて窮地から脱出させるところも毛野と八房は同じ）。この「あやまてり。あやまちぬ」という台詞、小文吾の以前に言う男が一人いた。墓六だ（十八回① 3 1 3）

「あやまてり。あやまちぬ」をキーワードにするとまた面白い八犬伝の構成が見えてくる。

九回（① 1 6 3）義実—八房（大輔）—犬—翁丸

十八回（① 3 1 3）墓六—紀次郎（与四郎）—猫（雉子毛）—翁丸

これが面白い構成ということではなくて、九回と十八回に「翁丸」が出てくるところだ。試しに $2 \times 9 = 18$ をヒントにして倍の回をみると

四回—八郎登場（前世）

八回—伏姫誕生（転生）

七回—孝吉義実（親）

十四回—大記総を索ぬ（子）

八回—伏姫誕生

十六回—信乃誕生

八回—八房誕生（雛狗）

十六回—代四郎登場（雛狗）

九回—嗚呼、あやまてり。あやまちぬ。（義実）

十八回—嗚呼、あやまてり。あやまちぬ。（墓六）

それぞれが対になっている。九回と十八回は善と悪が同じことを言う「反対」になっている。「反対」をもとにしてみると、これら五つの組み合わせが「稗史七法則」を使っていることがわかる。ハッキリと分かるのは信乃が犬士として再生する十九回までだが、倍にした回を対にするという単純な構成も八犬伝を読む上でのひとつの法則である、と言ったことを意識することでまた別の角度からの「読」みができるだろう。このように隔々にまで馬琴は気を配り八犬伝を作り上げていったということだ。

●地蔵と閻魔は一仏二体、慈愛肅殺異なれども、俱に能化の教主なり。（⑤ 161）

魔物同根の八犬伝の考え方が書かれている。言葉を変えれば、善悪もまた同根である、と言える。

●第九輯卷之三十三簡端附録作者総自評

後の姦淫を戒る、作者の隠微を猜すべし。

つい「猜すべし」を推すべし、「察しろ」という意味かと思っていた。猜にはそねむ、うたがう、もとる、はかるの意味があって猜疑心としてよく使う。

字面から言うと「作者の隠微を疑え」ということになる。「はかる」の意味

で使ったと思うが、馬琴にしては漢字の選択を誤った観がある。

この文だと「隱微」なんて勸善懲惡のためのものみたいで、八犬伝は道德の教科書にすぎない。もしそうだとしたら、壮大深淵な謎を秘めてるなんて過大評価して解説しようなんて血眼になってるのをみて、あの世で馬琴は「あ、あの～。そこまで深くは考えてなかったんですけどー。百年後の知音を待つなんてカッコ良く言ってみただけなんですけどー」と困っているかもしれない。

景連は古狸と書いた馬琴こそ古狸に思える時もある。

●朴平の生まれ変わりの小文吾が親兵衛と親戚なのは、剛毅木訥（志は剛なれども①42）は仁に近しだから？

木訥は朴訥（訥）とも書く。

●稿本では両腕がある犬太を片腕だけに描いたのも絵師の所行だろう。図像を読む場合、絵師がこう読んだという解釈を読むことにもなる、という部分が少なからずあると思われる。二代目重信が酷評されたのは挿絵を描くに当たっての「読み」がなってないと言う点にある。

●「八創（やつざき）」をそのまま「八裂き」の意味で使っているところもある。

先業因を生きながら、八創に斬割（きりさか）して、しかして後に馘（くびき）りて（⑤334）

ここでは八創がズタズタに斬るという意味で具体的、かつ後に首を斬ったとして、八創と馘りを分けている。

●馬琴が「八創（やつざき）」「八創」と使う創（カイ）と言う字、「切断」

という意味らしい。「八創」ならそのままズタズタに斬るで良さそうだが、馬琴は「首を斬る」というように意味をずらして使っている。八?を八裂きのままの意味に捉えてしまうと、首を斬られた者が転生するという八犬伝内の輪廻の法則に気付かないことになる。

この字、うちの漢和辞典に載っていないやっかいな字だ。馬琴はどこからひ

っばってきたのだろう。

と言っているうちに見つけた。

『水滸伝』四十四回。首斬り役人の楊雄について書かれたところだ。

兼充市曹行刑會子。因為他一身好武藝，面貌微[?]，以此人都稱他做病關索楊雄。

有一首臨江仙詞，單道著楊雄好處：

兩臂雕青鑄嫩玉，巾環眼嵌玲瓏。鬢邊愛插翠芙蓉。背心書[?]字，衫串染猩紅。
問事廳前逞手段，行刑刀利如風。微[?]面色細眉濃，人稱病關索，好漢是楊雄。

駒田信二訳『水滸伝』の当該部分。

兼ねて刑場の首斬り役人に任じたのであった。

背心（上衣の背中）に會（首斬り）の字を書し（以下略）

馬琴は「八會（やつざき）」をズタズタにするではなく、もともと「首を斬る」という意味で使っていたのだ。「八會」は「會（首斬り）」にキーナンバー「八」の意味をプラスした馬琴の造語かもしれない。首を斬られた挿絵から推測した、「八會」とは首を斬ることであるというのは正解だったようだ。



伏姫の座り方（半跏座）と宝珠の組み合わせからは如意輪観音が、また如意輪という言葉からは親兵衛が想起される。伏姫神女には複数の属性が与えられていて、ひとつに限定することはできない。そこがスーパー神女たる所以か。

ついでに言うと、輪宝は親兵衛が煩惱を打ち破る車男であるという特色を考える上で一つの要素かもしれない。

●伏姫は観音である、と馬琴は言う。童女の姿（三十三応現身のひとつ童女身）をして現れる時があるからそのまま受けとっても良いのではないか。

「観世音菩薩普門品」（『法華経』岩波文庫）

応に童男・童女の身を以って度うことを得べき者には、即ち童男・童女の身を現わして、為めに法を説くなり。

常に女神の姿で出現し、里見家を支援し、最後は富山の洞窟に鎮座するなど、作品中の伏姫のイメージは観音とは異なっています。(諏訪春雄通信 272)



102回 (『稿本 南総里見八犬伝』)

馬琴が描いた下絵を見ても、伏姫が常に女神の姿をして現れるというのは当てはまらないし、伏姫のイメージも姿を変えるという点において観音から逸脱はしていない。

ただいつものように注意が必要な着物の柄。稿本では描かれてないどころか指定さえもされていない。馬琴にとって重要なのは、斑の子犬を抱いた少女であることだけだろう。

大八の口絵のようにはっきりと馬琴が車を描いたり、隣の頁の念玉の着物の柄にさやがたを指定しているのもあるので、全ての稿本がない現在どこまでが馬琴の意思か、どこからが絵師の創作なのか着物の柄の判断は非常に難しい。自身で下絵も描いてるのだから、刊本の図像も全てそのまま馬琴の意思としてとっても良いという大らかな姿勢でなければ今ある形の八犬伝は読めないのかもしれないし、それはそれで正しいのだろう。

●現実にある美濃垂井の金蓮寺が『水滸伝』『金瓶梅』の潘金蓮と名前が通うのがなんとも言えない。

●

『里見九代記』結城落城の様子は記述なし。

『里見代々記』落城時の記述は八犬伝に近い。—春王、安王も生け捕られ—

『房総軍記』春王安王は女の姿に似せ、輿に乗りて城を出で

『房総里見軍記』春王安王を女駕籠にませ—季基の言葉は本書の家基の言葉

とほぼ同じ。この書は春・安王が切腹したと書いてあるので、いいかげんなよう
うだ。『里見軍記』は疎?にして誤りも少なくない、考証にたえない(⑩309)
と馬琴は言っているが、季基の言葉は「里見軍記」に拠っている。疎?で誤りも
あっても、考証と創作は別ということだ。

義実については詳しく書かれれば書かれるほどフィクションの度合いが高く、
かえって史料価値が低い「里見軍記」が馬琴にとっては創作の自由度も高く、
利用価値が大だったのかもしれない。八犬伝はフィクションであるという馬琴
の姿勢の表れだろう。

● 『結城戦場物語』—輿を見れば、姫君二人乗り給ふ。

『結城合戦絵詞』—中程の輿に年十二三ばかりなる姫君在します。

馬琴が両公達の脱出劇を知らないということとはありえない。

●



馬琴は春王と安王の兄弟二人が女装して結城城からの脱出を図った
が失敗したことを書かない。女装犬士が二人な理由はここにある。

出典隠しも大事だけど、こうした「隠し」も稗史七法則を考えるうえで大事
かも。さり気なく描いている三年は「後に大関目の妙趣向を出」す「襴染」と
いうことだ。

●三年は馬琴の創作だが、十六日は史実だ。春王、安王にとって十六日とはこ
の上もない厄日なのだ。

『里見九代記』系図(続群書類従21下)

嘉吉元年四月十六日、上杉方、結城の城を攻落す。長尾因幡守、春王、安王
を生捕て、五月(十六日)、美濃垂井にて両若君を害す。

●大將軍は八将神の一つであるが、この八将神の兄弟神は牛頭天王であるとい
う。

ここで

時に文明十年六月二一日、この浜辺にも牛頭天王を、うつし祭るよしありて
(②202)

が思い浮かぶ。

八犬士には大將軍が絡んでいるとすると、ここで牛頭天王は誰か。八犬士と関係が深い牛はというと八房だ（① 1 6 1）。古那屋の挿話では、房八＝八房だから、房八は牛頭天王に当たる。牛頭天王は素盞鳴尊に結びつく。この素盞鳴、大ざっぱに言うと、悪玉から善玉に変わる。この悪玉から善玉に変わるというパターンはまさしく古那屋の場における房八の役回りである。（八房も悪の犬から善の犬になったんだった）

となると八房・房八は素盞鳴尊となる。多くの人が言ってることだけど、富山と古那屋は神話の場であったか、と思いついた次第。

牛頭天王には八人の子がいて、これが八王子の由来だそうだ。

●女子はすべて水性にて（② 4 9）と女装をしていた信乃が言うのが可笑しい。しかし、ここに信乃と毛野の名前のヒントがある。以前信乃は信濃川、毛野は鬼怒川（毛野川）由来の名前と考えた。八犬伝と川が深く関係していることは分かるが、何故二人の名前が川なのか分からなかった。信乃の台詞が答えだろう。

匠作、番作親子の名も川由来と仮定すると、「番匠川」なる川がある。番匠川は大分県を流れていて、小文吾、後の豊後とも関係する。

● 実朝暗殺と定包暗殺未遂、光弘誤殺を結ぶキーワードは「にはかに」だ。

『吾妻鏡』 健保七年正月二十七日

右京兆にはかに心神御違例のことあり。御剣を仲章朝臣に譲りて退去したまひ

『北条九代記』 卷四にも「義時俄に心神違例して、御剣をば仲章朝臣に譲りて退出せらる」とある。

と以前書いた。馬琴がこの事件に関して『読史余論』を引き合いに出すので『読史余論』の当該記事を読むと、「鏡」「九代記」にない「心神違例」の中身が書かれている。

①義時の夢に薬師十二神将のうち**戌神**が現れ、来年の鶴岡の拝賀には行くな、と告げた。

②当日、拝賀は屋にしようとして頻りに広元が言っても仲章は必ず夜にするものだ、と**戌時**に定めた。

③鶴岡八幡宮の楼門に入った時、義時は夢のごとくに**白犬**が傍らに見えた

覚え、**心神みだれ**、仲章に剣を譲り退出した。

北条氏と犬の関係は分からないが、なんと犬尽くしなのだ。犬尽くしのこの事件を馬琴が利用しない手はないのではだろうか。

●「にはち」 16 という数字が基本であるとする、八犬士+八犬女で 16。
八犬女がお役御免となったあとの八犬士と八人の姫との結婚で 16

●竈**三**宝平五行（③82）の「三」をどう解釈しますかね。

仏法僧の三宝とみるのはおかしいので、竈という苗字、三宝、五行から、竈の神・三宝荒神からの命名であることは明らかな。

さらに別の解釈では、三宝荒神は五行（木、火、土、金、水）を司る陰陽道系の神であり、その御神体は「奥津彦」「奥津姫」「奥中彦」となっています。
と言うことらしい。

馬琴が三宝荒神をどう捉えていたか今は調べてないので分からないが、聖数・キーの「三」を名前につけているのに敵対者であるのは「荒神」という良くないイメージからの命名だろう。

三宝平の戦いぶりを見ると、「荒神」として道節と互角である（③103）。どこに差があったかという、陽（道節）が陰（三宝平）に勝ったというところだ。

●八犬士が長尾景春の母簀大刀自と相性が悪いのは、これもまた結城合戦に由来している。

春王・安王は、管領方の長尾因幡介に生け捕られ、長尾の郎党蠣崎と錦織に斬首されている。のちに莊介と小文吾が簀大刀自に斬首されるのは、この件の繰り返しだ。ただニセ首なので、結果は違う。ちゃんと荻野井**三**郎に助けられていたのだ。

信乃と毛野ではそのものズバリなので莊介・小文吾に代えられているが、兄弟二人という基本は踏襲されている。パターンが分かると、法則にガンジガラメに縛られている八犬伝ほど分かりやすいものはないかも知れない。

●籠城**三**年に及ぶ、と言うのを何気なく読んでいるが、ふと我に帰れば「三年も籠城できる訳ない」と思う。調べなおしてみると、実際の結城合戦の籠城は**一**年なのだ。

ここでも馬琴は昔の結城合戦にして昔の結城合戦にあらずという遊戯三昧な小説作りをしている。つまり籠城を「三年」に設定して大將軍の三年塞がりの意味を持たせる。三年塞がりさえ設定できれば、あとは「三」は恣意的な数字なのだから、馬琴は「三」をキーにして、伏姫、信乃や毛野などの「三年説話」を自由に作り出せる。

籠城三年は馬琴が八犬士関係の人物用に設定した数字だったのだ。

四輯見返しの「戌將軍」なんてのは、犬將軍＝大將軍＝三のこれ見よがしのヒントだった。

つい結城合戦の記述はおおよそのところは史実に基づいていると思ってしまうから、三という数字が偶然にもあるなんて不思議だなあ、とオマヌケな感想を持ってしまう。いつでも馬琴にしてやられているのだ。しかし、見破ってきたぞ。と思うのもハメラレているのかもしれない。

(付記)

三年も籠城できる訳ない、というのは偏見であった。

[三浦義同](#) みうらよしあつ 1457～1516

扇谷上杉氏家臣。上杉高教の男。官途は陸奥守、従五位下。瑞雲庵道寸と号す。初め三浦時高の養子となるが、彼に実子高教が生まれたため不和となり、一時足柄総世寺に入って道寸と号した。1494年に新井城に時高・高教を討って家督を奪い、岡崎城に拠る。1512年から伊勢宗瑞の相模攻略の標的となり、主君上杉朝興の援兵も敗れ、翌1513年には女婿の太田資康も敗死してしまい、孤立する。この間に、岡崎城・住吉城・新井城と退いて防戦に努めた。伊勢宗瑞との攻防は籠城三年に及んだが、ついに息子義意とともに自刃し、新井城は落ちた。最後は敵陣に突撃して戦死したともゆう。

●信乃は寛正元年の七月戊戌に生まれたとあるが、干支を見てみると庚辰なのだ。表では戌を強調してるが、ちゃんと龍にも絡めてあった。前にも書いたが信乃の母手束（たつか）のたつは龍であると思っている。

庚申塚や庚申の日に起きていることは、龍が起した現象であり、実は庚辰ではないかとも思っている。

●八犬伝に関しては、意味を持たせた数字に合わせて世界を組み立てていく馬琴の小説作りの方法がみえる。

他はどうかと手頃な長さの「春蝶」をみても、たった二作をざっと比較しただけで確たることは言えないが、「春蝶」では因縁の日付けが繰り返してでくるだけで、数字に意味を持たせて全体を統一しようという構築的な強い意思は感じられない。

八犬伝の世界がかくも巨大で堅牢なのは、それこそ何気ない数字までに馬琴の神経が行き届いた、稗史七法則に完全にコントロールされたものだからだ。

読み進むうちに、意識しなくても「六」は良くない数字だと読者は脳のどこかに刷り込まれているに違いない。酷六が殺され、墓六が殺され、宮六が殺される、その心地良い？繰り返しが勧善懲悪の印象を強める作用をしているかもしれない。

ずっと前に自分でこう書いていた。●以前、新潮版「八犬伝」を図書館で解説だけ読んだとき、何巻だったかに、第一回の里見季基が討ち死にする場面の「八騎の従卒一人も残らず、兪乱軍の中に撃たれて」という中の「八騎の従卒」に注目されていたのをみた時、なんだか、「うわ～」と鳥肌がたつような感動を覚えてしまった。

何気ないと、勝手に思いこんでいる数字にも、もっと注目すべきかもしれない。

ここまで考えたのならさっさと分析してろよと言う感じだ。書いたの何年前だよ。獅子が龍の八番目の子を見つけて満足してしまったんだな。愚かだ。

●6ばかり注目していたが、16 でなんとも言えないつながりに気付いてしまった。

春王と安王が美濃で斬首されたのは嘉吉元年（辛酉）の五月十六日。（①260）

毛野が対牛楼で復讐を果たしたのは、文明十一年（己亥）の五月十六日。（③327）

もしかしたら、6 ってのは16の代替数字かもしれない。

巨田新十六郎なんておかしいし、墓十六なんてわざとらしすぎてすぐに何か変だぞと気付かれてしまう。六を抜き出す時に結構省いた十六が本命数字だったとは、また馬琴にやられた。小文吾が犬太を殺害したり、ぬいが結婚したのが十六才となんとも言えない数字だったのだ。8にばかり意味があると思わせる手にひっかかっていたのだ。

うーむ。第一回と第十五回がポイントだ。

第一回に「十六日の月円なり」（①21）とさりげなく書いたこの日付がキーだったとは。

番作二八の少年なれども（①258）と書いてあるけど、十六才だ。そして妻の手束もこの時十六才。（われと手束は同庚にて①285）伏姫と同じ庚だ。

庚申塚で手束と伏姫が遭ったのも偶然ではないのだ。

●陽は単独では立たない、陰も単独では立たない。故に純陽の犬士の中に陰を加えるために信乃と毛野が女装をしていた。

陰陽二元論だと言えばそのまんまである。しかし、馬琴がハッキリと言表するものをそのまま受け取っては八犬伝は見えてこないことが分かった今、まだそこから派生する謎が残る。

何故二人なのか？

何故信乃と毛野でなくてはならないのか？

道節・現八・小文吾・莊介・角太郎（月日不祥一名著版八犬伝年表に従う）の五人のあとに信乃・毛野と生まれて、ずっと離れて親兵衛が生まれるのは何故か？

五人は長禄三年（己卯）、信乃と毛野は寛正元（庚辰）・六（乙酉）、文明八年（丙申）生まれで歳が離れすぎた親兵衛は別とすると、信乃と毛野は一組になっている。しの・けのと似た名前の二人が一組なのを陰陽二元論で説明できるのだろうか？

それが二人を春王と安王の生まれ変わりだとすると、すべて辻褃があってしまうから恐ろしい。



春王と安王の首が描かれた挿絵の中に永遠の繰り返しを示す陰陽太極図が一緒に描かれているのは象徴的である。

八犬伝では首を斬られた者は転生し、首を斬られても怨みを抱いて死ぬと、成仏できずにこの世に残ってしまう（玉梓、浜路）。

●馬琴が「六」を毛嫌いするのは、六大凶殺の「六」だからではないか。

あとは[六正刑]ってのも悪い「六」だ。

武家時代の正刑

禁獄、追放、流罪、斬罪、梟首、磔

「八」だって聖数なだけじゃない。八逆があるから八犬伝は成り立っている訳で。

八逆の定包が八房に生まれ変わって、法華經八卷の功德で仁義八行の八犬士に転生した。悪い「業」が良く転じるって言うのが「糸桜」や「三七」で分か

りやすい馬琴の基本。

● 3と6で36。36－8で28。なんで引いたかという二十八宿を出したかったからだ。

中野美代子著『西遊記の秘密』P218の図34二十八宿図・十二支・八卦・九曜等対照図をみると、八犬伝に出てくる（亀や蛙がないが）動物が多く出てくる。まあ計算（と言えるのか？）が恣意的であろうと、3・6・8が意味を持つ数字であることには変らない。

● 八犬伝では「名詮自性」がよく言われる。例えば墓六は墓蛙。口絵にも出ていてそのものズバリである。しかし、馬琴がハッキリ見せるものは表向きであるということを忘れていた。名前の決定にはまだ数字の要素があった。

墓六は信乃、額蔵、浜路に災厄をもたらすために「墓六」でなければいけなかったのだ。六でありさえすれば（死に様は度外視）、蟹六だろうが豚六だろうがなんでも良かったはずだ。

額蔵に厄をもたらすのが墓六から宮六殺害でひきつがれたに過ぎない。額蔵に主殺しができる筈はなく、代わりに宮六に墓六を殺させ、その宮六を額蔵に殺させている。結果六の消滅が図られている。

● 8と6の相性が悪い関係の初めを見ると、八郎に直接殺された酷六となる。これは挿絵でも大きく描かれている。犬との関係では、八郎は酷六を「狗党の萎毛」と呼び、八房が出てくるまで唯一の狗（犬）である。

八犬伝の核は八郎だから、八郎にまつわる6が最後まで八犬士に崇ったとみるべきなのか？

● ③74で小文吾が「同因果の六犬士」と言ってしまったあとに6がやけに出てくると思っていたら、荒芽山での巨田新六郎による災厄が降りかかった。分かりやすい。

● 浜路がなぜ八犬士に関係するかは、寛正三年生まれだからだろう。

挿絵で相似形のぬいも寛正三年に玉を飲み込んでいる。

● 三つの首と籠城三年が「三」の基本。

三にこだわれば、義実主従三人に八郎が家臣になってしまうと四になって意味がなくなるので、八郎はもとより去っていく設定の人物なのだ。

●さて安西三郎景連と寵三宝平五行（③ 8 2）の「三」をどう解釈しますかね。

●籠城三年の「三」に注意していくと、八郎の息子大輔（ゝ大）の幼名も「加多三」である。

●義実ら主従三人

●三浦

●神余・麻呂・安西の三家

●鯉を釣ってくる期限三日（① 5 7）

●蟹三十あまり（① 6 8）

●両三町（① 6 9）

●讐は三里の城（① 7 0）

●老たるもの両三人（7 2）

●三隊にわけて（7 2）

●手束の父は井丹三直秀。番作は三戌。

●三頭（みつつのこうべ）① 2 6 7、2 7 6

●嘉吉三年。三年の流浪後、番作大塚から犬塚へ改姓。（P 2 8 0）

●（番作の）母親は身まかりて、二年あまり、三年にもなるべし。（P 2 8 1）

●享徳三年、

●長禄三年（己卯）手束伏姫に遇う（莊介・道節・現八・小文吾生まれる）

長禄三年は春から天気は異常で、秋は暴風雨、それに追い討ちをかけるがごとく疫病の流行と虫害の猛威で、米は不足し、その値は暴騰し、京都は餓死者の山ができ、地方は「人民相食む」という餓鬼道が現出された。それに対して室町幕府のとった処置は年号が不吉であるとして、長禄を寛正と改めるといふ、はかない神頼みだけであつた。

馬琴が設定した長禄三年、八犬伝の世界ではのどかだが、実際は地獄だったようだ。

偶然にも天保七年に大飢饉が起こる。馬琴が政治が悪いと妖しみが起る例とした、義実が八房に与えた待遇は奇異なことであり、政治の歪みを表わすものだ。里見の領内は飢饉におそわれる。

もし八犬伝に幕政への批判を読むのなら、こういったところにも隠されているのかもしれない。対管領戦は飢饉のあとの構想かもしれない。

●三年が間（2 8 5）

●男児三人拳しかど（2 9 0）

●汝には兄三人あり（3 0 3）

●母なくなりて三年以来（3 0 4）

- 筑摩に三年の僑居（３３５）
- 三年のこの秋今宵（３３９）
- 鉄銭三文（②１４）青字は墓穴関係
- 三里の灸（１５）
- 春三月（２８）
- 故郷は三里（３８）
- 金三両（４３）
- 丑三（７９）
- 三方替（８０・１３４）

- 三尺の童子（９１）

- 三歳児（１０４）

- 三熊野（１２１）赤●は肩柳の台詞
- 三界は火宅
- 三宝（１２３）
- 三世
- 三蔵（１２６）

- 板三枚・三途の川（１３１）
- 豊島の三太郎・三兇・三尺帯・三人（１３２）
- 刃物三昧（１３６）

- 三重の帯（１３７）

- 三个年で火遁の術の奥旨を得る（１４４）
- 長禄三年（１４５）
- 寛正三年 浜路生まれる（１４５）
- 竈門三宝平（１４８）道節の父を撃つ

- 三なん七けい（１６０）

- 芳流閣 三層の楼閣（②１８１）
- 三間階子（１８４）
- 三寸息絶れば（１９６）

●富田三郎（１９６）

●三公（２０３）行徳

●長禄三年（２０８）

●春夏三月が間に、二親を喪ひぬ（２１３）現八

●祇園会より三日の間（２２６）

●三人（２２７）

●三、孝・悌・信の三字（２３６）

●三友（２３８）

●丑三（２４２）

●市川人は三人まで（２４９）

●三町（２５５）小文吾厄

●三人・三尊物（２６８）

●三間・三輪の杉（２７２）

●三従（２７８）

２７９大八登場

●三行半（２８１）

●**三**年以前の秋の比（②２８４）妙真、尼になる。

２９１房八心情を明かす

●無垢三（２９５）

●三世の後まで・子孫三世（２９６・３００）

●丑三（３０２）

●犬塚生の父祖三世（３０３）→房八の三世との対比

３１２ゝ大登場、八頻出

●**寛正三年**（３２１）ぬい川より出た玉を飲み込む
親兵衛四才、玉出現

●丑三（３２９）現八戻っていた

●三個の癖者（３３２）

３３４四犬士集う→実質三人

●両三年（３１４）

●三箇の破落戸（③２５）

●三年竹の手槍（５４）

●某（角太郎）は**三**年以来、（中略）妻と枕を並べし事なし（③４１０）

●毛野の三年については以前書いた。その台詞中においても「三年」は繰り返される。

●現八は（中略）京師に杖を駐ること、既に三年に及びけり。（③358）

●三とせ以来三回（③360）

●一角前後三箇の正妻ありけり（367）

●十月初の三日（369）一角、庚申山に行く

●三宅島（④231）⇒甲斐で四が頻出後、小文吾譚で「三」に戻った。

●三月下浣（④231）

●三夜にしてなほ死ざれば（④231）

●洲崎無垢三

●氷垣残三夏行

●八幡、房八、大八

●意味のある数字は

三

六

八

だ。

六は八犬士にとって縁起が悪い数字だ。岩波一卷から十巻までの六をざっと抜き出してみたが、馬琴が「六」という数字を使うのを意識的に避けているのが窺われる。悪人名に使われるのがほとんどで、災厄の最たるものが「魔の六月」であることから「六」が忌む数字であることが分かる。

八犬士にとっては悪魔の数字のような六だが、自ら六月の悪夢を背負った親兵衛が再登場するとラッキーナンバーになってしまう。六尺の棒を持って現われるなど、六なんてなんでもないのだ。そんな親兵衛が京都で退治したのは「六」だ。のちの六月六日など、親兵衛が再登場するまでは、どんな災厄が襲ってきてもおかしくはない日が栄光の日に変っている。

親兵衛が退治した「六」の暗号とは何なのだろうか。「六」の最終形態は、伏姫、へ大、四天王だが、その完成した六も馬琴は壊していく。「六」の意味がはっきり分かれば、何故良く転じた六まで壊したのか分かるかもしれない。

玉梓処刑は第六回

六歌仙（②24）酒の席の喧騒で喩え。

酷六、墓六、宮六、孟六、氷六

寛正**六**年（莊介受難の年）、第二十回作者云で寛正**六**年を再び繰り返している。

六月十九日（② 1 2 2）

六月二十一日（② 1 9 6）

道節**六**才（② 1 4 6）殺され再生・

十六才小文吾、犬太殺害）

ぬい**十六**才、房八と結婚

五月**十六**日（③ 3 2 7）毛野、復讐を果たす。

六里（② 2 4 5）

六ッ七ッ（2 8 0）

六尺あまり（③ 5 4）の木に額蔵処刑のため吊るされる。

巨田新**六**郎（③ 2 1 8）

ト部季**六**（③ 3 1 2）

舟虫処刑は**六**犬士

六稔歴にける戸田河原の、危窮（⑤ 2 7 1）

くみこ六人（① 4 7）義実らを取り囲む

強いて言えば、定包は禄（**ろく**）山

おん身が懐胎**六**个月（① 2 1 7）

定正は（中略）明る**六**日の申の比（③ 8 2）道節暗殺失敗・犬士苦戦

曳手・単節・?平・音音・力二郎・尺八（六人の夜）

丁六（③ 1 8 5）

舟虫は、年歳も三十のうへを六ッ七ッ（③ 2 3 7）

六布七布（③ 2 3 8）

寛正**六**年・**毛野**生まれる（これが毛野の特異性につながっている？）

六尺袖（毛野③ 3 0 1）

次の日〔六日〕（③ 3 3 8）→わざわざ注を入れている。

四六城木工作（甲斐の話では「四」が頻出）

浜路といふ六斎の市場（④ 1 3 5）

溷**六**（どぶろく）（④ 3 2 7）

馬加蠅**六**郎（④ 3 5 5）

筵才六枚（⑤ 3 0 4）

但鳥跣**六**業因（素藤の父親）⑤ 3 2 7

有年の六月中 (⑤ 3 2 7)

高梨六郎 (⑤ 3 3 0)

六角家

往る六月某の日 (⑤ 3 4 7)

六岐の枝 (⑤ 3 6 2)

東六郎辰相 (⑤ 4 4 4)

(親兵衛) 手には六尺ばかりなる棒 (⑤ 4 6 4)

六稔以前の事にして (⑥ 2 7)

六稔以来の (⑥ 2 8)

荒磯南弥六 (⑥ 4 1)

貝六 (郎) (⑥ 4 4) 以下略

六稔前つ秋 (⑥ 4 5)

ふみ月六日のことなりき (⑥ 4 5)

巨田新六郎 (⑥ 4 7)

六稔の程に (⑥ 5 4) 以下六稔は略

六月の祇園会 (⑥ 1 1 5)

六字の名号 (⑥ 1 4 1) 名号の六字 (⑦ 1 2 2)

仙駝麻嘉六 (⑥ 1 9 6)

鳶野戸郎六 (⑥ 2 4 5)

去歳の六月信濃路にて (⑦ 7 0)

直塚紀二六 (⑦ 1 6 5)

六道山能化院 (⑦ 2 9 3) 結城七郎朝光の建立

六才子 (⑦ 3 4 0)

香西復六 (⑦ 4 4 8)

二六郎一徳用 (⑧ 4 6)

香西再六 (⑧ 5 6)

六十斤一徳用

山幸樵六 (⑧ 1 1 7)

京都の五虎+妖虎→六虎

大野の六地藏堂 (⑧ 2 9 1)

従六位上 (⑧ 3 0 1)

晋六武佐 (⑨ 8 5)

十二月六日 (⑨ 1 2 0)

印東小六 (⑨ 1 2 8)
錐布五六 (⑨ 2 6 0)
生入永六 (⑩ 9)
浮浪六稔を歴て (⑨ 4 3 2)
六個の使人 (⑩ 1 2 7、1 3 2)
小六位の下 (⑩ 1 2 9)
今より六日の後 (⑩ 1 3 1)
松山五六 (⑩ 1 4 8)
使者の快船水路六里を往還 (⑩ 1 6 7)
六月五日の朝 (⑩ 1 7 2)
六月六日の早天 (⑩ 1 7 2) 上洛
宇賀地野見六 (⑩ 1 8 6)
六郎一八犬士結婚の媒酌人 (⑩ 2 2 1)

八と三は、肇輯口絵に女装で名前が似た二人（春王・安王－女装脱出と信乃・毛野－女装）がいるから、「八犬伝」を「結城合戦」に絡めた時からの既定だったと思う。六はなんだろう？易でもって八犬士に厄をなす6が選ばれたのだろうか。

蒼海巷 (⑥ 7 9)
青白のぶち
青海波
どうも青は善に転換したようだ。
青葱おどしの身甲蒼海巷 (⑥ 8 7)

十六日結城落城

八は言うまでもない。
勉強不足でよく分からないが、易では六を陰の変、八を陰の正とするらしい。
〈説文解字〉に「易の数、陰は六に變じ八に正す。入に従い八に従う」六は陰の変で九は陽の変。陰の変をもって陰の正たる八に従うとある。
まあとにかく6と8は、「陰の変」と「陰の正」の関係にあるってことだ。

●八犬士はもともと $6 + 2 = 8$ または $8 - 2 = 6$ の組み合わせで成っていたから、6を解消するために牡丹の痣が消えたとも言える。

●妻がいたのは信乃と角太郎の二人。ここでも $8 - 2 = 6$ になる。浜路・雛衣が死ぬことでまっさらな 8 となったうえで全員一緒に結婚して 6 を解消する。

●与四郎＋紀二郎＝6 この組み合わせで良いことが起きる訳がないのだ。

●信乃・現八・小文吾・額蔵、房八・ぬい・親兵衛の受難は六月。

●時に文明十年、**六**月十八日 (② 8 9)

●時に文明十年六月二十一日 (② 2 0 2)

●志婆へは五里あまり、六里もやあるべからん (② 2 4 5)

●文明十年戊戌の夏六月二十三日 (② 3 3 9)

●六月二十二日の小文吾・房八の悶着 (② 3 6 1)

●甲斐の「四」→安房は僅に四郡にして (① 3 1)

四犬士 (④ 1 1 3)

四年 (④ 1 1 4)

四境 (④ 1 1 5)

四十許 (④ 1 1 6)

四六城木工作 (④ 1 2 1)

四稔 (④ 1 2 3) 信乃

泡雪奈四郎秋実 (④ 1 2 3)

四稔 (④ 1 2 4) 木工作の前妻死去

太平記巻四 (④ 1 2 7)

新田の四天王 (④ 1 2 7)

四稔 (④ 1 2 8) 浜路

四下 (あたり) (④ 1 3 2)

夏四月 (④ 1 3 4)

齡四十 (④ 1 3 4)

四稔 (④ 1 3 5)

四稔 (④ 1 3 8)

第四日に至りて (④ 1 4 4)

盃四五度 (④ 1 4 6)

甲斐四箇郡 (④ 1 4 7)

P 1 5 0 木工作死

四知の誠 (④ 1 7 2)

四五日已前 (④ 1 8 0、他略)

四五名 (④ 1 8 1)

四稔已前 (④ 1 8 7) ㄴ大

齡四十前後 (④ 1 8 9)

四稔已前（④ 1 9 4）照文

四犬士（④ 1 9 5）

十有四年（④ 1 9 7）

十四年（④ 2 0 2）

十有四年（④ 2 0 5）

甲斐は「四」の国。浜路の亡霊が現われる「死」の国だ。死の国にいた浜路は木工作の死によって、里見五の君浜路姫として再生する。

●卒川菴八（② 1 7 3）善悪が逆転した。

[トップへ戻る](#)